



# 藤棚へつづく路



—青潟大学附属シリーズ—  
中学編  
第三シーズン 2

舞夜じよんぬ

いつも帰る時は、生徒玄関の砂利道ではなく大学側に面した雑木林を横切っていた。

あまり同じ学年の連中と顔を合わせたくない。自分のことを知っている奴らとできる限り顔を合わせたくない。なによりも、すれ違うたびに感じる悪意たっぷりのささやき声から逃れたかった。そう思って二年間。あと一年だけ耐えればいいと思っていた。

——やだよねえ、やらしいこと考えてるんだよ。

——前科者だよねえ。

——近づくなかって感じだよねえ。

自業自得だとはわかっているけれども、いつまで経っても自分に押し当てられた言葉の刻印が、熱すぎる。

司はいつものように三年A組の教室を走り出た。今日は掃除当番ではなかったから残る必要もなかった。戸を開けると丸く砂埃が舞うのが見えた。目にごみが入り、思わずこすった。涙が出てきた。

A組の教室位置はいつも階段が近くにあった。直角に曲がりすぐに駆け下りれば大丈夫だ。他のクラスの連中とも顔を合わせないですむようにして、生徒玄関まで急いだ。一年、二年の生徒たちは幸い、司のことをあまり知らないようだったので安心して駆け下りるスピードを緩めた。自転車通学よりも、いつも自動車 で迎えにきてもらうことを選んだのは、身から出た錆だ。

「あ、あの三年生さあ」

二年靴脱ぎ場のあたりで、どろりとした言葉を聞く。

「有名じゃん」

——有名か。そうだよな。

司はスニーカーを取り出してあわただしくかかとを押し込んだ。こういう時に限ってうまく収まらない。足に合わなくなっているのがわかる。

「ほら、『迷路道』（めいろみち）の会社の息子だって」

ほんの少しほっとしている自分がいた。少し落ち着いてつま先をとんとんさせた。

「えっ、すごいっ！ 超、お金持ちって奴？」

「うちの学校にそんなお金持ち、いたっけ？」

自分がすごいわけじゃない。父の仕事なんだから関係ない。はっきり言ってそれすらうっとおしいのだけれども、二番手のことならば別にかまわなかった。司はそれ以上の噂がささやかれないうちに駆け足で生徒玄関を出た。すっかり盗み聞きしていたのがばれてしまったろう。いや大丈夫だろう。両方の声が聞こえてくる。司は耳をふさいで、たぶんこれから下級生たちの声でささやかれるもうひとつの事実を、聞かないことにしようと決めた。

——あの人、一年の時、女子の下着ドロやったんだよ。お金持ちの親がお金出してうやむやにしたらしいんだよ。最低だよねえ。

桜がまだわずかに残っていた。一部、赤黒い種のようなものが、散った花の跡にくっついているのが見える。明日からゴールデンウィーク初日だ。一日飛び石になっているけれども、父に頼んで学校を休ませて貰うことにした。A組を周りでは「縁故クラス」と言うけれども、こういう融通が利くところはメリットだ。司だけではない。詳しく聞いていないのでわからないが、ゴールデンウィーク中は海外旅行をする人もいるという。

——似たようなものか。

腕にごついデジタルの腕時計がはまっている。中学入学の時、父が買ってくれたものだった。あの頃は派手でかっこいいと思っていた時計だった。普通に時刻を見るだけではなく、ライトを照らすこともできるし、簡単な電卓もついている。さらにアラーム機能は五種類くらいの曲を選ぶことができる。司の知っている限り、二年前は最先端といわれていたものだった。何度も曲を変えて、小学校の頃の友だちに聞かせたりして喜んでいた自分。みんなに見せびらかしてはしゃいでいた自分。小学校の卒業式に、わざと腕が見えるようにころんだりしていたいやらしい自分。

——壊したい。

ふと、そんなことを思った。

決していきなりというわけではなかった。

何度かコンクリートの上に叩きつけてみようと手を振り上げ、大抵そこで留まってしまう。防水加工はなされているので水につけてもどうしようもない。いっそ捨ててしまえばいいのだ。腕から外してしまえばいいのだ。わかっている。簡単なことだ。

司は砂利道の側に立っている、白樺の木に手を当てた。

桜の陰にちらちらしている、白い樹皮に触れた。死人の肌ってこんな感じなんだろう。自分も死んだら、きっとこんな感じになるのだろう。——うちのじいちゃんの顔に似ている。

——うちのばあちゃんの顔にも似ている。

今頃は二人とも病院で、感情をほとんどあらわさない木の顔をして、ベットに横たわっているだろう。

明日から過ごす、あの家の近くにある病院だ。

いつもだったら迎えに来てくれる車が、まだ来なかった。決して司が好き好んで家と学校の送り迎えをしてもらっているわけではなかった。ふだんだったら自転車で帰るのもありだった。タクシーだったら絶対に使わないですむ距離だった。ブレザーのポケットに手を突っ込み、司はミントガムを取り出した。銀色の紙をはがして、口に放り込んだ。くちゃくちゃやっている、なんとなく、クラスの男子たちと同じことをしているように思えてきた。みな、校則では食べ物持込禁止なのに、ちょこちょここと飴玉もっていたり、ガムや煙草を隠していたりする。縁故クラスのA組だけど、こういう時だけはきっちりと、ずれているのだと主張しているかのようだった。表立って司は出来なかった。だからこういうところこそそそする。所詮、自分はこそこそ男なのだと思うと、滴るつばもおいしくない。

外の風が、青葉を揺らし、しゃららんと鳴らした。

あまり人通りのないこの場所を、毎日の迎え場所をお願いしたのは司の方だった。  
誰も通らない、誰にも気付かれない。安心して、一人でたむろうことができるから。

「おい、片岡」

誰かの呼ぶ声があった。男子の、ややかすれた声だった。まだ咽にいがいがが残っている。

司はあたりを見渡した。白樺林の向こうから、砂利道の奥、真っ正面の校舎の影にかすかな人影がうろうろしているのを見つけ、思わず腹がむずがゆくなった。声はまだ小さかったけれども、相手の姿が近づいてきて、大きく輪郭をふくらませてくると同時にどんでかくなる。司はもう一度逃げ場を探した。あきらめるしかなかった。

同じクラスの天羽（あもう）だとは、すぐに気付いていた。

全くクラスの連中とは話をしない司でも、相手の声質で誰かを見極めることくらいはできた。

天羽がA組の評議委員だということも、三年間同じクラスで顔つき合わせていたら説明するまでもないことだった。そして、今の司にとって一番腹立たしい相手であることも。それを口に出せないことも。たぶん天羽には気づかれていないだろうけれども。

司は返事をせずにそっぽを向いた。ちゅんちゅか雀が鳴いているのを聞いている振りをした。ガムは噛んだままでいた。

「お前に用事があるんだって。ほら、無視するんじゃないよ」

司とは同じくらいの背丈だった。体育の時、整列の時、いつも一つ後ろか前だった。だいぶ刈り上げた頭を掻きながら、天羽はにかっと笑った。愛想よさげに見えるけれども、その表情が限定一名にのみ、冷たく変わることも司は気付いていた。

「ほらら、なんであっちむくの。ほら、あっち向いてホイってな」

顎が向いている方に指を差した。ひっかけられているようでむかつく。天羽は逃げずに、司の顔を真っ正面から捉えようとふらふらカニ歩きした。

「三年間一緒のクラスで、なーんもクラスメイトらしいしゃべり方しないなんて、俺の方としてもなんかやでさ。ま、この機会だしな、ちょっと付き合ってくれよな」

——うっとおしい。

迎えの車が来ないせいだ。すべてはそうさ。司はいつもなら来てくれる桂（かつら）さんを恨みたくなった。怒っちゃいけない。いつも自分のために一生懸命尽くしてくれている人には感謝しなさいと親には言われている。いつもそうしている。でも、よりによって今ってのはないだろう。

天羽は司の肩をぽんと叩いた。仕方なく顔をしかめて見ると、また満面笑顔でいる。

相当、明るい話がしたいらしい。

「春だよなあ。人、みな、春。まっさかり」

——春といえば、野球、したいなあ。

天羽に飲み込まれないように、司は頭の中で関係ないことを考えた。さらに風がばさりと枝を揺らしていた。

「片岡、お前にも春、くればいいのになあ」

——だからいなくなってくれよ。僕の前から消えろよ。

言いたいけれども言えない。司は唇をかみ締めた。次に何を言われるのか想像がつかなかった。

「今日あえてお前を追っかけてきたのには、やっぱし、わけがあるんだな、これが」

天羽は鼻の下を人差し指でこすると、膝を両手で叩いて、さっぱりと答えた。

「お前、西月のことめっちゃくちゃ惚れてるだろ。やるよ」

天羽忠文（あもう ただふみ）……クラスではいわゆるナンバーワン目立つグループに所属し、やたらとバラエティー番組や関西系のこてこてギャグをひけらかし、女子たちからは人気のあった男子だった。「だった」と過去形にしたのは、人気絶頂の時期が今年の冬休み終りまでだったからだ。何かのきっかけで、天羽は半分以上の女子を敵とし、鬨鬨かいまくりの男子扱いされるようになってしまった。もっとも天羽の場合、たったひとり気に入った女子がいれば、それ以上求めるものはないらしい。男子グループの場合、女子の評価はそれほど関係ない。男子中心に活動していれば特別問題はない。

司はもともと女子はもちろん、男子とも交流することがない。「ほとんどない」のではなく、全くないのだ。自業自得だとは心得ているけれども、天羽のような奴を見るたびにひりひりと心がささくれるのはやっぱり、ジェラシーだろうか。自分でも感情の動きがわからない。しかし、なんで天羽は司にいきなり近づいてきたのだろうか。わからない。

口を滑らせないように、司は目をそらし天を見上げた。見知らぬ白い鳥が翼広げて飛んでいる。

「とぼけたって無駄だよん。ほら。二年の時、お前席の向こうからずうっと、あいつのこと見つめていただろ。男子連中みんなお見通しだったんだぜ。ま、俺が黙らせておいたからあまりからかう奴いなかったけどさ。西月も気付いていたのかなあ、ようわからんぜ。ま、嫌いというわけではなかったろうな。女子の中で唯一、お前にあいさつしていた奴だしな。希望はあるだろうよ」

——一人でくっちゃべってろ。

思い当たる節がない、立ち去れ、そう怒鳴りたかったけれどもできなかった。

思い当たる節がありすぎる。

「西月もよく言ってたぜ、『片岡くんが下着ドロをしたっていう証拠、どこにあるの。証拠がないのに悪口言い合うなんて最低よ』とか言って、俺、しょっちゅう怒られたなあ」

いつも聞いている声が蘇る。自然と心臓が反応する。

「まあ、証拠そのものは俺たちにはわからないままだなあ。噂だけが飛び交っている今日この頃、お前が黙っていたらこの問題はあっさり片付くさ。二年前のことをいきなり持ち出す気なんてない。だがなあ」

天羽は笑顔をそのままにして、砂利を蹴った。

「片岡、お前、しんどくないか？ このまま、嘘ばっか、通すのってさ」

あくのない、きゅっとした笑顔だった。司には全く読み取ることのできない天羽の真意。決し

て言葉を出さないようにしようと心に決めるのが精一杯だった。

嘘だとわかっていたら。

濡れ衣だと頷くことができたならば。

天羽に何十発もこぶしをお見舞いしてやっただろう。

天羽を思いっきり罵倒してやれただろう。

そうしたいことは山のように心の中に溜まっている。火を噴きたい。

でもできないのは、すべて本当のことだから。嘘だと言えないから。

腕の時計が重たく感じた。司はボタンを数回押して、もてあそんでいる振りをした。

「まあいいさ。今日は一応俺なりの挨拶だ。けど俺は、この三年間お前を教室の中で孤立させたくはねえよ。そりゃあお前の噂は女子からしたらそりゃあやだろって思うけどな。もう二年だろ。なんであんなに女子が恨みがましいことするんだか、腹立つぜ。たとえお前がしたのかしてないのか、そんなことは正直なところ、どうでもいいぜ。片岡、お前も噂さえ邪魔しなければ、真面目でいい奴だと思っしなあ。もっと人生、すっきりしたっていいだろう？ だから俺としてはお前を三年A組のクラスメートとして、一緒に笑顔で卒業したいってわけなんだ。ま、これから少しずつ話していくから聞いてくれよな」

——聞きたくないって言ったらどうするんだろう。

すぐむよりも笑顔の方が暴力的だと感じたのは初めてだった。

「あのな、俺と西月が付き合っているとお前、思ってただろ？」

天羽は切り出した。しゅくっと、心臓あたりの筋肉が引きつった。

「そうだよなあ。ほとんどの奴みな、そう思っていたよなあ」

ひとりごちた。今はとてもだけどそう思えないけれども、二年の冬休み終りまでは司もそう信じつづけていた。いつも天羽の側で明るくおしゃべりして、笑い声もはじけていた西月小春（にしづき こはる）さんを思い出し、今度は首筋が痒くなった。襟足を搔いているとまた、天羽がにやにやする。あいつの言葉を認めたことになりそうで、慌てて手をぶらつかせた。

「事情はあんまり言えないし、俺が悪いけど、早い話、俺、西月よりも別の子にフォーリンラブ状態なもんで、今、ああいうことしてるってわけだ。ほら言うだろ。変な情けをかけるよりもきっちり態度をはっきりさせた方がいいってな」

——はっきりさせすぎだろ？

天羽の言う「態度をはっきりさせた」ことによって、西月さんが毎日うつむいて、それでも天羽の前では懸命に笑顔を作って話し掛けているところを観ている。くやしいうくらい毎日観ている。そして即座に跳ね返し、

「近寄るんじゃねえ！ あれだけ言ったのにまだわかんねえのか！」

と、女子の中では西月さんにだけ罵声を浴びせていることも。司は何度か見ている。西月さんが廊下で、一部の女子たちに囲まれて涙をこぼしているところを。

「天羽くん、何が気に入らないのか、わかんない」

とつぶやいてしゃくりあげているところを。男子の前では見せないようにしているのだろうが、司はたぶん男子のうちに入っていないのだろう。女子たちがバリケードをこしらえて、西月さんを守っていた。

「ま、俺のことはどうでもいい。一応は一緒に評議委員やってきた相棒だったんだ。俺もひどいことしているなあって思う。けど、俺の本音としてもまあああいうもんである以上、しょうがないってことで」

——しょうがないって、あんなにプライドはずたずたにすることないよな！

自分のやらかした罪が、本当に腹を立てたい時に邪魔になるなんて、もっと早くわかっていたら。どうして自分はあることをしてしまったのか。言いたいことやぶつけない言葉をすべて飲み込んでしまう、「下着ドロ」の記憶。大きな風呂敷が司の言葉を全部包み込み、いじけた風な態度だけ取らせてしまう。

「そんなびくびくすんなって。ま、俺も西月のことはそれなりに知っている。やたらとクラスのために尽くしたがっているところとか、A組の縁故クラスという名前を打破しようとか、『評議委員』としてはまあよく仕事してくれたって思う。評議委員会でも俺、すげえ周りの女子からは文句言われてしまったしな。ただ、俺に対してだけ、あそこまでしつこく追っかけてくるのは勘弁、ってところでもあるんだ。お前も男だったら、わかるだろ？」

——しつこいなって、そんなことないだろ？

司からしたらひたむきに、天羽から何を言われても気にしないように振舞っているようにしか見えないのだが。もっとも西月さんだからこそ、司はその行為がいやらしく感じないのかもしれない。懸命にノートを取っているところ、天羽が苦手な数学の問題を何気なく「これ、よかったら使ってね」と解いて渡しているところとかを覗いているたび、あれはいいなと思ったりもする。思うだけだ。口には出さない。

「俺、思うんだけどな。たぶんあいつは、俺に振られたってことが悔しくてなんないんだろうって思うんだ。クラスの公認カップル扱いされるように俺が振舞ってきたのは確かにまずかったって思う。けど、もう俺にその気がないのに、そんなことするのは偽善だろ？ だから俺としては、きっちりつけりをつけたい。俺なんかよりもずっといい奴がいることを、きっちりあいつに伝えたいんだ」

司を笑わずに見た。

「片岡、考えてみてくれねえか。もしお前が本気で西月のことを好きならば、俺は全面的に協力するぜ。西月だっけと、自分のことを本気で好きだっけと思われていたら気持ちもなびくさ。言っちゃあなんだけど、お前頭もそれなりに悪くないし、ルックスもいけてるし、運動もまあまあだし、あの事件さえなければお前、十分女子にもてもてになっておかしくないんだ」

いきなり絶賛するのは止めてほしかった。今度は唇のあたりが痒くなる。

「あの、事件をけりつけて、三年A組の中にちゃんと収まって、そこであらためて西月に言っちゃまえよ。たぶん西月も、お前に毎日挨拶欠かさないってことは嫌いではないってことなんだからさ。俺は金輪際西月を受け入れる気はないし、お互い不毛なことするのもいやだからさ、ここで片岡、お前も男ってところ見せてみろよ。俺も、男子連中も、全面的に応援する」

肩を両手でがっしり捕まれ、軽く揺らされた。

何も言い返せなくて、司は「じゃあな」と手を振る天羽の背を見送るだけだった。

迎えの車が到着したのは、天羽の姿が消えた直後だった。砂利道をしゃりしゃりと鳴らして黒塗りのベンツが到着した。運転している桂さんに司は思いっきりいらだたしい視線を投げつけた。かちっとしたカーキ色のブレザーが似合わない桂さんは、窓から顔を出して叫んだ。

「ほら、司、早く乗っちなえ！ 駅前でラーメン食ってくだろ！」

お坊ちゃまに仕える専用の家庭教師とは思えない言葉遣いである。司は唇を尖らせたまま、車の後ろ座席をちらっと覗いた。きれいに片付けられているシートの上には、バットとグローブ、バトミントンのラケットなど遊び道具が一通り揃っていた。

「マヨネーズ入りの納豆ラーメン食ったら、これからまっすぐ、行くからなっ！」

社長子息を迎えにきた家庭教師兼教育係の桂清（かつら きよし）さんは、当然、助手席の扉なんて開けてくれなかった。思いっきり音を立てて閉めた後、司は一言、「なんでもっと早くきてくれなかったんだよ！」と怒鳴りたかった。でも、桂さんになんかやっとなんかほっぺたつままれて、頭をこづかれ、

「今日は牛乳も入れて食ってみような、さ、行くぜ！」

といわれると、なんだかどうでもよくなった。

——桂さん、ゲテモノ食いだもんなあ。

長髪を後ろに束ねて黒ブチめがねをかけている、いかにも「売れない漫画家」といったイメージの桂さんは、鼻くそをほじりながらハンドルを握り直した。

「さ、司、なんかあったのかよ。しけた面してるなあ」

「桂さんが遅くきたせいだよ！」

わがままかもしれない。言っちゃいけないとわかっているけど。社長子息のわがままじゃない、ってわかってくれるのはこの人だけだった。



なんだかんだ文句を言いたくても、行き着けのラーメン屋で人目につかない場所を選んでくれるのが桂さんのいいとこだ。

「今日はこの格好だからなあ」

カーキ色の背広姿は、もちろん会社帰りのおっさんと思われなくもないけれども、桂さんには似合わないし、なによりも店の主人がいやな顔をしそうだ。

「おやじさんにも悪いしな、今日は個室とってもらおうか」

駅前の駐車場で、桂さんはハンドルの脇から自動車電話を手を取った。慣れた手つきでプッシュする。

「あー、ええっと桂ですが、おかみさんっすか。今日、奥の部屋空いてるかなあ。いや、弟連れてくんだけど、制服だと買い食いだつてばれて停学くろうかもしれねえから、悪いんだけど部屋空けてもらっていいかなあ」

愛想よくOKが出たらしい。にんまり笑って桂さんは親指を立てた。

「ほんじゃま、いくか、司。部屋に入るまではしゃべるんじゃねえぞ」

「わかってるって」

かばんを後方座席に投げ入れておき、ブレザーもついでに脱いだ。だいぶ気温も温かい。青大附中の制服は目立つから、かえってそれの方がよかった。「ベルト、ひとつかふたつ、穴ずらしとけよ」

言われている意味がわからず、司は言う通りにした。

「腹膨れるからなあ。あそこのラーメン」

——桂さんみたいな出腹にはなりたくないよ。

外に出て、桂さんの後ろにくっついて歩いた。桂さんと暮らし始めて二年近く経つけれども、いわゆる「社長の息子」が連れて行かれる高級料亭なんて行ったことがない。周りの連中は司がそういうものしか食べないんだと思っているらしいが勘違いもいいとこだ。夜いやらしいお店が多いのに昼間はおいしいラーメンや焼き鳥、もつ煮料理、お好み焼き屋さんが並んでいる通りに連れて行かれることがほとんどだった。食べた結果、まずいと思ったことは一度もない。

ここのラーメン屋に入ったのは五回目くらいだった。

「よおっ！ お久しぶりっす」

カウンターの向こうで麺をゆでているおやじさんに景気良く声をかけ、さっさと桂さんは店内に入って行った。昼の四時近くということもあり、中途半端な時間帯。学校帰りの高校生がカウンターで黙々とラーメンをすすっている程度だった。テーブル席にも誰もいなかった。

「ほら、黙って入っていきなっす！」

客商売をしているとは思えない無愛想な態度で、白い調理服姿のおやじさんは、顎で店奥を指した。どうやらカーキ色の背広姿が営業妨害になると、すぐに感じたらしい。

「邪魔しませんで、申しわけないっす」

たいして気を悪くしたわけでもなく、桂さんは細い通路をカニ歩きしながらトイレマークのついた扉を開けた。実をいうと個室というのは、トイレを通っていかないと入れない作りとなっている。裏を返すと、よっぽどの常連さんでないと存在を知らないのだ。「塩ラーメンにミルクと納豆とマヨネーズを入れた特製 ラーメン」自体、この店のメニューには存在しない。注文することができる、そのことがすでに桂さんの立場を物語っている。

無事、トイレの奥の扉から、予約個室にたどり着いた。こぎれいな四畳半で、傷だらけのテーブルだけがぼつねんと置いてある。勝手に座布団をしいて座るだけ。

「ま、こんなこと客商売じゃあ通用しねえけどな。俺はそういうところが好きだ」

誰も聞いていないのに、独り言を言う。

「司、何食う」

「ふつうのしょうゆラーメン」

「つまんねえなあ。まあいっか」

すぐに桂さんの分が運ばれてきた。脂が浮いていて、なにげなく納豆ねばねばな匂いがして、麺汁が妙に白い。桂さんの顔を見るとすぐにおやじさんが特製としてこしらえてくれるらしい。もってきてくれたおかみさんが、司ににっと笑みを向けた。

「弟くん、ずいぶん歳離れているねえ」

「そう、恥かきっ子なんだ。こいつお子ちゃまだからしょうゆラーメンな」

「はいはい」

大抵のところではそれで通用した。桂さんの、歳の離れた弟。司も何も言わずにそれを受け入れていたし、実際そうなのかもしれないと思う時があった。もしかしたら父は、母と結婚する前に桂さんをよその女の人と作ってしまったんじゃないかと。でもそんなわけもないしどうでもいい。腹の虫が鳴った。

「どうした司、やっぱり早く食いたいんだろ。少し食ってみろよ」

「いいよ、げてももの食ってやだよ」

「ほら、黙って食ってみろ」

箸でそのまま麺をつまみ差し出された。猛烈に腹がすいていたせいか、何でもよかったのだろう。ぱくりと加えて飲み込んだ。結構いける。麺の味が濃い。

「今度注文する時はストレートでこれにしてみろよ。今日のところはしょうゆでがまん」

間もなくしょうゆラーメンの到着だった。トイレを横切ってもってくるというのがなんだか気持ち悪いが、そんなこと言ったらはたかれる。司は黙々と麺をすすった。やっぱりおいしい。

「さっきの奴、どうしたんだ？」

「どうもしないよ」

麺が伸びないうちに食べつくし、ちりれんげで汁をすくいながら、桂さんが尋ねてきた。

「さっきの奴、って、なんだよ桂さん見てたんじゃないかよ。早く来なかつたくせに」

「お取り込み中は野暮かなって思ったのになあ」

とぼけた口調でごまかす桂さん。天羽とのあまり見られたくないところを観察されていたのだったらなんかいやだった。会話の内容まで聞き取られているとは思いたくないが。司は桂さんの

どんぶりから白い汁をすくい取った。なんとなく甘い。

「まあいいや。司、これからまっすぐ向こうに行くからな。今からだと着くのは五時くらいだから、今日は誰にも会えねえなあ」

「いいよ、明日連絡するから」

桂さんが言っているのは、神乃世町（かみのよちょう）の友だちのことだろう。

「なんなら、車の中で連絡すっか？」

「いいよ」

いつもの自分だったら、ためらうことなく自動車で電話をかけていただろう。一週間とはいえ、友だち連中はみな都合があるだろう。できるだけ早く連絡つけて、バット振り回したりボール投げたりして遊びたかった。でも、自動車電話というのは、司の知っている限り誰も使っていなかった。もし使っていることが知れたら、どうなるだろう。

司の顔をじろっと見た後、桂さんは湯気で曇っためがねを拭いた。少々、目が顔全体の肉に包まれて見えなくなる。

「じゃあ忘れもんもないな。遊びものは一通りつんであるし、服はさっき一緒に運んだし、ああそうだ。これも持ってきているから、大丈夫だろ」

言っている意味がわからず、司は桂さんの膝をつついた。

「これってなんだよ」

ポケットからがさがさと、取り出した包み紙を渡された。長方形で四角い、薄い。写真か絵葉書だろうか。

「宝物だろ？」

意味ありげにささやく口調がなんかいやらしい。取り出した。思わずつゆを嘔きそうになった。

。

「桂さん！」

「なに焦ってるんだよ。ったくなあ。司。お前って分かりやすいところにいつも置いてあるからなあ。この子、結構可愛いじゃん。お前のクラスメート？」

手が震えて慌てて袋にしまい、後ろポケットに押し込んだ。

「関係ないよ！」

「関係ないならなんで、机の上に飾ってるんだ？」

「桂さん勝手に僕の机いじるなよ！」

「いいじゃん、色気むんむんしちまうお年頃だ。好きな子ひとりかふたり居たっておかしくねえよ、な、司」

——この人なに考えてるんだよ！

全身暑くて死にそうなのは、熱いラーメンをすすった後だからではないと、司もわかっていた。いつも散らかったままの机だし、どうせ誰も気付かないと思っていたから黙って飾っていた。今まで誰かに何か言われたこともなかった。今年貰った年賀状の一枚に過ぎない。そうだ。たった一枚の年賀状で、たまたま家族写真つきだったからといって、それほど驚くことでもない。たまたま送ってくれたクラスメートが、薄桃色のかわいらしい晴れ着をまとっていたから目につ

いたわけじゃないと、言い訳したい。でもできなかった。ズボンのポケットのあたりが熱くなってくるのは気のせいだろうか。

「けどいいよなあ。お前の歳で年賀状送ってくれる女子って、そういねえよ」

「桂さんは今でもいないんだろ！」

憎まれ口を利いてやる。

「残念ながらその通りだ。が、まあそれは関係ねえだろう。な、司、その子にはちゃんと告白したのか？」

いきなり何考えているんだろう。この人は。

「そんなの関係ないよ。どうして桂さんそうやって人のことつついてくるんだよ！」

「言わないと損だぜ。どうせ振られるならそれも運命だしなあ、相談に乗るからさ」

「そんなの関係ないだろ！」

歯と歯がかみ合わなくて泣きそうになる。そうだ。もし自分が今まで何もしでかしてなくて、ただのクラスメートだったとしたら、きっと行動を起こしていただろう。こんな机の上に年賀状を並べるだけで済ませるようなことなんてしていない。そうだ。男だったらそのくらい平気で行動していただろう。あんなことさえ、あんなことさえしていなければ。

さっきの天羽がささやいた言葉が耳に突き刺さる。

——お前西月に惚れてるだろ。西月、やるよ。

司はラーメンの汁を一気に飲み干した。口をぬぐい立ち上がった。

「おいおいどうしたんだよ」

「今日は帰る。桂さんとなんて帰らないから」

「おいおい、いきなりなあにむくれてるんだよ」

「人の机の上勝手にかき回すなんて最低だ！」

「じゃあなにか？ お前、あの年賀状ないと、眠れないんじゃないかねえのか？」

——しつこいな！

あやうく口に出そうになったのをこらえた。ひたすらどんぶりの模様を目で追いながら無視しつづけた。

「俺もあまり言わなかったがな、今年の正月からずっと、その葉書定位置だったろ。机右上。なにげにお前、勉強している間もそっちばかりしちらちら見てるしなあ」

——大嘘つきやがって！

「それにさ、春休み帰った時も司、しっかりその葉書、持ち歩いてただろ」

ふざけるなと怒鳴りたくても言い返せないのは、桂さんの言うことが一言一句その通りだから。毎日顔をつき合わせ、一日三時間まともに勉強させられ……決してラーメンの作り方なんかではない、ちゃんとした学業だ……葉書一枚になんて関心持たないだろうと安易に思っていたの

にだ。

「まあ、いいさ。大切にしろよ。ほらほら、ポケットから落ちそうぞ」

手を当てて封筒を確認した。ない。目立たないようにそっとズボンのポケットを探る。やはり

ない。座布団から降りて、素早く畳みの上を手で滑らせる。目立たないようにこっそりと、桂さんにはばれないように。でも無駄だった。桂さんは口をぬぐって目配りを行った後、

「ほらほら、司、立てよ。ほら落ちてるぞ」

むっとした顔のまま、言われた通りにしたとたん、ぽとんと落ちた。桂さんが拾ってくれた。

「ったく、宝物なんだったら、早くしまっとけ」

今度は手のところに押し付けられた。腰が抜けた風にすんと落ちたのが分かる。

「全くなあ、前から思っていたんだけどなあ、お前、ちゃんと言ったのか？」

「うるさい、うるせえってば」

「不毛だなあ、司も男だったらもう少ししゃきっとしろよ。惚れた子には全力かけてぶつかるとかな。振られる時は玉砕するとかな。いろいろしろよ」

「桂さんみたいに、夜のいやらしい店に行くようなことはしないから大丈夫だってば」

思いっきり頭を拳骨で殴られた。

「大人には大人の事情があるんだぞ。つべこべ言うな。食うだけ食ったら、さあ行くぞ。忘れものねえな」

しつこいくらい手元の封筒を覗き込むのはやめてほしかった。もう一度ポケットに封じ込めて、司はトイレに向かう戸を開けようとした。がすぐにひっこんだ。聞き覚えのある声が聞こえたからだった。

「ん、どうした」

司は一步後ずさりし、桂さんへささやいた。

「知っている人かもしれない」

どらどら、と桂さんは司をどかして覗き込んだ。男子トイレのあたりに人影がある。見覚えがあったらしい。やっぱり小声で答えた。

「あれ、学校の先生か」

「うん、D組の菱本先生だと思う」

司のクラス担任ではない。やたらと元気で明るい先生だ。いつも白衣を着て静かに語りかけてくるA組担任の狩野先生とは正反対だった。

「そっかそっか。俺とほとんど歳、変わんねえじゃん。あれ、青大附属の制服着ている奴もいるなあ。この店、結構青大附属比率高いのかねえ。俺としては穴場だったんだが」

明らかに勘違いした様子の桂さんは、甲高い声でおかみさん呼んだ。勘定を済ませながら、そっとささやいた。

「悪いんだけどさ、うちの弟が行っている学校の先生が来てるみたいなんだ。見つかったら速攻、怒鳴られること請け合いなんで、裏口から出してもらえないかなあ」

さすが顔だ。司と桂さんは、反対側の入り口から居間を通過して、裏口から出た。素早く靴を履きながら、もう一度尻ポケットのあたりを触れた。落としてはいなかった。

——やるよ、って言われたってなんて言えばいいんだよ。

腹持ちのいいしょうゆラーメンの味がまだ、口の中に残っていた。

腹いっぱいになると桂さんも、あまり司をからかったりしなくなる。一応はこの人、司の家庭教師かつ教育係という名目で雇われているはずなのだ。二十四時間、「迷路道」後継者の身辺を守るために付き従っている、というのが建前だ。体型に似合わないとはいえ、仕事上スーツを着ることもあれば、黒めがねかけて別の業界の方と勘違いされることもある。しかしほとんどはジーンズにトレーナーという、比較的女性にはもてそうにない……司曰く「夜のいやらしい店に行かないと相手にしてもらえない」……タイプの格好をしている。よく締め切り間際の漫画家が髪の毛を振り乱し、みかん箱を机代わりにして書きまくっている様子を読むことあるけれども、まさにそのまんま。桂さんは絵も上手だし、その気になれば「売れない漫画家」にはなれるんでないかと思ったりする。

司は気付かれないように、ポケットから封筒を取り出し、きちんとかばんにしまいこんだ。シートベルトをした後、目をつぶって眠くなった振りをした。

——年賀状来るなんて、思ってなかったよな。

もちろん、自分にだけきたとは思っていない。周りの男子たちが軽蔑紛らわしたような口調で言うところによると、西月さんはクラスの男子に全員出したのだという。いや、これは誤解を招くだろう。もちろん女子全員にも。クラス全員に年賀状を毎年出すというのは、そうそう簡単にできることではない。司も年賀状を返したのは、クラス内において一人、西月小春ひとりだけだった。

家族写真なのだろう。父、母、兄、弟、それに挟まれて西月さんが桃色の着物姿だった。お正月の記念撮影なのだろうか、と思ったが違った。背景が藤の花だった。紫がかったきれいな藤棚だった。青濁なんだろうか、それとも違うところなんだろうか。藤っていつ咲くんだろうか。

少しぼっちゃりした雰囲気、決してスレンダーというわけではない。猫を一匹抱き上げて、おっちゃんこさせたという雰囲気の女子だった。おかつぱに髪の毛をまとめているが、前髪を上手にすくって、右端にヘアピンで留めている。顔とか格好とかは好みがあるかもしれないけれども、写真の中にいる西月さんはめいっぱいの笑顔を振りまいていた。家族のみなさまがむっつりしている中、一人だけカメラを意識しているというのだろうか。

こういう表情を教室で見かけなくなり三ヶ月以上経つ。

無理に明るく振舞っているのはわかる。たぶん西月さんなりに気を遣っているのだろう。たとえ以前仲のよかった天羽に冷たくあしらわれても、たまに怒鳴られても、

「ごめんね、私、悪いこと言っちゃったみたいだね」

と顔を引きつらせるようにして笑い、すぐに廊下に駆け出していく。一度も文句を言ったところを聞いたことがない。西月さんがいなくなったあと、すっきりしたという顔でもって天羽は、別の女子に話し掛け、今度は大声で笑いこける。落差を教室で見せ付けられるたび、司は教室から飛び出したくなる。西月さんを別の場所に連れていきたくなる。こんなひどい扱いをされる場所じゃないところへ。今から司がいく、あの場所へ。

でも、そんなことをする権利がないのも分かっていた。

自分はただのクラスメートに過ぎない。しかも、女子の周りには半径五メートル以内に近づい

てはならない、最低な男子なのだから。

——桂さんは何にもわかってないんだよ。

ぼそとつぶやいた。

「ああ？ 俺の何がわかってないんだ？」

「なんでもない」

桂さんはそれ以上何もつつこんでこなかった。目を開けてもう一度、外を眺め司はもう一つ尋ねた。

「桂さん、この辺で、藤がいっぱい咲いているところってどこかなあ」

「藤か？ そうだなあ、あるとすれば、青潟市民公園あたりかな」

遠くで眺めている分にはどんな花かわからない。葡萄のように細くたわわに垂れ下がり、華やかに背後を飾っていたあの紫色の塊。年賀状にはにあっていた。

——本当にもらってもいいのか？

——本当に、本当に取っちゃってもいいのか？ 天羽。

二年前の自分だったら。あの事件を起こす前の自分だったら。

きっとためらうことなく、西月さんに会いに行っただろう。桂さんにつつかれる前に。とっくの昔に。二ヶ月前、天羽に西月さんが冷たくされて、毎日廊下で泣いているのを見ていた時にすぐに。言うべきことをちゃんと申すだろう。どういえばいいかくらい、司は知らないわけではなかった。二年間抱えていた想いをぶつけて、天羽の代わりになるからって何度口にしたかったことだろう。

でも、できなかった。

してはいけないことだった。

「司、やっぱしお前、電話しとけ。周平とこさ」

桂さんに起こされたのは三十分くらいたった頃だった。五時近い。到着まであとそれほどでもないのだけれども。

「え、でも、いいよ」

「もう学校終わってるだろ。あいつらもな。ほらほらかけろよ」

自動車内の取り外しができる、受話器にボタンのくっついた電話を渡された。

「周平も待ってるぞ。司と早く会ってしゃべりてえなあって、春休みもそう言ってただろ？」

強引な口調に少々むっときたけれども、なんだか一瞬素直になって、司は受話器を取った。目の前には見慣れた背の低い町並が続き、真横と真上には緑色の叢が広がっていた。すっかり緑色に染まった中に、茎のふといたんぽぽが一面咲き誇っていた。この場所はたんぽぽをはじめとして、花が咲くのが遅い。奥には桜が満開、藤は見えなかった。

——ここには藤、咲いていないんだな。

むしように周平と話がしたくなった。あいつのことだ。今ごろ野球の練習を終わらせて家に帰っている頃だ。わざとむくれつつらのまま、司は暗記している電話番号をそのまま押した。電波

が不安定なのか、じいじいと文句を言う。その後で、かちりと人の声に切り替わった。

「ええっと、周平？僕だよ、司だよ」

——司か？ 今、来るとこなんか？ おめえ、どっからかけてるんだよ。

「え、今？ 今青潟から帰るとこ、途中のガソリンスタンドから。うん」

答えられなかった。嘘ついてしまった。自動車電話なんて、知らない人の方がきっと多いだろうし、周平も車の中で電話をかけることができるなんて、想像すらしていないだろう。口ごもり素早く別の話に切り替えた。周平の声は明るかった。かなりがさついていた。

——じゃあ、司、あとどんくらいでこっちに着くんだ？ 今からおめえのうち行ったら遅すぎるかなあ。

「今から遊びに来るか？ うん、来いよ！」

——じゃあ今から行っからな！ おばさんも知ってるんだろ。

ハンドルを握っている桂さんに目で尋ねた。受話器に響くよう、大声で答えてくれた。

「ああ大丈夫だぞ。周平、司のおっかさん、周平たちのためにな、でっけえケーキ買ってきたってな。来い来い。他の奴も誘って来いって言ってたぞ！」

真田周平は二ヶ月前、春休みに帰った時と同じく司を待っていてくれそうだった。

——わあった。じゃあ、今から行くからな！ はやく来いよ！

ずっと変わらない声となまり。青潟へ移り住んでから、誰もがこういう言葉を使うものではないのだと知って、司が封印してきた言葉だった。青潟の言葉とは違う抑揚は、司が意識して青潟の街で消してきたものだった。季節の流れもずれた町。司は受話器を置いて、桂さんに頼んだ。

「あのさ桂さん。途中で俺、歩いて家に帰るから。降ろしてもらえないかな」

「お前もなあに、こそこそしてるんだよ」

窓から入る風にかき消されながら桂さんが怒鳴った。

「どっちにしろばれることだろ。お前が自動車から電話かけたってことくらいなんだってんだ」

「やだよ。それに、こんな格好で帰ったら」

桂さんには似合わなすぎる、かっちりした格好。しかもよりによって真っ黒い車。たぶん父さんの仕事用の車をそのまま流したんだと思う。見られたら、たぶん、周平にも他の奴にもばれてしまいそうだ。

「しゃあねえなあ。わかった。次の角のところで降ろすからな。周平待たせるんじゃねえぞ。お前の分のケーキ、食べなくなるからな」

桜の花が満開の四つ角で、桂さんは車を止めた。司はかばんだけをぶらさげると、すぐに家に向かい走り出した。生まれてから十二年間暮らした、日本のお寺を大きくしたような家。お客さんや友だちがたくさん来ても困らない、どんなに真夜中枕投げしたりプロレスしても怒られない、大きな家が自慢だった。きっと母さんも、一緒に住んでいたおじさん、おばさんたちもみんな待っていてくれる。一番大きな皿に乗っかるようなケーキをきっと用意してくれている。

周平も待っている。眉の薄い、こめかみあたりに少し剃りを入れた、けどちっともワルっぽく



ないあいつに会いたかった。

「司、俺たち親友だよな」

夕食も終り、部屋に戻った後周平がつぶやいた。大抵司が帰ってくると、周平が押しかけてきて一晩泊りがけで遊ぶのが常だった。母もお手伝いさんたちもみな心得ている。和室ばかり六部屋が、中庭の池を囲むように並んでいる。でかい鯉が足音を聞きつけるなり、えさをねだりに近づいてくるのもいつも通り。司の友だち連中が真夜中、まくら投げや大相撲の取り組みを行ったりするのもいつものことだ。最後に安眠妨害された桂さんに怒鳴られて一同しゅんとするのも、また毎度のことだった。

夜は寒くなるからと、母からは厚い掛け布団を渡された。泊りにくる時、かならず周平は司の部屋で眠ることになっていた。小さい頃からそうだった。まゆ毛がだんだん薄くなっていて、このままだと顔面はげになるのではと司は人事ながら心配している。そりの入った髪型は一段と「中学生の不良化のきざし」のプリントに近いものに進化している。前髪もぐるぐるのリーゼントヘアを気取っている。

「当たり前だろう、なんでいきなり聞くんだよ」

「いや、なんとなく」

布団をしいて、Tシャツとパジャマのズボンにさっさと着替え、司は横たわった。あぐらをかいて何かを言いたそうにしている周平を覗き込んだ。

「今夜はうるさくするなよっておばさん言ってたけど何があったんだ？」

「たいしたことじゃないよ。桂さんのことさ」

司は簡単に説明した。

「桂さん、明日人間ドックに入るんだ。いつもこの時期、うちの母さんが無理やり押し込むんだ。胃カメラ大腸カメラ血液検査その他いろいろなものをして、悪いところないか調べるんだ。朝一番で一時間くらい下剤飲まなくちゃなんないし今夜九時からは何も食べられない桂さん早いとこ寝ちゃおうと思っているらしいんだ」

「ひええ、それは悲惨だ」

顔を思いっきりしかめてみせた周平。上半身裸で胸をかいた。

「だろ、だから起こしたら最後、きっとぶんなぐられるよ」

「司、お前もたぶん殴られるのか？」

「うん、たぶんな」 まだ風呂には入っていない。最初に桂さん、次にお手伝いのおじさんとおばさん、母と続き、最後に司と周平がのぼせる寸前まで浸かるのが普通だった。風呂掃除もしなくちゃいけないのが面倒だ。もちろん周平にも手伝わせるつもりだ。

「けど司、桂さんと一緒に住んで、やじゃねえか」

「別にそういうことはないよ」

取り分けて、面倒なことはない。もし母と一日中顔をつき合わせているというのだったら、思いっきりけんかしてしまいそうな気はする。でも桂さんの場合、食事と勉強の時以外面倒なこ

とを言わない。部屋を片付けろとか、いかげん夜更かししないで寝ろとか、いやらしいテレビ番組観るなとか。たいしたことじゃない。自分で出来ないことを桂さんは押し付けないだけだ。ちなみに周平には、桂さんのことを「親戚のお兄さん」と伝えている。

「ふうん、そっか」

周平は短く答えると、裸のまま司の隣りに横たわった。食事が終わったばかりでまだ身体はほかほかしている。母が心配しすぎるだけなのだと司も思っている。

「他の奴ら、どうしてる？ 今日もっと来るかと思ってたんだけどなあ」

到着して、待っていてくれたのが周平だけだったことが司としては少々不満だった。いつもだったら他の友だちも周平が連れてきてくれて、もしかしたら三、四人くらいが雑魚寝するかもしれないのにだ。ひそかに期待していたのにだ。なんで周平だけだったのだろう。

「あ、みんなな、塾があるから今日は来れねえって。明日来るはずだぜ」

——塾か。

「周平は行ってないんか？」

「行かねえよ、そんな金、うちになんかねえもん」

さらっと答える周平の顔には、なにもれらったものがなかった。

司の家は裏手に山を見上げる格好となる場所に立っている。以前はお寺だったとかで、とにかく広がった。口の字型の中庭を囲むようにして、欄干のむこうに和室がみな障子で仕切られている。もちろん部屋と部屋の間はふすまだ。部屋が多すぎるくらい多いので、一部屋ずつ空けてそれぞれの部屋が割り振られている。そのせいかプライバシーもそれほど気にならなかった。

司の部屋は畳八枚程度で、座机と本棚、あとは小さい頃に遊んだ超合金のロボットとか野球のバット、グローブ、テニスラケットなんかが残っている程度だった。ほとんど青潟のマンションに運んでしまっているので、暇な時はすることがない。大抵は周平のような友だちを引きずり込んで遊ぶのが常だった。中庭の鯉が、ちゃぽんと跳ねる音がした。司は障子を閉めた。時計を外し机に置いた。

「司は青潟のがっこにそのまま行くんだろ」

「その方が楽だし」

言葉を濁した。

「周平は？ 神乃世から出るのか？」

「一応な」

周平も言葉が少なかった。筋肉がびっちり詰まっている胸板は、いかにも運動をやりつづけたことの証明だった。小学校の頃から野球、サッカー、バスケなんでもござれの周平は、現在中学で四つくらいの運動部を掛け持ちして活躍している。運動部関連の推薦入学を狙えばどこの学校も引く手あまただろう。司は尋ねた。

「私立の推薦とか受ける気、ないんか。周平余裕でいけるよ」

「ねえよ。だって金かかるじゃねえか」

思わず

「じゃあ僕が父さんに頼んで学費出してもらえるようにしようか」  
と口走りそうになり、慌ててつぐんだ。いくらなんでも親友に対して失礼だ。

いつからだろう。父さんと母さんが友だちよりものすごく金持ちだということを知ったのは。神乃世町で暮らしていた頃は自覚なんて全然なかった。父さんが「自分の会社」に勤めるために青潟へ単身赴任していることとか、母さんが寝たきりのおじいちゃん、おばあちゃんの面倒を見るために一人、今でも神乃世町に残っていることとか。ずっと疑ったことなんてなかった。たまたま、お寺になりそこねた大きな家に住んでいて、たまたまそれが広い部屋でいっぱいだっただけだった。部屋の中には置きっぱなしにされたさびた仏像以外金ぴかのものは見当たらなかったし、母さんひとりだと無用心だからということで、気心のしれたお手伝いさん夫婦が住み込んでくれていることも、とりたてて「金持ち」の特権だと思ったことはなかった。

——青潟に行ってからだ。

隣の周平の顔を見下ろした。目を閉じると本当に眉が薄いとわかる。

「周平は僕の親友だよ」

小さくつぶやいた。

「青潟に行っても変わらないよ」

「ほんとかよ。青潟ってすげえ奴ばかりなんだべ」

「そんなことない」

——ないよ、周平だけだ。

確かに青潟のクラスメートは「すごい」奴が多い。頭の回転もさることながら、小学校の頃から買い食いが当たり前だという奴、すでに彼氏彼女の存在を持っている人、さまざまだ。司にとっては信じがたいことを、みな平然とやっていた。真夜中にディスコに繰り出すのが普通という女子たちもいると聞く。

「僕は神乃世町の方がいいなあ」

「ほんとかよ」

繰り返した周平の言葉には、さっきとは違って少しとげが混じっていた。理由を説明できれば一番いいのだろうが、それもできない。

「じゃあさあ、親友の証に、何かしろよな」

「証？」

いきなりの要求。周平がそんな言い方をするのは初めてだった。

「何、すればいいんだよ」

「司が一番、それにふさわしいって思うことだってばよ」

「それにふさわしい？」

要求される意味がわからず、司は横たわり何度か寝返りを打った。

「わからん！ 周平、何しろっていうんだよ」

「親友だったら、親友として、ってことだぜ」

外は静まり返っている。周平の言葉が障子越しに響いた。ひとつおいた隣の部屋で早々と寝

ているであろう桂さんには聞かれていないだろうか。ちょっと声を落ち着かせた。

「何しろって」

机の上に銀色に光るものを見つけ、司はそっと手に取った。文字盤のデジタル表示がてかてかして、周りに蟻の頭ひとつくらいボタンがたくさんくっついている。中学入学祝に父さんにねだったものだった。確か、六年の頃一番かっこいい、と思っていたデザインで、周平を含む男子たちが一度、生で見たいと騒いでいたものだった。司も当然その中に入っていた。だから周平にあの時「じゃあ司、お前買ってもらえよ」とそそのかされた時……本人にその意志があったかどうかは別として……当然のごとく頼み込んだのだ。めったにおねだりなんてすることなかったけれども、父さんはその時、あっさりと買ってくれた。小学校でさっそく見せびらかし、男子たちと一緒に時計をいろいろいじって遊び、最後に担任にげんこつ食らわされて取り上げられ、小学卒業まで返してもらえなかったという曰くつきのものだ。

周平の腕時計が隣りに並んでいる。すっかりはげた黒い合皮のベルトに、いかにもプラスチックでできたゴム型のバンドに、白いデジタルの文字盤がくっついている。たぶん千円くらいで手に入るものだろう。周平には似合わないと思った。ごつい腕、だいぶ毛が生えてきた手首。

——この時計、周平のほうが似合うよな。

司は枕もとに時計を置いた。

「これ、やるよ」

「はあ？」

横になり、今度は周平が司を見上げた。眉のない顔で四角い額。てかっていた。

「僕、また買ってもらうから、いいよ」

うまく言葉が出なかった。

「司、どういうことだ？」

「だから、この時計、やるよ」

これが親友の証だから、と口にしようとしたとたん、突如周平が司を押し倒した。最初はふざけてプロレスごっこしようとしているのかと思ったが、それにしても手加減していない。周平の方が悔しいけれど腕力は上。本気出したら怪我をするのが目に見えている。でも今の周平は違う。両肩を布団に押し付け、片一方の手を振り上げた。指が目に入ってくる、と思いきや頬に衝撃が走った。

「何するんだよばっかやろう！」

片膝で急所を蹴り上げた。司も売られた喧嘩はしっかり買う。納得いかないのに殴られるなんてそれは絶対変だ。

「うるせえ！ 俺をバカにしてるのかよ！」

「どうしてそういうことになるんだよ。僕、ただ、時計をやるって」

「時計なんか欲しくねえよ！」

「だって周平、この時計かっこいいって言ってただろ！ それに今お前してる時計、なんか合わないしさ、それに僕は別のがそろそろ欲しかったからさ」

「ざっけるんじゃねえ！」

すでに会話はかみ合わなくなっているのがわかった。大抵だったら逃げるだろう。青潟の連中相手だったら司は尻尾巻いて逃げるだろう。でもここは神乃世町だ。司の生まれ育った場所だ。そして相手は親友だ。周平だ。

——手加減なんか、絶対、しない。

「司、周平、いいかげんにしろ！　　ったく腹すいてるのになんで俺がまた怒鳴らなくちゃなんないんだよお」

結局いつものようにふたり桂さんにげんこつを食らわされた。すっかり腹を減らしたまま、上下灰色のジャージ姿でいる桂さんはかなりご機嫌悪かった。髪の毛はぬれたままで寝ていたからだろう、逆立ちくせ毛の嵐。魔人様だった。周平もなにか桂さんに怒られたことがあるのですぐに静かになった。司は言うまでもなく、大人しくうなだれていた。周平もそうだけど、桂さんには勝ち目なんてない。

「お前らさあ、なんで仲いいのにこうもすぐ喧嘩するんだ？　　ったく、司も周平も」

廊下には、着物姿で様子をうかがいにきた母さんの姿が障子越しの影として残っている。めったに入ってくることはない。

「子どもの喧嘩に親は口を出さないの。仲裁してくれる人がいるしなおさらよ」

というのが母の主義らしい。桂さんも気付いたらしく、

「あ、いつものことっす、大丈夫っす」

と声をかけていた。何度か頷くしぐさが影絵芝居のように映った後、楚々と消えた。

「おばさん、話わかるよなあ。どこの誰だかとは違ってな」

司をにらみつけるようにして、周平は腕をさすっていた。さっき勢いあまって司が噛み付いた後が残っていた。

桂さんは空腹を忘れたらしく、薄荷飴らしきものを懸命になめていた。食事が取れない代わり、飴玉はいくら口にしてもいいらしい。ポケットから生ぬるい飴を取り出し、周平に、次に司へひとつづつ渡した。

「さて、今回は何が発端だったんだ？　手を先に出したのはどっちだ？」

周平が手をあげた。布団に正座して、もじもじとお互い指先を動かしている。桂さんがあぐらをかき、ふたりを交互に見つめている。

「一発目は周平か。で、原因はなんだ？」

「僕が時計やるって言ったらいきなり怒り出したんだ！」

それしか言いようがない。司は事実だけをぼそっと伝えた。

「なんで時計やるって言ったんだ？　そもそも、なんで時計なんてやらねばなんなかったんだ？」

お前らだったらまだ賭けマージャンやるわけでもないだろうに」

——賭けマージャン？

思わず周平と顔を見合わせた。ばつが悪くなってすぐに逸らした。

「じゃあ司、どうしてお前、時計やろうと思ったんだ？」

「親友、の、証」

うまく言えない。付け足した。

「周平が、僕のことを親友だと思っているんだったら、そういうことをしろって言ったんだ。だから、時計を証にしようか、って思ったんだ」

「はああ？」

脱力した風に桂さんは後ろにひっくり返った。

「次は周平だ。なんで司に、親友の証なんて欲しいって思ったんだ？」

答えなかった。横目で司が周平を見たけれども、全く反応がなかった。

「司のこと、親友だと思ってるんだったら、なんでものが欲しいなんて思った？」

「んなもん欲しがってなんてねえよ！」

布団を思いっきり叩いた。桂さんは落ち着いている。もう一度起き上がり、足を組みなおし周平にかかと笑った。

「そうっかあ。周平、お前、親友の証として別のものが欲しかったんだなあ。わあったわあった。したら司が勘違いしやがったと。で頭にきたと、だろう。そういうことだろう」

簡単に片付けようとしているのが見え見えだった。でもそれが一番近いような気もした。いったい何をすれば周平は満足してくれたのだろう。司には頭をどんなにひねっても見つからないような気がした。

「な、周平。司に、何して欲しかったんだ？ ものなんかじゃねえよなあ。おい、司もちゃんと聞いとけ。どうやら今回はお前の勘違いが一番の発端だったってことだからなあ」

——僕がやっぱり悪いのかよ。

司がぶんむくれたまま横を向いたら、今度は桂さんの手で頭をぐりぐりされた。

「ほらほら、親友いなくなったらどうするんだ？ 周平、まずはこいつに、わかりやすく言ってやれよ。司の奴きっと勘違いしちまったんだよな」

またぽちゃん、と水音が響いた。髪の毛をがしがしとかきむしりながら、周平は司を見た。にらみつけるようにして、火が出そうなほどに。

「司、ずれえよ」

また無言を通されると、どこがずるいのかわからない。司はじれながら、片足を立てて膝を抱えた。にらみ返した。

「僕がなにしたんだよ」

「言わねえっけさ」

さらにむっと来た。

「何言えばいいんだよ」

「ほんとのことさ」

「ほんとのことってなんだよ」

もう一個薄荷飴を口に投げ込んだ。もごもごして聞き取りづらい。

「知ってるくせにとぼけるなよ」

「だからなんだよ！」

もう一戦、今度は司の方からしかけようとした。すぐに取り押さえられた。

「司、もっと話聞いてやれ。周平も言いたいことがあるんだったらこの際に言っちゃまえよ」

天井の電灯がぱちぱちと音を立てた。

「今日、なんで他の奴ら来なかったか知らねえだろ」

「みんな忙しかったんだろ」

「司のこと、みんな気付いたからだってさ」

吐き出すように、短いセンテンスで、周平はつぶやいた。しかしそれ以上の言葉は出てこなくて、しばらく無言が続いた。蛍光灯のじりじり音と、時々響く鯉の水音、中庭を挟んだ向かいから聞こえるテレビの声。司はしばらく周平に背を向けたまま、親指を絡めて手遊びに熱中していた。桂さんも特別何も言わずに、両腕を組んで「うーん」とつぶやくだけだった。やがて膝を打った。

「よし、周平、ちょっと俺の部屋で話すか。司の奴、あのまんまだとぶんむくれたままだからな、少し作戦会議だ」

「どうして僕がぶんむくれるんだよ！」

司と周平が喧嘩をすると、大抵桂さんが仲裁に入る。母が割り込んでくる時もあるけれども、ほとんどの場合司が悪者にされる。今度もきっとそうなんだろう。思いっきり腹がたって司の方から部屋を出た。

「勝手にしろよ！」

適当に納屋に籠って寝ればいい。このうちには余った部屋がたくさんあるんだから。

中庭に下りて、司はぼんやりと池の鯉を見下ろした。赤ちゃんの頭くらいの大きさと、石のネックレスをこしらえ、中に水と鯉を入れた仕掛けになっている。竹垣で反対側の部屋からは覗き込めないよううまく細工されている。うっかり足を踏みはずさないように、小さな電球が石畳の途中途中に、燈籠のように飾られている。今夜は司が帰ってくるしお客さんもあるということで、わざわざつけてくれたのだろう。

闇の中で、うごめいては跳ね、跳ねてはうごめく鯉たちの動きを感じる。

——周平なんか、大っ嫌いだ！

障子を閉めた部屋の向こうで、桂さんにあいつは何をしゃべっているんだろう。自然とこみあげてくるものをこらえながら、司は鯉の動きを目で追っていた。

気付かなかったわけじゃない。

なんで周平以外の友だちが今日、きてくれなかったのか。

けど周平は全然変わってなかったし、時計をやると言い出すまではなんでもなかった。

「親友だよな」と言われて、「証」が欲しいと言われたから取り出しただけ。

たぶん周平が一番欲しがっているものだろうと思ったから、渡そうと思っただけだ。

なんであんなに怒るのかわからない。しかも本気出して殴るなんてひどすぎる。

——僕のことを気付いたってなんだよ。

背筋に冷たいものが流れる。自分にとって怖いものがないとは言わない。青潟でやらかしてしまった自分の失態を聞きつけたのだろうか。いくら神乃世町と青潟が離れているとはいえ、陸



の孤島という場所ではないのだから当然だろう。

——だから、気付かれないようにしてるのにさ。

この家に戻れば、よけいな肩書きなんて無視して、周平たちと野球やって遊ぶことができるはずだった。

「下着ドロやった金持ちの息子」「金でもって学校に居残ろうとした奴」「将来は『迷路道』の三代目社長」「創立者夫婦が二十年以上前、誘拐されてふたりとも意識不明の重体となり、現在も植物状態」とか、司は神乃世町から出るまでは知らずにいたことばかり。なぜ、青大附中の連中はみな、本人の気付かないことまで知っているのだろう。神乃世町だったら周平たちと一緒に夜の見張り番に出かけても平気だったのに、青瀬だと桂さんと一緒に無い限り変なところへはいけない。友だちがいないから別にかまわないとはわかっているけれども、何かが違いすぎる。

——やっぱり、神乃世町に戻ればよかったんだ。

一度は選ぼうとした選択肢だった。身体を壊して戻ってきた、ということにしようかと父さんも言ってくれた。母さんもそれがいいと言ってくれた。でもあえて司は青瀬へ残る道を選んだ。クラスで「下着ドロの現行犯」と言われてもかまわないと覚悟して決めたことだった。

周平に話したことはもちろんない。

親友でも言えないものは言えないものだ。

——そんなこと、言えって言われても。

——父さんが社長だなんて、僕、青大附中に行くまで気付かなかったのにな。

障子が開いた。身を硬くして、視線を黒い水に向けたままにした。石畳をゆっくりと歩いてくる二人の人影を、片方の肩で感じた。知らん振りをした。

「司、周平、あとはお前ら二人で解決しろ」

短く桂さんが告げた後、一発尻をこいて背を向けた。

周平は黙って司の背中に立った。振り向くにも背中がぼしんと堅くなって動けなかった。指先で池の水をかき回した。

「この前な、進路指導、あったんだ」

いきなり話が飛んでいる。息を殺して司はうなだれた。

「あれからだ。司のこと、周りでいろいろ言い出すようになったの」

「僕のこと言い出すってなんだよ」

もう周平が怒っていないことだけはわかった。周平は頭を下げるなんてないけれど、こうやって別の形で手を差し出してくれる奴だった。受け取るしかない司だった。

「俺たちも、よくわかんねかったけど、司がなんで青瀬に行っちゃまったのか、その時初めて分かったって奴がほとんどだったんだ」

——父さんのうちに住むんだってことにしてたもんな。

小学校の仲間には一言も話していなかった。なんで青瀬に行くことになったのかなんて、あの当時司すら良く理解していなかったから。

「お前、社長になるんだもんな」

ぶっきらぼうに飛んできた言葉を、司は受け止めて頷くことしかできなかった。

——なりたくて、なるんじゃないんだ、周平。

「司が金持ちになっても、社長になっても、親友だってことには関係ないだろ」

「当たり前だろ」

ようやく司も言葉を発することができた。

「けど、お前、なんであんなたっけえ時計、投げるようにくれたりするんだよ」

「あれは」

言葉が出なくてまごまごしたけれど、

「あれ、僕より周平の方が似合うと思ったし、それに、『証』ったらそれかって思ったから」

「ばっかみてえ」

周平が思いっきり頭をはたいた。痛くて振り返らざるを得なかった。

「俺、そんなん欲しいって言ったんじゃないよ」

——じゃあ何して欲しかったんだよ。 それ以上何も言えなかった。

「先に風呂入ってえ。お前もすぐ来い」

——だからここ僕のうちなんだってば。

司は黙って立ち上がった。司の部屋から洩れる黄色い光を追って、石畳を照らす灯籠の影を踏んで歩いた。周平も何も言わなかった。

司も周平も、いわゆる保育園や幼稚園には通っていなかった。いつも司の家に近所の子どもが集まってきていた。実質そこが無料の保育園みたいなものだった。子ども達を遊ばせる専用の部屋が三部屋くらい空いていて、仕事に出ている親が迎えに来るまでのあいだ、近所のおばさんたちが面倒を見てくれていた。司の母さんも手が空いている時はお菓子を出したり、臨時の保育さんとして走り回ったりしていた。もちろん、無料でだ。

当時は就学前の子どもを面倒みるところが神乃世町に存在しなかったということもあるのだろう。

周平には父親がいなかった。神乃世町に来る前に諸般の事情で、お母さんは周平をおなかの中にしまいこんできたという。司の知っていることはその事実だけだった。周平も自分の父親についてはそれほど知りたいとも思っていないらしい。もし「父なし子」とさげすまれたのだったらそれなりに文句も言うだろうが、その点においてはさほど嫌がらせも行われなかった。話題にもほとんどのぼらなかつた。片親育ちというのは、神乃世町においてそれほどめずらしいものではない。司だって自分で言うのもなんだが、ふつうのうちの場合、父さんは大抵月に三日しか帰らないものだと思っていた。だから毎日、真夜中に電話がかかってくるものだとも。丑三つ時に電話に出るといわれるのはたまったものではなかつた。

父さんがうちに帰ってくる時、酒の入っていないことはほとんどなかつた。司はどこのうちでも同じだと思っていた。

真っ黒い車に乗せられて、やはり黒服のきっちりした運転手さんに手を貸してもらいながら、「おーい、つかさー、帰ってきたぞー、出てこーい」

と玄関先で叫ばれたこともある。父さんは自分で車が運転できないんだろうと思っていた。大人なのにかっこわるいなと思っていた。もっとお金持ちになれば、自動車学校にいけるのになあ、と思っていた。

神乃世の常識は青潟の非常識だと気付くのに、十二年かかった。

結局夜が明けるまで周平と、野球、サッカーの話で明け暮れていた。

司が青潟で得ていた雑誌のスポーツ情報はかなりのものだったし、周平は肉体をこき使って得たサッカーのテクニックを余すところなく披露してくれた。桂さんを起こさないようにして途中、バッターボックスに入った真似をしたり、スライディングを布団の中でやらかしたり。

ちょこっとだけ掛け布団をかけずにひっくり返ったものの二時間もたたないうちに起こされた。いつものことだが、周平が泊りこむ日は、いつも司の部屋にご飯を用意してくれるのだった。

母は顔を見るなり開口一番、

「あんたたち、やっぱり寝てないのねえ」

とため息をついた。

「周ちゃんもあんまりむちゃしちゃだめよ。司みたいにひよろひよろしているよりはましだけど

ねえ」

「大丈夫っす。俺、たくましいっし」

力瘤を見せつけるのはやめて欲しい。腕立て伏せをいきなり十回やってのけるもんだから、ご飯の上に埃が舞うではないか。司はさっさと自分の茶碗を受け取り、かきこんだ。

「ほらほら、司、あんたもおかず食べながらにきなさい！」

——だって、煮魚嫌いなんだ。しょうがないだろ。

あとで周平に食べてもらおうと決めて、司は茶色い身の部分を、ほんの少しつまんで口に放り込んだ。

「周ちゃん、今日はこれから時間あるの？ よかったら司と一緒に病院つきあってくれないかしら」

——やはり病院、行かなくちゃいけないのかあ。

「もう桂さんは病院に行ったの、母さん」

いつもの暑苦しい存在感を感じられないのに気が付いて司は尋ねた。

「あんたたちが寝ている間に行きましたよ。今ごろ、カメラのんで寝ているわよ。夕方にはぴんぴんして帰ってくるわよ」

ようやくあぐらをかき直し、母さんからお茶碗を両手で受け取り、周平は勢いよく首を振った。

。

「午前中は野球部の練習があるっし、三時くらいになったら司、もっかい迎えに来ていいっすかしら」

「周ちゃんは運動部なのよねえ。ほんっと、日々大人っぽくなっていくわねえ」

「俺バカだから、身体動かすことしかできねえし」

取り立てて司に嫌味を言ったつもりはないらしい。周平ってそういう奴だ。

——どうせ僕は、運動部入ってないよ。

「ほら、司、なんでそんなに食わねえの」

「いいよ、僕こういうの嫌いだから食べたくないしさ」

「いいかげんにあんたも食わず嫌いはやめなさい！」

母は思いっきりぺこっと頭をはたいてきた。友だちの前でそんなみっともないことはしてほしくなかった。でも臙脂色の縞模様染めた和服と、白いかっぱうぎを羽織った母にはいわゆる「家庭内暴力」なんてできるわけもなかった。司はただ、抗議の意を、茶碗に箸を突き立てることによって表すのみだった。気が付いているのかいないのか、周平はあっという間に自分の食事を平らげていた。母が見張っていなかったらきっと食べてくれるはずなのだ。

「さ、じゃあふたりに時間来るまでゆっくりしてなさいね。周ちゃん、あとでお母さんに持って行ってもらうものあるから、待っててね」

髪の毛を束ねて、おひつを持ってってくれた母。いなくなったと同時に司は無理やり周平に煮魚を押し付けた。この辺の呼吸はあっている。物言わずあっという間に周平は平らげてくれた。

。

とりたてて周平に話したわけではない。

いったい周平は、「親友の証」として何を求めているのか。

司にはいまひとつつかめなかった。だから昨夜は当たらず触らずの話をするにとどめた。もちろんお互い野球の話をする止まらないのでそれほど困りはしなかったのだけれども。

ただ、このままでは、やっぱりまずいだろう。

——「証」かあ。

結局時計は受け取ってもらえなかった。別の行動を司が起こさないとまずいのだろう。少しのずれならば昨夜のバカ話で隅と隅を合わせて終わるけれども、なんだかそれだけでは足りないような気がした。具体的になにが、と言われても司にはわからなかった。

周平も話を蒸し返すようなことはしなかった。だからなおさら、困る。

——周平、どこまで知っているのかなあ。

自分が喜んで食べることのできる卵焼きを崩しながら食べ、皿にくっついたものは舐めて取り、司はしばらく考えた。

白い柄なしのTシャツにジーンズ姿の周平は、何を欲しがっているのだろう。

小学校の頃、女子がよく、「ねえねえ、友だちだからおそろにしよ！」とか言いながら、髪飾りやハンカチをおそろいにしていたのは見たことがある。まさかそんな気持ち悪いことをしたがる奴じゃあないだろう。

——女子みたいなことじゃないよな。僕にだって言いたくないことだってあるのにさ。

司は眠くなってきた目をこすりながら、テーブルの上のいちごをつまんだ。食い足りない分はデザートで補うのが司の主義なのだ。

「病院っていつものところか」

「うん、じいちゃんとはあちゃん見舞いに行く」

「あ、そっか」

片岡家の事情をすべてご存知の周平は、こくっと頷いた。

「ずうっと寝てても、じいちゃんたちってちゃんと歳だけは取っていくんだよなあ。白髪増えてたよなあ。頭はげてきてたよなあ」

よく見ている。何度も周平と一緒に見舞いに出かけたことがあるから分かっているのだ。

「周平も気をつけろよ」

「なにをだよ」

「まゆ毛」

きよととした顔で周平はひたいを撫でた。

周平が帰った後、司はボタンのたくさんくっついた白いシャツと紺色のブレザーを羽織った。制服以外でブレザーなんて着るのは久々だった。ネクタイはいらないだろうと思っていたら、母にすぐ締めるように言われた。よそゆきの服なんて大嫌いだ。襟がちくちくして、特にのりが効きすぎているとかぶれてしまう。青大附中の制服なんてもともと嫌いだけど、うちでたまに着せられるブレザーはもったいやだ。

「さあ、早く乗ってちょうだいね」

母さんが運転していく。足だけスニーカーにして、ぞうりはビニール袋に包んで。お手伝いのおじさんおばさんが菓子折りの包みを三折ほどかかえて後方座席に置いた。司も助手席に座ってシートベルトを締めた。これも司は大嫌いなのだ。窮屈なことなんてどこがいいんだか。

「司、ほら、だらしなくしないの」

母さんが運転している間、司はひたすら目を閉じ眠り続けた。寝不足解消だった。

向かう「かみのよ総合病院」には母さんの父さん母さん、すなわち司のじいちゃんばあちゃんが入院している。周平にも言った通りいつものお見舞いだった。母は毎日、着替えや紙おむつを運ぶために行き来しているけれども、司はこうやって帰ってくる時しか寄らなかった。なんだか自分の中で、「おじいちゃんおばあちゃん」の意味が、他の連中とは違うような気がしてならなかった。

——じいちゃんばあちゃんって、みんな、目、開けてるだろ？

——うちのじいちゃんばあちゃん、目、開けたことないんだよ。

司の記憶する限り、ふたりが意識を取り戻したところを見たことがない。物心ついた時からふたりは病院のベッドの上でほとんど身動きせずに眠っているだけだった。個室に一人ずつだった。男と女、ということもあり個室二部屋を十五年以上占領しているという。司が生まれる前からの話だった。ただ、最初のうちはふたりとも髪の毛が黒かったような気がする。特にじいちゃんは。この数年ほど、髪の毛がどんどん後退して行って、ほとんど額がてかてかのつるつる状態だった。将来の周平を見ているようで少し心配だった。

車から降りると、周りには桜そぼろを振りかけたような景色が一面に広がっていた。

薄緑色の建物には病院名の看板がかかっていない。建物の陰になっている白い建物の方が本館なのだが、司のじいちゃんばあちゃんは長期入院患者のため、別館に回されている。特別緊急の手術が必要とかそういうわけではないので通常だったら自宅介護で十分とのことだった。ただ母さんの体力の問題もあって、今のところは病院に入院させたままだった。その辺の事情については司もよくわからない。

「司、荷物もってちょうだい」

スニーカーからぞうりに履き替えた母が、表情を大人の人たち用のものに切り替えて微笑んだ。歳相応とはいえ、だいぶしわも増えたものだと司は面白く眺めた。紙おむつを2パックと、着替えの浴衣を入れた大きな手提げを母は抱え、もう一つの風呂敷包みを司に顎でさした。

「これをね、婦長さんと看護婦さんに渡してもらえる？」

いつものことだった。永年お付き合いしていると、一種の家族付き合いに近いものとなる。お菓子やお茶、本当はしてはいけないらしい差し入れだけど、母はこっそりと人のいない時を見計らって渡すようにしている。

「最近はおじいちゃんたちもご機嫌がいいみたいでねえ」

——ただ寝ているだけだろ。

司の見る限り、じいちゃんもばあちゃんも、白い鉄のベッドで天井見上げているだけだった。

むしろ周囲で世話を焼いてくれている看護婦さんたちの方が身近だった。側の肘掛いすに腰掛けて、持ってきたお菓子をつまむ。窓辺にはまだ手つかずのまま残されている畑の連なり。本館が通院客中心でかましいのに対し、別館は看護婦さんたちの移動する音くらいだった。時折奇声を張り上げる年配の患者さんが病室前を横切る程度だろうか。

「そうなんですよねえ、そうそう、ほら司、お渡しして」

言われた通りに風呂敷のまま渡そうとしたら母に手を叩かれた。あわてて結び目を解いて中から取り出した。高校生くらいの看護婦さんが一生懸命断っていたけれども、間に入った母さんと同じ年代の看護婦さんが……たぶん婦長さんだろう……お礼を言って受け取った。

母が隣の病室にいるばあちゃんのところへ行った後、司はぼんやりと外を眺めていた。桜そぼろの景色よりもくっきりと、眼下には形よく緑の木々を整えた公園が見えた。きいろっぽい花が咲き乱れていた。お天気もいいので、家族に車椅子を押されながら散歩している患者さんもけっこういた。

——周平たちと一緒に野球やりたかったのにな、いつもそうだよな。

じいちゃんばあちゃんの見舞いは強引に予定に組まれている。日曜日の予定は学校行事以外ほとんど使えない。

酸素マスクをつけたまま、時々痰を管から戻しているじいちゃんの顔を見ながら、司はかつてクラスの連中から聞かされた話を思い出していた。

それまでは想像なんてしたことなかったことばかりだった。

——片岡、お前んうちってたいへんだよなあ。社長さんまだ目、さまさねえのか？

言われた時、どう答えていいかわからなくてうつむいたら誤解されてしまった。腹立てたと思われたらしい。

——すっげえ有名な話だし、うちの父ちゃんたちからも聞いてたけどさあ。

尋ねてきた奴が誰だったか覚えていない。入学直後のことだったと思う。ごくごく普通の調子でだった。世間話、特段盛り上げようとすることもなく、何気ない感じでだった。

——悪い奴に誘拐されて、一週間くらい見つからなくて、その後発見された時には死人みたくなくなってたって言ってたよな。あれから、どうなったんだ？ うちの母ちゃんたちもすげえ知りたがってたぜ。

じいちゃんもばあちゃんも病院で寝ているなんて言えなくて、それより連中がどんなこと言ってほしかったのかがわからなくて司はずっとだんまりを続けていた。幸い青大附中は話したくないという奴を無理やり絞り上げるようなことはしなかった。司が一言も発しないうちに、みな見切りをつけて離れてくれたから。

次の日こっそり大学図書館へもぐりこんだ。自分が生まれる一年前の、青澗市で起こった誘拐事件について調べた。新聞の三面記事にでかでかと載るような出来事だった。「青澗会社社長夫婦誘拐事件」と銘打たれている見出しを目で認識したのは初めてだった。懸命に読みこなしていくうちに、病院でねっころがったままのじいちゃんばあちゃんがまだ「社長」「社長夫人」だったことがあったのだと再確認した。

——あのふたりもちゃんと立って、話していたことがあったんだ。

今、ここで寝ているじいちゃんが、司のいることに気付いてぱっちり目を開けたとしたら。

——じいちゃん、僕のこと知らないんだよな。

血圧が上がっているのか下がっているのかわからないけれど、呼吸は整っているようだった。ベットの上に広げられた紺白の浴衣がすっかりくたりとしていた。

手元に持ってきたゲームウォッチを取り出して、時間つぶしをしていた。時折母さんが戻ってきては紙おむつをロッカーにしまったり、着替えを手提げ袋に入れたりと気ぜわしくしていたのを黙ってみていた。

「司も手伝いなさいよ」

「だって、何やればいいのかわからない」

本当のことだから言うしかなかった。実際司が手を出すとなおさら時間かかること多い。親切心で結局立っているだけだ。

母さんは備え付けのテレビにスイッチを入れ、目を閉じたままのじいちゃんに話し掛けた。

「早く目、さましてちょうだいよ、お父さん」

管から白い痰がピーカーへ流れていく。母さんにとってじいちゃんは、生身で動いたことのある確かな「お父さん」らしい。

退屈をもてあました司は、母がむっとするのを無視して外の公園へ飛び出した。

せっかく野球をやりたくて返って来たというのに、一日中辛気臭い病棟の中で過ごすなんてやってられなかった。時折すれ違う人が挨拶するので、頭を下げるくらいのはした。青湊において自分が注目されやすい人間なのだということを知ってからは、特に礼儀正しくするようにしていた。黙っていても「あの、『迷い路』の息子さん」というささやき声が聞こえる以上は仕方ない。

——生まれたくて生まれたんじゃないのにさ。

公園をぐるっと三周くらい駆けた。途中、藤の木を見つけてちょっと立ち止まったりした程度、あとは身体を疲れさせるだけだった。身体の筋肉が気持ちよく伸びた。まだ咲いていないだらんとした藤のつぼみが見え隠れしていた。年賀葉書で微笑んでいた、かの人のことを思い出した。

——やっぱり周平と一緒にくればよかった。

わからないなりに、何か言いたいことが見つかった。

神乃世町に戻ると、すべてが司の身体に合わせられて切り抜かれ、全身をのびのびさせてくれる。桂さんと一緒に過ごしている時も決して窮屈だとは思わないけれども、やはり一番足りないのは走ることであり、叫ぶことなのだろう。神乃世町では誰も「迷い路」の息子だなんて言わない。ただの司だった。

ただ、周平が昨日の夜口にしていた、「進路指導」の際に広がった幼なじみ連中の不安みたいなもの。それが気になった。青大附中でも進路指導のようなものはある。青大附高へそのままエ



スカレーターで進学できることにはなっているが、それぞれの進路によっては公立を受験することもあれば、他の全寮制高校に推薦されることもある。さまざまだ。おそらく司もこのままだと、青大附高へ進むことになるだろう。周平はどうするつもりなのだろう。神乃世町の近くには公立高校もそれなりにあるし、たぶん一番近いところを受験するつもりだろう。ほとんどの子は公立高校入学試験を受験した後、それなりの進学をするだろう。

——周平、どのくらい知ってるんだろう。

——僕が、社長になるって知っているって？

——でも僕は、父さんに軽蔑されてるよ。きっと。だから、うちから追い出されたんだって。空の青さが澄み渡り、細い雲がたなびいている。目の上をさりげなくこすられたような、いずい感じが残った。

——父さんも母さんも、僕が神乃世にいる時だけはふつうだけど、青瀬にいる時は全く違う人になるんだって、みんな知らないよな。

たまたまだだっぴろいうちに住んでいるだけ。そう司は思っていた。

誰も不思議になんて思わなかった。

——親友の「証」か。

本当だったら今、こうやって思っていることをそのまま周平に伝えたかった。

この二年以上もの間、司がどうしてクラスの連中から口を閉ざしてきたかを。

身体の中に芽生えている、突き上げるような叫びがどうしてなのか、周平に聞きたかった。

周平とだと平気なのに、学校では思いっきりミーハーな話で盛り上がれないという、おなかが空いたような感覚を。

藤に抱かれて微笑むあのひとのことを考えるたび、どうして変な夢ばかり見てしまうのか。

周平にだったらすべて話すことができただろう。

でもそんなことをした段階で、周平は司から離れてしまうだろう。

最低の奴だと思うに違いない。なにせ周平は女子にまるっきり関心を持っていなかった。司が小学校を卒業する頃からもそうだったし、今だにエッチな話とか女子の話とか、したことがない。きっとそんなことに関心を持っているのは司がえげつないからなんだと思うだろう。

それにもうひとつ。「どうしてあんなことをしたのか」とたずねられたらどう答えればいいのか。言い訳できれば世話はない。ただの誤解なんだと言い訳できればいい。でもできない。してしまったことは本当なのだから。

気がついた時、かばんの中に丸い布の塊が詰め込まれていたことも、妙な匂いが鼻についていたことも記憶に残っている。白やピンクや水色や、いろいろな色に目がくらんで、指先が勝手に動いたことも記憶している。ただなんでそんなことをしてしまったのか、いまだに司はその気持ちが出せない。今なら決してそんなことしたいなんて思わないだろうけれども、あの時だけは自分が自分でないみたいだった。おぼけがのり移って司を駆り立てたようだった。

屈伸運動を何度か行った後、司は立ち上がった。病院に戻ろうとして、見覚えのある女性とす

れ違った。特段挨拶されなかったので無視していたけれど、病棟にたどり着いた時に気がついた。名前は忘れたが、ある有名な女優さんだった。この病院は父さんがお金を出して有名なお医者さんと呼んだりしていることもあり、お忍びで有名人や財界人がやってくるのだという。それがわかるようになったのは、青澗に暮らすようになってからだったのかもしれない。

「司、そんなに退屈なんだったら、先にうちに戻る？」

帰ってからいやみったらしく母に文句を言われた。じいちゃんばあちゃんと話をしたことのあ  
る母さんならともかく、司にとってはただのくの坊だ。退屈だってしかたない。

「うん、戻る」

「じゃあ車に乗ってなさい。これからお母さんは、院長先生にごあいさつしてくるわ。いつもよくしてくれるからおじいちゃんもおばあちゃんも、ほんといい夢見ているみたいよ。あんたももう少しお手伝いしてくれたらねえ。それと、司」

「なんだようるさいなあ、ガキ扱いするなよ」

母の髪は少しほつれていた。和服姿こそ乱れていなかったけれども、病室で長く過ごしていると、どことなく顔が黒っぽく見える。

「周平ちゃんを大切にしなさいよ。あんたのこと大好きなんだからね」

なんだかくすぐったい。

——うるさいな、そんなのわかってる。

だから、親友の「証」を探しているのだと言い返せず、司はさっさと駐車場へ向かった。

桂さんが帰ってきたのは次の日の朝だった。

人間ドック自体は一日で終わったのだが、せっかく特別室に入れてもらったのだから、一晩くらい泊っていくようにとお医者さんから勧められたらしい。本人はそう言っていた。

「どっか悪いところあるから、検査したんじゃないのかなあ」

司が耳もとでささやいてやると、

「そうだなあ、司の面倒を見ているとさあ、ストレスたまっちゃって胃に穴が空いたぜってことじゃねえのかねえ」

「けどさっき、胃の中はなんでもなかったって言ってたよ」

肥満体型かつ高血圧の気はあるにせよ、胃と腸については問題なしとのことだった。

「だからこうやって、食いたくなるんだろうよ、司。さ、食うか食うか」

母さんが作ってくれたお弁当を持って、桂さんと一緒に出かけたのは神乃世の奥に位置している小さな公園だった。朝から食欲のなかった司に母さんが、懸命に苦手な煮魚やにんじんのサラダを食べよう叱りつけ、司もむくれ、結局は桂さんが機嫌直しに外へ連れ出してくれたようなものだった。

「お弁当、中、何かなあ」

「たぶん司の大っ嫌いな緑黄色野菜とかな、魚とかな、そんなもんだぞ」

「桂さん、おなか空いてるなら食べていい」

咽がいがらっぽくて、せきをした。たんがからんだわけでもないのに、だんだん言葉に濁った音が混じってきたような気がした。外はこの三日間ほど、すっかり晴れ渡っていた。飛び石連休にも関わらずしっかり司は学校を休んでいる。ちょっとだけ後ろめたさを感じる。きっと、藤棚の前に立つあの人も、学校に来ているのだろう。また天羽にきついこと言われて泣いているのではないだろうか。三年に上がってから司は、あの人が悲しい顔をしているところしか見ていないような気がした。

「昨日、周平たちと、野球するつもりだったんだ」

お弁当が予想した通り、朝のあまりものといちごジャムのサンドイッチセットだったことにえらく失望した。車の中でお弁当を広げ、司は窓を開けた。

「へえ、お前、ちゃんと打てたのか？」

「打たないよ。だって誰も投げなかったんだ」

つい、口が尖ってしまう。

「だってさ、みんなが集まっているって思ったら、周平だけだったんだよ。みんなたまたま、用事があったとか具合悪かったとか、言い訳つけてたけどさ、結局、僕なんかに会いたくなんてなかったってことだよな！」

さすがに周平の前でそんなことは言えない。素直に周平とキャッチボールして遊び、近所のゲームセンターに入った程度のことだった。いつもやっていることを周平としたに過ぎない。

「なにそう、ひがみっぽいこと言ってるんだよ、司。周平がお前のことひとりじめ！って思って

たのかもしれないだろ。あ、なんだかあぶない言い方だなあ」

「桂さんなんもわかってないんだ！」

わかってない。絶対、わかってない。前の日に周平は言っていたじゃないか。

「お前、社長になるんだろ」と。

そのことがばれたのが、先月の進路指導の時だったって言っていた。どういう話し合いの中で、司の父さんのこととか、司の将来とか、いろんなことが出てきたのかはまだ聞いていないからわからない。でも、周平がやたらと遠慮深いのはきっとそのせいに決まっている。他の友だちが誰も集まってこなかったのは、進路指導の時に意味不明なことを言って混乱させたいらしい、女の先生に決まっている。

「おいおい、だからってむくれるなって。ほら、俺の分だ。食え」

パンがやわらかくて、ちょうどほわっと口にとろけてくるようだった。中のジャムと冷たさが一緒だった。「いやあ、奥さんが作るサンドイッチ、うめえよなあ」桂さんに誉められるくらいなのだから、きっとおいしいのだろう。

司は言われるがままに、ジャムのたっぷり挟まったサンドイッチを口にした。たぶん足りないから、煮魚とかサトイモの煮っ転がしとか、それも全部食べなくちゃいけないだろう。おやつ持ってきたかったと、つくづく思った。

「ほら司、ほっぺた、ジャム、ジャム」

ウェットティッシュを渡された。顔を慌ててぬぐった。見かねたのか桂さんがふき取ってくれた。

「ったく、ぶきっちゃだなあ。司。お前ももうちょっと、大人になれ。彼女できねえぞ」

「そんなのいらないよ」

「ほらほら、赤くなる。あの可愛い女の子のことどうなんだ？」

頭をまたぐりぐりされた。

「関係ないだろ」

「ないわけないだろ。お前も男なんだからすることしたいだろ？」

司は車から降りた。深呼吸をした。目の前には巨大なくるみの木がそびえ、芝生が延々と続いていた。車を乗り付けてはいけない場所なのだろうが、諸般の事情によりこの辺にはあまり人が入ってこないようになっているという。パーマをかけたおばさん頭をした木々が、横並びに連なっていた。むしように木登りしたかった。でもくるみの木によじ登る腕力はない。

司は、おばさん頭の木の一本に目をつけ、駆け出した。途中木の股がちょうどいいくらいに広がっている安定性の高い木があるのだ。いつもそれに昇って下を見るのが好きなのだった。

——なんでだよ。

みんなの前では言っではいけない。だから黙っていた。

黙っていることは青濁で過ごすために不可欠なこと。だから慣れていた。

いつのまにか周平の前でも、黙ることが平気になってしまっていた。自分でも信じられない話だ。

——ほんとのこと、周平なんも教えてくれないんだもん。僕だって、周平以外の奴とも会いたかったし、それにいったいその女先生がどんなこと言ったのか聞いたかったんだよな。どうして、僕を避けるんだよ。そりゃ確かにうちの父さん、ものすごいお金持ちなんだってことはわかったよ。けど、僕はいつもおこづかい三千円なんだよ。桂さんにラーメンとかおごってもらってるんだよ。

周平はどこまで本当のことを知っているのだろう。

青潟で司が突きつけられた事実を、どこまで知っているのだろう。

——じいちゃんばあちゃんのこと、知っているんだよな。

あれだけ地元新聞の三面記事にでかでかと載る事件だ。今まで司が知らないできた方がおかしい。むしろ司が疑問に感じたのはその点だった。なぜ司は、知らなかったのだろうか。

青潟で「迷い路」が信じられないくらい有名で、司の父さんのことを知らない人はいないとまで言われているなんて、神乃世に住んでいた頃は想像していなかった。あんな酔っ払い父さんなのに。

——その女先生、何か、僕と父さんについての話、したのかな。

司はしばらく考えた。すぐに止めた。ろくでもない想像しか膨らまなかったからだった。司のうちのことをものすごく嫌っているか、それとも青潟での噂を広めたかのどちらかだろう。

よじ登り、小学一年くらいの子どもが横たわったような枝にまたがった。なんとなく、身体の中に今まで違った感覚が走った。ジーンズが木と擦れたせいだろうか。なんとなく腰のあたりがうずいてしまう。なんだか楽な格好に身体をずらしてみた。どうもおちつかなくて、木を抱きかかえるようにして顔を擦り付けてみた。こうすると少し、落ち着いてきた。桂さんがのんびりと車から降りてきて、ゆっくり司のいる方へ歩いてくるのが見えた。小さく手を振った。

——僕のこと、きっと嫌いなんだ。

——神乃世にいればよかったんだ。父さんなんかと一緒に住まなきゃよかったんだ。

一年六月にやらかしたあの事件直後、父さんに張り倒され、自分の部屋に閉じ込められた日のことを思い出した。いやなことばかりだ。青潟も、父さんも。

「つかさー。降りて来いよ。そんなところで一人、木馬に乗っててもむなしいだろ」

ようやく腹の肉をTシャツの中で揺らしながらやってきた桂さん、片手にはポテトチップスの袋が覗いたスーパーの白いビニールをぶら下げている。どこで買ってきたんだろう。まだたくさん入っているようだ。ポテトチップスは大好物。すぐに身を起こそうとして、またはっとうつ伏せた。同じ感覚が走った。

「ははん、降りられねえんだろ」

「違う、違うよ！」

変なこと考えているわけじゃないのに、身体の中が勝手に反応してしまうだけだ。こんなままで降りていたら桂さんにさんざん笑われるに決まっている。

「ほらほら、笑わねえから降りてこいよ。そんな格好で木登りしてたら、男が立ってもしょうが

ねえだろ」

——なんで、そんなこと言うんだよ！

目の前の桂さんはにやにやしつつ、下にビニールシートを敷いた。虹の色合いの、どはでなものだった。隠せない。司は上半身を起こし、できるだけ背中を見せるようにして木の幹にしがみついた。できれば桂さんの勘違いだったと思われるように、心の中で何度もおまじないを唱えた。

「ほら、じゃあまず、おかずだな。司、先にポテチへ手を出すんじゃないよ。まったく、お前てば本当にガキだなあ」

ちゃんとコーラ瓶も持ってきてくれていた。大嫌いな煮魚を桂さんが平らげてくれたのは助かった。ただ、にんじんの混じった野菜サラダだけは食うように命令された。膝を抱えたまま司は無理やり口に押し込んだ。誰もいない芝生の上で、司はちょぼちょぼと食べ、空に揺れる葉影を目で追った。

「あんなあ、司」

「まだ食べたらだめなのかなあ」

手を伸ばそうとしたところを叩かれた。

「お前、周平とスケベ話したことあるのか？」

片手で膝を割ってきた。さっき思いっきり幹と擦れたところにタッチしてきた。慌てて蹴飛ばした。外れて自分がお向けにひっくり返ってしまった。

「桂さんじゃないし、僕」

「またまたあ、好きなんだろ。ほんとは」

今度は額を小突かれた。あぐらをかいたまま、桂さんは司に背を向け、さっさとポテトチップスの袋を開けた。

「周平だってそんな話、したがないもん」

司も足下に上がってくる蟻を見つめつつ答えた。

「あれ、あいつもそうなのか？」

「ガキの頃から、周平ってそういう奴だった」

——だから、言えないって。

振り向いてみると、少いうつむき加減のまま、桂さんは肩を怒らせて、ため息をついていた。

「そっかあ。まだ周平、色気づいてねえのかあ」

「わかんない」

「あのまゆ毛がまずいのかねえ」

「知らないよ」

小学校の頃からそうだった。周平はあまり女子に関心を持つ性格ではなかったし、女子たちも文句を言ってつかかかってきたりはするけれども、それ以上に行動したりはしなかったように思う。司も同じだった。男子たちと固まって遊び、牛乳瓶のキャップを集めてはメンコに燃え、暇さえあれば野球に鬼ごっこ、サッカーにバスケ。一日中走り回るだけ走り回っていた。

今でも周平は、変わっていないはずだ。

たぶん、司が毎日青大附中の教室で猛烈に感じていることを、周平は想像できないはずだ。

「なるほどなあ。ガキの頃から、一度もないのかあ」

「小学校の頃は、あったけど」

「最近の方が、一番爆発してもおかしくねえのにな」

たぶん、司だけだろう。ちょっとしたことで女子にまつわる妙な想像をしてしまいそうになるのは。クラスの男子たちもそれなりに「お付き合い」はしているようだけど、司のようにどうしようもなく一人の女子のことばかり考えて、眠れなくなるなんてこともきっとないだろう。あの天羽だって、西月さんをあっさりと振ったところを見ると、司みたいな気持ちになったことがないのだろう。自分だけだ。司ひとりだけが勝手にいやらしい想像ばかりしてしまうのだろう。桂さんと同じように。きっとだ。

——だから、あんなこと、きつとしちゃったんだろうな。

他人事のように思う。いつも、あの事件を思い起こすたび、自分がしでかしたことの重大さに震え上がると同時に、あの頃の気持ちが思い出せずいわゆる新聞の三面記事を読んだような気持ちになる。今の自分がじいちゃんばあちゃんを眺めていても、でくのぼうのように転がっていると感じているように。どこか心の枝みたいなものが、何かの拍子にぽきんと折れてしまったのかもしれない。わからなかった。

——周平にばれてたら、僕はきっと。

もう親友だとは言ってもらえないだろう。いや、それ以前に、あの葉書を毎日眺めて夢を見ている自分を思ったら、もう友情なんて終わってしまうだろう。

「隠し事するなんて周平が知ったら、いやあ、きっと、あいつ泣くぞ」

「別にそんなことしてないよ！」

「でもなあ、司。あいつがな、『親友の証』ってくさい台詞言ったのは、たぶんその辺じゃないのかねえ」

一度も匂わせたことがなかったのに、桂さんは、ずっと司の頭の中で繰り返している言葉を持ち出した。腹ばいになり顔を隠した。

「うまく言えねえよ。俺も。世の中不思議なもんでな、隠し事をしている時ってどうしても、こっちの方が落ち着かなくなってしまうもんなんだよ。なんでだろうな。特にお互い、いい奴だなんて思える相手ほど、そうなんだぞ」

——いい奴だから言えないことだってあるんじゃないかよ。

司は言い返したかった。少し大きめの蟻が白い粒を加えてシートの上を歩いていった。

「お前がどこまで知ってるかわからねえよ。みんな教える必要はねえだろうな。でもな、司がもし、ほんの少しでも周平に、秘密を教えてやったとしたら、きっとあいつは安心するんじゃないか」

——秘密ってなんだよ。

もごもごとつぶやいた。

「なんだかんだ言たって、お前が片岡社長の息子なんだってことには変わりねえだろ？ この

前お前言ってただろ。小学校の時は運動会で『親子でやりましょ二人三脚』に社長来てくれたことあったってな」

なぜか父さんは、学校関係の行事に燃える人だった。毎年、よほどのことが無い限り運動会や学芸会には来てくれたし、頭を桂さんのような感じで何度もなでなでしてくれた。

「だろ？ それも、片岡社長が司の父ちゃんだから、してくれたことだろ？ みんな同じなんだぞ。みんなが肩書きがどうの、金持ちがどうのって言うけどな、結局のところ、お前の父ちゃんなんだってことが一番大切なんじゃないか？ それに周平も、お前の父ちゃんのこと、大好きだと言ってただろ」

——けど、僕の父さんだからであって、もし本当のこと。

「何言ってるんだ。司、いいか。よく聞けよ」

鼻の前にいきなりポテトチップスの袋を突き出された。漂う油っぽい匂いに誘われて、司は手をつかみまもてつかんだ。座り込んでかみ締めた。

「お前が思っているほど、周平も他の奴も気にしちゃあいねえよ。そりゃあな、神乃世町にお前の父ちゃんほど金持ちはいないかもしれない。お前のうちみたいに、でっかいうちに住んでいる奴はいないかもしれない。でも、司は司だろ。周平はお前の親友だろ。だったら、そう言ってやればいいんだよ。そうさな、あいつも少々すねちまうところあるからな。例えばだ。こう言ってやったらどうだ？」

——こう言ってやったらってなんだよ。

次に桂さんは、一言。

「俺には好きな子がいるんだ！って叫んでみろよ。司、こればかりは、本当のことだもんなあ」

思いっきり司は、ポテトチップスの袋をまかしてしまった。慌てて広いながら、口に放り込んだ。

「やんや、きったねえなあ。落ちたもん拾うな」

結局司は、桂さんが片付けてくれるのを黙って見下ろしているだけだった。

外にいと、まだ五月の風は冷たい。部屋の中だとそうでもないのだけれども、Tシャツとベストだけでピクニックを楽しむのも限界があった。「さあてと、じゃあ行くぞ」途中まで片付けを手伝ったけれども、司のぶきっちょさにあきれた桂さんが全部やってくれた。「もう帰るの」「寄るところあるからな」荷物くらいはさすがに司も持っていった。食べ残した弁当とシートを抱えただけだった。

帰りの車の中、司は窓を閉めた。入ってくる風よりもクーラーの適度に聞いた環境の方が気持ちよかった。窓から眺めると、年配の女性たちが花見をしてなにやらひとりが踊っているのが見受けられた。また別の場所では、小学校の野外授業なのだろうか、ぞろぞろ男子女子それぞれ二列になって歩いている姿も見かけた。

——周平にそんなこと、言えるかよ。

自分なりにずっと考えてきた「証」とはなんなのか。



隣りで黙って運転している桂さんに見られないように、司は顔を窓に向けた。

あいつが欲しがっているであろう時計をやろうとした時に、なぜあれだけ激怒したのか分からず戸惑い、かといって自分なりにどう答えていいかわからなかった。桂さんの言うとおりに、自分の隠してきた秘密というものをさらけ出せばいいのだろうか。なにか、気持ち悪くなりそうだった。

——僕は、二年前に、女子の更衣室に入って、女子の着ているものをもって、外に出ました。

——手提げの中に入れていて、歩いていたら。

——ずっと一人で歩いていたら、いつのまにか、外に出ていたので、そのまま歩きました。

——その時、白い木がたくさん、こんな風に並んでいる、林を見つけて入っていきました。何をしたかは覚えている。

でもなぜあんなことをしたのだろうか。

やっちゃいけないことだということくらいは、今ならはっきりと言える。

今なら絶対にやらない。

でも、あの時の記憶だけは紙の上を書いただけの、平べったい状態だった。

だから、何もいえなかった。先生に呼び止められて、振り返って、いきなり学校の個室に閉じ込められ尋問された時も、「なぜそんなことをしたの」という狩野先生の言葉にも、反応することができなかった。天羽たちが直後に司を教室に呼び出し、「なぜ、そういう紛らわしい行動をとったのか」と問われても何も言えなかった。

司の目の前に広がる景色は、神乃世で初めてふくらみ広がっていく。

——なんで犯人だって決め付けるわけ？ 天羽くんもひどいよ。みんな、同じクラスメートでしょ。もっとクラスメートを信じなくちゃだめよ！

男子のひとりが、「お前、女子のパンツを触った感想は？」といやらしげにささやいた時だった。今までは意識なんてしたことなかった。ただ同じクラスにいる同じ顔の女子と同じだと思っていた人が立ち上がって、司の前に立ちふさがった。女子たちのざわめきが生ぬるく広がった。

「いい？ 第一、どこで片岡くんがそういうことをしたという証拠があるの？ 実際、見たの？ ほら、天羽くんにも聞いているのよ。見てもいないのに勝手に決め付けるなんて、ひどいじゃない」

少し甘えた感じの早口言葉。最初、何を言っているのか聞き取れなかった。

ただ表情だけは嘘じゃないとわかった。司の顔を何度もあどけなく見やりながら、悪口を言った奴だけではなく、自分の側で腕組みしていた天羽にも同じように声をかけていた。びんびんと響き渡る声が教室中を静まり返らせ、同時にどろどろしたゼリーのような空気にとろかしていた。

——だって、犯人って一人しかいないじゃない。

——そうだよ、片岡くんしかいないって。

——小春ちゃん、なんでいきなりそんなこと言うわけなんだろうね。

あの時、一番「なんで」とつぶやきたかった自分がいた。

目の前の女子が、クラスの評議委員を勤めている西月小春だという名を知ったのは、その次の授業からだ。同じ顔の男子、女子。誰一人見分けることができず黙りつづけていた司が、初めてしっかりと別格、と思うことのできた人だった。おかつ髪に前髪をつまむようにして斜めに結び、ころころと笑う、あの人のことをいつしか目で追うくせがついていた。

——嘘だと言いたかった。

あの人が言う通り、全くの濡れ衣だって言い切ることができればどんなによかったらう。

司が初めて、自分のしたことを悔いて泣いたのは、帰ってひとりぼっちになってからだった。

今まで、こういう時に思い出す相手は周平だけだった。悔しくて泣きたくて壊れてしまいそうな時、語りたと思うのは周平たったひとりだった。

——周平、聞いてくれよ！

二年間、言いたくても言えなかった。小学校の頃ならば、毎日周平の家に駆けて行ってしゃべりつづけることが、今の司には出来なかった。

今、言わないと、もう二度と周平に話すことはできないかもしれない。どんどん、他の友だちと同じように遠くへ逃げてしまうかもしれない。どんなに司が周平を追いかけても、追いつけないかもしれない。

車窓から流れる山々と、満開の桜、こぼれそうに大きなたんぽぽ。景色が遠のいていくにつれ、司は突然、怖くなった。

「桂さん、あのさ、まっすぐこれから周平のうちに言ってほしいんだ」

「おい、いきなりどうしたんだあ？」

「とにかく、早く、早く」

司はわめいた。脇のハンドブレーキに触れそうになり怒鳴られた。

「じゃがっしい、なにほざいてるんだよ。わあったよ。行く行く。周平とこな」

目一杯の神乃世の景色が続いていた。時折、「ほら、信号なんか無視しちゃえ」と騒いでは叱られた。

周平は目をまんまるくして玄関から出てきた。こざっぱりした町営住宅の一棟。神乃世町ではアパートのような集合住宅が少なく、ほとんどの人たちが一戸建てで暮らしていた。周平もその一人だった。お母さんとふたりで、きれいな花のいっぱいおがった庭のついた家に住んでいた。

「どした、司」

「あの、あのさ」

降ろしてもらった後、先に桂さんには帰ってもらった。

「今日おばさん、いないよな」

「いるわけねえだろ、母ちゃん仕事だ」

「ちょっといいかな」

黙って顎をしゃくる周平。前の日よりはなんとなく、他人行儀なところが残っているようだ

った。たぶん、司の感じていたことすべてかもしれない。顔の汗が張り付いて臭い。司は何度か鼻の下をこすった。奥の四畳半に入り、足の踏み場のないくらい漫画本と洋服が散らばった場所で、自分の座るところだけ片付けた。ぬぎっぱなしの下着や靴下が散乱していた。いつものことだ。窓を開けて周平は、椅子にまたがって座り、膝を抱えた司を見下ろした。ジーンズの膝が白っぽくなっているのに気付いて、なんとか指先で丸く話を書いてみた。

「あのさ、周平」

司は切り出した。咽が詰まりそうで、声が出なかった。

「今から僕が話すこと、まずは何にも言わないで、全部聞いてくれるか」

「はあ？」

身を乗り出すようにして、椅子を前に傾けバランスをとる周平。

「絶対に、何にも文句言わないで、ただ黙ってしゃべってるの、聞いてほしいんだ」

「何改まってるんだよ」

——周平にだけは、分かってほしい。

桂さんが教えてくれたように、まずは一言ずつ区切りながら、言葉にした。

「僕、今、好きな女子が、いるんだ」

「司、おい、今なんて言った！」

「だから黙って聞いてくれっていったらろ！」

ぐわっと涙が出そうになった。こらえた。司は膝を抱え直し、もう一度つぶやいた。

「その人に、今度、ちゃんと話そうって、思ってる」

「ちゃんと話すってなんだよ！」

「だから黙れよ！」

軽蔑しないでくれ、とは言いたくても言えない。司はもう一度深く息を吸うと、言葉を吐き出した。周平に割り込ませないように、ひたすら早口に叫びながら、途中息継ぎをしながらずっと話し続けた。

「今、まだ言う勇気ないんだけど、僕は青濁で取り返しのつかないしくじりをやっちゃったんだ。なんであんなことをしてしまったのか、僕もまだわかんないんだ。けど、いつか必ず周平には話す。僕のやらかしたとんでもないことを、クラスの中でひとりだけかばってくれた人がいて、それが、今言った僕の好きな女子なんだ。証拠もないのにそんなことしたなんて決め付けるのは変だとかいって、僕に悪口言う奴へ文句言ってくれたり、帰り、誰も僕に挨拶なんかしてくれないのに、その人だけがにっこり笑ってくれるんだ。ほんとだよ、その子だけなんだ。僕に年賀状くれたクラスの人ってその子だけなんだ。優しい子なんだなって最初は思った。うちの小学校の女子みたくおっかなくないなってそう思ってただけなんだ。けど、その子が今、仲の良かった男子に嫌われて、すごく辛い思いしているのを今、見てるんだ。どうしてそんなに嫌うのかわかんない。僕の場合はやったことがことだから、当然卒業までシカトされてもしょうがないんだって思うんだ。それはあきらめてる。けど、その子は僕の見限り、全く悪いことなんてしてないって思うんだ。クラスのこと一生懸命だしさ。本当だったら僕なんて絶対に手の届かな

い人なんだって思っていたけど、その男子から言われてるんだ。僕が本当にその子好きだったら、譲るって」

「おい、ちょっと黙れ！ 司、お前変だぞ！」

周平が本と靴下の上にぺたんと座り、怒鳴りつけた。

「周平、お前、女子のこと好きだなんていう奴、嫌いだよな。僕もその子のこと知るまでは女子を好きになる奴がどうしてそう思うのかわかんなかった。けど、今ならわかるんだ。嫌われてもしかたないってわかってるのに、ひとりでも優しくしてくれたら、どうしても好きになっちゃうよ。僕だけじゃないかもしれないけど、それでも、嫌われてる僕のことをふつうに接してくれる人なんて、いないんだ。桂さんだけなんだよ。今、僕と話してくれてる青潟の人って。だから、僕はもう決めたんだ。僕さ、周平」

言葉が溢れた。言うつもりのない言葉ばかりだった。周平はあきらめたように、下から見上げるようにして司を見つめた。

「その子がどんなことをしてたとしても、どんなに嫌われるようなことしていたとしても、僕だけは、その子の味方でいようって決めたんだ。僕にしてくれたことを、そのまんま、その子に返そうって思ったんだ。きっと僕がその子に好きだって言ったら、嫌がられるってわかっている。嫌われても当然だって思っている。好きになってくれなんて思わない。ただ、僕は、その子のことを味方なんだって思いたいんだ。僕考えていること、間違ってるか？」

「ちっ、結局お前も、女かよ」

吐き出すように周平が横を向いてつぶやいた。

「周平、僕だって、たぶん周平だったらそう思ってる。ずっと女子なんて好きにならないって思っていたんだ。けどやっぱり、どうしようもないよ。夜になったら変なこと考えたりしちゃうんだ。青潟のストリップ劇場のポスター見ていると自然と鼻血が出るし。きっと周平はそんなこと考えないよなって思ってたし、絶対そんなこと、言わないでおきたかったんだ。けどさ、周平、欲しがってただろ」

「何をだよ」

少しあきれた風の言葉に、司は泣きたくなった。

「親友の『証』をさ」

もう溢れる涙がどうしようもなく流れた。しゃべり疲れたのと、息が上がったのと、すべてで頭の中が朦朧としていた。

「周平にしか、こんなこと言えないよ。僕みたいにいやらしいことばかり考えてるなんて、変だろ。絶対変だろ。けど、しょうがないんだ。もう、どうしようもなくて、言えない」

周平は立ち上がった。目をそらしたまま、机の引出しを開いた。部屋と同じくごちゃごちゃした状態。実用に適していない。かき回した後、ぽんと一冊、投げてよこした。

「これ、なんだよ」

おちち、という感じの胸を両腕で隠した高校生くらいの女子が、表紙からじっと司をにらんでいた。写真集だった。めくってみると、どの写真もみな際どかった。足をゆるめて寝ている姿が

印象的だった。ほとんど、布を身につけていなかった。

「そういうことだ」

一言だけつぶやき、周平は司が涙をぬぐい切るまで黙っていた。

連休明けは大雨だった。司のようにまとめて六日間連休を取ったのは珍しい存在だったらしく、好奇の眼を向ける連中もいた。気にしないようにうつむくのがいつもの司だったが、どうしても顔をあげたい気持ちになってしまい、数度西月さんと目が合ってしまった。にっこり笑っているのを見るだけで、また学校での生活が始まるのを乗り切ることができそうな気になる。

「西月さん、そんな気を遣わないでもいいですよ」

朝の会の前に、西月さんが大きな菓子折りを持ってきて、教卓にとんと置いて、  
「このあられ、すごくおいしいってうちのおじいちゃんが言ってたんです。だから一袋ずつ分けてください！」

旅行するたびにいつも、西月さんはお土産をこまめに買って来てくれる。仲良しの友だち連中だけならわかるが、クラス全員というのが珍しい。食べ物だから素直に喜ぶ男子たちだけど、今年に入ってからはそうでもないようだった。原因が天羽にあるのはわかりきっている事実であるが。

「それなら、一人ずつ持って行ってください。そうですね、班長さん、人数分お願いします」

狩野先生は力の入らない声で静かに指示をした。一部の男子がうんざりした顔をしていた以外は、素直にみな「小春ちゃん、ありがとう！」とお礼の言葉をかけているようすだった。司のいる班長も、投げるように手のひらサイズの和紙袋を投げてよこした。よく母さんが取り寄せているところの、おいしいと評判のあられだった。桃色と白の小粒たちが和紙の間から透けて見えた。

——どこ行ってきたんだろう。

もし、あんなことをしてなければ。すぐに話し掛けて聞いていただろうな。

司はすばやくかばんの中ポケットにあられ袋をしまいこんだ。天羽の方へつい目が行った。角のところを持ち上げていたが、司の視線に気が付いたらしい。隣の男子に声をかけていた。頷いたその男子、天羽の分をつまみ、司へ投げてよこした。二列くらい離れている。コントロール良く、勢い良く、机の上に着地した。

西月さんがそれを見ていた。司も表情を見ることはしたくなかったので、そのまま受け取り、やっぱりかばんにしまった。

——周平と約束したんだから、果たさないとな。

周平の前で泣きながら告白したあの日以降、一気にわだかまりは消えた。さんざんあきれられ、嫌われるかもしれないと覚悟していたけれど、周平は特段何も言わず、次の日に神乃世の友だちを呼び出してくれた。しかも、謝らせてくれた。別にそれを求めていたわけではないのだけれども、司も素直にほっとしたところがあった。

「こいつら、司が金持ちになっちったら人間代わるんでないかって心配してただけだってな」

どうしてそう思ったのか、聞こうと思ったけれどそんな暇はなかった。

みな申し合わせたように、学校からくすねてきたらしいボールを使ってドッチボール班分けじ

ゃんけんをし始めたからだった。その後、神乃世にて周平と真面目な話をした記憶はない。ただ、小学校時代と変わることなく、野球やゲームや車のカード話で盛り上がりただけだった。

——だって、あれが親友の「証」なんだからさ。周平のことを親友だと思う以上。

西月小春に、自分の想いを打ち明けるということ。

きっと受け入れてもらえないことはわかっているけれど、周平と同じ温かさを分けてくれた、あのクラスメートへ、ありがとうという言葉进行告げること。

今、司のしたいことはそれだった。泥沼に足をつっこんでおたおたしている自分が情けない。もし、自分の立っている場所がふつうの地面だったら、ためらわないだろう。藤棚の前で微笑むあのひとに、告げたい言葉はみな自分の中に揃っていた。きれいにラッピングして、プレゼントしたかった。けど、それは今の司にはできない。してはいけないこと。そう思ってきた。迷惑だと思われてそれでおしまいになりそうだった。

——そうだ。天羽だ。

両腕を組んで、「そういやあさあ、今度、落語のテープが手に入ってさあ。ダビングする？近江ちゃん？」と別の女子に話し掛けている。できればひとりになったところを捕まえて、話をしたい。連休前に持ちかけられたことへの答えを出すためだ。

「話があるんだ」

放課後まで待つことになった。雨は時折やみ、また降り続けていた。たまたま天羽の班が掃除当番だったこともあり、司は廊下でさりげなく待つことができた。女子たちが先に教室から出て行くのを確かめた後、一呼吸おいて司は近づいた。

「おう、どうした片岡」

「この前の話なんだけど」

一度口をきりりと結び、もう一度臍のところに力をこめた。

「あれ、本気なのか」

「ああ、西月のことな。あたりまえじゃん」

合点がいった様子。天羽は腰に手をやり、うんうんと頷いた。

「連休中、まじで考えてたってわけかよ」

言葉にできない。司はそっと足下を見つめた。頷くことに抵抗があった。

「まあそうだよな、けど、俺はお前のこと買ってるんだぜ。片岡いいか、お前ちゃんと毎日努力してるじゃねえかよ。普段掃除もさぼらねえし、悪口言われても文句言わねえしさ」

——言うだけのことしてたら言うさ。

悔しくなる。いつもそうだ。天羽を始め、他の連中たちに言われた言葉を思い出すたび、司はたまたま泣きたくなる。「だから、お前、西月のこと、俺から取っちゃえよ。俺はいつくらかも三枚目になってやるからさ」

——三枚目？よくよく見ると天羽の口元には、穏やかな笑みが浮かんでいた。

「やっぱり一度はな、付き合った相手だ。情けってのはあるもんだぜ」

——別に嫌っているわけじゃないのかな。

なんとなく、天羽は心底西月さんを嫌っているように思えてならなかった。でも、今の言い方だと、少しは猶予がある様子だった。その辺に少しだけ司はほっとして、突然どきりとした。鼻の下をこすり咳払いした後、天羽は人差し指を立てて、司にこいこいと合図した。雨だれが叩きつける音で、教室にはシャッターが下ろされたようだった。

教壇にふたり腰掛け、天羽はまず息を吐き、膝を広げた。両手を組んで祈りのポーズをした。「片岡、本当に、本気で、なんだな」 天羽に対してではない。周平に誓って頷いた。「一年の時からだよな」

同じく、遙かかなたの周平への答えとして。「やっぱし、俺の見ていた通りだったなあ。で、二年間西月を見てきて、やっぱり変わんなかったか」

天羽の方を一切見ず、司は三度目の頷きを繰り返した。にまっと笑って天羽が肘をついた時も、司はただ真っ正面の一点を見据えていた。「そっかそっか。お前って、実は結構素直な奴だなあ。いや、バカにしてるんでねえよ。お前みたいにストレートに頷く奴って、やっぱり本気じゃねえかって俺も思うからさあ」 口元でまた小さく笑い声を立てた。

「じゃあ、俺なりに、腹割って話をさせてもらいたいんだけどな。お前、今のままじゃあ、玉砕しちゃうぞ。あ、俺矛盾したこと言ってるか？」 ——矛盾してないさ。 今度は首を振って答えた。

「その理由がどこにあるかは、片岡、お前も自覚してるんだよな。まあそれはしゃあねえや。けどなあ、そこをクリアしねえと、話がまとまらないってのも確かなことだったりするわけだ。そうだろ、わかるだろ」

天羽の言い方は、何となく学校の先生っぽかった。無理やり大人になってやろうとする押し付けがましさを感じさせる。

「単刀直入に言うわ俺。あの、下着ドロのことだけどな、あれ、本当にお前なんだな」  
——いつか言わねばならないって、わかっていたさ。

周平にもそこまでは言えなかった。証拠を押しられても先生にも頷けなかった。  
——周平、そういうことだ。

膝に置いていた両手が震えた。一年の時に吊るし上げの弾劾裁判にかけられた時、最後まで口を閉ざしていられた司だった。でも、二年たった今、覚悟は出来ている。 四度目の頷きを返した。

「そっか。わかった。まずはそっからだ」

天羽も怒らなかつた。むしろ安心したようにまた笑って、ぐいと身体を斜めに向け、親しげなポーズを取ろうとした。心持ち前かがみになった。

「つまりだな、俺がお前に言いたいのは、今までやっちゃったことを一度ご破算にしちゃえばどうかってことなんだ。お前、そろばん教室通ってたか？」

首を振った。神乃世には司の通うような塾とか習い事とか、ほとんどなかった。



「俺、暗算結構いけるんだぜ。それはいいや。とにかくな。俺が思うに、お前はまず三年A組の連中一同に、本当のことを白状してごんげする必要があると思う。これは決してお前を吊るし上げたいからじゃねえ。そんなことしたってなんになるっていうんだよ。もうあと一年もねえんだぞ。それにな、この中学卒業しても、片岡、お前青大附高進むだろ。このままずっと、『下着ドロの過去を隠しつづけたとんでもない男』っていわれるよりも、『きちんと禊を済ませて生まれ変わった男』と思われるのとどっちがいいんだ？　どんなに隠してたって、あのことはみんな、噂で耳にしているし、ずっとこのままだと陰でこそこそ言われるわけだ。そんなの、はっきり言って、切ねえだろ？　そうだろ、片岡」

青大附高なんてどうでもいい。周平のことだけを思い浮かべ、頷いた。

「だろだろ。だからだ。俺がひとまず、修学旅行前にうまくごんげの時間をこしらえてやる。その時にきっちり、けじめつけろ。まずは野郎連中にだ。女子も人間だ。話せばわかってくれるさ。もちろん、西月もな」

——そうだろうか。不安がよぎる。かばんの中に西月さんの分身がいる、そんな気がするあられの袋。

「あの女、ほんっと単純だから、『片岡くんって男らしい！』とか言って、すぐ俺のことなんか忘れちゃうよ。まあお前が惚れている相手だしあまり悪口言うのはやなんだけどな。西月、どうやら男子には、王子様願望あるみたいなんだ。ほら、知ってるだろ。俺たちが最初で最後の共演となった、評議委員会のビデオ演劇『奇岩城』。あん時なんてなあ、たぶん片岡だったら気絶しそうな感じで甘えた声だして『ルパンを撃たないで～！』とか言いながら、抱きつこうとしてきたんだぜ。王子さまなんて俺にとっちゃあ、こっぴどかしくていけねえや。お前だったら正真正銘、王子さまになれるだろ？　お姫様には毎日、百日間、ばらの花を持っていかねばならないなんて、ふざけるなよって感じだよなあ。俺には出来ねえよそんなこと」

「ばらの花？」

百日のばらの花。意味不明だ。天羽もあきれ調子で続けた。

「俺たちがなんとなく付き合うってことになった頃だったな、小野小町と深草少将の恋の話、ってあるらしいな。それを古文の授業で聞きつけたらしいんだ。深草少将って悲惨な奴だったらしいぞ。小野小町が深草少将にとんでもない条件を出したんだと。百日間通い詰めることができたならOKするって言ったらしい。で、くそまじめな深草少将は九十九日間通い詰めた。がしかし、あと一日ってとこで風邪引いちゃっていけなかった。ジ・エンド。これはなあ、なんかなあ、男として許せねえことだよなあって思うが、女子ってのはそういうのにロマンチックを感じるらしい。西月もそうだったんだ」

——百日、通うのか。

古文の授業はほとんどわからなかったので聞き流していた。司は思いっきり後悔した。

「で、西月はたまたまふたりに花屋に出かけた時に、いきなりばらの花を指差した。なんて言ったと思う？」

わかるわけない。

「『私、小野小町のように、ばらの花を毎日、机の上に置かれて思われてみたいなって思うの』

ってな。いかにも、俺にそれやれよって、言わんばかりにな！」——別にそんな怒ることでもないと思うけどな。

単に西月さんの憧れを語っただけなのではないだろうか。司にとってはそうとしか思えない。なんで天羽がそこまで激昂するのか、理解できなかった。別に西月さんは天羽にそうしてほしかったわけではないのかもしれない。たまたまばらの花が好きで、たまたま小野小町の話を出して、ほんつとにたまたま、深草少将の恋物語に感動して、というただそれだけなんじゃないだろうか。

「俺は悪いが、押し付けがましいのは大っ嫌いだ。まあ俺の立場としては、簡単に西月を怒鳴りつけるわけにはいかなかったし、それなりにその場をごまかした。けどな、お前がもし俺の立場だったらどうしてる？ 一言怒鳴ってやるのが筋だろ？」

天羽は同意を求めている。裏切ってやりたくなかった。

「いや、それなら僕は、ばら、買ってあげる」

問題は毎月三千円の小遣いでどう対処するかということだけだ。

「へ、お前、本気で買う気になれるのか？」

「だって、ばらが好きなんだったら」

「けど百日もだぞ、三ヶ月以上だぜ」

「一日一本だったら、それほどお金もかかんないと思う。いざとなったら、その辺のきれいな花を摘んで持ってってもいい」

しばらく天羽は口をあげたまま、目を泳がせていた。

「片岡、お前、どうしてもっとしゃべらねかったんだよ。お前ってさ、あんなへまやらかさねば、もっと人生、明るく楽しく生きられる人間だぜ」

西月さんはただ、花が大好きだったのだろう。

司はあまり花について詳しくない。年賀状で初めて藤の花がどんなものなのか知ったくらいだ。ただ、年に二回くらい父さんが、お母さんに真っ赤なばらの花束を持ってきていちゃいちゃするのは覚えていた。結婚記念日と母さんの誕生日らしい。父さんは母さんが大好きなんだということだけはよくわかった。女の人はきっとばらの花が好きなのだろう。

——そうか。西月さん、ばらが好きなんだ。

ばらの花が届くと母さんは、めったに使わない真っ白い花瓶を持ってきて、背を低めにたっぴりに生けた。ばらには刺があるはずなのだが、お花屋さんで買ってきたものにはなかったので不思議だったことを覚えている。学校で「ばらには刺があるなんてうそで一す！」と言い放ち、担任の先生および女子たちに鬨聲を買ったという、情けない思い出も残っている。

——九十九日通い詰めた人、気持ち、わかるな。

もし小野小町が西月さんだったとしたら。自分が深草少将だったとしたら。

きっと同じことをしていた。絶対そうしていた。

「片岡、なに一人であの世に行ってるんだ？」

肘でつつかれ、慌てて我に戻った。まだ妄想から抜けきれない頭のまま、司は思いつくまま尋ねてみた。なにせ天羽しか、西月さんに関する生情報を教えてくれる奴はいないのだ。

「西月さんが欲しがっているのは、花なのか？」

「ああ、なんか女子ってやたらと花が好きらしいよな。あと、ビーズの指輪も欲しがってたな。やっぱその次の日にな、いたしかたない事情でふたり、『リーズン』へ買物に行ったというわけだ。で、女子がやたらと好きな手芸店があったと。ビーズとかししゅうとか、家庭科の授業満載ですってところ。そこに立ち止まってずっと西月、『ビーズで作る指輪セット』それを眺めててな、『こんな可愛い指輪、いつか王子さまから貰いたいなあ』って、また俺の顔見て言うんだぜ。前の日の深草少将事件のこともあって、さすがに俺も切れそうになったけど、やはり宮仕えのわが身、黙ってなくちゃあだめだったんだよ。ほら、ちょうどビデオ演劇撮影中だったから波風立てたくないってとこでさ」

ビデオ演劇ということは、今年の一月初めだろう。

しかしなぜ、天羽はそこまでいらいらしなくてはならないのだろう。

司には謎だった。

「あの、さあ」

恐る恐る司は言葉を発した。

「西月さんはただ、指輪が好きだけだったんだろ」

「はあ？」

「ビーズの指輪。手芸とか、そういうの好きそうだから」

けっと天羽は思いっきりのけぞり、後ろの壁に頭をぶつけそうになった。

「なわけねえだろう！　じゃあなんでだ？　俺の顔をじいっと見るんだ？　話の流れで、なんか俺が買わねばならねえ感じになっちまって、しかたなく俺、『ビーズで作る指輪セット』セット、買ってしまったぜ」

がたいのいい天羽が、どんな顔をしてかわいらしい雰囲気のキットを買ったのか、想像すると司も笑いたくなる。がこらえた。西月さんに悪い。その指輪は西月さんに行かなかっただろうから。

「そのセット、捨てたのか。もしいらないなら、僕に」

言いかけたところを押えられた。片手で「ちょっとまった」と押し戻すしぐさをした。

「俺が、本気で惚れた相手にやった。細い針金と格闘するってのも、相手が別だったらなんとななるもんだよなあ」

天羽が好きな相手というのは、たぶん狩野先生の妹と言われている、近江さんのことだろう。

女子たちからはなんとなく無視をされている感じだが、男子たちとは仲がよく、たいして困った顔もしていない。いつも漫才や落語、映画の話をして盛り上がっている。今はだいぶ伸びているけれども入学当時は丸刈り寸前のたわし頭だったので、かなり強烈な印象を受けた。あまりビーズの指輪とか、ばらの花束とか喜びそうな感じではない。天羽も近江さんのことについてはあまり触れたくないらしいので、司も黙った。

しばらく天羽は西月さんとの会話を、声音を変えながら再現した。ところどころ、むかむかするような表現もあったけれども、できるだけ冷静に語ろうとしている天羽を尊重して司は聞き役に回っていた。人によっては感じ方も代わるものだとつくづく思った。

司がひそかに宝物にしているあの年賀状すらも、天羽にとっては胡散臭い以外の何者でもないらしい。

「なんであつたらもん、クラス全員に送りつけるのか俺には理解できんぞ。そりゃあな、全ての人間に対して親切にしてやるのは大切なことかもしれないぞ。けどな、俺としては返事を書くのに困っちゃうっていうのも辛いと思うんだがどうだ？ 片岡、あいつに年賀状送ったのか」

「うん、うちの年賀状を送った」

きれいなプリントがされている、父さんの店のバーゲン用の見本葉書を、桂さんにくすねてきてもらい、ところどころ訂正して送った。

「はあ、お前、本当に、天然記念物的感覚の持ち主だなあ」

何をあきれられたのかよくわからない。

「じゃあ今日配られた、あの怪しい食べ物も、お前にとっては宝なのか？」

返事を待たずに天羽はしゃべりつづけた。

「仲のいい奴にみやげ買うならいい。けど、クラスの連中すべてが大好きな奴じゃあねえだろ。当然、いやな奴だっているだろ。どうして、そんなみんなにいい顔したがるんだ？ しかも、俺にまで買ってくるんだぜ？」

「おいしかったからじゃないのか。あれ、うちでも良く注文するから」

天羽って、どうして西月さんのことをこうも悪く解釈するのだろう。話しているうちにだんだん疲れが溜まってきた。ビーズの指輪にしても、年賀状にしても、あられにしても。もちろんばらの花にしてもだ。

「こういうふうになんか人を良く良く受け止めていたらお前、将来絶対騙されるぞ。まあそういう奴だってこと、こうやって話さないとわからねえからいいのかもな。かえって黙ってる方がお前のためなのかねえ」

これ以上馬鹿にされるのもなんだか面白くない。司は無理やり話を折り曲げた。別の方向へベクトルを向けた。天羽側に身体を向け、半分のお尻で身体を支えるようにした。

「さっき言っていた、ビーズの指輪セットと同じもの、今度、教えてほしいんだ。空き箱持ってきてほしいんだ。それと、ばらなんだけど、どこの店なのか、教えてほしい。具体的にどういうものが好きなのか、僕に教えてほしいんだ」

「は、お前、今なんて言った」

単純だけど、もう心に決めた予定を告げた。

「僕がかわりに用意するから」

天羽の顔がしばらく間延びしてしまっただけに見えた。

「お前、正気か？」

「そうしてほしいんだったら、そうするから」

こうやって思いついたものを言葉にしていくと、何をこれからすればいいのかがだんだん見え

てくる。周平の部屋でもそうだった。あの時まで、司は「証」が腕時計以外、どういう風に表せばいいのかわからなかった。ただ一言、西月さんのことを打ち明けるだけで周平の構えが全部解かれていくのを、司は真ん前で見た。かっこ悪いくらい、鼻水啜り上げて泣いてしまうくらい、恥ずかしいことを伝えて、嫌われるかもしれないと覚悟していたのに、周平は受け入れてくれた。

天羽はもちろん、周平とは違う。

でも、司の思っで見ない言葉を引き出し、何をするか教えてくれるのは、やっぱり同じだ。

しゃべればしゃべるほど、答えががちりと固まってくる。

「そっか、よっしわかった。お前、本気なんだな」

今度は天羽に対して、強く頷いた。

「じゃあ明日、指輪の箱……ねえかもなあ。ただ作り方の紙だけはあるかもしれねえし。それと、花屋なんだけどな。駅前の、ほらわかるかなあ。『佐川書店』の隣りにある、やたら女子好みで、ちっちゃい花屋。今の時期だと桜の枝にピンクのリボン結んでいるっていう、毛虫がきそうなほどぶりぶりな花屋。見ればわかるぜ」

天羽は協力を約束してくれた。

「だがな、片岡」

最後に念を押された。これも、やっぱり司は頷き以外で答えを返すことはできなかった。

「準備だけはしとけよ、修学旅行までに、けじめのな」

——ああするよ。もちろんだよ。

周平の眉なし顔が天羽に重なった。外の雨はだいぶやんできたけれども、まだ霧雨が続けているようだった。背を向けて天羽が教室から出て行くのを待ち、

司はそっと、戸口付近の西月さんの席に向かった。歴代の生徒たちがつけた傷が残っている以外、きちんときれいに使われている。桃色の座布団と、机の脇にかかった少しトーンの違うピンクの手提げ。

やはりこの人は、花が好きな人なのだ。きれいなものが好きな人なのだ。こまやかなあられが好きな人なのだ。

——周平、ちゃんと、約束は守るよ。

そろそろ桂さんが待ちくたびれていることに違いない。机の上に、想像で膨らませた真っ赤なばらの花束を置いてみた。父さんがいつも母さんに渡しているのと同じ、両腕に抱えられないくらいのむせかえりそうなほどの。

だんだん天気もよくなり、ブレザーを羽織るのも暑苦しくなりつつあった。次の日約束どおり、司はひとりで青潟駅の前に出かけた。天羽も西月さんも相変わらずだったし、狩野先生もたまに声をかけてくれる程度でそれほど何が、ということもなかった。ただはっきりしていたのは、司が放課後何を買いに出かけようとするのかを誰も知らないということだけだった。天羽だって気付こうと思えば気付いたのだろうがそうはさせたくなかった。

「片岡くん、今日は一人で帰るのですか」

いきなり呼び止められた。狩野先生の、狐にめがねをかけさせたような顔が待っていた。仕方ないので曖昧に答えた。

「うん、はい」

「桂さんはいらしてないのですか」

「今日葬式だから」

ぶつ切りで答えた。

「そうですか。なら、なおさらですが気を付けて帰って下さいね」

——みんなそうだ。僕がひとりで帰るとなると、みな慌てるんだ。

「はい、さようなら」

ぶっきらぼうに司は答え、教室から飛び出した。

久々にひとりで歩く青潟駅近辺の通り。天羽の言っていた「佐川書店」に立ち寄りスポーツ雑誌をぱらりとめくり、二冊買った。活字は苦手だけど、スポーツの話だけは平気ですんずん読める司だった。包んでもらった後、さっそく隣りの花屋へ直撃することに決めた。

いや、入るのが照れる。

——天羽も、どうやって入ったんだろう。

最初、通りに並べられている鉢植えを覗き込むような振りをしていた。チューリップの鉢植え、赤白黄色と華やかなのはわかるが名前がわからない花、あと「猫の草」と言われる雑草みたいな草の鉢植え。年賀状に映っていた藤の花はないのかと探したけれど見当たらなかった。

「お母さんにたのまれたの？」

まいかけをかけた店員のおばさんがにこにこしながら尋ねてくれた。初めてなのにまるで知り合いのようなので話し掛けてくれた。神乃世町にいた時みたいだった。

「あの、ばらを、お母さんに」

思わずでまかせが飛び出してしまった。口がうごかなくてもごもごしていると、おばさんはしっかりと頷いてそっと司の肩を押すようにして目の前の花を指差した。

「ばらねえ、このあたりはどう？」

銀色のごみ箱っぽい花用のバケツが、店の奥にはたくさん並んでいた。ばらの花がどんなものなのか、そのくらいは知っていたけれども、赤、白、ピンク、黄色などなど色とりどりにひしめき合っているのを眺めていると、どれを選んでいいのかわからなくなる。たぶん、赤が一番い

いのだろう。

——うちのお母さんが貰っていたのも赤だったしなあ。

でも、よくよくみると、赤でもずいぶんいろんな色が混じっている。花びらの端がくるくるっとまかさっているものとか、ティッシュでこしらえた花みたいにふわふわしているものとか。また考えていると分からなくなる。適当に一番端っこにささっている真っ赤なばらを指差した。

「これください」

「一輪でいいの？」

「はい」

——だって、毎日持っていかなくちゃいけないんだからさ。

——百日通わなくちゃいけないんだからさ。

財布からじゃら銭を取り出し、おばさんに渡すと、

「じゃあ待っててね。きれいに包んであげるからね。その制服だと青大附中なの？ ああ、頭いいのねえ。お母さんへのプレゼント？」

いろいろ聞き出そうとしてくるのには閉口した。

——明日も買わなくちゃいけないんだけど、このおばさん僕を変な奴だと思ってないだろうなあ。

気弱になる自分を思いっきりしばいた。

——だめだだめだ。まだ九十九日あるんだからさ！

銀色のアルミホイルで丁寧に切り口のところを包んでくれた後、薄いセロファンのようなものでまとめた。

「お母さんも嬉しいでしょうねえ。ほんっと。お花はね、毎日水を替えてあげて、お話してあげると長持ちするからね。いつあげるの？」

でまかせもここまできればしかたない、適当に開き直った。

「あの、明日の朝」

「そうなの。じゃあこっちの方がいいかもね」

司が受け取ったばかりの花を取り上げ、おばさんはもう一本花を選び直してくれた。今持っているのはだいぶ花びらが開ききった格好で、うっかりするとこぼれてしまいそうだったが、おばさんが選んでくれたのは少し堅めに閉じたつぼみのものだった。

「ほら、こちらだったら明日の朝、咲くわよ。今夜、お兄ちゃんが話し掛けてあげれば、ちょうどいい具合に咲くからね」

いいおばさんだけど、これから毎日通うに当たって、どう言い訳しようか。司はしばらく頭を抱えなくなった。

今日、ばらの花を買おうと決意したのにはいくつか理由があった。桂さんが今日、明日と会社関係の葬儀手伝いに借り出されたからということと、やるならば早いほうがいいという自分なりの判断からだった。

ゴールデンウィーク中、改めて感じたのは自分の性格がいかにあなあかということだった。

桂さんに背中を押されなければ、きっと周平との間にはそれ以上の何も生まれていなかっただろうし、たぶん次の休みで顔を合わせる頃にはまた、淋しい気持ちを抱えていたに違いない。まだほんの少しだけ、あわせた角と角がずれただけ。司ももっと早く、周平のほしがっている答えを見つけられればと改めて反省した。

周平もまんざら、そっちのことに関心がないわけではないらしい。

司が毎日感じている、女子を見てときどきしてしまうような感情を、知らないわけではないらしい。

少なくとも、軽蔑されはしなかった。

——けど、あのことは。

二年前の六月に血迷ったことをしたあの日の気持ちはまだまだ、どろついたぬかるみの中、行方不明のままだった。

言いたくたって言えないし、言おうなんて思えない。

司は自転車をこいで青大附中へ戻った。

普段だったら「危険だ」という理由でいつも車の送り迎え。自転車で出かけるというのも、そうあまりないことだった。

桂さんがなぜかその点はうるさくて、司もとりわけ困ることがあるわけでもないのですがそのままにしていた。でも今日だけは違う。朝一番に珍しく桂さんが全身 決めに決めて出かけた後、こっそりと自転車を引っ張り出して出かけることにした。あとで怒られるかもしれないが、それはその時だ。

生徒玄関前の砂利道に差し掛かったところで自転車を留めた。忘れ物した顔して、教室に入っ て行こうと決めた。すでに四時半を回っていたけれども、もう五月も半ばというだけあってそれほど夕暮れっぽい匂いはなかった。ただ人気がなくなっているのと、教室の窓辺に茶色っぽい光が刺さっているのが朝と違うだけだった。

花を持ち、少し背中に隠すような格好で司は玄関に向かった。途中、連れ立って歩くふたりとすれ違った。ちょうど玄関に入る寸前だった。男女二人。まだ校舎に残っていたらしい。もう一度背中に隠そうとして三年A組の靴箱に向かおうとした時、「ははあ、片岡か」唇を囁んだ。最悪だ。同じクラスの奴だ。

「なんでこんなところいるんだろうねえ」

女子も聞き覚えある声だった。

「まあいっさ、ちょっくら待ってな」

司が黙って立ち止まっていると、ふたりはすのこから降りて、司に向かいにやりと笑った。厳密にいうと女子は冷たい視線のみだったけれど、男子だけが妙に親しげ光線を発していた。

——一番見られたくない奴に見られたよ。

姿を隠そうとして柱を探したが見つからなかった。司はもう一度玄関から出ようとした、それを面白がるように、例の男子は身を近づけるようにしてすれ違い立ち止まった。胸が苦しい。ばくばく言う。歯がぎしぎし言い始めている。頼むから手のところだけは見ないでくれ、そう祈



った。

「片岡あのな」

再接近してきた時、司は観念してうつむいた。天羽忠文が穏やかにささやいた。

「まだ、西月、教師研修室にいるぜ。じゃあな」

——まだ教室にいるんだ。

天羽の後ろに立っている女子が、現在熱愛されている近江さんだということに気付くのが遅れた。もう一度視線を逸らしたくて隠した。うまく見えなくなっただろうか。少し顎をあげるような格好で澄ましている。

「さ、近江ちゃん行くか」

仲良く肩を並べて歩く二人を見るのはいやだった。ずっと前、隣りにいたのは西月さんだったはずだった。

自分でもなんでなのかよくわからなかった。司は上履きに急いで履きかえると、階段を駆け上がった。

A組の教室には誰もいなかった。当然、西月さんもいなかった。

確か天羽は「教師研修室」にいると言っていた。もしかしたら戻ってきているかもしれない。顔と顔を合わせてしまったらアウトだ。しばらく司は誰もいない教室の扉にもたれかかり、すぐ目の前に見える西月さんの机を見下ろした。

いつもここで、「片岡くん、お疲れさま！」と声をかけてくれるあの人の。

誰もいないところでひたすら泣きじゃくりながらも、他の女子たちが心配そうに近づいてくると、「大丈夫、私、泣かないから」と平静を装おうとしているところも何度か見ている。

——こんなに一生懸命なのに。

どうして天羽は西月さんを嫌いになってしまったのだろう。 どういう理由があるのかわからない。司からすると西月さんが求めてきたと言う「ばらの花」も「ビーズの指輪」も、単に天羽のことが好きだから、大好きだというメッセージに過ぎないような気がする。でも天羽はそうされることが嫌いだったらしい。その一方、惚れぬいている相手……おそらく近江さんだろう……には自分の手でもって丁寧にこしらえたという。この差はどこから来るのだろうか。

司には計り知れない感情のいろいろ。でも、きっといろいろあるのだろう。

——僕が、何もしてなかったらな。

握り締めていたばらのつぼみをそっと顔に近づけてみた。花屋のおばさんは朝、話し掛けるときれいに咲くと話してくれた。少しだけつぼみの上あたり、細かく花びらが筒のようにくるくる巻きとなっていた。

——話し掛けたら、きれいになるのかな。

花屋さんのということだから、たぶん本当なのだろう。

司は廊下、および部屋のどこにも聞き耳立てている奴がないことを確かめ、つぶやいた。

つぼみをちょうど口元に当てるように。

「ありがとう」

何かもっと、いい言葉があるような気がしたけれど思いつかなかった。

「大丈夫だから」

言った後で自分でもわからなくなった。大丈夫？ 何を言いたかったのかわからなくなった。

つぼみの形はうんともすんとも言わなかった。本当に咲くのだろうか。司は両手で捧げ持つようにして、西月さんの机へまっすぐ置いた。花が椅子と向かい合うようにした。こうすると、西月さんに司のつぶやいた言葉をそのまま伝えてくれそうな気がしたからだった。

急いでマンションに戻ると、ぎりぎり桂さんはまだ戻ってきていなかった。

一応といったら変だけでも、桂さんは司がひとりで夜ほつつきあるくことを厳禁していた。

不良化の兆しを避けるためなのだろうかと最初は思っていた。反発したかった。でも桂さんが言うには違うらしい。

あまり桂さんを怒らせると、にんじんとレバーいためとぎとぎとした煮魚の食事なんかを食べよう命令されるのでとりあえずは知らない振りをすることにした。桂さんご自身はレバーが大好きらしいがそんなの趣味だ、知ったことじゃない。

六時過ぎ、やっと桂さんが帰って来た。まっとうな格好そのままだった。黒服に黒いネクタイ、めがねも黒ぶち。ただしサングラスでない。司の部屋を覗き込み、

「おおい、司、メシ、まだだな」

「冷蔵庫の昨日食べたカレーでいいよ」

「ほら、通夜弁当貰ってきたからな、食うか二人で」

——お弁当なんだ。超ラッキー！

桂さんはB級グルメと自称するだけあって、普段は手作りものが多かった。司からするとげてもものの部類に入るものも多いが、食べないと怒られるのでがまんすることが多かったが。今日はてんやものだけあって、きっとまっとうな食べ物だろう。見るとやっぱり、プラスチックのお重に入った茶飯などが出ていた。生臭いお魚なんかはない。

「さあ、カレーかけて食うか」

——茶飯にカレーかよ。

やっぱり、この人の味覚はわからない。電子レンジでカレーを軽く温めた後、生温かい茶飯にかけかきこんだ。

「今日は大丈夫だったか？ お前くらいの年で俺が送り迎えするってのも、ちょっと過保護だとは思うんだが、事情が事情だ。しょうがねえ。で、怖い奴におっかけられなかったか？」

「そんな奴いるわけないだろ。それより今日、父さんに会って来たの、桂さん」

「ああ、久々に司も顔見せろって言ってたぞ」

桂さんにとっては「社長」なのだろうが、司の前では「司のとうちゃん」と言う。

お酒が大好きで、たまに酔っ払っては大声で英語の歌を歌い、運動会でははっちゃきになって「お父さん対抗リレー」に参加する父。神乃世で見せる顔と、青濁で見せる姿とは別々のものだった。たぶん神乃世では司のことを可愛がってくれていたのだろう。でも今はきっと。

——どうせ僕なんか嫌いなくせにさ。

父の仕事がどれだけ忙しいかは、入学して二ヶ月だけ一緒に暮らしてみてもよくわかった。ほとんど顔を合わせる暇もない。面倒見てくれるのは当時、父の側近だった男の人で、かなり年いった人だった。ろくすっぽ口を利けずに、ただ言われるままにしていたことを覚えている。青潟市内、海の向こうまで眺望が楽しめる十階建のマンションだった。エレベーターで上がってさらに、ガラス戸が張り巡らされていて、入るとがらんとした誰もいないような部屋だった。たぶん父も司のことを気にかけてくれてはいたのだろうけれど、それは桂さんと暮らすようになってから初めて思ったことだった。司が車で迎えに来てもらい、運転手の男の人に付き添われてエレベーターを昇り、部屋に入るまでじっと見張られているあの環境。司が言葉をひとつひとつ、捨てていったのはあの二ヶ月なのかもしれない。

しばらく茶飯とカレーをスプーンでぐるぐるかき回していたら、桂さんに軽くぶたれた。

「あのな、司。いいかげんお前も大人になれ」

怒ってはいないけれど、やれやれって感じだった。

「そりゃあ仕事は忙しいぞ。でもな、司のことをほんっと心配してるんだぞ」

「そんなの人のうちのことなんてわかんないだろ」

口を尖らせて言い返す司に、桂さんは知らない振りして腕時計を見た。

「明日は本葬か。くそお、いつものラーメン食べねえな」

「桂さん、お葬式あしたもあるの」

「おおそだよ。今日が通夜、明日が本葬だ」

お葬式とは、一回行っただけではすまないらしい。色々面倒なことだ。

「じゃあ、明日、車、迎えに来なくたっていいよ」

「じゃあ悪いがそうさせてもらうか。けど司、いいか。気を付けるんだぞ」

「ガキじゃないんだからそんなこと言うなよ」

いらいらする。桂さんは基本的におおらかなのだが、時々細かいことを言うことがある。いつも車でお迎えされるのもそうだ。司は部活にも入っていないし、友だちだって青大附中にはいないからそれでもいいけれども、もし用事がある時なんかはどうすればいいんだろう。

「司、お前が毎日何事も無く過ごしているのは誰のおかげだ？ そうだ、俺様のおかげだ」

「冗談じゃないよ」

ふざけ調子で言い放つ桂さんの言葉には、時々芯が入っているような気がしていた。まだまだ、司にはわからない言葉が多すぎた。「けどな、ふつうのうちの奴ら、まあ言ってみれば周平とかな、あいつらはごくごく普通によっぴき彼女とデートしたり」「周平はそんなこと絶対しないよ！」　なんか、熱くなって怒鳴りたかった。

「まあ例えだ例えだよ。そういうんじゃないんだよ。つまりな、司、お前は青潟にいる限り、どうしてもお前のとうちゃんが社長さんなんだってことから逃れられないんだ。まあ俺がお前の立場だったらなあ、しんどいってのはわかるぞ。わかるけど、命には替えられないだろ？ 命あつてのものだねだからなあ」

——またお説教だよ。その癖自分は夜になったら、スポーツ紙のやらしいところに載っている

店に行くんだよ。

もう司だって子どもではない。その辺は良く知っているのだ。

「だから、お前もその辺考えろよ。まあエッチな本読んで一人抜くのも悪くねえし」

「そんなことしてないよ！」

せっかくのカレーがまずくなる。桂さんごのみの妙な甘さが舌に残る。辛くないのに顔が熱くなる。

「好きなあの子のこと考えるのも悪かあない。けどな、司、お前がもし、何かとんでもないことに巻き込まれた時、困るのはお前のとうちゃんかあちゃんだけじゃないんだぞ。お前一人がひょいっと足踏み外したとたんに、何千人もの人が仕事なくするかもしれないし、追い出されるかもしれないんだ。まだまだお前が きんちょだからあまり言いたくねえなあこんなこと。俺だったらやだよなあ。でも」

はあ、とため息をつき、桂さんはじっと司を見つめた。

「それも、司のさだめなんだよな」

要するに外を出歩くなということなのだろう。言いたいことはわかっている。父のマンションに住んでいた時もそうだったし、今の生活も似たようなものだった。夜遊びするのは神乃世にいる時くらいだった。友だち同士でゲームセンターに行くことだってよくしたけれども、青澗ではそういう普通のことが一切できないのが不思議でならなかった。桂さんが一緒だったら、それこそ怪しいラーメン屋、牛もつ屋、串焼き屋、その他いろいろな娯楽施設に連れて行ってもらえたけれども司ひとりでは何も許されることがなかった。近所のコンビニでスポーツ新聞を買ったり、本屋さんでたまに漫画の単行本を手に入れたりするくらいだ。欲しいといえば、桂さんがうまく手配してくれるのでそれほど困ることはないのだけれども。桂さんを友だちだと思っていればそれほど不便はない。たまに電話を 神乃世にして、周平たちと馬鹿話をすることもできる。

でも、今回だけはそういうことになるかと困る。

——今度、どこの花屋さんに行こうかなあ。

今日買いに出かけた例の花屋さん、店員さんはいい人なんだけど、すっかりお母さんに渡すものなのだと勘違いしてしまっている。本当の目的は他人さまに言いたくないし、できれば桂さんにもばらしたくない。なんとかならないものだろうかとしばし考えた。

食べ終わり、桂さんから、

「じゃあ俺は今日働いたから、司が洗物全部しろよ！」

と言い放たれた後、司は蛇口をひねりつつ考えた。

大抵、桂さんに「欲しいものがある」というと、「じゃあどんなもんだ、言ってみい」と問われる。あまり怪しいものとか、値段が高すぎるとか、そういう理由があるとあっさり、「だめだ、そんな金は無駄になっちゃう。お前が働いて金稼げるようになってからにしる！」とどやされる。ただ、桂さんと共同で使えるようなもの、たとえばビデオデッキとか、ビデオの映画ソフトなどだと、「そうかあ。じゃあレンタルビデオ屋にこれから行くか！」と一緒に出かけることになる。

——どうやって桂さんに、怪しまれないでばらを買うことができるか、だよな。

花屋のおばさんは、「毎朝話し掛けるとばらがきれいに咲く」みたいなことを話していた。また咲ききった花よりは、少し堅めのつぼみの方が長持ちするようなことも話していた。

——だったら、花をまとめて買っておいたらどうかなあ？

水をじゃあじゃあ流したまま、司は電話帳のもとに走った。思いついたらまずは調べなくちゃ、と意気込んでしまう司のくせだった。すぐに「花屋」の電話番号がずらっと並んでいるところを探した。青潟市の花屋さんを数えてみたら、ページ三ページくらいずらっと並んでいた。百軒ゆうにある。だったら大丈夫だ。この中の花屋さんへ十日ごとに一度十件電話して、つぼみのばらの花をみな注文して持ってきてもらい、司の部屋の中に隠しておく。毎日水を買えておけば、たぶん百日とは言わないけれども一週間くらいは持つだろう。そして一本ずつ学校に朝一番でもって行き、西月さんの机の上に置いておく。桂さんだって一日中司とくっついているわけではない。不在時を狙って花を注文すればいい。ここで大切なのは、司が持って行っていることをばれないようにすることだ。

もし、「下着ドロ」の片岡から渡されているという事実を他人に知られたら、大変なことになるだろう。もちろん西月さんはいつも笑顔で笑ってくれる人だから怒ったりはしないだろうけれども、周りの奴らからさんざんひどいことを言われるかもしれない。また天羽のことをまだ思っているに違いないし、ただ心の慰めになるだけなんじゃないだろうかと思うのだ。司としては西月さんが自分のことを思ってくれるのを期待しているわけではない。好きになってくれたら、たぶん宇宙ロケットに乗った気持ちで遠くに飛んでしまおうだろうけれども、もう自分は罪人だ。西月さんがかばってくれたように「濡れ衣」だったら堂々と人前で渡すことができるだろうけれど、女子のパンツやブラジャーを触ってしまったのは正真正銘の事実なのだ。あきらめるしかない。だからたったひとつ、司は天羽のかわりになるようなことをしたかった。

——ほんとは、天羽がしてやればいいんだけどさ。ごめん。僕ができることったらこれだけなんだ。

たぶん、知られた時には嫌われるだろう。本当のこと知ったら、無視されるだろう。それは覚悟の上だ。

——ありがとう。

机の上におそらくまだつぼみ開いていないばらの花に語りかけた言葉をつぶやいた。

「おいおい司、水流しっぱなしだぞ！」

じっとしゃがみこんだまま、職業別電話帳を覗き込んでいた司の後頭部を、桂さんは思いっきりはたいた。あわてて台所まで走っていくと、もうすでに排出口はつまり、水がシンクから溢れ出しそうになっていた。

「ご、ごめん」

「まあいいさ。それよか司、お前、なんかしたのか？ 相当考え込んでいるなあ」

顔を覗き込まれ、慌てて目を伏せた。閉じた。

「司、何かあほなことたくらんでいるんじゃないかねえのか？」

「そんなことしてないよ」

隠さなくちゃ。やっぱり自分は、囚われの御曹司なんだろう。そう感じる時だった。

まずは夜まで待った。

桂さんは相当、通夜で疲れたのだろう。黒服を廊下にかけてっぱなしにしたまま、すぐ自分の部屋に入って寝てしまった。今日は司の勉強を見る余裕もなかったようだった。

——チャンスだ。このマンションもかなり広い。広いはずなのだが、野郎ふたりということもあり散らかりっぱなし足の踏み場なし、たまに出てくるゴキブリぞくぞく状態。司も桂さんも対して抵抗はないのだが、たまに母さんがやってくると仰天されてふたり怒鳴られることしばしばだ。まずは電話のある廊下へ向かった。

さっきちらっと見た、職業別電話帳の「花屋」ページを探した。

たぶん電話で今、注文すれば明日の放課後前後には到着するだろう。できるだけ早く家につけばの話だが。そこでまとめて花が一本ずつ、十本到着すればあとは簡単だ。珈琲の空き瓶がいくつか残っているのでそこに突っ込んでおけばいい。司の机の足下。こちらに隠しておけば目立たないだろう。問題は時間帯が夜十時、果たしてお店は開いているのだろうか。そこらへんだけが心配だが、たくさんお店があるのだから十件くらいは大丈夫だろう。「すみません、ばらの花のつぼみを一本配達してくれませんか」と頼めばいい。たまに桂さんだっけ「すんませーん、ざるそば一丁！」と言っているではないか。

まずは一軒目、受話器を取り上げ指で小さい電話番号の文字を押え、プッシュボタンを押そうとした時、通話音が鳴らないことに気が付いた。何度もゼロのボタンを押した。電話の線が切られているのではないかと思った。

「司、あきらめろ」

両手、両肩に手を置かれた。

——ちくしょう！

思いっきり振り払った。

「なんだよ、なんで邪魔するんだよ！」

かっとなって叫びたい。でも叫べない。ここは司のうちであって桂さんの監視下にある家だ。この主人は桂さんであって、司は桂さんの視界に入っている場所でしか動けない。受話器を投げ捨てた。ぶらんとぶら下がったのを桂さんは静かに拾い上げた。紺のびんびんに張ったスエットスーツで、桂さんは軽く司の頭を撫でた。そうされるとなおさらぶん殴りたくなった。

「僕だっけ僕なりの用事があるんだから、監視するなよな！」

「友だちにかけるとかいうなら知らん振りする。けどなあ、今日司、どこに行ってたんだ？」

「どこって、どこだっけいいだろ！」

「駅前の花屋で買物していたんだな」

「そんなの関係ないだろ！」

ぞくっとした。いつもそうだ。司が絶対ばれていないと思っていたことが、いつのまにかきれいに桂さんに知られている。分身の術でも使ったのだろうか。結局は逃れられない。歯がみする

しかない。

「違うんだよ、司。俺もほんとうはそんなことしてどうするって気もするけどな、お前はいつでも誰かに狙われているんだってことだけは忘れるんじゃないって、それだけわかってほしいだけなんだ。もし青瀧に周平みたいな奴がいて、一緒につるんでなんかしてるんだったら安心だけど、お前、基本として一人で行動してるだろ？ それはまずいんだ。いいか司。俺がべったり怪しい関係のおっさんみたくくっついてるのはな、お前の立場がすげえ、あぶないものだからなんだ。ぴんとこなくて当然だけどな、しょうがないんだ。それがお前のとうちゃんかあちゃんの子として生まれた……」

「さだめなんてどうだっていいよ！ 僕はただばらの花買っただけなんだってば！」

電話を床にぶん投げた。

「なんで、お前花なんか？」

——言えっていうのかよ！

丸めて持っていた職業別電話帳を桂さんは静かに取り上げた。

「司、お前の部屋に行こうな。まずは少し落ち着け。やばい薬とか酒とか注文しようとしているんだったら俺もお前をぶん殴るが、どうもそうでもないらしいな。別の意味で、俺に相談しておいた方が、いい方法見つかるかも知れねえぞ。この辺お前のことだ、わかってるだろ？」

——何がいい方法だよ！

悔しくも司は、硬直してしまったまま動けなかった。桂さんの言う通り腕をとられて部屋に連れて行かれた。今夜は絶対黙っている。絶対ばらの花のことなんか言うもんか。決して毎朝、あの人のところへ花を運びたいなんて、言うもんか、絶対、絶対に言うもんか……。

結果、司はいつものパターンで眠気と一緒に桂さんにころっと白状させられてしまった。

対戦すること二時間。 司としては懸命にがまんしたつもりだったのだ。隠し切って、最後まで白を切るつもりだったのだ。

「司、そっか。ごめんな」

頭をぐりぐりなでられた後、

「そりゃあ、言いたくないわな。隠したいわな」

悔しさとみっともない自分がむかつくのとで頭がわんわんいって、今にも壊れそうだった。

「無理やり白状させてしまった以上、俺も男だ、ちゃんと俺なりに協力するからな。ばらの花のことはちゃんと俺なりに考えがあるから安心しろよ。それにしてもなあ」

最後にもうひとこと、部屋を出る直前桂さんはつぶやいた。

「周平にこう言う時いてほしいよな、司」

——周平か。

いつもそうだった。何かがあると、いつも司の方から白状してしまう。どんなに隠したくても。桂さんにも周平にも。

次の日司は西月さんの方をそれとなく伺ってみた。

二年間しっかりと見つめてきた西月さん観察記録が司の頭には残っていた。本日の笑顔と平均比較対象するのはわけなかった。球技大会や学校祭、合唱コンクールではしゃいでいた時よりは静かに見えた。天羽に無視こかれて作り笑顔を見せている時よりは自然に微笑んでいた。おいしい給食を頬張っている時の満足げな表情が一番近い。誰からも噂になっていないことや、天羽や近江さんが司の行動を言いふらしていないところを見ると、クラスの人には幸いばれていないらしい。

教室に入るまでは心臓が止まってもしかたないくらい跳ね上がっていたけれど、今のところは安心だ。司はそしらぬふりして教科書を広げた。

西月さんがばらの花を受け取って、どう思ったのか知りたい。欲しくてならなかったばらの花、きつとうれしいに決まっている。天羽からではないけれど、欲しいものはプレゼントできた。押しつけだったらどうしようと思ったけれどもたいしたことではなかったらしい。いやがられたくはなかった。

「下着ドロ」の片岡から渡されたなんてことがばれたらどうする。

西月さんはクラスの笑い者になるかもしれない。そうさせないためにはどうすればいいだろう。

.....けど、いつまでも隠しておけないよ。

昨夜、桂さんに徹夜で説教されたのが堪えている。全部白状させられて、ひたすらいじけていた司に、桂さんは、

「司、俺もなあ、大学時代、本気で追っかけていた子がいたんだよ。全然相手にされなかったけどな、全身全霊かけて尽くしまくった。俺の四年間悔いなしってくらいにな」

.....桂さん大学の話と一緒にするなよ。

普段なら馬鹿にしたいところなのに、そうできなかった。

「司がその子に本気なら俺はなんも言わん。ただ、その子が必ずしも司のことを好きになるとは限らないし、もしかしたら彼女の死ぬほどいやな部分を見るかもしれない。司のことを先入観で見てもひどいこというかもしれない。人を好きになるっていうのはな、そう言うところまで覚悟して、惚れぬく。そう言うものなんだぞ」

.....あの人にそんなところあるわけないよ。司は半ば反発を感じつつも黙っていた。

「それともうひとつ、覚悟しとくのは」

桂さんの熱弁は続いた。

「振られても、嫌われても、彼女の幸せだけを考えてあげられるか。しつこくまとわりつかず、彼女が望んでいることが叶うよう、祈ってあげられるかどうかだ」

.....わかってる。わかってるってば。

いつになくまじめ一直線に語る桂さんに、司はなんだか「ほっといてくれよ！」と怒鳴りたかった。できなかったのは司を見つめる桂さんの眼差しに、怖いものを感じたからに他ならない。



恋に報われなかった青春時代、今だ桂さんの傷跡として残っているに違いない。うっかり文句いいたら倍返しされるだろう。

「いいか、司。惚れるならとことん惚れろ。ぶつかっていけ。けど相手がやだといったらジ・エンドだ。それ以上追っかけて彼女を悩ませるのはやめろ。ばらの花を捧げたい気持ちはわかるがごそこそするな。片岡司の捧げ物としてきっちり渡せ」

.....そんなことできないよ。

桂さんに反発したわけではない。西月さんが欲しがっている、百日通い詰めて欲しがっているのだ。もごもごと文句を言いつつ、司は後一週間ばらの花を買い続けることを決意した。

「しょうがねえなあ。三日もやってたらばれるだろ。いくらなんでもなあ」

しかたなさに桂さんは、司がばらの花を買いに行くことを許可してくれた。葬式に行く前に司を花屋へつれていき、学校へとんぼ帰り、その後まっすぐ家に戻る。これが条件だった。

もちろん覚悟はしているつもりだ。西月さんと二人きりのところすべてを打ち明けたいと思っている。ただ、西月さんを傷つける噂がこれ以上立つのは嫌だった。下着ドロの片岡に惚れられて、さらに彼女の立場が悪化するのとは避けたかった。気づいてくれるのは西月小春さん一人だけでよい。

「片岡、まずは第一歩踏み出したな」

小声で体育の授業中天羽がハードルの順番待ちの間ささやいた。アキレス腱を伸ばしている間、司は知らないふりをした。かまわずに天羽はひじをくいくいさせた。

「あいつ朝一番に来るから花をみた時、一人だけだったらしいぞ。機嫌よかっただろ」

.....だって、欲しがっていたものだからさ。とりあえず、嫌がられていないことは分かった。天羽がその後、いかつい体を持って余すようにしてぶるんと両手を左右に振った。

「だが、一つ計画違いがあったんだわこれが」

わざとだろう、軽いおとぼけ口調で、

「ばらのナイトさまをあいつ、俺と勘違いしてやがる。たまったもんじゃねえよなあ。俺の方見て相変わらずにたにた近づいてくるんだぜ。たまったもんじゃねえよな」

.....どうしよう。司はひざを押さえて屈伸運動を続けていた。

でないと、天羽の次の言葉が簡単に予想できてしまいそうだったからだった。

.....片岡、ほんとのこと、百日かける前に言ってやれよ。お前が花持って行ってやっている間、あの女、かわいそうに誤解しまくってるんだぞ。早くすっきりさわやかさせてやれよ。ちゃんと俺は不必要な誤解させねえように、冷たく無視しているけど、鈍だからこのままだと気づいてくれねえぞ。

天羽はだいたいそんなようなことを言った。ハードルを飛ぶ順番がきて駆け去る間際、

「早いとこ、例の準備、しておくからな」

頭がぼおっとしているうちに司の順番が回ってきた。いつもならひっかけないで飛び越すことができたのに、だめだった。危うくつんのめりそうになったり、ふみきりの瞬間タイミングをはずしたりと、結局タイムは今までの最悪だった。

「動揺するんじゃないよ」

天羽が軽く肩を叩き元気づけるような調子で声を掛けてきた。反対側のグラウンドでも女子たちが同じくハードル走のタイムを競っているようだが、西月さんが果たしてこちらを見ているかどうかはわからなかった。天羽の方ばかり見ていたとしてもあきらめはつくけれど、司にもそれなりに意地がある。せめて天羽よりいいタイムを出していたならばと、鈍な自分を罵った。

.....やっぱり言わないといけないのかな。まだ周平には話したいないことを、まず先にクラスの人に告げなくてはならない。

でも、なにを？ なにを語らねばならないのだろう。

司は男子更衣室に向かいながら、つかめないあの時の感情を手探りしていた。かちんと鳴る部分があるのに、それがどうして音がするのかわからない。

.....どうしよう。

司は同じ言葉を繰り返す、考えを麻痺させた。

「小春ちゃん、さっきはすごかったじゃん。いいタイム出してるし」

「ううん、そんなことないわよ。私運動神経ないし」

「そんなことないよ。小春ちゃんにはガッツがあるもん」

女子たちが西月さんをかこむようにして騒ぎ立てていた。かわいらしくぶつしぐさをする西月さんの姿も見え隠れしていた。ぽっちゃりしたほっぺたにえくぼがふたつくっきり出来ている。

もともと西月さんは見かけほど運動オンチではない。ものすごく速くはないけれど真ん中よりは上、という結果を出していた。司の観察したところ、それは彼女の努力以外のなにものでもない。放課後友達を誘って懸命にバレーのサーブを稽古したり、朝自主練習と称してランニングしたりと、ありとあらゆる手を尽くしている。トップには立てないけれど、中以上には位置している。

.....僕も成績よくなって、運動ばりばりだったら、まだよかったのに。

司は数学の小テストの結果をのぞき込んだ。ゴールデンウィーク以降、少しクラスの連中より遅れがでてきているような気がしていた。休みを二日も取っていたら当然なのかもしれないが、どうやってとりもどせばいいかもわからなかった。

「西月さん、よく一人でこの問題、解けましたね。よく努力してます」

狩野先生は小テストで三人しか解けなかった問題の正解者として、西月さんをほめたたえたのだった。女子では二人だけだ。

はにかみながら、

「この前、泉州さんと一緒に勉強して、とことん教えてもらったんです。私、数学苦手だから、克服しなくちゃと思って」

「そうですか、よく頑張ったんですね」

狩野先生の言い方は白けているふうに聞こえた。きっと疲れているのだろう。他の男子たちが「いい子ぶってな」とささやいているのも聞こえたが、ただのやっかみだろう。司は単に、偉いだけ思った。自分でやりたいとは思わなかった。なにごとにも全力投球の西月さん。藤棚の前で純真な微笑みを浮かべている西月さん。クラスの数学得意な女子に苦手分野を特訓してもらって懸命に自分を伸ばそうとしている西月さん。司のあこがれている野球選手にそういう人がいた。テスト生として入団し、人一倍の努力をして一軍に上がり、苦節を重ねて抑えのピッチャーとなった選手だった。できればそんなことしないでヒーローになれたらいい。でも、もうそんなこと期待できないことを自覚している司には、西月さんの姿勢こそ尊敬に値するものだった。どうして天羽はそんなところまで悪く取るのだろうか。

「片岡、お前天然記念物的性格だなあ。お前、本当に社長になって大丈夫か？俺が言い出したことだけど、なんだか壮絶ないじめをしているような気がしてきたぜよ」

「なんで」

「だってな、西月がなんで泉州のあねごのことをだしにして自慢した？そこまで一生懸命努力した自分をほめてほしいからだろ。ほんとに努力している奴ってのはな、汗かいているところをみせないし、きわめてつらっとしているもんだ。お笑い芸人が舞台上で苦節うん年お涙ちょうだい語られたらたまったもんじゃないだろ」

.....そんなものかな。

天羽は付け加えた。

「俺はそういう連中を腐るほど見てきたんだ。ほんとにすげえってのはな、なあんもやってませんよ、って顔で満点だすような、そうさな、コネ入学でありながら全然そんなこと思わせないとある彼女のことさ」

.....近江さんのことか。

天羽が匂わせるのはたぶん、狩野先生の妹で現在天羽の彼女のことだろう。ほとんど授業なんてうわの空、文庫本をめくりつつクラスの女子から孤立し、それをむしろ楽しんでいる風な女子だった。男子の一部とはよくバカ話でつるんでいる様子、この前の小テストでは満点だった。やる気なしにみえても、西月さんよりは上だということを認めずにはいられなかった。

「俺も罪悪感持ちたくねえし、もっかい確認しとくわ。片岡、本当に、あの女なんかで、いいのか？」

.....天羽には、わからなくてもいいさ。

「いいよ。このまますすめても」

.....それまでに、もっかい、覚悟を決めよう。

桂さんが迎えに来てくれたら、あのばらを買いにいこう。司は改めてそう思った。

桂さんはやはり黒服のいかにもその筋の人、といった格好で現れた。

「司、行くのか」

「うん」

司が目をそらしたまま、助手席のシートベルトを締めた。

「司ずいぶん腹が座ってきたなあ」

「関係ないよ」

司は車がすぐに昨日立ち寄った花屋へ向かうのを、息を殺して待った。

「行ってこい」

司の尻っぺたを思い切り叩いた。助手席のドアから降りた時、通行人の視線を一身に感じたのは気のせいなんかじゃない。司は足元だけ見据えたまま、花屋の入り口に立った。

おばさんか司の顔を思いだし、

「おや、昨日のお兄ちゃんかい」

と、話したそうにするのをさえぎり、

「あのう、今日は同級生の人にあげたいんです」

自分でも驚くくらい大声が出た。

「そうなの、お兄ちゃん勇気あるねえ、偉いねえ」

どうして自分は口軽くぺらぺら白状してしまうのだろう。昨日と同じばらの花を手に車へ乗り込み、学校へとんぼ帰り、人気のないのを確かめ、同じく「ありがとう」とつぶやいた。幸い誰にも顔を合わせないですんだ。

「よし、じゃあまっすぐ帰るぞ」

桂さんはにやっと笑った。

「けどな、一週間過ぎたら、はっきり言えよ。いいな」

.....そんなあ。

「現代日本は時の流れが早いんだ。小野小町の時代とは訳が違う。いいか、司、わかってねえかも知れねえけどな。いきなり知らない奴に追いかけて、気持ち悪がられないってことないぞ」

.....僕だってことばれたら、もっと気持ち悪がられるのに。

西月さんが勘違いしていることを、司は決して口にはしなかった。

司を置いてから桂さんはスピード違反確実な運転で、どこぞの葬式会場へ向かった。部屋にこもり制服を着替えてターコイズ半袖トレーナーと緩いジーンズにした。

.....どうする、司。

自分に問いかけた。

.....きっと西月さん、花の送り主が天羽だと思って喜んでるんだ。僕だってわかったら傷つくよ。桂さんの言う通り、内緒のことは一週間が限度だよ。それはわかっているさ。けど。

ごたついた机の上を両手でかき分けた。右側の棚には、藤棚の前の少女の笑み。ばらの花のあざとさとは似つかわしくなく思えた。このまま気づかれないようにして、西月さんの笑顔だけ取り戻すことができたなら、願わずにはいられない。でも、それは不可能なことだった。もう走り出してしまったのだから。司は髪の毛をかきむしり頭の中を空にしようとした。いつもならばそ

の後、外国のアクション映画ビデオを観て気分転換するのだから、中途半端に胸の穴あたりがうずき、苦しくなるだけだった。

電話が鳴っていたのに気づかなかった。いつもなら桂さんがつないでくれる。司が直接受話器を取ることは、まずなかったし禁じられていた。

……しょうがないよな。

司は声を出さずに受話器を取った。

「片岡さんのおたくですか」

太いぶっきらぼうな声。女の人っぽい。なんだ騒ぐことじゃあない。

「はい」

答えると、受話器の向こうの声は急にくだけ、早口に言葉を回転させた。

「片岡かいあんた、ちょっと聞きたいんだけどさあ、あんたさっきうちの教室でなにやってたわけ。私見てただけだけどさあ、あんた天羽に弱み握られたってわけなの。いやがらせなの？ はっきり言いなさいよ！」

「あの、誰？」

司がかすれた声で相手の名を問うと、電話の主はあっけらかんと返してきた。

「ごめん忘れてた。泉州（せんしゅう）。しゃべったことないからわかるわけないか。とにかく、片岡、あんたに話があるのよ。今うちにいるんでしょ。なんであんなことしたのか言いなさいよ、ちゃんと出てきてさ」

偉い剣幕だった。受話器の向こうからステレオデッキが大ボリュームで鳴り響いているようだった。

……西月さんの友達って人だ。

女子の名前はほとんど覚えていなかった。

司が電話の主、泉州よし恵について知っていることといえば、ただそれだけだった。

……見られてた。

頭の中、心臓、震える足。とにかく出てこいと言い張る泉州さんに、パニックを起こしかけ、どもりつつ時間稼ぎをしようとした。

「い、今はだめなんだ、あ、あの、部屋から出られないから」

「なにもあんたをリンチしようなんて思ってないわよ。私はほんとのことが知りたいの。なんで小春ちゃんの机に花なんか置いたのか。あんたがもししら切るつもりだったらこちらにだって考えがあるんだからね。片岡、あんただっていやでしょう。これ以上青大附中で最低男の烙印押されるのは、悪いこといわないから、ここらで少し気持ち楽にしたらどう？」

……まるで取り調べみたいだ。思い出したくない二年前の記憶が、外の気温の重なりと一緒に甦ってくる。汗が気持ち悪くにじむ。受話器を握る手はべっとりとして鼻に臭う。

「じ、じゃあ、あの」

「片岡の都合のいい場所でいいわよ。どうせ天羽には気付かれたくないだろうしね。私も弱いも

のいじめは好きじゃないし。さしあたってあんたのうちでどう？」

……そんなあ、無謀だよ。

言い返す間もなく、司は家の住所と最寄りのバス停、マンション名まで確認させられていた。泉州さんはすでに司の学校公表分データを調べ尽くしているようだった。

……もうだめだよ、周平。僕、やることどうしてこんなことになっちゃうんだよもう。

桂さんが夜遅くまで帰ってこないのが唯一の救いだった。司は床に投げっぱなしの制服とスポーツ新聞を拾い上げタンスに押し込んだ。部屋を片づけることが得意な奴なんて、司の友達には今までいなかった。なんとか部屋にちらばっていた雑誌とスナック菓子の空袋はベッドの下に押し込んだ。母がいる時なら思い切り怒鳴られただろうが、桂さんとだとお互いさまというところもあって、物が増殖するばかりだった。

……ほんとに来るのかな。司も正直なところ半信半疑だった。泉州さんという女子について知っているのはただ一つ、西月さんの親友であるということくらい。髪を桂さんのように束ねていて、ぶっきらぼうに単語を響かすような話し方をする人だった。そのくらいだ。今まで司との接点はほとんどない。あの事件以来女子で声をかけてくれるのは西月さんくらいだったし、いきなり家に押し掛けるようなことはしないのではないだろうか。司も泉州さんが来た時どう返事をすればいいのか見当がつかなかった。

……初めましてじゃないしな、こんにちはかなあ。玄関で話すのか？部屋に入ってくるのかな。

泉州さんはとにかく、彼女なりに納得いく答えを見いださない限り、司の家からは帰らないのではないだろうか。ようやく床の見える状態となった司の部屋。へたり込むとまた、暗い展開ばかりが思い浮かんでしまう。

……どうしよう。

「片岡？あのさあ、来たんだけど入れないのよね、どうすればいいわけ」

泉州さんは司のマンション入り口がオートロックだということを知らないらしい。部屋番号を入り口のタッチボタンで押すと自動的にインターホンにつながるようになっている。響きすぎて音が割れている。

……ほんとに来た！

桂さんがいたら居留守使えたのに。歯がみしながら司は重たい指でドアのロックを解除した。

「おじゃましまーす。っと、あんた、一人なの」

制服姿の泉州さんはきっと学校からまっすぐやってきたのだろうか。息があがっていた。見た感じ、髪はぼさぼさ、顔も浅黒かった。じっくり間近で観察したことはないが西月さんがきゃしゃに見えたのは、きっとこの人との比較対象にあるのだろう。目がつり上がり、眉が薄く細いところは誰かににているような気がした。

「あがらせてもらっていいの」

当然のような顔をして言っただけの泉州さんに気迫負けしてしまった。何の用だといやみったらしく言ってやりたかったのに。司は黙って自分の部屋を指し示した。

「じゃあ入るね」

靴をかかと引っかけ、玄関に脱ぎ捨て、さんはついてきた。気の進まぬ司がとろく歩くのを思い切り背中押した。「さっさと入ってよ」……誰のうちだと思っているんだよ。言い返せない。ここは片岡司の家なのだ。

「お茶とかお菓子とかどうでもいいから、早く話に入ろうよ」

……せっかちな人だなあ。そんなもの用意するつもりなかったけど、言われるとどうしようもない。曇ったグラスに梅酢の薄めたやつを注いで持ってきた。

「あんたいやみ？」

言いつつも泉州さんの態度はまんざら悪くはなかった。司が部屋のドアにもたれていると、「ほら、片岡、話すからベッドの上にでも座れば」

……なんでだよ。

見ると泉州さんは片膝を立ててあぐらをかき準備をしていた。絨毯の上が多少汚れていようと、泉州さんは全く抵抗なかったようだ。すすって、

「やたらすっぱいんだけど」

司も梅酢がおいしいとは思っていない。頷いた。

「あんた素直だねえ」

感心したようにあぐら姿の泉州さんは両手を膝に置いた。

「なら話は早いわ。あのさあ、さっきのことについてなんだけど、天羽がかんでいるのかそれとも片岡の計画なのか、それを知りたい訳よ」

……どっちもどっちだし。

司は静かに膝を見つめた。

「ま、答えは出ているみたいだけどね」

ははっ、と付け足した笑いが続く。言葉を探して舌先で小さな音をさせていた司は、ふと泉州さんの視線の先が目の前の机棚に向かっているのを捕らえた。ちょうど、斜め上。

「なんで」

「あ、こいつやっとなしゃべった」

火花散りそうなくうきが、いきなりゆるんで力が抜けた。訳がわからない。司は泉州さんと机を交互に見た。すでに警戒心なんてさよならと言う顔の意味するところは、なんなのか。

「あまり言いたくないけど、片岡、もう少し上手にとぼけなよ。せめて机の上にあるもの、しまうとかさ」

あらためて、さっき片づけたはずの机をなで回した。

……しまった。

硬直したまま動けなくなったことに気付いたのは、泉州さんの次の言葉だった。

「片岡、あんたさあ、本当に小春ちゃんのこと、好きなんだねえ」

棚の上には、藤棚背景の葉書、さらに机の上にはその前の年のものが透明のビニールシート下に挟まっていた。気付けよ、と頭を殴りとばしたい。今からでもとあわててびっくりがえした。

「もう遅いって」

背中で泉州さんが笑いこけるのを無視して司はひたすら机の上、棚の上、あらゆる紙をひっくりがえし続けた。

.....どうしよう。

全身は燃え尽きそうなほど熱い。背を向けているから泣きそうになっているところ挟まって見られないですむ。ひっくりがえした一瞬、目が合った西月さんの笑顔に、手が震えた。

いくら隠したって無駄だと気付くのに少し時間がかかった。泉州さんが司の横に回ってきて、「あのさあ、あんたが本気で小春ちゃんを好きだということはよく分かった。そんなことからかう気なんてないから安心しな。それよか片岡、まず要点整理しようや」

.....要点整理ってなんだよ。

口の中でもごもご言いながら、意外とやさしい態度の泉州さんのペースに乗せられていた。

「人の家にきて」

「それはないだろうって？まあその気持ちわかるけどね、片岡、あんたそれだとしゃべりづらいでしょう。わざわざ来てやったんだからほんとは感謝されてもいいところなんだからさ。ほら、片岡、あんた全然飲んでいないでしょう。まず落ち着きな」

梅酢の入ったコップを渡された。無理矢理口をつけさせられた。すっぱかった。

「だからなんで」

「単刀直入にいうわよ。あんた、天羽にそそのかされたわけ？」

展開が早くてついていけなかった。たぶんこの泉州さんという人、司が天羽の一言をきっかけに行動しているのだと見抜いているのだろう。かなりの部分、当たっている。梅酢を飲むわずかの間に西月さんの写真を机の上に発見してしまったり、観察力は確かなものだ。司もここでへたなことを口走らない方が身のためだ。親友を追いかけけているのが、かの下着ドロ野郎だと知って、泉州さんはなにをしたいのだろう。司に謝らせたいのだろうか。それとも振った天羽に雇われた最低野郎と軽蔑したかったのだろうか。表向き、天羽の態度は「恋女房を突き飛ばしたごろつき」そのものだ。本当は、西月さんに別の明るい未来が来るようにと思いやっているのだということを泉州さんは知らない。誤解を解いてやった方がよくないだろうか。すっぱい思いで司は舌打ちした。

「天羽は悪くないよ」

「はあ？」

泉州さんには不意打ちっぽく思ったことを言った方がよさそうだ。

「あいつ、あいつなりに考えてるし」

「小春ちゃんを振るためにならなんでもするもんねえ」

またあぐらをスカートのままかいた後、泉州さんは唇を曲げた。

「男子にはわからないかもしれないけどさ、あんなに仲良くしててその気にさせておいて、いきなり突き飛ばすっていうのは最低だよ。天羽が近江さんに浮気したのはしかたないよ。けど小春ちゃんがいる以上、あきらめるのが礼儀じゃない。それが土下座して許してもらうか。だって小春ちゃんにはなあんも悪いとこないのよ。小春ちゃん、もし天羽が二股かけたいならそれでも



いいって言ったのに」

「だから、嫌いになってくれれば、みんなの同情は西月さんに集まるし、そうすれば西月さんも楽になるし」

……と、思うけど。

天羽をかばってみるものの、歯切れが悪くなる。自分なりに天羽の言葉を解釈してみると、やっぱり西月さんが苦手だったんじゃないかとも思える。司からすると暖かい思いやりとしか感じられないことをたまたま天羽は苦手だったと。でもさんにそんなこと言ったらはたき殺されそうだ。言葉を選んだ。

「ふうん、で、あんたは恋敵をかばうわけだ。それでなんなの、小春ちゃんを奪ったっていいよって言われたわけ」

「奪ったってなんて言われてないよ、やるって言われたただけだよ！」

……またやっちゃった、ああ。

言った後で後悔してばかりだ。司は部屋の奥を眺めながら梅酢を飲み干した。

「片岡、で、もらうって言ったわけなの」

「言うわけないよ！」

じろりと睨む泉州さんに挑発されると気付くのが遅すぎた。思わず口が動いてしまった。

「僕はただ、天羽に言ってもいいって言われたただけだよ。だから、それだけなんだ！」

「言ってもいいって、つまり、天羽には小春ちゃんなんてどうでもいいんだ、ってことをかなあ」

ぶるぶると首を振り、司は思わず叫んでいた。

「僕がいたいだけなんだってそれだけだよ！」

「言いたいことってはっきり言ってみな」 男口調でつつかえされ、舌が焼けた。

「要するに、小春ちゃんは僕のもんだ宣言したって訳ね。天羽の思う壺ってことかあ。あっ、言い訳したって無駄だよ、あんたがなに言ったって、顔にみんな書いてるんだからねえ。こんなわかりやすい奴、見たことないよ。面白すぎるったらないよねえ」

桂さんならなんて言うだろう。出ていけって言いたいのに、それができないのは司の中でびくつくものがあるからだった。おっぱらったらきっと、何かをなくしてしまいそうだった。見えなけれど泉州さんの顔には、どことなくなごめそうな色が浮かんでいた。

司は黙ってもう一杯梅酢を汲むため、部屋を出た。

「なあに照れてるのよ、面白すぎるよねえ。だからかあ。片岡、あんた思ったより面白い奴じゃん」

……つまらない奴の方がいいよ。

なんかわからないけれど、司と三十分以上会話が成り立った相手はみなそう言う。どこがどう面白いのかわからないけれど、司を西月さんに寄せ付けないようにという目的はなさそうだった。

「じゃあさあ、片岡、あんたがなんでばらの花を捧げるなんていうきざまねしているのか、そ

こんところも教えてほしいなあ、ね、悪いようにはしないよ、小春ちゃんにも、今のところは言わないであげるからさ」

……本当かなあ。

司は口をとがらせたまま泉州さんに向き直った。

いい加減にしろとか、ふざけるなとか言いたかったけれど、一呼吸置いてでた言葉は、「ほんとに、誰にも、言わないよな」だった。

机の上のばらの花を、西月さんはそっと手提げの中に隠していた。

ちらりと覗く赤い影。ごくごくわずかの女子と、こっそりささやきあっているけれども、司の方を一切見るようなことはしなかった。時折、天羽の方を見つめ、すぐに逸らして、また天羽が席にいない時を見計らってはまた見つめ直していた。今にも涙がこぼれそうな泣き笑いの表情を掠め取るたび、司はおなかの調子が悪くなるのをこらえるのに必死だった。

「小春ちゃん、どうしたの、今日なんか、幸せ一杯って感じだよねえ」

「ううん、そんなことはないよ。それよりね、今度の球技大会のことだけど、またみんなで頑張ろうね！ ちょっとつらいけど、また朝練、女子だけでやろうよ。で、こっそりみんなでアイス食べるの。楽しいよきっと！」

話を逸らそうとして、また早口になり、目をくるくると動かしている。やはり笑顔でいるほうがいい。親指とひとさし指でつまんでみたくなるような、ほっぺたがえくぼでへこんでいた。

やはり天羽の言う通りなのだろう。ばらの花の出所については、天羽から西月さんにこっそり渡されたものなのだと、まったく疑いを持っていない様子だった。信用した通り、泉州さんは本当のことを話さなかったし、天羽も言わなかった。

「片岡、頼むから早く覚悟を決めてくれよ」

給食当番の時、教室ですれ違う時、ことあるごとに困り顔の天羽はつぶやいた。もちろん司に向かってだった。

「お前みたいなまっすぐな奴、見たことねえよ。な、過去は確かにまずった、けどそれはきちんと男らしくけりをつければすむことだぜ。あんな女に片岡なんてもったいねえが、少なくとも男子連中は納得する。西月なんかよりもいい女子に認められるさ」

たまたまポケットににぎりこぶしをこしらえていた。司はそのまま出した。ぶらさげたままにした。勘違いしたのか天羽はあわてるように両手を振った。

「お、怒るなよ、お前にとって西月が女神さまだっていうのはよっくわかる。好みだよな好み」  
——ちょっとは西月さんのこと、気にしてやってるんだろうな。天羽だって悪い奴なんかじゃないしさ。司はにぎりこぶしをポケットにしまいなおした。

「まあ、俺の言いたいのは、早いうちにぶつかって、腹の中のものをぶちまけたほうが、残りわずかの青大附中時代をまあく過ごせるんでないかってことだよ。片岡、俺はさあ。おめえみたいな全身善意な奴、愛しちゃってるんだぜ！」

投げキッスを決め、天羽は司の耳に顔を近づけた。

「さて、第一計画は一週間後でよいか、ばらの騎士」

——七本目のばらか。

頷くしかなかった。第二の計画を忘れてしまうために。

天羽が西月さんから意味ありげな視線を送られたり、なにげに微笑まれたりされているのがう

っとおもしろい。司からすればそれもうらやましいかぎりなのだが、お互い趣味の違い仕方がないのかもしれない。

むしろ司が送り主だと知った時の反応が怖い。

西月さんの性格だったら露骨に「下着ドロなんて寄って来ないでよ！」と文句を言うことはないだろう。いつもかばってくれた人なのだ。たぶん、大丈夫だと思いたい。

ただ、次の段階に於いて、司の「ぬれぎぬ」が正真証明の事実だと言いきってしまったとしたら、西月さんはどう思うだろう。きっと、あの人のことだ、今まで通り接してくれると思いたいが、やはり不安はよぎる。

放課後を待ち、人の気配が消えるのを息殺して待った。また泉州さんに張り付かれるのはごめんだ。梅酢でもてなした後、とうとう全部白状させられてしまったけれども、できればこのまま何事もなく過ごしたかった。幸い泉州さんは何もすでにかばんの中へばらの花をつぶさぬよう、筒に入れてもってきてある。持ち物検査を規律委員にされてしまったら一貫の終りだが幸いまだ、そういう野暮な出来事は起こっていないらしい。時間をつぶし、雨が降りそうな空を見上げて時計を覗き込んだ。三年A組の教室に誰もいなくなったところを見計らい、もう一度階段を昇った。数人、別の組の女子とすれ違ったがそれ以外は誰にも会わなかった。教室に入るとまずは感謝の意。両手を組み合わせて握り締め、軽く降った。その後花をつぶさないように、卒業証書を入れるような筒の入れ物を取り出した。この日のために、小学校時代の卒業証書入れを持ってきて、隠しているのだ。

「気合、入れなくちゃなあ」

第一計画「告白」は少し気合を入れればなんとかなる。それだけはなんとかする。いつものように、ばらの花をかばんの中から取り出し、そっと西月さんの机に置いた。今日も誰もいなかった。ちゃんと「ありがとう」とささやいておいただけあって、ばらの花びらはあともう少しでほころびそう、といった済ました顔をしていた。

司はいつものように、校舎裏の林を抜けた砂利路に向かった。ブレザーを脱いで軽く風になびかせた。誰もいないはずだった。

「気合い？」

いつのまにか後ろにくっついて来る影あり。背中から男子っぽい匂いが漂うから、女子っぽい声でも誰だかわかる。

「なんでそこにいるんだよ」

浅黒くすらりとした女子の姿。泉州さんだった。追っ払うのも言葉が見つからず、司は背を向け直した。

「いやね、クラスでは話すと怪しまれるし、あんたもアリバイ作って置きたいだろうと思ってね」

いつも桂さんと待ち合わせている林の通り道までつけてきたらしい。確かに言っていることは間違っていない。

「なんか用あるの」

「あるよ、だから来たんじゃない」

司は空を見上げ小雨をほっぺたで感じた。傘をさした方がいいだろうか判断に迷った。

泉州さんはためらわずに頭をぶるんと振った。

「あんたの『百日間小野小町計画』なんだけど」

霧雨が、「滴」という言葉にふさわしく垂れてきた。傘をさしたかった。泉州さんは両手を腰に当てた。

「とっくに他のクラスの女子から、情報流れているよ」

鼻息が余計だった。

——嘘だ。

だって西月さんは気付いていなかったじゃないか。いまだに天羽のことをずっと見つめつづけているじゃないか。もしばれていたら、司の方をいいにせよわるいにせよ、しっかりと見つめているはずだ。

身体がごわごわと鳴り出すのが分かる。ごまかすために天を仰ぎ、水滴を頬に受けた。

「片岡、あんた同じクラスの目は完璧にごまかしてたね。それは偉いよ。けど頭隠して尻隠さずってあんたのことだよ。C組の女子には気をつけろって、青大附中三年間通っていたらわかりそうなもんだけどね」

——そんなの知らないよ！「C組の女子は怖いよ、あそこの男子みなちっちゃくなってるしねえ」

司はそっぽをむいた。視線をそらすといきなり肩をつかまれた。

「女子同士の団結力を甘く見るもんじゃあないよ。たぶん九割方、明日中にばれるよ」

——他のクラスのことなんて。

心臓が止まりそうで本当だったら逃げ出したい。目を塞ぎたい。

「逃げる気？」

「逃げないよ」

「そんなら、あんたもそろそろ覚悟を決めなさいよ」

「わかってる」

空がうすぐもってくる。司をあざ笑っているかのようだ。風がいきなり冷たく刺さる。どこことなく汗くさいにおいが漂った。なんだか口をこじ開けられるような気がして、司はつばをゆっくりと飲み込んだ。振り返って泉州さんを真っ正面から見据えた。「どうして、言わないんだよ」「なにを」——一番不思議でならないことを聞くことにした。

「僕のことをみんな知ってるんならC組の女子よりも先に、泉州さんが話せばいいじゃないか」

「だってあんたが自分でしゃべったじゃん。ばっかじゃないの」

それに、と泉州さんは続けた。

「あんたと約束したじゃんか、誰にも言わないって」

——そりゃ、言ってたけどさ。

後ろに束ねた髪がぼさぼさに乱れて、時代劇に出てくる浪人に見えた。

「そんなみみっちいことするよりも、あんたを応援する方が面白いしさ。小春ちゃんがどう言うかはわかんないけどさ、天羽のことを追っかけるのをやめさせるには役立ちそうだしねえ」

「天羽のこと、嫌いなのか」

信じられない言葉だった。

今の言葉、司の聞き間違いでなければ、泉州さんは今、司を応援するなんて言わなかったらうか。

「別に好きも嫌いもないよ。ただ、小春ちゃんはちょっとみっともなさ過ぎ。天羽が嫌がってるんだから、すっぱり切って別の彼氏探せばいいのになって思うよ」

——別の彼氏？

おそろおそろ泉州さんの顔を伺う。にやりと笑い、泉州さんは間を置いた。

「知ってる？ 天羽に振られてから小春ちゃん、他の組の男子に三人くらいラブレターもらっているんだよ。ああいう子だから愛想よくごめんなさいしているけどいつまでもそうするのってねえ、ここいら純情少年に頑張ってもらった方がいいんでないかと思った訳よ」

口がたらっと下がったまま閉まらない。全身の血があふれそうな気持ちを必死にこらえた。西月さんに自分がぴったりだ、なんて言ってほしいけれど、一生無理だと思っていた。

——なにもしてなかったら。

三人のラブレターよりももっといいもの、いくらでも書きたいし、書けるのに。

なんてたって下着ドロだ。想い人の親友に認めてもらえる理由がわからない。

「それはそうと、片岡、あんたの部屋にバットとかグローブとか、空き巣のしわざってくらい散らかっていたけど、もしかしてさ、野球ファンだったりする？」

.....なにを見てるんだこの人。

早く桂さんに来てほしい。きつく振り返り、にらみ返した。

「そんなこと関係ないだろ！」

「あるんだよ、実は」舌をぺろりと出した。なんとな演じているような気がした。マンガの登場人物のまねみたいだ。

「小春ちゃんのお父さん、高校時代、選抜高校野球の全国大会にでたことあるんだよ。だから、小春ちゃん、お父さんと話を合わせるために野球しっかり観ているんだからさ。その辺、アピールするといいかもよ。あ、車、来たじゃん。早く乗ろ」

なんと泉州さん、桂さんの運転する車がどれだかチェックずみのようだ。しかも一緒に乗り込むつもりの様子。なにを考えているのだろう。やたらとめざといのはわかる。司を嫌いではないらしいとも気づく。でも、あまりにも司の日常に入り込みし過ぎている。そんなこと関係なさに、外国のモデルさんみたいな顔の泉州さんは顔を耳に近づけた。もちろん意味ありげな笑みをくっつけて。

「いつもあんたを迎えにくる運転している男の人、やたらかっこよくない？ あんたの兄さん？  
ねえ、紹介してよ」

素直に答えた。それしかない。

「僕の家庭教師で、B級グルメマニア」

——この人、正気かよ？

「へえ、おいしいことに詳しいんだ、教えてもらっちゃお！」

——あのゲテモノラーメン見てみろよ。

やっぱり泉州さんは謎の人だ。趣味が理解できないし、ずうずうしいし。司のことをおもちゃ扱いしているし。女子版桂さんってところだ。

どこかで様子を伺っていたのだろうか。のろのろと車が近づいて、砂利を鳴らしながら止まった。今日は普段着だった。「かっこいい」とはとてもだが口が裂けても言えない白の無地Tシャツと黒いトレーナー地のパーカー。極めつけは腹を締め付けないようにゆったりさせたぼんたんと呼ばれる黒いズボン。学生服の不良さんがよく穿いているようなもので、桂さんが着ると短い足がさらに縮まって見える。運転席側の窓を開け意味ありげに笑う。やな感じだ。

「おい司、今日は彼女と一緒に、デートかよ」

状況を知らないで何を言っているんだろう。隣りにいる泉州さんのことを言っているのだろうか。思いっきり首を振った。

「よくないよ」

言いかけると、遮るように、

「片岡、紹介してよ」

泉州さんがにやりとひじで司のわき腹をつついた。

「なにするんだよ」

「いいじゃないの、一度はふたりっきりになった仲じゃないの」

思わずむせ込んだ。

「そっちが押し掛けてきただけだろ！」

「おい司、今なんと」

桂さんはおちゃらけ顔のままだけど、声音が変わった。やばい。後でものすごく怒られる。学校の人には内緒にしてくれと頼んだけど、まさか桂さんの前でばらされるとは思っていなかった。口止め忘れていた。あわてて司は割って入ろうとしたが、遅かった。

すりすりと泉州さんは車のドア越し、桂さんに近づいてゆき、礼儀正しく礼をし微笑んだ。この切り替え、まさに女優さんだ。

「『迷路道』のクリスマスパーティーで会ってますよね。覚えてますか？」

「うーん、覚えてないなあ。司のクラスメートかな」

本当にわからないらしい。腕を組んでじっと泉州さんを観察している。まさかとはおもうが二人が知り合いだなんてことは。

「覚えてないかあ、場合が場合だもんね、ほら去年のクリスマスパーティーの時。うちの親と一緒にあいさつしたんだけどなあ」

「ごめん。俺、鳥頭でさ」

「泉州ってうちの父さんなんだけど、すっごく前から知ってるはずなんだけど、覚えてないで

すか」

いったい何を訴えたいのか司にはよくわからない。見た感じ泉州さんときたら、司を始めクラスの男子たちには一切見せないような笑顔でもって、車へ寄り添おうとしていた。厳密にいうと運転席で作り笑顔をして髪の毛べったりした頭の桂さんに向かってだった。

「せんしゅう……、って、俺の知っている限りだと、わかんねえなあ。まあいいや、司の友だちだったら大歓迎だぜ。彼女だったらもっと大・大・大歓迎だけどな。お嬢さん」

どうやら桂さんも泉州さんタイプの子は苦手のような。おちゃらけて話を逸らそうという考えのようらしい。だが甘いぞ、と司はささやいてやりたかった。この人にかかったら、こっちがいやだと思ってもいつのまにか本当のことを白状させられてしまうのだ。ずっと隠していたあのことも、このことも、すべて吐き出させられてしまう。しかもむかつくことに、無理やりじゃなくて、自分の方からなんとなく話さずにはいられない気分になってしまう。何でだろう。自分でもわからない。黙ってうつむいて、ボンネットを叩いていた司だったが、

「おいおい司、せっかくだ、彼女とドライブでもするか？　じゃあどうでしょう、お嬢さん？」

と、桂さんに流されてしまった。泉州さんだけじゃあ、ないのだ。言うなりにされてしまうのは。

泉州さんは諸手を挙げて喜んだ。司が助手席に座ることを、かなりむっとした気持ちで見ているらしい。そんなの関係ないじゃないか、といつものように司は自分の席をぶんどった。泉州さんが乗り込むと、また男同士の匂いが漂った。三人集まると妙に臭い。桂さんは気にしないようだったが司はがまんできなかつた。車窓をあけてクーラーを入れてもらうよう頼んだ。

「あ、これって、パトカーみたい！」

目ざとい泉州さんは、ギアの後ろに置いてある自動車電話をすぐに発見した。騒ぐと思っていた。しかしなぜ、パトカーなのか？

「パトカーって、これよりもっとちっちゃいんですよ。知ってますかあ？　交通違反している車に呼びかけたり、追っかけたりするんですよ」 「おやまあ、お嬢さん、実はひそかにパトカーマニアかよ」

完全に桂さんも泉州さんの思惑に乗せられている。そりゃあそうだろう。顔とスタイルだけみればモデルさんみたいな雰囲気だ。スカートはいたままあぐらをかくなんてことを見せ付けられなければきっと、そう思うだろう。

「ううん、違いますよ。わかってないなあ。それにしても十二月のあのこと、本当におぼえてないんですか？」

「ごめん！　ほんとうに覚えていないんだ！」

いつもの通学路を通して、桂さんはとぼけた声で返事した。

「まあそれじゃあしかたないですよなあ」 「いろいろ質問されたし、じゃあお嬢さん今度は俺が質問していいかなあ」

司の膝を桂さんは指で弾いた。ちょっと痛い。

「学校の司って、いったい何してるかなあ」



「そんなの聞くなよ！」

かっとなってクラッチを踏んでいる足にかなづちを落としてやりたいと思った。知らぬ顔して桂さんは続けた。もっと腹立つことに、後ろの席で泉州さんはいい子ぶって答えるではないか。

「こんなおもしろい奴いないですよねえ。もっとしゃべりゃあいいのにねえ」

「ほお、そうか、おもしろいか、そうかそうか」

妙に納得しながら桂さんは横目で司をにらみ、さらにのほほんとしゃべり続けた。

「じゃあ、司をどうすればもっといかした奴にできるかなあ。いい方法ねえかなあ」

「ありますよ。もっちりん」

——そんなの関係ないだろ！

振り返り後ろに漬物石を投げたくなかったが、手元にはなにもない。司は後ろの席をバックミラーで見てめっとにらんだ。

「ほう、そりゃどんな感じでだろう？」

「桂さん！」

「彼女作ればいいのよ。ねえ、片岡、何言いたいかわかるでしょ」

——そんなの知るかよ！

——いったい僕になに言わせたいんだよ！

——桂さんも、それに、あの人も！

「うるさいってさっ！」

とうとう頭の中が爆発してしまった。といっても、両足を強くばたつかせただけだったけれども。全く驚く気配のない桂さんと、後ろでがはは笑いをしている泉州さん。どんなに身をよじって叫んでも、ちっともかないっこなかった。

「ほらほら、そうやってはつきり言いなよ。ね、今度、いい方法相談に乗ってやるからさ！」

——乗ってくれなくたっていい！

桂さんが自分のほっぺたをつついて、鏡を見ろ、という風にバックミラーを指差した。

「タコ見てえだな。ま、こういう奴なんだけどな、司はおもしろい奴だぜ。お嬢さん、もしよかったら面倒みてやってくれねえかなあ」

「わかった！ 彼女見つけてやるからね」

——勝手にしろ！

いったい桂さんは、泉州さんのどこが気に入って車に乗せたりしたんだろう。信じられない。司の知らないところでこのふたり、やっぱり会ったことがあるんじゃないだろうか。クリスマスパーティーなんてそんなの知らない。あるとすれば「迷路道」の洋服を購入している一部のお客さんを招いて、青潟の高級ホテルの一室を借り切って、ものすごいパーティーをすることがあるとは聞いていた。だからクリスマス前後は桂さんもかりだされて手伝いさせられるとぼやいていた。ただそれだけのはずだ。なんで泉州さんなんかそんなところに出るんだろう。でも泉州さんの口調だと、そのパーティーで桂さんと会ったことのあるような様子だった。

「さっきから僕のことばかり馬鹿にしているけどさ、泉州さん」

「あいよ、なんか文句ある？」

「どうしてそんなパーティーに泉州さん、出てたんだよ」

うまく言えなくてなんだか聞き返された。あっさり返事が返ってきた。

「うちの親が呼ばれてたからよ。それに付き合ってたってわけよ。桂さん？っていうんですか。あの、本当に私のこと、覚えてないんですか？」

「ごめんなあ、去年の『迷路道』のパーティーだったら、すげえいっぱいお客さん来ていたからわからないなあ」

最初に聞かれた時よりは、少しだけぴんとくるものが合った様子だった。車はいつのまにかいつもの駅前ラーメン屋に到着したようだった。駐車場の空きを確認した後、桂さんはまず泉州さんに、

「よかったらラーメンか餃子食っていかねえか？ お嬢さん」

と誘った。ちっとも女子っぽい食事じゃないんだからあっさり断ればいいのに、泉州さんはやっぱり泉州さんだった。

「おごってくれるんですか！ すっごい嬉しい！」

とぶりっこ声で喜びを表す始末だった。なんかよくわからないけれど、泉州さんの好み桂さんらしいということだけはよく伝わってきた。この調子だとあの、マヨネーズ、牛乳のトッピングがされた怪しいラーメンも喜んで食べるんじゃないだろうか。この人、やっぱりよくわからない。

それほどひどくはなかったけれども、外は雨だったこともあってまず、桂さんは泉州さんを店の前でまず降ろした。

「悪いけどちょっと待っててな。一緒にラーメン食おうよな」

「すっごいラッキー！ ありがとうございます！」

駐車場へ車を置きにいった。耳元に桂さんはささやいた。

「司、彼女、お前のクラスの子だろ？ 泉州さんっていう子だろ？ どうしたんだ？」

「どうもしないよ！ 関係ないだろ！」

「年賀状の子とは違うみたいだけどなあ」

「うるさい！」

こう言う時、司は反抗期だと自覚する。だって冗談言うのもいいかげんにしてほしいから。

「いやあ、まんざらあの子、お前のご嫌いな子じゃねえみたいだぞ。それにずいぶんあの子、司のこと調べているみたいだしなあ。ほら知ってるか？」

泉州さんには聞こえないように、

「あの子の父さん、青湊警察のお偉いさんだぞ。知ってたか」

——そんなの知らないよ！

「この前のクリスマスパーティーに来ていたのも知らないわけじゃないんだけどなあ、あの子」

桂さんは頭を掻いた。ふけが爪にたまっていた。外は完全に雨だった。

「てっきり、男だと思っていたんだよなあ。髪の毛、帽子の中につっこんでてさ。もしかしたらって思ったけど、スカート履いていたからわからねかったなあ。その頃から司のこと、ずいぶんチェックしていたんじゃないかなあ。司、気をつけろよ、あとそれとだ」

あっちむいてホイ、といきなり指差した。つられて指の方向を向いてしまった。どかっとなんか骨を食らわされた。

「どんな事情があったかしらねえが、いくらなんでも女子とふたりっきりいちゃつくのは十年早いぞ！ 中坊のデートってのはな、これから俺がやるようにやるんだ。よっく見とけよ」

「なんも悪いことしてないよ！」

「ばあか、そんなんじゃないねえ。全く司、お前本当にガキだから、お守りする俺の方がはらはらするぜ。ばらの花持っていくわ、おもしろい女の子と仲良くなるわで、これじゃあ将来、お前の彼女も気が気じゃねえなあ。おい、お嬢のこと、好きなのか？」

「好きじゃないって！ 僕はあの、ただ」

またもうひとつ、拳骨が落ちた。

「だから、おもしろい奴だって言われるんだよ。司、ほら、男も女もまずはお互い、一緒にメシを食って、その上で話し合おうぜ。お嬢も待っているしな」

いつのまにか桂さんは「お嬢」と泉州さんと呼んでいる。やっぱりあの人変だ。あっという間に司たちの中に入り込んでいる。司にとってはただのクラスメートに過ぎないのに。

——なんだよ、僕がなんも考えてないのに、周りばかり動いていくなんてさ。周平、ひどいよな、なんとかしろだよな。こういう時、お前だったらどうする？ 僕みたいなことになったら周平どうする？

ふと、頭の中によぎった言葉を司は振り切った。

泉州さんと桂さんに巻き込まれて忘れていたことだった。

——もうC組の女子にばれている。

もう、一刻も早く、西月さんに「ばら」の捧げ主が誰なのかを伝えなくてはならないということ。

——どうすればいいんだろう。

なんども同じことばかりつぶやいている自分に、司はだんだんいやげがさしてきた。いつものラーメン屋前で、お嬢さんらしくにこにこしている泉州さんの浅黒い顔を見ながら、司はもう口を閉じて舌だけ動かした。

——あのばら、僕からなんだ。

もちろん、誰にも聞こえないくらいの声でだった。

男子トイレを通り抜けて奥の部屋に通されても、泉州さんは動じなかった。振りかえった桂さんが、なにげにに様子を伺ったのを、すっかり勘違いしているらしい。司の前だっことを意識していない。腕に飛びかからんばかりだった。

「すごおい、かっこいいじゃん」

——かっこいいってなんか間違っていないか？

うっかり変なこと口走ると大変なことになる。すでに司は学習済みだ。

「じゃあ、もっとかっこいいものを見せてか。いつものラーメン一丁！」

やはり桂さんは頼むと思っていた。もう第一次関門「トイレを通り抜けて特別室へ」は通過している。ラーメンにマヨネーズをトッピングするなんて、ピザでもあるまいし人間の食べたものではない。さすがに桂さんはいきなり怪しい食べ物をすすめることはせず、素直に塩と醤油ラーメンを注文した。もちろん自分の分はオリジナルバージョンだ。

「片岡もずいぶん若者らしい食い物食べてるんだよねえ。いわゆるファーストフードとか、そういう庶民のものは食わないもんだと思っていたよ」

「食べてるよ」

神乃世では、の話だが。周平と親の目を盗んでセットメニュー注文したことがある。後で母さんに買いぐいしたことを怒られたけれども、禁止はされていない。夕食が食べられなかったのが計算違いだったただけだ。

「そうかあ、いつもさ、腹すいたぞって顔しててさ、そのくせ給食はなーんも食わないんだもんねえ」

「おい司、お前そうなのか？」

——食べる気になれるってか。

割り箸を割らないまま、テーブルを叩いてあさっての方を向いた。

「さあて来た来た、取り皿もサンキュー。さ、お嬢も食うか？ 俺の特別メニュー」

店のおかみさんがいつものようにぶっきらぼうに、ラーメン三膳、置いていった。すっぱいのと脂臭いのとでごったに状態の、桂さんのラーメンどんぶり。覗き込み泉州さんは驚かずに、

「うん、食べていいですか。おいしそう！」

——やっぱりこの人変だよ。

箸を割って司はぐるぐる自分の醤油ラーメンどんぶりをかき回した。これだって結構な量がある。給食はいつも、ほんの少し皿にひっかかるくらいしか食べないので、四時過ぎると猛烈に腹が減ってくる。のびないうちにがつついた。

「片岡ってさ」

仲良く、マヨネーズラーメンの汁を自分の塩ラーメンどんぶりにちりれんげで注ぎすすっている泉州さんは、口をもごもごさせたままつぶやいた。

「もう少しなんとかしたらどうかねえ。あんた、犬食いしてるんじゃないの」

——人のこと言えるのかよ。

「小春ちゃんのうちって、食事のマナーにはうるさいらしいよ。あんた、もう少し箸の使いかた覚えなよ。あ、そっか。今度さ、あんたに矯正箸をプレゼントしようか。ねえ、桂さん？」

最後の、桂さんへの呼びかけだけがやたらと甘ったるかったのがむかっとくる。

「余計なお世話だ！」

「いや、司、お嬢の言う通りだ」

なんでこの二人、初対面……ともいえないけれども限りなく初対面に近いだろう……なのにここまで結託できるんだらうか。司は汁を一気にすすって口を袖で拭いた。

「お前もなあ、やっぱり握り箸は直そうな。俺も前から気になってたんだぞ。泉州さん、鋭いなあ、やっぱりあんたみたいな子がな、司の彼女だったら」

「桂さん！」

もうがまんでできなくて、司はテーブルを思いっきり殴った。もちろん箸は握ったままだ。

「なんでそんなに僕を馬鹿にするんだよ！ もういいだろ！ 僕ひとりで帰るから！」

「桂さん、そういうわけいかないでしょ」

また世の中なめきった表情で、にやにやしなながらお嬢、泉州さんは微笑んだ。

「だって、あんたのことで桂さん、神経すり減らしてるってのがよおくわかるよねえ。またあんた誘拐されたらどうすんのさ。青潟中大騒ぎになるんだよ。状況によってはさ、うちの父さんも殉職しちゃうかもしれないしさ」

そんなのほほんとした言い方しなくたって分かっている。よっくわかっている。なんでみんな、わかりきったことばかりぶつけて司を物笑いにするんだらう。さっき桂さんが言った通り、泉州さんのお父さんが警察関係の人だったとしたら、たぶんじいちゃんばあちゃんの誘拐事件がらみでの知り合いなのかもしれない。司が生まれるはるか昔のことだし、泉州さんだって生まれているとは思えないし。でも、新聞にあれだけでかでかとする事件だったのだから、もしかしたら泉州さんのお父さんが関わっていたのかもしれない。それこそもしかしたら、「殉職」寸前だったのかもしれない。

——わかってるよ。どうせ僕は、そういう立場なんだもんな！

——けど、そんなことと、なんでここまで僕が物笑いにされるのかとは関係ないよ！

もっと言い返したいのに言葉が続かない。司はただ、ぎょろっと目に力を入れてふたりをにらみ返すしかなかった。全く動揺する様子もなく、ふたりは仲良くマヨネーズラーメンを食していた。

食べ物がおいしいのかどうかわからないけれど、胃袋が膨れるとなんとなく無言でも平気の気分になってくる。余計な言葉を泉州さんも桂さんも口走らず、ふたり腹を撫でて、

「ああ食ったかった、うまかったかお嬢」

「ごちそうさま！ 今度作り方教えてくださいよ！」

「おおきた！ 今度うちに遊びに来いよ。司、お前も一緒に作り方覚えろよ！」

なごやかな会話が続いていた。

——マヨネーズをラーメンに入れること自体が間違ってるよ。

無視して司は割り箸の先を噛んでいた。食べ終わった後、まだ食い足りない餃子を注文するのが桂さんの常なのだが、どうもそういう気分ではないらしい。お茶のお代わりをおかみさんからもらうと、爪楊枝で歯の間をつつきつつ飲んだ。もう帰りたい。

泉州さんは帰りがっていないみたいだった。

「あのさ、片岡、この機会だからひとつ聞きたいんだけどさ。ほら、やっぱ、学校だといろいろ問題あるじゃん？ 小春ちゃんにも聞かれないことあるじゃん？」

「話すことなんてもうないよ。この前、話したことだけだよ」

いきなり肩をがしっと両手で捕まれた。もみ出した。上手だ、肩がほぐれる、と思ってしまったけれど慌てて身を逸らした。

「やめろよ、泉州さんいったいなんで僕につきまとうんだよ。桂さんだけでいいだろ」

「もちろん、あとで桂さんには出血大サービスしてあげる。でもさ、せっかく桂さんがいるんだったら、私がやばいこと口走ったって、あんた守ってもらえるじゃないの。最高のシチュエーションよ」

——どこが最高だよ！

司は手を振り解いて尻で座布団一枚の幅、逃げた。向かい合って受けているのは桂さんだった。自分のことをネタにされているのに、全然腹を立てようとしはないではないか。やっぱり桂さんと泉州さんとの間には、何か事情があるんじゃないだろうか。司が知らないところで何か。まさか、泉州さんのお父さんが、司の二年前にしでかした事件について調べていたとか何とか...いやそんなことはない。ないはずだ。警察には洩れていないはずだ。でも、泉州さんが情報を流して、お父さんを動かしていたとしたら.....想像ばかり膨らんで、さっき食べたラーメンをもどしそうになる。どきどきした。

「なんだよ、もういいかげんにしろよ！ もう僕だってみんな話しただろ？ あの人の、本当のこと言いたいんだったら言えよ。C組の女子にばらしたいんだったらばらせよ。もう僕はもうなったっていいんだから」

言いながら、危うく泣きそうになりごくとつばを飲み込んだ。

「いやごめんごめん、別に片岡、あんたのこと泣かそうだななんて思っていないからさ。それにしてもあんた、ずいぶん泣き虫だねえ。別に男が泣いちゃいけない法律なんてないんだから」

「泣いてなんかいないって！」

勝手に決め付けるのはやめろと司は言いたい。桂さんに助けを求めたいけれども、三人きりの部屋の中、泉州さんの思う壺になりそうだ。お願いだからこれ以上、桂さんに事情がばればれになるようなことは話さないでほしい。それだけ祈った。

「あのね、片岡。私はね」

髪の毛がほつれてぼさぼさしている。ドアアップで見ると本当に目の切れ長なことか、唇の細くくっきりしたとことか、鼻の整っているところとか、有名な大人の女優さんそっくりだと思わずにはいられない。だけど、髪と肩の白いふけだけがやたらと目立ち、せっかくの顔かたちが台無しだった。司は覚悟を決めて一言投げた。「泉州さんこそ、もっときれいな格好すれば、桂さんいちころなのに」

「はあ？」

不意を食らったらしい、熱気が少し引っ込んだのを感じる。ゆるんだ口元と目元が、花びらほころびたという感じで、やっぱりきれいだった。

「食べる前にさ、肩のところ、はたいた方が、いいと思うんだ」

一矢報いたか。ざまあみろ。一瞬にして崩れた。泉州さんの表情はすぐに意味ありげな笑みを浮かべた。

「ご忠告ありがと。いいきっかけになったよね。ところで片岡あんた、どうしてあんなこと、しちゃったわけ？」

——あんなことって。

桂さんへ優しく頷くしぐさをする泉州さん。司にはふたりの意思疎通がどうしてなされているのかが見当つかない。

「この機会利用して、白状しちゃいなよ。桂さんだって心配しているよ」

——なんだよ、この人たち。

またぐぐっと、こみ上げてきそうになる。火をつけてしまった自分をぶん殴りたかった。司は足を半分あぐらかいた格好にしながら、後ろにのけぞり片手をついた。

「そうだな、司。今日は秘密を守ることでできる三人組だ。ってことでだ」

完全に包囲された。司はやっと答えの出た言葉を桂さんから聞いた。

「二年前のこと、言っちゃまえ」

きん、と頭の中に張り巡らされていた糸が切れた音がした。

いつも桂さんと出ている裏口から抜け出すと、司は駆け出した。勘定はどうせ桂さんが全部やってくれる。あのふたりがぐるだったってことをどうして気付かなかったのか、自分のまぬけぶりに腹が立ってくる。

——結局それかよ！

変だとはうすうす思っていたのだ。なんで泉州さんがいきなり司のうちに電話をかけてきたのかとか、なんでいきなり上がってずうずうしくばらの花の事情について聞き出そうとしたのかとか、なんであんな白々しいやりかたで初対面を装い、あっという間に打ち解けてしまったのか。パーティーがどうのこうのって話していたけれど、あんなのきっと大嘘だ。最初から泉州さんと桂さんは、告げ口かなにかしあって、司に張り付こうとしていたに違いない。

——桂さんはしょうがないよ、桂さんは。

なんだか似たようなことはあった。桂さんはいつも脳天気にもB級グルメのことばかり考えているように見えるけれども、実は相当の切れ者だったらしいと聞いている。今のところは司の教育係としてのみ、父の会社に携わっているけれどもかつては超エリートだった……本人談……らしいとも聞く。桂さんはその辺の事情を司に全然話してくれないけれど、たまに父の関係で連れて行かれるパーティーなどで聞いた話だと、わけありで会社を辞めたのにまだ社長である父が手放さないでいる、ということらしい。つまり、桂さんもいろいろあるってことだろう。あんまり今までは考えてなかったけれども、桂さんが単なる「売れない漫画家」風貌の奴ではなく、ひと

癖もふた癖もある切れ者だったことは確かのように。 司がこっそり何かしようとしても、すぐに桂さんに気付かれる。 ばらの花百日間計画のように。

司が精一杯考えて計画し、ばれないように遂行しようとしても、桂さんにはかなわない。

頭ごなしにやめさせられることはないけれど、桂さんの視界に入らないようにすることができるのは風呂に入ることとトイレくらいじゃないだろうか。今まで考えたことなかったけれど、二十四時間監視されている状態なのだ。

きっと、司が西月さんへばらの花を捧げようとたくらんだことを見抜いた段階で、学校側に手を回したのかもしれない。それこそ、泉州さんのお父さんの関係で、かもしれないしそうでないかもしれない。また泉州さんも桂さんのおめがねにかなってさっそく、司へスパイみたいなことをしようとしたに違いない。ついうっかりと、西月さんへの想いを認めてしまい、内緒にするという約束のもとでぺらぺら話してしまった自分のまぬけさが悔しい。

本当に、どうしようもなく悔しい。

曇りのち晴れ。雨はだいぶやんだ。湿った空気が足下からよじ登ってくる。蒸し暑い。青潟には梅雨がないと言うけれど、きっとこれって噂に聞く「梅雨空」だ。 司はひとりでゆっくりと歩き出した。

さっきラーメン店を飛び出した時、桂さんも泉州さんも、全く動じていなかった。小さく、「おい、司待て」と怒鳴ったように聞こえたけれども追いかけてこなかった。黙ってもうちに帰るしかないのだから、とたかをくくっているのだろう。思い切って駅前のゲームセンターに入ってみようか。それとも、喫茶店に入ってみようか。そのくらいのお金だったらポケットに入っている。

——僕だってわかんないこと、なんでも知りたがるなよ。

涙が出そうになる。泉州さんに言われた「泣き虫」という言葉が刺青みたいに刷り込まれてしまいそうだった。そうだ、学校では決して泣かないけれども、あの時、二年前のあの日はどうしようもなく泣きじゃくっていた。

本当に、あんなことさえしてなければ泉州さんにさんざん物笑いにされることもなかったし、司が計画していたことだってもっともっと楽に運んだはずだった。何もかもがぶっ壊れてしまった。孫悟空がお釈迦様の手の中で走り回っていたことを知ってショックを受けるという話を読んだことあるけれども、今の司がまさにそうだった。さらに猿の本能丸出し。みっともないっらない。

駅前通りは仕事帰りの男女や学生たちでごったがえしていた。司が青潟に越してきた時、神乃世よりも大人がひしめいていることに驚いた。また、司と同じ年頃の子どもが男女で肩を並べて歩いていたことも。司はあの頃誰かのことをそんな思いで見つめる日が来るとは思っていなかった。たまらなく通りのカップルがうらやましいと思う日が来るなんて。司にはわからない感情がこここのところあふれかえって、どうせき止めたらいいのか見当つかなかった。

——わからないのがどうして悪いんだよ。

数人、青潟大学附属中学生の制服姿を見かけた。雨が降ったせいかちゃんとブレザーを羽織っ



ていた。司は見られるか見られないかのすれすれで花屋の隣に並んでいる書店に滑り込んだ。入り口のマットにこけそうになった。自動ドアが開いて前かがみになりふらついた。棚が大ざっぱに四列くらい並んでいた。司がたち読みするコーナーは一カ所だけだ。スポーツおよび格闘技。男性客ばかりで野球雑誌を手にも取ることままたまならず、司は人の後ろから本棚を覗き観するだけだった。なにかの拍子にレジの方へ目が行った。やはり司と同じ年頃の男子が学生服のままレジを捌いていた。

——一年くらいかなあ。アルバイトする中学生なんていけないんじゃないかと思う。でも、学校でなんもやる気なしのまま惚けているよりはましかもしれない。「お客様、恐れ入りますが二列に並んでお待ち下さい！」本を片手に十五人以上の客から本を受け取り、一秒でカバーをかけ、隣のレジ打ち係の女性に「雑誌、一点で五百円、計五百円となります！」と威勢よく声を張り上げている。まだ声が女子みたいにとんがっている。愛想は悪くない。どんぐり眼の、なんにも考えていない顔した奴だった。やがてピークが過ぎるまでの五分あまり、その男子は魔法の手を使うがごとくスムーズにレジ前の客を片づけていった。実に要領がいい。片手で本を受け取り、次の瞬間もう一方の手でカバー用の用紙を器用に折っている。

——すごい、速い。司は自分よりも確実に仕事のできる奴にぼんやり見とれていた。あの忙しさを思うと、本を買うのも気がひける。司は野球専門週刊誌を棚に戻した。やがてそのレジ打ち少年は手薄になったところで、隣の女の人に、

「さっきの電話、俺宛だった？」

と尋ねた。

「五月ちゃんからだと思っているんでしょう」

「違うよ、それより誰だよだれだよ」

「かわいい声だったわよ。佐賀さんとか」

言いかけた女の人を遮るように、いきなりレジ打ち少年は手元のカバー折りを中止した。はっと空を見つめ、司と目が合った。すぐにそらし、

「あの、俺さ。もう手伝わなくていいかな。おとひっちゃんに頼まれたこととか確認しなくちゃいけないんだ。母さん、悪いけどさっきたんが店にきたら、後で電話するっていって」

「なんなの、関崎くんに頼まれたことって。雅弘、あんたもそろそろ受験勉強なんでしょう。関崎くんのように頭いいわけじゃないんだから。全く、遊んでばかりなんだから」

「遊んでなんかないよ。生徒会の手伝いだから、内申書対策なんだってば」

——そうか、あいつここの息子なんだ。

合点がいった。なあんだ、別にアルバイトってわけじゃないんだ。うちの手伝いだったら、当然店番くらいやるだろうし、給料なんてもらっていないはずだ。で、隣りのかなり年配な女性が彼のお母さんなのだろうか。

ばたばたとレジ周りを軽く片付けた後、本屋の息子はレジ裏の戸を開けて、さっさと奥に入ってしまった。それからどうしたのかはわからない。すぐに本屋の奥さんがレジ脇で本を束ねたり重ねたりしはじめたので、司はすぐにレジの側から離れた。

そろそろ帰ろうと思った矢先だった。

「こんにちは。あの、佐川くんいますか？」

司の背中にぶつかりそうになり「ごめんなさい」とささやくような声で頭を下げ、まっすぐレジ前に立ったセーラー服の女子がいた。こちらも当然、「別に」くらい答えようと思ったのだけれども、そうする必要はなさそうだった。お下げ髪をきっちりと編み込んだ、なんとなく神乃世でひそかに男子たちから人気のあった女子のことを思い出した。それほど司はのぼせていなかったけれども、あまり男子たちとおしゃべりせず、女子たちだけであやとりやって小さく笑っている姿に似ているような気がした。横顔をちらっと見た。全体的に線が薄そうな感じだった。

「あら、五月ちゃん、ごめんねえ、さっきまで雅弘ここでレジうち手伝ってたんだけどねえ。なんでも関崎くんの手伝いがあるからって言って、たった今出て行ってしまったみたいなのよ。五月ちゃんからも言ってやってちょうだい。もう少し勉強しなさいって！」

「私、頭悪いからわからないです」

小さい声で「五月ちゃん」と呼ばれた少女は答えた。笑顔がちらりと覗きそうな声だった。「でも、五月ちゃんのおかげで雅弘も少しは受験生らしくなったかなあ。いつもありがとうね。お母さんによろしくね」

——この人、さっきのレジ打ち野郎の彼女かなあ。

想像するだけだったら何にも罪にはならない。司はもう少しレジに近いところで適当に週刊誌を手を取った。やたらと馬の写真ばかり乗っている雑誌だった。

「佐川くんのおかげです」

「でもねえ、生徒会の仕事って大変みたいよねえ。ねえ五月ちゃん、佐賀さんって女の子、知ってる？」

——おいおい、もしかしてこの親、自分の息子の彼女に……。

立ち聞きを貫きたい。ページをめくりながら耳を済ませた。

「佐賀さん、ですか」

平な声が返って来た。

「そうなのよ、今日、おととい、先週とずいぶん雅弘、その女の子から電話貰っているようなのよ。くるたびに『生徒会関係』の人だって言い訳するんだけど、どうなの？ 五月ちゃん、その辺知っている？」

——親の分際でそこまでやっていいのかよ！

レジ打ち少年の母親に、いささか憤りを感じた司。自分の親がそんなことしやがったら、たぶんすぐに家を飛び出しているだろう。この親がやっていることというのは、「息子の彼女に、息子の浮気を報告」しているようなものだ。

「私、知ってます。佐賀さん、私も会ったことがあります」

凜とした声が耳に響いた。決して大声で叫んだわけでもない。たぶん、司以外の人にはそれほど気にも留めていなかっただろう。ごくごくふつうの声で答えただけだった。お下げ髪の彼女は背を伸ばしたまま、小柄な身体を堅くしながら、

「きっと佐川くん、他の中学の交流会のことで忙しいんです。あの、おばさん、今、私が来たこと、内緒にしてもらえませんか？　きっと佐川くん、私が来たこと知ったら、気を遣ってくれると思うんです。忙しいのに、申しわけないですから」

しっかりと足のついた声だった。どこか、似たような声を聞いたことがあるような気がした。司は身動きせずずっとこのまま本を立ち読みしつづけた。文字なんて追っていなかった。ただひたすら、お下げ髪の彼女の言葉をかみ締めた。

——似ているよ。

誰に似ているのか、わかりきっていること。

おばさんはさらにひと笑いし、天気のこととか彼女の家族のこととかについて二、三尋ねた後、レジにやってきた客の相手に戻った。お下げ髪の彼女も一礼してまた司の背中にぶつかりそうになりながら玄関に向かった。すれ違い際に司はお下げ髪ですっきり見えていた頬と瞳をしっかりと観た。そこには唇をぎゅっと結び、ほんの少し潤み加減、涙がこぼれそうなのを必死にこらえる人特有の表情が浮かんでいた。

結局本は買わなかった。ここの店が「佐川書店」であることは、外に出て看板を確認した後に気が付いたことだった。きっとさっきの彼女は泣いているのかもしれない。電話をかけてきた浮気相手の女子がどんな人なのかはわからないけれども、佐川書店のおばさんにとってはあまりいい印象を持っていないらしい。また、なんとなくだけどお下げ髪の子のことを気に入っている、という雰囲気も感じられた。家族で応援してあげたい、そんな気持ちを起こさせるタイプの子なのだろう。

——僕よりも年下なのに彼女いるんだ。しかもふたまたかけてるんだ。

腹が立ってくるのか、それともうらやましいのか。桂さんに言ったらきっと「そりゃあやっかんでるに決まってるだろ！　司、お前も色気付いたからに」とどやされるだろう。

——けど、あの子、かわいそうだよ。

もしかしたらその佐川という少年は、本当に生徒会の関係で別の彼女に会っているだけなのかもしれない。勝手にあのおばさんが誤解しているだけなのかもしれない。あおっただけなのかもしれない。明日になったらあっさり仲直りしているのかもしれない。

でも、あの時すり抜けた涙のたまった瞳と、一文字に結んだ唇。　誰かの顔に同じものを見つけたような気がした。目を閉じた。ふうっと、薄い紫色の背景色が頭の中に浮かんできた。

——ううん、大丈夫。私、平気だから。ありがとう。でも私が悪いの。私、なんでも直すし反省するから、きっといつか天羽くん嫌われないようにするから。

——天羽くんは悪くないの。きっと私が、天羽くんの気に障ることしちゃったからなの。だからみんな、天羽くんを責めないで。ううん。泣いてない、泣いてないの。さっき、ちょっと眠くなっちゃって涙がたまってしまっただけなの、ごめんね、みんなごめんね。

どこが泣いていないのか。いつも司は問い詰めたくなる気持ちを必死で押えていた。

しゃくりあげながら、いつものように天羽から冷たい仕打ちを受け、時には天羽と近江さんとのおちゃめな会話を目の前にして、必死にこらえているあの表情にそっくりだった。

本屋の息子がもしも、おさげ髪の子の瞳を見ていたら、きっと別の子になんて会いにいきたいなんて思わないだろう。運が悪かったのだろう。あと五分でも早くあの子がレジの前に立っていたら。

——僕だったら、あんな目、させたくないよ。そうだろ？

話したこともない、たった一度だけ見かけた本屋の息子に司は話し掛けた。

——だからなんだ。だから、絶対そうなんだ。

司は駅前のバス停に向かった。電話ボックスに入り、桂さんの車に備え付けられている自動車電話の番号を押した。何度かコール音が続いたけれども、出る気配はなかった。きっと泉州さんと司を探し回っているか、それとも無視してふたりでいちゃついているかのどちらかだろう。念のために今度は自宅へ電話をかけた。すぐに出た。

「おいおい家出息子、いまどこにいるんだ？」

「そこに泉州さんがいるんだろ？」

「ご名答、早く戻ってこいよ。話はそれからだ」

「女子とふたりっきりになるなんて、やらしい証拠だって言ったの誰だよ！」

さっきかっとなって店を飛び出した引け目が残っていた。帰りたくない。本当だったらこのままだこかで野宿したい。でもできそうにないのもわかっている。司は一呼吸置いてから、

「じゃあ、泉州さんを出してよ」

と要求した。

「あいよ、おーいお嬢、司がやっぱり話したいんだと」

「あいよっ！」

すっかりラーメン熱で張り切った声が響いていた。

——なにが「あいよっ！」だよ。

「おじゃましてまーす、片岡、あのさ、さっきの話の続きするまでは帰りたくないなあと思ったんでおじゃましてるんだけど、どこにいるのよ。桂さん車出すって言ってるわよ」

「そんなことしないでいい、まっすぐ帰るって言うておいてくれよ。それより」

さっきまでそんなこと、考えてもいなかったのに、なぜか自分の中で言葉が練られていく。本屋のレジ前でおさげ髪の少女が涙を貯めていた、あの顔だけが目に焼きつき離れない。どうしてなのか、わからないけれども。

司はぎゅっと目を閉じた。もう一度あの映像を浮かべようとした。

「泉州さん、これから僕、天羽のちに行くつもりなんだけど、天羽の住所って知ってる？」

「へえ？ 天羽ってあんた、どうしたのよ。恋敵のところに塩送りに行ってどうすんの」

「塩なんて持っていかないよ。僕はただ、天羽のうちの住所を知りたいだけだよ」

「はあ？」

同じ用件を繰り返した。

「ええとねえ、天羽のうちは学校の近くだってことは有名だよねえ」

「学校の側にいれば、あいつに会えるか？ 今日なんだけどさ」

「明日じゃあだめなわけ？ 学校で話すればいいじゃん」

「いや、今日話さないと、だめなんだ」

泉州さんは受話器の向こうで黙った。しばらく沈黙が続いた。もう一枚だけテレホンカードを追加して緑色の受話器を握りしめた。

「僕、これから天羽と話をするつもりなんだ。それが終わってからだったら、泉州さんが知りたがっていたことを話してもいい。でも、天羽に会わないとだめなんだ」

「小春ちゃんのこと？」

すぱっときりつけてくる言葉。でも慣れてしまったらしい。

「そうだよ。悪いけど、すべてを終わらせるから、それまでは泉州さんにも桂さんにも話せない」

泉州さんはぶっきらぼうに、数字を並べ立てた。二回繰り返した。司も聞き返した。その後で尋ねた。

「それ、天羽の電話番号？」

「そ、小春ちゃんからみで私もよく電話かけたことあるんでね。感謝しな。それと今のこと、約束するんだろうねえ」

「なにがだよ」

「すべてが片付いたら、あんたのほんとうのことを聞かせてもらえるんだろうねえ」

——そんなこと、なんであんたに言わなくちゃなんないんだよ！

心で毒づくものの、司は頷いた。

「約束するよ」

教えられた電話番号に司は、深呼吸を五回くらい繰り返した後、ゆっくりとボタンを押した。最初はなかなか繋がらなかったが、やっと天羽の母さんらしき人に挨拶をした時、ふと息を呑んだような気配を感じた。きっと天羽の奴、司の過去の悪事を知っていて、気持ち悪いと思ったに違いない。でも愛想良く繋いでくれた。

「どうしたんだよ、お前電話かけてくるなんてめずらしいなあ」

「頼みがあるんだ」

司は電話ボックスの外に三人くらい人が待っているのを、申しわけなく思いつつ手短かに告げた。

「西月さんとふたりっきりで話のできる場所、どこかないかなあ」

自分の中でも、他の人の前でも、司は彼女のことを「西月さん」と声に出して言ったことはなかった。口から響いた「にしづきさん」という言葉。発したとたん、泣きじゃくりつつ笑顔を浮かべようとしていた顔が浮かんできた。

「腹が据わったんだな、片岡」

天羽の口調はどこか、面白がっているようで、やっぱり真面目だった。

「そういうこと。西月さんのこと、よろしく頼む」

泣き顔しか思い浮かばないのが辛くて、司はなんどもその後、「西月さん」と繰り返した。

「いいか、片岡」

天羽は電話の向こうでくぐもった声を出した。

「俺が西月に放課後残れって話をしておく。明日は委員会もないし、修学旅行のしおり作りもだいたい一段落したってことだ。だから周りには誰もいないと思う」

「けど、もうばれてるんじゃ」

C組のうるさい女子に目をつけられているという話を天羽は知っているのだろうか。泉州さんの言っていたことが本当だとするならば。天羽はくくっと押し殺すように笑った。

「あたりまえだろ、うちの男子連中みな知ってるかもしんねえよ」

「みんなって、天羽、まさかばらしたんじゃ」

「ばらしてねえよ。ただ見張ってた奴がただけだ」

天羽はこともなしげに言う。

「ま、安心しろ。野郎どもは落ち着き払ったもんさ、片岡が男を見せるまではなってことで、だんまりを約束してくれたぜ」

知らないうちに話が進んでいる。寒気が走り、くしゃみが二回ほど飛び出した。

「おいおい大丈夫かよ、武者ぶるいか？とにかく俺が、他の奴等に邪魔させないように手を打っておく。いいか、片岡、お前はただ、あの女に思いの丈を思う存分告げればいい。まさか本当にお前がばらの花持って行くとは思ってなかった。修学旅行の時は同じ部屋の奴とその時の話を笑い話にできるくらいにしちまえよ、ちゃあんと手は打っておくからな」

——手なんてどう打つんだよ！

話が終わり、電話ボックスから出た司の目には、しわくちな夕陽が空いっぱい広がっているような気がした。隠しごとをめいっぱい広げて、明日。突きつけることになる。わが家、桂さん付きのマンションに帰ったのは六時をもう回っていた。いつものように、

「ただいま」

と、声を掛けてみた。返事はなかった。てっきり泉州さんを連れ込んでいると思ったのだが。桂さんの部屋、トイレ、風呂場を覗きこんだが誰もいなかった。気抜けして、ちょっとほっとした。

——あの人がいたら、疲れるし。いつぞやは大急ぎで隠したあの葉書を机の上に出した。藤棚を背に微笑む、着物姿のあの人を。

二年前のあの事件を引き起こすまで、司は西月小春という名の女子を意識したことはなかったような気がする。神乃世にいたような、男子とほとんどかわりないような子とはみな違う、青湯の女子はみななんか違う、そんなことを思った程度だ。どこがどう、というわけではない。ブレザーの着方ひとつにも、襟元のリボンの結び方も、みな独特なものがあつた。いいとか悪いとかは感じず、ただ、少し変、と思った程度だった。

司があ的事件後、天羽にひっぱられ、A組の男子たちに弾劾裁判へかけられた後のことだった。一言も発することのなかった三十分近く、腕時計の重さが痛くて、司はずっと真下を見おろしていた。

——なんであんなはずいませした？

——てか、犯人本当にお前なのか？

——お前が校長室から出てきたところを見たって奴がいるんだぞ。

——まさかもみ消したなんてこたあないよな。いくらお前のおやじさんが社長だったとしてもそれは違うと思うぞ。

——白か黒かはっきりしろよ。おい、黙ってないでなんとかいえよ。このままでいいのかよ。

あまりの男子連中ヒートアップ状態に、天羽が強引に裁判の終了、および判決を出した。うやむやなままに終わった。

自分に与えられた制裁はそれから二年間の無視。女子はもちろん男子もだった。そのくらいの制裁は受けて当然だった。理由はわからなくともしてかしてしまったことだけは事実。司は被告人として、目を閉じた。廊下に出て、何かを言おうとした天羽から離れようとしたとき、

「天羽くん、どうしたの」

後ろから追いかけてきた声に、天羽の足が止まった。つられて司もかたまった。

「いやあ、小春ちゃんこれはこれは」

いきなり口調を変えてへらへらと笑う。

「とーとつですがなんぞやと」

あの頃はやっていたCMの口まねだ。がたいのいい天羽が腰を屈めてお愛想いうと、なんだか奇妙なギャップが感じられて面白い。見ていた司にはそんなこと考える余裕なんてなかったはずなのに。変な記憶だけが残っている。

「小春ちゃん」と呼ばれたおかつ髪の子が、評議委員の西月さんだとは知っていた。甲高い声で明るくしゃべる……ちよっとうるさめの子、といった印象しかない。いや、なかった。

「さっき他の男子たちから聞いたけど、まさか天羽くん、変なことしてないよね」

「お、俺、めっぽうノーマルよん」

「そういう意味じゃなくって！」

あの時初めて、司は西月さんに呼びかけられた。

「片岡くんを裁判に掛けてるなんてこと、絶対ないよね！」

ぎらぎらしたまっすぐな瞳だった。

天羽は明らかに慌てていた。どこでどうばれたのかわからないといわんばかり、あちこち髪をかきむしり始めた。あれも今思えばテレビ番組のギャグだったのかもしれない。西月さんの目が司を向いていたのはほんのわずかで、すぐ天羽の方を向いた。

「裁判なんてフェアじゃないよ。評議の女子みな反対してるのよ。第一、片岡くんが犯人だっていう証拠なんてないのよ。犯人が生徒じゃないかもしれないってどうして思わないの！」



「小春ちゃん、これには地底うんマイルもの深いふっかーいわけがあるのさ。男のロマンで」  
「関係ない！今、天羽くんがしてるの、絶対おかしいよ。だって犯人片岡くんだって決まった訳でもないし、みんなに疑わせて、後で真犯人が出てきたらどうするのよ」

「あの、小春ちゃんごめんごめん、めんごめんご、どうか怒らんといてえなあ」

あの頃天羽はひたすら西月さんをはじめとする女子たちに関西系のギャグをかまし受けをねらっていた。まだ入学してから二ヶ月ちょっとしか経っていないのに、A組の男子人気トップは天羽で決まりになってしまった。司からすれば、周平よりは運動能力落ちるのではないかと感じる程度だった。そこらへんの距離の違いも、もしかしたらクラス二年間で一人も友達ができなかった原因かもしれない。なにせ、リーダーをなめきっていたのだから。

「お前、さっさと行け」

天羽に怒鳴られ、司はそのまま逃げた。西月さんがその時司を目で追ってくれたかどうかはわからない。それどころじゃなかった。

——片岡くん、おはよっ！

それからだ。西月さんが司に毎朝夕あいさつしてくれるようになったのは。

周りの女子たちからは、「小春ちゃんやめなよ、下着ドロだよあいつ」と止められた。

男子たちからは、「西月もものずきだねえ、あんなうそつき野郎かばうなんてな」とばかにされているのを聞いたことがあった。

でも二年間、今日まで彼女の態度が変わることはなかった。

たった一枚、青潟のクラスメートとして年賀状が届いていた時、むしようにいらいらして返事を出さなかった。女子にどう書けばいいかわからなかったからだ。挨拶してくる西月さんが不気味に感じたのも確かだった。周りから「下着ドロでもいいんだってさ、片岡も愛されてるねえ」とひゅーひゅー口笛吹かれたりもした。面と向かって答えられず、西月さんの顔を見ることもできず、司の方が逃げ出したりもした。

——僕になんかかまうなよ！

あっち行けよと思ったりもした。

一度、西月さんが風邪で学校を休んだことがあり、それこそ誰ともしゃべらず授業でも当てられず、一日を過ごしたことがあった。だんまりは慣れているはずなのにになにか、体の部品に油がささってないような気がしてならなかった。うちに帰り、ふとぐっちゃぐちゃになった机の上...勉強なんてしたことなかった.....を見おろした時、するすると動き出すものがあった。わからないけれども、唇から吐息が洩れるような感触だった。

西月さんのくれた年賀状を手にとり眺め、机の棚に置くようになったのはそれからだった。司は初めて手に取った時と同じふうに、そっと指で藤棚の上をなぞった。つるつるした表面が、西月さんの頬に変わるような気がした。そっと頬につけ、机に耳を押し当てた。部屋の中は闇だった。

眠りに入る瞬間を覚えていられないのと同じ感覚だ。西月さんのことを見つめてひとり自分が

変になるのを感じて戸惑うのも。

——なんで寝てるんだらう。

暗闇の中、机にうつぶせて目を閉じたところまでは覚えている。気がついたら、ベッドのブラインドに顔をくっつけて眠っていた。ということは、桂さんがベッドに寝せてくれたのだろうか。てっきり桂さんは泉州さんを連れ込んでいるのかと思っていた。いったいあのふたりどこにいたのだろうか。司はブラインドの隙間から真下を見おろした。そこには朝陽に当てられた銀色の建物群と、電線に留まるすずめたち。めったに見えない小さな海。司はしばらく覗きこんだのち、一気に窓脇のひもをひっぱった。しゃきっとこなごなに裁断してしまうような響きが部屋に満ちた。寝返りをうち、机の下に隠していた花瓶に視線を向けた。一輪もないけれど、つぼみのほらがありそうな気がした。

桂さんは昨日のことに全くふれず、さっぱりしたトーストとマヨネーズとアンチョビを重ね合わせて食べていた。

「司、腹空いてるだろ、はよ食え」

「昨日どこいたんだよ」

「彼女とデートとでも思っていたか？」

黙って肯定する。口いっばいに頬張ったまま桂さんは司にオレンジジュースを注いだ。

「お前駅前の本屋によったろ。車でふたりしっぽりと、お前の彼女について語り合っていたんだ」

——桂さん！ あの、彼女じゃないって！

「わりい。彼女候補ってところか。あのお嬢もなあ、腹座ってるよなあ。もしお前がけじめつけたらいくらでも協力してやるって胸をたたいていたぜ。どうやら司のこと、俺の次に好きらしいぜ」

一瞬だが、全身かみそりになったかと思った。切れそうだ。

——こっちからおことわりだよ！

教室に入った。司の到着を待つかのように、何人かの男子が振り返り、笑いともあざけりともつかない表情を見せた。

が、何も言わない。

女子たちの一部も……西月さんとは別のグループだが、悪い関係ではなさそうに見える……司を一瞥した後、ひそひそ声で何かを話していた。二年前、あの事件の前後からその雰囲気は全く変わっていなかった。前から三列目、廊下側から二列目の席にもう、ばらの花は見当たらなかった。おそらく西月さんが受取った後しかるべき場所に隠したのだろう。

——C組の女子に見破られているなんてこと、ないよな、絶対。

すでに泉州さんから入っている情報に、息がとまりそうになる。

まずそんなことはないだろう、と楽観的に思いたい自分と、いや泉州さんの言うことは間違っていないのではないかという予感と。司はまず、泉州さんの顔を探した。厳密にいうと「匂い」

を探したといった方が正しいかもしれない。なんとなく、一緒にいると周平や他の男子連中に似た雰囲気があって、むかつくけれども落ち着いてしまうのだ。あえてC組の女子たちがどういふ顔をしているかは見なかった。それ以前にC組の女子なんて誰が誰なんだかわからない。同じクラス的女子自体、西月さん以外分別つかない司にそれは求められないことだろう。自分の席に付いた後、司は全く予習していない英語のノートを広げ、教科書の英文を写し始めた。英語だけはひとなみの成績を取っている。

「片岡くん、おはよ！」

顔を上げると、いつも通りの西月さんが、後ろにあの泉州お嬢を従えて通り過ぎた。他の男子たちにも同じように、返事を待たずに声をかけ、最後に天羽くんへも温かい言い方で挨拶していた。もちろん無視されていた。

もちろんお嬢は何も言わずに一瞥し、視線だけで何かを伝えようとしていた。全くいつも通り、ばらの花のことなんて匂わせない。ほっぺたがふっくらしていて、おかつ髪に前髪をすくって束ね、横に流しているいつものスタイル。なんとなくだけど、あの年賀状にくらべて、身体の線が泉州さんに似てきているように見え、慌てて司は下を向いた。男子たちがどう言っているかわからないけれども、泉州さんの身体つきは、いや、確かに分かりやすくくびれているんだと昨日あらためて感じたのだから。きっと、「スタイルいい」方に入るのだろう。近づいている西月さんもきっと、そうに違いない。

「小春ちゃん、今日のリーダーの予習、やってきた？ 悪いけど写させてえ」

「いいよいよよ、私も他の人から貰ったものをそのまま写しているだけだもん」

天羽たちからするとこういう行為が、「いい子ぶるんじゃねえよ」ってところなのだろう。いつか、司が過去の事件をみんなの頭から消去して、生まれ変わることができたなら、たぶん自分もそういうだろうと思った。

天羽が立ち上がった。さっきまでメイン男子グループの中で、近江さんを交えて「修学旅行のしおり」について語っていた様子だったが、西月さんがすんなりと席についたとたん、他の連中には両手を合わせて何かを謝り、彼女の方へ向かった。女子連中が少し西月さんの席からはけて、一緒にいるのは泉州さんだけだった。この二人もないしょ話をしているようすだった。司は耳をそばだてた。

「なんなのさ、天羽」 太い迫力の問いに、天羽は無視したまま、西月さんに何かを言った。

司には聞き取れなかった。

「はあ？ あんたなんか用あるわけ？」

「あねごには関係ねえだろ、俺は、こちらに用事あるんだ」

もう一度何か言い返そうとした泉州さんを小首かしげて西月さんが制した。

「天羽くん、放課後に、ここで？」

「そういうこと。わかったな」

西月さんの声が、上ずっているように聞こえたのは自分だけかもしれない。司だけではなく、他の女子たちも、一部の男子たちも興味ぶかげに言葉なく様子をうかがい、最後に互いのグルー

プでまた話を始めた。一瞬だけ、電気のようなものが教室内に満ちたような気がした。

司の背中に、今まで感じたことのないぞわりとした空気がのっかった。

ただ、天羽が手を背中に乗せてくれただけのようなものだけれども。

——とうとう始まった。

教室の中だけで過ごすわけもいかず、いやおうなしにトイレに行ったり体育館に向かったり、他のクラス連中と顔を合わせる機会は多々あった。たぶんその中にC組の女子が混じっていたのだろう。すれ違いざま、唇をひんまげたような言い方で、

「ばらの花なんて、きざったらしいよねえ」

と、司にではなく隣の友だちらしき女子に話し掛けていった。

——やっぱりその通りなんだ。

泉州さんは嘘を言ったわけではなかったってことが証明された。

いつもの司だったら聞かない振りをするのだろう。でも、もう天羽によって賽は投げられてしまった。もう、放課後のA組の教室において、例のことをすべて告げなくてはならない。自分で決断したことだとはわかっているし、それは自分なりの覚悟だし。約束なんだから。頭の中ではちゃんと約束としてまとまっているのに、どうして今、こうやってがたがた震えているのだろう。

A組に戻り、朝よりは少し熱くなっているような男子女子の眼に、司はまたうなだれた。西月さんだけが全くいつも通り、けらけらと笑いつづけているのだけが救いだった。きっと、気付いていない。きっとそうだ。司は自分に言い聞かせ、時折髪のをかきむしった。桂さんに言われた通り、今日は下着も制服のシャツもみな、買ってきたばかりのものに替え、シャワーもあびて来た。面倒だけど、そういわれて素直に従ってしまう自分がばかみたいだけれども。たぶん、西月さんに近づいても今日の自分は臭くないだろう。すべて、今までやってしまったことを洗い流せないけれども、せめて、ほんの少しだけでも。

司のいる間はさすがに誰も何も言わないけれど、一度教室を出るといきなり盛り上がる一部のグループが見受けられた。何を言っているかなんて聞きたくない。きっと、天羽がなぜ西月さん呼び出したのか、そんなこと話しているに違いない。当の天羽はというと、あくびをしながら相変わらず近江さんにちょっかいを出していた。受け答えする近江さんは、めんどくさそうに片手の文庫本を置いて、天羽にとっては面白いらしい言葉を返していた。

——なんで天羽は僕なんかを応援しようと思ってくれるんだろう？

——泉州さんだって、どうしてだよ。

誰もみな、様子をうかがうようにはしているけれども、とりあえず本当のことは隠しておこうと思ってくれているらしい。女子たちも他クラスはともかくとしてうちのクラスみな、あまり不必要なことは言わないようにと心がけてくれている様子。司は泉州さんの方を見た。誰もいないようだったらこっちから声をかけてみたかった。でもタイミングがうまく合わなかった。今日はやたらと西月さんにばかり、くっついていて様子だった。西月さんもいつも通りの笑顔でみん

なに接していたけれど、時折天羽の方へ細い視線を投げていた。

「片岡、ちょっと来な」

昼休み、食器片付け当番だったこともあって司は、銀色の食器一セットをひとりでかかえて給食準備室へ向かっていたその途中だった。両手で金具の取っ手を握っているし、給食準備室の通りにはあまり人通りがない。

「来れないよ。給食室に置いてこなくちゃ」

「あっそか」

相変わらず泉州さんは、髪の毛洗っているのかどうか分からないくらい真っ白の肩をしていた。あまり女子の身だしなみについてうるさく言える自分ではないけれど、痒くないんだろうかと司は余計な心配をした。今日の自分がすっきりした格好だからなおさらなのかもしれない。清潔な方が、居心地いいのかもしれないのと思う。

「けさ、天羽が小春ちゃんに言ったこと、やはりあんたが仕組んだことなわけ」

「だから昨日言ったよ。僕はそれ終わるまで何も言えないって」

豚汁の甘い匂いでまたおなかが空きそうだった。司は小さくつぶやいた。

「わかってるって。ま、私も小春ちゃんには本当のこと言っていないから安心しな。けど、あんたもがんばんなよ」

「そんな、関係ないだろ。人のことなんてさ」

下着ドロ野郎にくっついていて、この人もあとで何言われるかわからないのに。司としては気を遣ってやったつもりだった。さっきなんて担任の狩野先生とすれ違い、泉州さんちゃんと一礼返したじゃないか。全く、意識なくこちらにからんでくる理由は、やはり、その、マヨネーズの入ったラーメンをすする楽しみゆえだろうか。

——そんなことだったらいくらでも、僕が取り持ってやるよ。

司は給食準備室の使用済み食器置き場に、思いっきり持ってきたものを置いた。給食バケツと一緒にがちゃがちゃと、先割れスプーンと銀色のさびた食器皿とがぶつかる音がした。手が軽くなったのでさっさと逃げようとしたら、やっぱり泉州さんに捕まった。

「僕なんかといたら嫌がられるだろ」

「別に、私はやじゃないけどね」

「それって変だよ」

「なんで変なのよ。面白い奴と話したいって思って、どっこがいけないのさ。あ、っそっか。あんた、昨日もとうとう言わなかったもんねえ。下着ドロのこと」

「こんなとこでわめくなよ！」

怒鳴れない内容なのが悔しくて司は廊下の窓側に張り付いた。

「あのさ、桂さんのこと前から知っているんだろ？ どうせ僕なんかにかからんでくるのってそういうことなんだろ？ だったらいいじゃないか。桂さんだって泉州さんのこと、嫌いじゃなさそうだしさ。けど、僕なんかと話して、あとで女子たちに嫌われたらどうするんだよ」

「いいじゃない。友だちは自分で選べるんだからそれを利用しなくちゃ嘘だよ。そりゃねあんた

。あんたをもし『男』として桂さんと比べてしまったとしたら、ちょっと考えるものはあるかもよ」

——何が「男」としてだよ。僕だってあんたなんか「女」として。

言いかけて司はふと黙った。何も動じていない泉州さんの顔には、何にも悪気がなさげに見えてしまった。

青潟に来て初めて……男子たちにも、もちろん女子たちにも……見たことのないものだった。

——誰かに、似てる。

「あんたねえ、前から思っていたんだけどさ、男子たちが片岡のことずいぶん見直しているの気付いてなかったよねえ。女子はまあ、あんたのしたことがずいぶんなもんだからあまりいい顔してないけどね。二年の時も、周りの奴らにさんざん面倒な手伝い押し付けられたり、荷物運びさせられたり、ま、私からしたらずいぶん割の合わない仕事させられてたじゃない。罪悪感あんのかどうかわかんないけど、あんたちゃーんとやってたじゃない」

——この人、何言ってるんだ？

よくわからない。司は動くのをやめて、まじまじと泉州さんの整った鼻に一点集中させた。

「なによりもあんたえらいよね。よく転校しなかったよねえ」

「それが」

思いっきりふてくされた格好で司はにらみ返した。

「あんたのうちだったら大抵、転校するかなにかするよね。よくドラマであるじゃん。家庭教師つけて、帝王学学んで、海外留学してってさ。あんた、親に頼めばそれくらいさせてもらえたんじゃないの」

「英語しゃべれないからできない」

転校しとけばよかったと、この場でかなり後悔した。

「じゃあなんで、あんた青大附中に残ったわけ？ 友だちも誰もいなくてさ、桂さんとラーメンすすっているしか楽しみがないのにさ。桂さん言ってたよ。青潟にもっと友だちができればいいのになあってさ。あんたが自分で行動するなりすれば、うちのクラスの男子限定だけどころでも仲間に入れてくれるのにねえ」

「うるさいって！ 僕のことそこまで知ってるんだったらさ、みんな知っているんだろ！」

通り過ぎる一年生たちを横目に、司は泉州さんの腕を窓辺に引き寄せた。陽射しが窓を照らして、外の生徒玄関および自転車置き場をまぶしく輝かせている。砂利路を蹴って逃げ出したかったけれどもそれができない。ならば言うしかない。

「僕が一年の時に男子たちから、制裁受けてるってことだってみんな知ってるんだろ！ 一切しゃべるなって言われてることくらい知ってるんだろ。それに」

咽が詰まりそうになった。こんなこと今までなかった。さっき食べた豚汁が胃にもたれたのだろうか。涙がまたにじみそうになった。なんでそんなに泉州さんは司に寄ってくるのかわからない。二年前、気が付いたら袋の中に下着らしき布を詰め込んで、ふらふら歩いていた自分。下着に手を伸ばした瞬間は全く覚えていない。でも、やらかしてしまったことだけは確かなのだ。もしかしたら泉州さんのブラジャーかパンツかわからないけど盗んでしまったかもしれない。そ

んな奴になんで、どうして、話し掛けられるのだろう。

「あんた、二年も経ってるんだよ。二年」

ぽん、と司の頭を撫でるしぐさをする泉州さん。ぎょっとして身を引いた。

「言っとくけど、女子は絶対許す気ないと思うよ。被害者に許して欲しいなんてこと、思っちゃだめだよ。ま、私は全然気にしないけどね。私の使用済みパンツが欲しかったら、買えって言っちゃうからねえ。どういうのに使うかわかんないけどさ」

「そんなの絶対買わないよ！」

細いウエストを自分でぽんぽん叩きながら泉州さんは笑った。

「けどさ、男子たちは違うみたいだよ。私も小春ちゃんから評議委員のこととか、クラスのこととかいろいろ聞いていたけどね、天羽たちは一生懸命片岡をもう一度、クラスの仲間として迎え入れたいなって思ってることは事実らしいんだよ。ほら、やっぱりやじゃん。卒業するまでクラスがしらけたままってのはさあ。小春ちゃんも天羽に振られて傷ついているけどでも、ちゃんと天羽がクラスできちんとやり遂げたいことくらいは応援したいって気持ちあるんだしさ。もし、小春ちゃんを片岡がね、本当に思ってくれているんだったら、まずはそこから妥協したらどうかなって私は思うわけよ。このまんま、だ一れも友だちいないで卒業するよか、なんぼかいいじゃん」

——そんなの余計なお世話だよ！

窓辺をにらみつけた。

「ほらほら、だからそういうところがあんた、みんなからめんこがられてるんだよ。まったく、片岡って金持ちのぽんぽんのくせに全然すれてないよねえ。天羽も言っていたらしいよ。小春ちゃんと仲良しだった頃にさ、『なんとかして片岡をもう一度みんなになじませるにはどうしたらいいか』ってさ。『あいつ馬鹿じゃないし、なんか血迷っただけなんだよなあ。だからなんとかしたいんだけどなあ』ってさ。だからそこんところもう少し考えてさ」

「関係ないだろ！」

「関係あるよ。だってあんたと友だちになんなかったら、今度は私が困るもん」

「はあ？」

いつもながら動じることのない泉州さんに、司は声を荒げた。

「これからさ、桂さんについてのプライベート情報をいろいろ欲しいなと思っているわけなのよ。会えば会うほど惚れそうなんだもの。その辺やっぱり、これから先相談に乗って欲しいなあ。いくら親友でも小春ちゃんとだったらだめなんだよねえ」

——とっくに惚れてるくせに。

無言で流す司へ、お構いなく語りかけてくる。

「小春ちゃんのことについては保証できないよ。今日あんたが何をやるかわかんないけどさ。でも、片岡、あんたがある程度覚悟して小春ちゃんにぶつかるんだったら、私と天羽および男子たちは全面的にバックアップするよ。女子に許してもらおうなんて思わないこと、それともう一度、言うべきことだけさっさと言っちゃうこと、そうすればあんたの性格さ、なんとかなるって。小春ちゃんに振られたって、お友達として私も残るしさ。あの桂さんもいることだしね！」

」

「だからなんで僕なんかにかまうんだよ！ 桂さんになにかしたいんだったら自分でやればいいだろ！」

「だって、私もわかるもんなあ。天羽たちが片岡のこと心配する気持ちってさ。ほんっと、あんた、おもしろいもん」

片手を振って、最後に振り返り際、思いっきり背中を殴られた。たわんで膝を付きそうになった。

「もちろん秘密厳守でいくから安心しな！」

口が開いたまま塞がらないとはこのことだ。鐘が鳴るまでの二分ほど、司は豚汁の匂う空気に包まれたまま泉州さんの言葉をひとつひとつ整理しようと試みた。考えてもみない言葉ばかりだった。信じがたい言い方ばかりだった。司には全く、想像なんてしてなかったことばかりだった。

——僕のこと好きだなんて、そんなわけないよ。

——天羽が僕のこと、もう一度仲間にいれようだなんて思ってるわけないよ。

——泉州さんも桂さんだけならともかく、なんで僕の方もいって言うんだらう。

教室に戻ると次の授業は数学。とおりに際、西月さんとふたりでおしゃべりしている泉州さんの声を耳にした。

「よし恵ちゃん！ さっきまでどこ行ってたのよ、ねえ、あそこの数学の問題のとこなんだけど教えてほしかったのに」

「はいな。まかせときな」

あねご肌の泉州さんは、さっきまでさんざん司をいじって遊んでいたような顔なんて一切見せず、西月さんとふたりノートを開いていた。「秘密厳守」はほんとならしい。男子たちも女子たちも、西月さん以外の人には一切司のことを隠したまま、放課後に突入させようとしているらしい。天羽と目が合った。

——天羽、本当に、ほんとなのか？

親指を立てて、司にだけ分かるようににっこした笑みを返された。

「健闘を祈る、グットラック」

——やっぱり本当なのかもしれない。

司は小さく頷きを返した後、今度は人目はばからず西月さんの方へ視線を向けた。からかう声など、一切返ってこなかった。



どうやら気付かずにいるのは西月さんだけらしい。天羽がそんなことを軽蔑しきった顔で言っていた。

「はああ、全然気付いてねえなあ。予想以上だわあ」

——天羽は段取り段取りって言っているけど、本当に大丈夫なのかな。

この日だけは桂さんに頼んで、ばらの花一輪を例の花屋さんにて買って来てもらった。終業のチャイムが鳴ると同時に司はいつものように砂利路へ駆け出した。迎えには来なくてもいい、その代わりにばらの花だけ持ってきてもらう。受取ったらめいっぱい走って後、教室に戻る。司は話していないのだが、泉州さんが逐一予定を立ててくれていたらしい。

「お嬢にはまたラーメンおごらないとなあ」

ひとりごちたのち、にやっと笑いかけた。

「司、気合入れていけよ！」

余計なことは言わなかった。これから会社の用事があるのだろうか。桂さんの格好は明るい臙脂の背広姿だった。似合わない。

机を下げて教室を出た時も西月さんは笑顔のまま、みなと挨拶を交わしていた。放課後の待ち合わせなんてないかのようだった。

「あれ、小春ちゃん、今日一緒に帰らないの？」

「うん、ちょっと狩野先生に呼ばれてるから。また明日ね！」

司の方なんて見ていない。が、他の連中はさりげなく司、および天羽の方を意味ありげに視線投げていく。

「ほら、くみ恵ちゃん、私、杉本さんのこととか、いろいろあるじゃない？ だから今日は残ってくね」

「じゃあねえ」

からくりご存知の泉州お嬢も、しっかり司に目配せして去っていく。

「これだけ騒ぎになったら、そりゃあばれねえわけねえなあと俺も心配していたんだけどさ」

ちらっと様子をチェックした後、天羽は司にさりげなく、

「とにかくちょっとだけ来い」

とささやき、近江さんに

「じゃあ俺先に評議のことで行ってるよん、待っててえな」

と大声で言っただけだ。

——どこに行けばいいんだよ。

とにかく天羽をおっかければいいんだろう。しかたなく司はかばんをぶら下げて、できるだけさりげなく教室から出ることにした。もともと司が人と挨拶して教室を出るなんてことはめったにないことだから、別に反応もなにもあるわけじゃない。けど今日に限っては空気が妙に静まっていたような気がした。気のせいだろう。天羽が階段を降りて玄関へ向かった。三メートルだ

け離れて追いかけた。

「下手な尾行だなあ。よっし、こっちさ来い」

下級生たちが通り過ぎていくのを横目に、天羽はいきなり職員室前で立ち止まった。放課後となると戻ってくる先生たちが、時間差でうろうろしている。狩野先生もちらっとふたりの方を流し目して職員室の中へ。白衣が目立った。長い影がふたりぶん伸びて、司は足をもじもじさせた。

「職員室前ってのはな、結構使える場所なんだぜ。うるせえやつらもここではちょっかい出してこねえし、先生どもはあんまし俺たちにまとわりついてこねえし、なによりも女子がひっかかってこねえ。これは大きいぞ」

——そんなこと思うの天羽だけだろ。

あまりいい思い出が残っていない司としては、一切無視するしかなかった。苦笑して天羽は、司の肩を三回軽く叩いた。

「わりいわりい。そうだな、お前はな。とにかく今日お前のやることを済ませたら、あとは明日のロングホームルームの時までにもいっこ、覚悟を決めてこい。あ、片岡、お前もしかしてかなり緊張してる？ ちびりそうか？ 先にしょんべんしてきたほうよくねえか？」

——余計なお世話だ！

でも、ちゃんと教室に戻る前には、トイレに寄っていくつもりではいる。もちろんだ。

「そっかそっか、片岡、とにかくだ。あとは俺がうまく段取り組んでおいたから、向こうが教室にいる時にこっそりふたりっきりになるように持ってってやる。ま、さっきの様子だとあいつも全然気付いてねえみたいだし、やっぱり俺がなにかいちもつあるんでないかとか思っているはずだろう。変なこと、言うかも知れねえ。でも、俺もちゃんと正真正銘の理由付けてことしとくから、その辺は心配しないでいいぞ。とにかくだ、片岡」

半分以上天羽の言葉は理解不能だった。ひとり、芝居がかった言い方で司の肩を抱くようにして語りつづける天羽。なんだろう。どこかの名探偵が犯人を前に堂々と推理結果を語っているかのようだった。

「なあに、目が点になってるんだよ。まったく片岡ぼけてるんだからなあ」

耳を痛くない程度に引っ張られた。失礼だ。

「とにかくだ、教室に誰もいなくなったところで、お前堂々と入っていけよ。運悪く誰かがいたら、忘れ物を捜しているような顔をしてふららふららとしてればいい。今日は委員会関係も、まあ修学旅行前ってこともあってだいぶ落ち着いてるはずだしな。そしたら、お待ちかねお前の女神様がやってくる。最初は俺を探しにきたような顔をするだろうが、その時にちゃんと言うんだぞ。『呼んだのは、俺だ』ってな。あとは逃げられないように俺がうまくやとく。ふたりっきりになったところで、思いのたけを激しく語っちまえばいい。言いたいことだけは、あるだろ、片岡」

頷いたらからかわれるのが目に見えているので、あえて知らん振りをした。天羽は気を悪くしたような顔をしなかった。むしろ上機嫌でにやにやと、

「ま、やってみねえとこの辺の呼吸はわからねえな。とにもかくにも、まずはお前、早くばら

の花、買ってこい。西月には、教室に誰もいなくなったら行くからと言ってあるから、その辺は大丈夫だ。もうそろそろ掃除も終わって落ち着いたころだろうしな。俺は少し評議のかみで狩野先生のところにいってくるから、その間にちゃんと気合入れとけ。いいな」

最後に背中をばしりとやられた後、天羽はさっさと職員室へ入っていった。

司もまずは、トイレに駆け込むことにした。さっきから近くてならなかったのだ。緊張の現れとは思いたくないけれど、天羽に言わせてらきっとそうなんだろう。

西月さんは天羽が呼び出したと思い込んでいる。実際その通りなのだけれども、きっと目的は違うことなんじゃないかと思っているだろう。泉州さんが何も話していないということはきっと、今この一瞬も疑っていなはずだろう。西月さんは今きっと、天羽がやってきて、ばらの花が自分の仕業なのだと言ってくれると思込んでいるだろう。

——あいつ俺だと思込んでやがる。

とことん顔をしかめてつぶやいていた天羽の表情は、ほんととことん近づいてほしくないといわんばかりのものだった。

天羽が言うには、実際ばらを持って一週間通い詰めた奴が司であることを暴露し、あとはおふたりで仲良くどうぞ、という乗りでまとめようとしているらしい。西月さんがどれだけショックを受けるかはわからない。でも、あとは司がなんとか自分の思いのたけを連ねて、言いたいことを伝えればいい。それはもともとと覚悟していたことだ。周平との約束でもある。

——けど、西月さんはそんなこと関係ないよな。

泉州さんも天羽も、なぜか司を応援してくれている。もちろん泉州さんは自分の恋成就のために司を利用しているのかもしれないし……いや別に、桂さんとだったら司も応援してやりたいなと思う……、天羽はそりゃあもう露骨に、「うるさく付きまってくる元彼女」を捨てたいのだろう。それも、できるだけ傷つけない形で、自分を悪者にしてという形で。司も、もし何事もない心のもとだったら、全身全霊かけて西月さんを口説こうと思うだろう。あの沁みさえなければ。

司は頭をぶんぶんと振った。

——好きになってくれるなんて、思っちゃだめだ！

——そんなの、ありっこないよ。ないって。

最初から悪い想像をしておけば、少しは気持ちも楽になりそう。西月さんが「ありがとう片岡くん、私、嬉しかったのよ」と微笑んでくれるところを期待していたのかもしれない。そんなわけがない。今一瞬の間にも、西月さんは天羽から新しく告白されることを期待しているのかもしれないのだから。それが裏切られて、悲しく思わないわけがない。よりによってあの下着ドロ野郎から……自分に貼り付けられたレッテルは一生はがれることがないだろう。はがしてものりがしつこく張り付いたままに違いない。なによりも一番可能性が高いのは、「あんたみたいな下着ドロ野郎なんか、近づいてこないでよ！ 最低！ 不潔！」と罵られてほっぺたひっぱたかれて、泣きながら去っていくところ。その場面を想像してはいけないと思いつつも思い浮かべてしまう。ひとり取り残される自分と、しおれたばらの花と。

——わかってるよ、わかってるよ。けどどうしたらいいんだよ。

司はかばんに潜めたばらの花がつぶれないように、そっと取り出した。他のクラスの女子が降りてきたのでブレザーの中にいったん隠し、そのまま駆け上がった。どういう噂話されているのかは、聞かないふりをした。

三年A組の教室に駆け上がってみると、掃除当番の連中と近江さん、また一部の男子たちがそこそと話をしているのが見えた。近江さんはやはりいつものように、文庫本を片手になにやらしゃべりまくっている。耳をすませてみると、どうやらテレビ演芸番組の話らしい。天羽もそうだけど、近江さんも漫才とか落語とか、ああいう日本伝統演芸が大好きらしい。西月さんもそういうの嫌いではないんだろう。よく父さんの会社のパーティーで落語家さんとか漫才師さんがくるから、もし好きだったら父さんに紹介してもらってもいいのに。思いかけて頭を振った。こういうこと周平に言ったらきっと張り倒される。そういうえさで女子を釣るなんて最低野郎だと嫌われるだろう。

回れ右して今度はD組の方へ向かった。扉は閉まっているが、教室からは男女入り交じった嬌声が聞こえる。廊下には髪の毛を一本に束ねた、胸の大きい女子が黙って立ち尽くしていた。顔の形はよくわからないけれども果物のメロンをむりやりブレザーの中にふたつ押し込んだような丸みが不気味だった。——まだかなあ。あまりうろうろするのも怪しまれそうだった。例のメロン二個を胸に押し込んだような女子が、奇妙な表情で司を見据えた。奇妙、としか言いようがない。慌てて司はばらの花をブレザーの脇あたりに隠した。

——早く帰ってくれないかなあ。

D組側の手すりによりかかると、司はかばんにもう一度ばらの花をしまいこんだ。かばんを廊下においたまま、腹を手すりに押し付ける形ですすっと滑り降りてみた。小学校の時良くやって怒られた遊びだった。誰もいないからできたことだ。今だとバランスを崩して三階から一階まで落っこちそうだった。途中でやめて階段を昇り直すと、すべて見ていたらしいメロン胸の女子が無表情に司の挙動を見据えていた。やっぱり、なんか怖かった。

しばらく手持ちぶたさでうろうろしていると、ようやくA組の扉に動きが見えた。男子連中がしゃべりながら教室を出て行った。A組側の階段から降りていくと同時に、何か面白いことを言った奴がいたのか、がはは笑いをしているのが聞こえた。

ひとまずほっとして司はA組の教室前に立った。何はともあれ誰もいないはずだ。さっきみんな出て行ったんだから。

まだじいっと見据えている胸の大きい女子を無視して、まず司は窓ガラスに向かった。さっき掃除当番の誰かがきれいに磨き上げたのだろうか、髪型の乱れくらいは直せそうだ。軽く髪の毛をかき回した。次にシャツの襟とブレザーの埃を払った。さっき砂利道で砂埃を被ったような気がする。司としてはたいして気にはならないのだけれども、西月さんがどう思うかわからない。女子は基本として清潔好きだと聞いている。泉州お嬢のように、肩にはふけの嵐という状態の人もないわけではないが、西月さんはやはりそういう人だろう。

——ふけ、落ちてないかな。

最後に肩を払った。たぶん大丈夫だろう。実は昨日桂さんがつかっているオーデコロンをかばんに忍ばせ、さっきトイレで制服に振りかけておいたのだ。どのくらい使えばいいかなんてわからないけれど、やったらみかん臭い。でもこういうのもたしなみらしい。司のできる限りの準備は終わった。扉に手をかけて、まずは握った。ゆっくり開けた。

——やばい、誰かいた！

最悪もいいとこだ。

さくさくとした頭の女子が窓際の机の上に腰掛け、上目遣いに司の方を見た。慌てて扉を閉めようとし、なにげなく振り返るとまたメロン胸のあの女子がじとっと見据えている。逃げ場なし。しかたなく司は呼吸を整えて足を踏み入れた。女子は司なんてどうでもいいという顔ですぐに窓の外を眺めていた。「何しに来たの」でも「こんにちは」でもない、じゃまなものが来たなという程度の感じでしかない様子だった。たわし頭の女子、近江さんはポケットから文庫本らしきものを取り出し、適当に開いて目を落とした。

自分の席に行くにはやはり抵抗がある。司はとりあえず、一番前の椅子を引いて座った。男子の席かどうかだけは確かめた。女子の席なんて選んだら、見られた時に「やーい下着ドロ菌がついた！」などといわれる可能性大だからだ。足下に血を薄めたような光が注いでいた。近江さんがさっき見つめていた空を司も追った。赤と青が混ざったような、神乃世で良く見るような夏の空だった。小学校時代周平と一緒に野球していた時、こんな空していた。気を紛らわせたくてそう思った。

どのくらい時間が経ったのかわからない。司がずっと膝に両こぶしをこしらえて、うつむいている間。さっさと近江さんが帰ってくればいいのに全く動きやしなかった。振り返ると何を言われるか怖いからそのままいた。司はそっと教室で黙って座っていた。廊下に足音が響くたび、笑い声が聞こえるたび司は身を硬くして耳をそばだてた。何度か繰り返された後、A組側の階段をばたばたと音ならして駆け上がる足音が響いた。

——天羽だ。

D組寄りの扉が思いっきり開いた。空気が揺れた。ほっと息を吐いた。

「おーまったせいたしやした！ 近江ちゃん、もしかして待ちくたびれてた？」

「別に」

一言、めんどくさそうに近江さんが答えた。はたと合点がいった。どうやら天羽は教室で近江さんと待ち合わせしていたらしい。

——なにが段取りだよ。そんな、こんなだったら、西月さん入ってこれないじゃないかよ。

——さっさと帰ればいいんだ！

ずっとうつむいていた時は、このまま何も起こらなければいいなんて真剣に思っていたくせにだ。全く自分の性格はいいかげんだ。司は天羽の足音が自分の後ろに近づいてくるのを感じて、さらに身をこわばらせた。歩きながら近江さん相手に軽口を叩き合っている天羽の様子。そこには動揺とかそういうものはなかった。

「近江ちゃん、花好き？」

「嫌いじゃないわよ。私は百合が一番」

「あぶねえこと言うよなあ。せめてもっと激しく燃えろグラジオラスとか」

「なんでグラジオラスが激しいのよ」

よくわからない言葉ばかり、天羽と近江さんは使っている。このふたり、クラスでも三年になってからいつもそうだった。西月さんと仲の良かった頃と同じような調子だった。あの頃は聞いてもそれほど腹が立ったりしなかったのだけど、今の自分にはふたりの交わす言葉がちくちく刺さり、泣きたくさせた。

足音が止まった。肩に置かれた手が熱かった。「じゃあ、がんばれよ。待ち人、そろそろ来るぜ」

——近江さん見てるよ。

やはり近江さんは天羽の彼女なのだから、それなりに司のことも聞かされているのかもしれない。その辺はあえてがまんすることにした。司だって自分の思いとか今日の計画とかを桂さんや泉州さんにべらべらしゃべっているのだから。そうすることによって今日のチャンスが得られたのだから。これから西月さんが来た時、自分はどうやって本当のことを話せばいいのだろう。舌がもつれて思いっきり噛みそうだ。けれど、天羽と近江さんがいるところで西月さんが傷つくところを見るよりは、はるかにましなような気がした。

——天羽、感謝するよ。

——周平、いよいよなんだよな。

神乃世で「親友の証」を求めたあいつに、司は身動きせぬまま想いを投げかけた。

——いよいよ、一人なんだ。

後ろ側の扉が開いて出て行こうとしたとたん、今度は天羽が息を呑む気配を感じた。はあっと息のようなものがどこかから聞こえている。司は振り返りたいのを必死にこらえた。心臓がちぎれそうだ。なんでかわからないけれど猛烈にトイレに行きたくなってしまった。握りこぶしをめいっぱい力入れ、足を震わせていた。

「ほら、待ってるぜ。ばらの相手が」

——ばらの相手、って僕のこと？

恐る恐る司は振り返った。扉に入る直前のところで、前髪をすくった格好の西月さんが司と天羽を交互に眺めていた。天羽は真っ正面から西月さんの顔を見据え、背に従えている近江さんの方へ片手をひらひらと後ろ側へ延ばしていた。近江さんとはいうと、あきれはてたといわんばかりの様子で、天羽の手を無視しあくびをちいさくした。

西月さんはなんども繰り返し司と天羽を眺めなおした後、最後に司へ向かって、小首をかしげた。細い声で尋ねた。

「私を呼び出したの、天羽くんじゃなかったの？」

——やっぱり言われた。

答えが見つからない。西月さんは近江さんにも何かを訴えたさそうなそぶりをした。口びるを

開いたままななどか呼んだ。でも近江さんは一切相手にしなかった。天羽も最初はかなり驚いていたようすだったけれども、もういつも通り冷静に戻っていた。

「天羽くん、どういうこと。説明して」

怒っていない。泣いてもいない。ただ、か弱かった。司は両手を爪が食い込むくらい握り締め続けた。ただ西月さんの視線だけは受け止め続けた。全校集会で途中具合悪くなって抜け出したいのに抜け出せない奴のようだった。近江さんはあきれたふうに、「ほう」とため息をついた。ひとにらみきかせた。天羽は一步あとずさりし、近江さんへ困った風と同じく「ほう」とため息を吐いた。うなだれると同時に司へ顎で頷いた。合図だろうか。司は動かず、黙って西月さんだけを見つめることにした。もう逃げられないのだったら、何したって、何言ったって同じだ。もう西月さんが司のことを想ってくれる可能性はゼロだとわかったのだから。しょうがない。司は周平と約束したことを果たすだけだ。それ以上のことを望んではならない。

——僕は、下着ドロなんだ。永遠に、そうなんだ。

それならせめて、真っ正面から見つめることだけ、させてほしかった。

「まあ、入れ。それからだ」

西月さんは一步入った。同時に司はかばんを開け、かろうじてつぶさないですんだばらの花一輪を取り出した。西月さんの机は司の座っている席の真後ろだった。いつものように斜めにして置いた。西月さんはそれを、何も言わずに見つめた。視線が苦しくて、とうとう司はうつむき背を向けた。身体が汗ばんできて、とろけてしまいそうだった。

「片岡、くん？」

いつもの「片岡くん、おはよ！」ではない。細く、泣きそうな声だった。いつも天羽に見せないところで、女子同士で泣いている時の声と同じだった。耳にするたび、どうしようもなく苦しくてみじめになる、あの時のものと同じだ。西月さんはもう一度、繰り返した。

「まさか、これ、一週間、ずっと片岡くん、だったの？」

——答えなくちゃ、だめなんだ。そうだろ、周平。

足場がぐらついているようだった。司は足がこのままなくなってしまうんじゃないかと思うくらいがたがた震えているのが自分でもわかった。雲の上で足元がすとんと抜けそうだったら、こんな感じなんじゃないだろうか。みっともなくらいからだが震えているのが丸見えなんじゃないだろうか。顔も、きっと信じられないくらい真っ赤なんじゃないだろうか。ばらの花と同じくらい、きっとそうだ。

西月さんは見ていた。隣りにいる天羽ではなく、司だけをばらごしに見つめていた。

決して軽蔑するような目ではなかったのが救いだった。ただ、「どうして？」と尋ねるようなまなざしに、言葉が見つからない。泣いていなかったからよかった、そんなことを思った。もしここで悲鳴をあげられたら、司はきっと窓から飛び降りて逃げ出してしまっただろう。年賀状の写真でしか正面で見つめたことのなかった彼女が、今ばらの花を境にして近づいている。

——よかった、ほんとに、よかった。

司は西月さんの机側に立った。そつとばらの花をくるんだアルミホイル部分を握り締めた。さ

すがにここで、いつものように、「ありがとう」とは言えなかった。ただ指先に想いをめいっぱいこめた。刺が食い込んでしまいそうなくらい握り締めた。赤い光はばらの花びらをとろかしたようだった。頬が染まり、ただじっと司だけを見つめているあの人へ、一步一步近づいていった。

隣りで天羽や近江さんが何を想っているかなんてどうでもよかった。

たとえこの場で西月さんが司を張り倒したとしても、それでもよかった。

後ろでただ立ちすくみ司が近づくのをそのままに、待っていてくれる大好きな人。

——警察に捕まったっていい。嫌われたっていい。もう退学になったっていい。

今まで感じたことのないもの。教室の窓ガラスいっぱい照りつける「神乃世発」の夕暮れ。

周平の声「親友の証を見せろよ」。

いろんなものが交じり合い、頬を真っ赤にした西月さん一点に集まった。声がうまく出ない。

「ほら、言いたかったんだろ。お前の、『女神さま』にさ」

——余計なことというなよ！

めまいがした。天羽をちらっとにらみ、もう一度司はうつむいた。

——ありがとう。僕を救ってくれて、ありがとう。

「これ、あげたかったんだ。受け取ってほしいんだ」

かすかに西月さんの髪が横に揺れた。司は続け、そっとばらを差し出した。

「盗んだんじゃない、自分で買ったものだから」

「そ、そんなんじゃないの。私、これ、受け取れないよ。そんな高価なもの。私、ばら、大好きよ。でもね」

「聞いた。ばらの花、毎日、プレゼントしてほしいって」

なにか付け加えないとまずい、とっさに言い足した。

「天羽から聞いた」

西月さんは息を呑んだ。かすかに震えているようだった。もっと、違う言い方すればよかったかもしれない。そこまで頭の回らなかった自分のアホ加減を呪いつつ、司はもう一度ばらの花の柄を握り締めた。わけがわからないなりに、全身が激しく燃え盛っていた。目の前に広がる夕陽の滴りで、

——もう、この瞬間に死んだっていい。

天羽のせきばらいで、司はすぐに生き返った。西月さんも司からすぐに目をそらした。

「わりい、つまりだなあ、そういうわけなんだ」

もう見てくれない。司がずっと西月さんだけを追いかけて近づこうとするけれども、そうさせないバリアが張られているようだった。細い、か弱い声だった。片面だけえくぼをこしらえ、早口にまくし立てようとしている。

「そういうわけってどういうことなの。私、わからない。だって、なんで片岡くんがそんなことしなくちゃいけないの？」

もう一度司を見た。笑っているのか怒っているのかわからない。



「ね、誰かに頼まれたの？ 私、怒らないから」

ゆっくりと、いつもの評議委員口調だった。今だったら司が「ごめん、冗談だったんだ」と言えば、丸く納まるだろう。そう言ってほしいんだろう。でも司には一切嘘を言うことなんてできなかった。

——そうしたいだけなんだ。

言葉にしようとしても、舌が固まって出てこなかった。

——お願い、嘘だって言ってよ！

叫んでいるように見えた。天羽がもう一度、のほほんとした感じで助け舟を出してくれた。

「素直に受け止めるよ。お前、前から片岡に優しくしてやってただろ？」

「優しくって」

「西月、受け止めてやれや」

どこか天羽の口調は、以前「小春ちゃん小春ちゃん」と優しく語りかけていた頃のものに似ていた。その調子そのまま、司ににやりと笑って見せた。

「ほら片岡、お前も西月のことどうして好きか、言ってやれよ。一年の、あの時からだろ？ 男子からもみなばればれだったんだって、わかってるだろ。この機会だ。誰もライバルいないんだ。安心して言っちゃまえ」

ゆっくり今度は近江さんへ片手を差し出し、数回振るようなしぐさをした。近江さんはうんざりしきった顔で天井を眺めている。天羽がずっと腕、そして指を触れようとしているのを、特段振り払うでもなく面倒くさそうに唇を尖らせていた。

「片岡はずっと、お前に惚れてたんだ。俺なんかよりも何千倍もな」

「そんな勝手に決め付けないでよ。片岡くんだって迷惑するよ。私なんかに」

——そんなことない！ 僕はそんなことないよ！

舌の奥がとろっと溶けた。言葉がゼリーみたいに流れてきた。叫んでしまった。

「迷惑なんか、しない。天羽の言う通り」

「片岡くん、なんでなの、だって私、片岡くんになにもしてないよ？」

天羽が指を鳴らした。もう止まらなかった。もう自分の気持ちが考える前にどろどろっと流れてくるのを押えられなかった。目の前でまだ赤く、揺らめいている夕陽の中、司は周平との約束の言葉を口にした。

「西月さんがいたから、僕はこの学校にいられた」

気のせいだろうか。誰かが司の頬をさらっと撫でたような感覚が残った。かすかな風のような感じだった。

震える足と手をそっと包んでくれた。そんなふうに。

震えが止まった。ずっと手が西月さんの方へ、正面へ出た。握り締めたばらの花はちゃんと、だいたい色に染まった西月さんの髪と頬の前にあった。

「ちゃんと俺のできることを、するから」

言うつもりがなかった言葉が、自然とよじ登ってきた。

「お願いします。付き合ってください」

藤棚の垂れ下がる花のように、司は頭を下げた。

側に近づいてくる、温かい気配がする。自分の振りかけてきたオーデコロンで、側にいるはずの西月さんの、甘い薫りが消えてしまったようだ。また震えてくるのは風の魔法が消えてしまったからだろうか。司は身動きしなかった。

「私、クラスの評議として当然のことしただけだよ。片岡くん、濡れ衣着せられただけなのに、そんなこと言われたって困るからって。それだけなのよ。そんな大げさに受け取らなくたって、いいじゃない」

優しい声だった。いつも「片岡くん、おはよっ！」と呼びかけてくれたものと同じだった。

「誰にそんなこと吹き込まれたの？ 私、ちゃんと文句いうから。片岡くん、今のことみんな嘘でしょう。嘘と言ってもいいのよ」

——違う、違うってば。文句なんていいんだって。僕はただ。

いきなりずきっと咽が痛くなった。横目で天羽の方を見た。視線がかち合った。すっかり落ち着き払った天羽は司にだけわかるように、小さく目のふちに笑いしわをこしらえてみせた。

——本当のことを言いたかっただけだよ。天羽になれなくてごめん。けど、これだけはいいたかったんだ。

「本当。今のこと、嘘はひとつもない」

——ありがとう、それだけだよ。

言葉は返ってこなかった。西月さんは司の顔を黙って見つめた。さっきとは違って、感情の糸がみなすぱっと切られたようなそんな表情だった。暗さがさらに西月さんの瞳を潤ませているように見えた。戸口で天羽と近江さんがいきなり身を寄せ合い、

「近江ちゃんけっこう大胆？」

「別に、それより早く帰ろうよ」

肩をつつきあい、挨拶もせず教室から出て行くのが見えた。天羽だけがもう一度、言葉にならない「グットラック」を、親指立てて合図していった。まさしく司を応援しているとしたか思えない。

教室の窓べから流れる青と赤の絡み合った光に、西月さんが包まれていた。髪の毛が赤茶色に照り付けられていた。手を伸ばしたいのをこらえつつ、司はもう一度言葉を捜した。とうとうふたりっきりだった。他の女子たちだったら「片岡みたいな変態と同じ部屋にいるなんていや！」とか言って逃げ出すだろうに。一言も西月さんはその類のことを言わなかった。

「片岡くん」

一度、天羽たちが出て行った扉をそっと眺め、西月さんは静かに尋ね返した。

「今のこと、天羽くんが全部、仕切ってくれたのね」

責める口調とは違った。少し安堵しながら司はうつむいた。

「花も、天羽くんから持っていくようになって言われたのね」

「違う！」

この辺誤解されないようにしなくちゃと、司は強く否定した。

「天羽はただ、あの、ばらの花が好きだけど買ってあげられないって言ってたから、それで」

——だってばらの花が好きだって言ってたし。

「私が？ ばらの花？」

「うん、ばらの花を百本毎日、小野小町みたいに持って行ってあげればって。だからあの、天羽は悪くないんだ。僕がやりたいって言うただけだから」

そっと視線が司の手元に移った。ばらの花はちょうど花びらが一杯に開いて、今にもこぼれそうだった。このままだと天羽が嫌がらせをしたんだと思われるかもしれない。それはまずい、司なりに考えた。

「ほんとは、ビーズの指輪、作りたかったけど僕、指が不器用でぜんぶ、材料無くしてしまったんだ。だから」

「ビーズの指輪？」

——だって、ビーズの指輪がほしかったって言ってたし。

西月さんは司とばらの花を何度も見比べた。頬をこすり、またばらの花に目を落とした。

「ほんとは天羽がしてあげたかったことをしてあげられなかったから、だから、僕ができればって思ったんだ。だって僕は」

言葉が自分でも支離滅裂だとわかっていた。でも、これ以上天羽を悪役にするわけにはいかなかった。たぶん天羽は西月さんのことが好きではないのだろう。だからわざと振るようなことをしたのだろう。でも、最後の最後まで西月さんのことを傷つけないと思っていたに違いない。だから、司にチャンスくれたのだろう。そうとしか考えられない。決して想いが……下着ドロのくせに恐れ多い望みまで口走ってしまった自分……叶うはずもないとわかっているけれど、せめて茜色に染まる西月さんの姿をプレゼントしてくれた天羽には迷惑をかけたくなかった。天羽が手伝ってくれなかったら、この一時も、こうやってふたりで一緒に空気を吸うことすら許されなかったのかもしれない。

——僕はこれで、十分過ぎるくらい十分なんだ。だから。

本当は手を伸ばして、もっと触れるくらい近づきたい。

泣いてる時には一緒にいたい。

あの頃の天羽と西月さんのように、一緒に話をしたい。

でもそれは、自分の罪を思えば望めないことだ。

夢見ることすら許されないことだ。

だけど天羽は、ばらの花一輪という魔法でもって、西月さんに近づくことを許してくれた。

「西月さん、僕は」

また表情を無くした西月さんへ、司は咽の奥から言葉をしぼり出した。

「西月さんのおかげで、僕は、死なないですんだんだ。ありがとうって、あの、それだけ」

あとは言葉にならなかった。もう正面から西月さんを見つめることはできなかった。自分の眼からまた、ひとたれ、ふたたれ、熱いものが流れてくるのをとめられず、司は片手で何度も頬をこすった。もう二度と、手の届かない相手だからこそ、今この時だけは自分もだいたい色に染まっていた。西月さんと一緒にくるんでほしかった。

手元がいきなり引っ張られるような感覚に、思わず司は顔を上げた。みっともない、涙でずたずたの顔を見られてしまって慌てて髪の毛を振った。もう床いっぱい光も消えていた。あとはわずかにうすい藍色の空が広がっているだけだった。西月さんの手が司の持っているばらの花をつかんだからだった。めまいがして、司はふら付いた。あやうく机の角に尻をぶつけそうになった。

「この花、天羽くんが持っていけて、言ってくれたのね」

「うん」

しゃくりあげながら司は頷いた。

「それで、片岡くんが一週間、私のために持ってきてくれたのね」

「うん」

「そうなの」

ささやくような、やわらかい響きだった。クラスでは決して聞くことのないような、たんたんとした言葉だった。こんな西月さんを見られるのも、今だけだろう。受けとって、西月さんは自分の口元にばらの花を当てるようなしぐさをした。

「ありがとう。もういいよ」

もう一度西月さんは微笑んだ。ふたりっきりになったばかりの時とは違って、そのまま普段の笑顔につながりそうな表情だった。ただ、闇の中で見えなかったのかもしれないけれども、ほっぺたのえくぼを発見することはできなかった。

「じゃあ、また明日ね。ありがとう」

肩がかすかに震えているように見えた。司はそのまま動かず、西月さんが扉に手をかけるのを見送った。黒い影に戻り、廊下へ去っていった西月さんを誰かが待っていたのだろう。

「西月先輩、どうしたんですか？ そのばら」

と平べったい女子の声が聞こえてきた。

「きれいでしょう」とだけ、西月さんの返事を聞き取ることができた。

——もう、思い残すことなんてない。もう、ひとりでいい。もう、大丈夫だから。ありがとう。

司はもう一度、ほっぺたの涙をぬぐった。

——はじめ、きちんとつけるから。受取ってくれて、ありがとう。

部屋の中でぼーっとしている司を桂さんが様子伺いにきた。

「頼むから食うもんくらいは食えよな」

生返事を返し、食卓へ向かう。さばの煮付けとブロッコリーのサラダなんて、苦手なものばかりが並んでいたのに、ひたすら食いまくってしまった。

「しかし珍しいなあ。司、野菜まで食ってやがるんだなあ」

それ以上桂さんは何も言わなかった。

一切、西月さんとの間になにが起こったかは話していない。いつものように車で迎えに来てもらい、その後はずっと部屋の中だった。

——神さま、ありがとうございます。天の神様地の神様、あとえっと、とにかくありとあらゆる神様、ほんとにほんとにありがとうございます！

ふと、桂さんのさいばしと、司の箸とがぶつかりあった。思いっきり極上の笑顔で見返してしまった。自覚はあった。

「司、お前、明日まではそれでいいけどなあ。ったく」

風呂、歯磨きの後はすぐ部屋に戻った。宿題なんてやる気しない。ベットにもぐりこみ、何も見えない状態にして眼を閉じた。夢の中に早く突入したかったけれども、まだ夜の八時過ぎ、眠くなんてなりやしない。一度起きて、棚に飾ってある藤棚の写真を、粹ごと持ち込みまたベットに入った。ただひたすら、写真の表面に指を滑らせていた。

——もういいよ、ありがとう。

何を意味するかはわかるようでわからなかった。断られたのかもしれないけれども、少なくとも彼女は司を、露骨に「下着ドロ」として拒絶はしなかった。恋をしている自分が生身でいて、西月さんが自分に対して「嫌い」といわなかったことだけが真実だった。最悪のことばかり想像して心を麻痺させていたからなおさらだろうか。

——女神さまか。

天羽の言葉が思い出される。

やっぱり自分の見る目は間違っていなかったと思わずにはいられなかった。天羽はこれまでの経緯を追う限り、決して悪い奴ではないだろう。クラスで明らかに浮き上がっている司を、懸命にクラスへなじませようとしてくれたのだから。しかも、昔付き合った彼女を、「信頼できる」という一点において、司に紹介してくれるようなことすらしてくれたのだ。もちろん西月さんのことが嫌いなのはびんびん伝わってくるものがあるけれども、それとこれとは違うだろう。ただ、天羽と自分とは女子の好みがはっきりと分かれている。あんなおっかない顔をしてにらんでくる近江さんを追いかけるよりも、ほわりとしたほっぺたにえくぼをこしらえる西月さんの方がなんぼいいかしれやしない。

ふっくらした、ほおはこのあたりだろうか。

小指の爪の先で、写真に触れる。

もし本当に、この指先に温もりが伝わってきたとしたら。

——理性、ふっとんでたろうなあ。

想像するだけで、またかあっと血が昇ってくる。

それにしても、と司は思う。

——僕は贅沢な奴だよなあ。

わけもなく頬が赤らんできて、むしように叫びたくなったりして、しばらく想像の世界に浸っていて約二十分後。もう一度、妄想の内容をチェックしてみるうちに、自分が現実に戻されていることに気がついた。三年D組の「下着ドロ野郎」だった自分が、やはり消えずにそこにいる。

——これ以上の奇跡なんて、夢見てどうするんだよ。

だけど、夢見てしまう自分も、生身でちゃんと、ここにいる。

決して、男子の生理的現象に基づく妄想のネタなんかにはしていない。絶対にしていない。そのくらいの自制心は司にもある。エッチなことなんて考えたらいけないと、あの事件以降自分を必死に抑えてきたつもりだ。テレビや雑誌、スポーツ新聞のお色気ページなどでつい、ということはないとは言わないけれども、西月さんに対しては決して、しやしない。

なのに夢の中で起こる出来事だけは打ち消すことができない。目を閉じるたび、えくぼの愛らしい微笑みが浮かんでくる。一度は何も着ないで、後姿というすごい奴も見てしまったことがあった。——うわあ、どうしようどうしよう！

目が覚め、自分のやらしさ加減に腹が立つ。

次の日、西月さんはぎりぎりになるまで教室に来なかった。いつもだったらすぐに教室で、他の女子たちと一緒にノートを見せ合ったり、前の日のテレビドラマの話で盛り上がったりしているのに。珍しかった。鐘が鳴ってからそそくさと飛び込んできて、一切話をする間もなく自分の席に着いた。当然、司とも顔を合わせなかった。

「あれめずらしいねえ、小春ちゃん？ 寝坊したの？」

「ほら、下級生のことでいろいろあって、今日もこれからいなくなっちゃいけないの」

「小春ちゃん後輩思いだもんねえ」

この辺の事情はよくわからない。司は天羽とその仲間衆が固まって盛り上がっているのを眺めつつ、もう一度西月さんの言葉をかみ締めていた。あの声、あの笑顔が、昨日は自分の目の前で、手を伸ばすとすぐに届くところにあったのだと。

とはいえ現実はまだ淋しいものがある。修学旅行の準備についていろいろ、他の連中は盛り上がっているようだが、司は息を殺しているだけだった。一応天羽たちがそれなりに司の席順とか部屋とかを決めてくれているらしい。さすがに一人だけ別部屋、シングルルームだなんて希望は通らないだろう。その辺は何も考えずに任せておくことにした。

「おい、片岡、修学旅行の時なんだがな」

二時間目が終わった後、天羽が近づいてきた。昨日の今日だ。言葉が見つからない。

「お前の部屋なんだけど、月島たちと同じとこにしといたからな」

たぶんそんなとこだろうと思っていた。月島とは、どちらかいうとクラスの地味目グループに属している奴だった。天羽たちとは別でいつも、漫画やアニメの話ばかりで盛り上がっているような雰囲気がある。体育とか遠足のバスの時も、集団行動を取らねばならない時はいつも投げ込まれていた。別に話をするわけでもないし、一緒に歩く時だけ黙って隣りにいる相手が必要、そんな時のためだけだ。いつものこと。

「わかった」

「けどお前、あいつらとも全然しゃべったことねえだろ」

——余計なお世話だよ！

どうせ集団行動の時は意味なくおしゃべりする必要なんでないのだからしょうがない。

「三日もあるんだぜ、三日も。もう少しお前も、この前みたいなぼけぼけしたとこ見せて、もっとなじめや。ほら」

——おせっかいっていうんだよ！

もちろん天羽が親切心で言ってくれているのはわかる。西月さんのことといいすべてその通りだ。「だからな、来週の月曜なんだが、いいか」

「いいかって何が」

「もちろん、あれだよ。昨日の続きさ」

——昨日の続き？

西月さんの方を見た。思わず目が合った。すぐに向こうから逸らされた。

「わかっているだろ、前から約束したことをな。第一計画突破したら、次は第二計画だ。覚悟はあるな」

頭の回線が繋がりに、西月さんと天羽、そして司へと一本に意味が伝わった。

もう逃げられない、やらなくちゃいけない、あのことだ。

——あるよ。もちろん。

答えず司は天羽を見上げていた。どきどきもせず、机の上に手を置いたままでいた。

「わあ、四時間目終わったら玄関に來い。手短かに話そうぜ」

忙しい評議委員はさっさと自分の席に戻ってしまった。

怖い泉州お嬢は、今のところ教室で何も聞いてこなかった。なんとなく桂さんと同じ対応に思われた。うるさいくらい付きまどってきて、ゲテモノラーメンを平らげても平気なあのお方は西月さんに、どういうこと話しているのだろう。触らぬ神にはたたりなし。無理に泉州さんのつっこむ余地をこしらえるつもりはなかった。まあ、あとでいろいろあるだろう。

狩野先生もいつも通り、静かに帰りのホームルームを終わらせた。西月さんに何か用があったらしく、小さい声でひとつふたつ指示をしていた。こっくり頷きすぐに教室を出てしまった。

別に話をしたかったわけではない。顔をまた真っ正面から見据えて話をするなんて、もう心臓がいくつあっても足りない。むしろ何も会話がなかったから、助かったといった方が正しいかもしれない。あの「片岡くん、おはよ！」が聞けなかったことが淋しい程度なら、がまんできる。

天羽に呼び出された通り、司は玄関につっぱした。いつものパターンだ。この時間、桂さんが迎えに来てくれるのは早いことが多かった。天羽も「手短に話そうぜ」とふっていたのだから、すぐに片付くだろう。

内容は大体想像がつく。

——あのことを、言えてことだよな。

玄関で大急ぎ、スニーカーに履き替えた。すでに土曜の四時間目ということもあり、何人かは自転車置き場へダッシュしている様子だった。

外に飛び出すと、昨日よりもだいぶ冷え込んでいて、何度かくしゃみをしてしまった。鼻水もかすかに鼻の下をぬらしている。手でこすり、ブレザーを着た。靴箱の陰に思わず隠れてしまったのは、玄関ロビーを西月さんが見覚えある女子と一緒に横切っていくのが見えたからだった。相手がどうも横から見てでこぼこした体だと感じたのは当然だった。前の日、メロンをふたつブラウスの中に押し込んだような胸をして、じいっとにらみつけてきた、髪の毛一本しぼりのあの女子だった。手短に終わらせる意思是確かに持っていたらしい。天羽がポケットに手を突っ込んだまま、ブレザーを脱いで玄関に下りてきたのは司が着いてからすぐだった。

「わりい、待たせたな」

「そんなんでもないよ」

「さ、行くぞ」

取り巻き連中は誰もいなかった。好都合だ。天羽は素早く司を親指で誘い、校舎後ろ側へと向かった。なんのことはない、いつも司が桂さんと待ち合わせている砂利路へと向かう路だ。天羽もずいぶんと司のことを細かくチェックしているのだと改めて感じた。

「一言言わせろ。片岡、お前よくやった！ えれえよ」

まずはお褒めの言葉を頂戴した。うそっぽくない。堂々と言い切った天羽の口調に、つい司も、

「ありがとう」

と返してしまった。満足げに「ま、相手の好みっていうのは人それぞれとしてもだなあ」とつぶやく天羽。礼儀として、司も付け加えた。

「もう、悔いはない」

「いんやあ、それほどでも」

おどけた後、天羽は自分の頬を何度かぺたぺたとはたいた。

「けどなあ、さっきも言ったけどな、お前もうひとつやることあるだろ。分かっているよな」  
わかっていることだ。司も思う。

「わあったわあった。ところで片岡。今度の月曜の五時間目、何の授業かわかってるかな」

いきなり先生口調。むっとした。

「わかってるよ。ロングホームルームだろ！」

「怒るなよお坊ちゃま。俺と近江ちゃんのオンステージって世界なんだがんなことどうでもいいわな」



——二年までは、天羽と西月さんとなんだけどな。

A組ではあまり盛り上がり欠ける時間帯であることは確かだった。一生懸命西月さんが、「A組はみんなから『コネクラス』だとか言われて馬鹿にされてます！ そんなことなんてないってわかってるのに、実力テストの結果とか、球技大会の結果とか、そういうものを引っ張り出されてさんざん悪口言われてます！ けど、みんなほんとはやればできるんだってことを私、知ってます！ 一生懸命努力すれば、かならず結果がついてくるんだって、信じてます！ だからみんなも一生懸命やりましょうよ！」

と声を掛けていたことを覚えている。司も当時、ずいぶん物好きな人だとだけ感じていたのだけれども今は違う。とにかく純粹でひたむきな人なのだと思っている。ただ、そう思わない天羽のような奴がたくさんいたのも当然のことなんだろう。とにかく司にとってロングホームルームとは、西月さんの声と笑顔をシャワーのように浴びることができるという、至福の時ではなかった。

天羽は鼻水を啜り上げた。

「さっきもしゃべったけどな、修学旅行の準備最終段階ってことで、他のクラスではイベントとかいろいろ企画をやるらしいんだ。が、しかし。俗に言う『コネクラス』の俺たちA組に、そこまでの団結力を求める必要ははっきりいってない。根本的に、無理って奴だわな」

——そんなの知らないよ。

全部天羽にお任せだ。司が割り込む部分なんてない。

「けどな、このままじゃあいけねえよなって俺もいつも思っていたんだ。他のクラスのようにもっと、クラスが一丸となってさあ、仲良くなるって出来ねえかなあって狩野先生にもいろいろ相談をしたりしていたわけだ」

——狩野先生じゃあ無理だよ。

もともとあの先生はクラスに対して無関心風に見えた。「風」と曖昧にぼかしておくのが、わずかな「希望」でもある。天羽も同じ「希望」を持っていたのだろうか。

「狩野先生はそれなりにうちのクラスのこと、真剣に考えてるらしいんだ。ただ趣味としてあまり熱く情熱たぎらせるのは好きじゃないらしくってな。ほら、D組の菱本先生のように熱血できないらしいんだ」

——やっぱりあの先生、熱血なんだろうなあ。

噂に聞く、社会科担当の菱本先生を思い出した。生徒と一緒にあのラーメン屋に入るような先生だ、きっと狩野先生とは違うのだろう。

「だから、お前のことを話しておいたら、俺に一任する、つまり『任せる』と言ってくれたんだ。ありがてえなあ」

「なにが任せるなんだよ！」

足下から血が一気に昇って、頭の上で噴火しそうだ。昨日と同じくらい、熱い。

「つまりだなあ、片岡」

天羽はゆっくり、初めてここで話をした時と同じように、肩を叩いた。

「俺に、お前のこと、任せてもらえねえか。悪いようにはしない」

——任せるって、いったい。

次にくる言葉は、大体想像通りだった。

「片岡、お前のためのステージを俺が作る。ここで、襖やっちまえ！」

うつむいた。司は片手を握り締め、足下の砂利を小さくつま先で掘った。

「男子も女子も、お前ひとりをハブにするという状態はもうやだろって思うんだ。ほんとは臭いくらい青春ドラマやりたいのにさ、どうしてもふたをしておきたい問題があるって奴だ。一応こういう事例みたいなのは、評議関連でも結構聞くことあるから、俺もそれなりに用意した。お前、わざとらしい青春ドラマなんて今ごろ流行らないと思っているのか？ 思ってるだろうなあ」

一人、酔いしれつつ語る天羽。

「けどな、あんまり大きい声では言えねえけど、あまりにもしんどい出来事をな、うちの学校のある奴とかこういう奴とか、懸命に乗り越えてきてるんだ。たまには教師の鉄拳、とか愛の抱擁とか、いろいろくさすぎるネタを用意してだなあ。ま、お前が知らないだけだなそういうのは。とにかく、ほんっととにかく、やってみて後悔は絶対にさせねえよ」

いつも思うのだが天羽の言葉は理解不能な時がかなりある。

「変なこと言うようだけどな、お前があ的事件を起こしてから、誰かかしらは味方になってやりたいてって思った奴が絶対いるはずなんだ。お前の大好きな西月以外にも、男子の中ではかならずいたはずなんだ。ただどうしてそれができなかったかっていうと、あとあと何言われるかわからねえ、他の奴らが何考えてるかわからねえ、そういう、『不信感』ってもんもあったんじゃねえかなと俺は思う。繰り返すけど、うちのクラスは俗にいう『コネクラス』だからなあ。お前もそうだろ」

——否定できないよ。

入学試験問題、半分は白紙で出したような記憶が残っている。それでも受かったのだから、たぶんそれだろうと思っていた。

天羽はにっこりと頷いた。

「けど俺はそれを責める気ねえよ。でないと、今のA組になんか入れねかったもんな。ただ、いんちきして入学しちまったっていういやあな気持ちってのは、まだ残ってるんだよな。俺も最近やっとわかったんだけど、いつ俺は他の奴らよりも楽しんで受かってしまったってことを気付かれるんだろうって、いつもびくびくしてたかってことをさ。他の奴らも『A組は決してコネクラスじゃない』って建前が大嘘だってこと、わかってるし。俺も二年まではその大嘘を守ろうと懸命にやってたけど、そんなの無駄だったよな」

話がだんだんそれていく。本当だったら問い返したい。でも天羽は真剣に、笑顔ながらも語りつづけていく。

「俺は、三年になってから決めたんだ。すべてのことにおいて、正直になりてえなって」

——正直？

言っている意味がだんだんわからなくなってきた。司の足下にできた、ちいさな蟻地獄の巣も

だんだん深くなっていく。

「俺は、じいちゃんのコネで青大附中に確かに入っちゃった。それは本当のことだよな。同じ小学校の奴で、一緒に受けて落ちた奴の方が成績良かったことも知っているんだ。それがすっごく辛くてさ、まるで俺がそいつの席、取っちゃったような気がしてさ。でも、もう入ってしまった以上は俺らしく、正直にぶつかっていきしかねえんじゃねえかって思うようになったんだ。奇麗事の嘘なんかつかねえで、周りの奴らに無理やり好かれなくてもいいって、そういう気持ちでいこうって思ったんだ」

——奇麗事の嘘？

天羽においてはひとつだけ、わかる部分がある。確かに天羽は一年の頃からおちゃらけ野郎として有名だった。クラスの男子女子みんなに関西系のギャグを飛ばし、なにかあると「あ、それはしつづいいたしやしたあ〜」とお笑いを取るのがくせだった。ふつうだったら笑えないだろう？と感じる事件がある時も……司の時は例外としても……「ま、そんなことどうだっていいでがんしょ！ それよかもっと明るいこと考えましょうや！」と雰囲気を変えようとしてくれた。そう言う奴だった。

「とにかく、このクラスをなんとかせねば、俺も三年間A組評議としてなにしてきたの、ねえあんたってことになっちゃうんだよなあ。他の連中もやっぱり、このまま自分のコネを内緒にしたまま卒業するっていうのは、罪悪感ばりばりでしんどいよなあってことになるわけだ。お前だけじゃねえよ。みな、人にはなっかなか言えねえ秘密ってもんがたくさんあるんだよ。でな」

車の到着合図、クラクションが鳴った。無視した。司も、天羽も。

「俺はお前になんとしても、A組の一員として、気楽な顔して座ってもらいてえんだよ。俺のわがままだってわかってるし、正直、一部にすげえひでえことしているかもしれねえって気持ちはあるんだ。でも、このまんま、白々しい嘘で塗り固めたクラスで終わるよりは、みな本音をさらけ出して、気楽なアホ組A組としていてほしいんだよ。ここまでお前に恥をかかせるのはひでえことだってわかってる。けど、お前がすべて男らしく白状すれば、必ず俺たちはお前をカバーする。約束する。他のクラスの連中からまた、『下着ドロ』だとわざとらしいことを言われたら、その時は俺たちA組男子野郎が、制裁してやる。だから頼む、片岡、俺に月曜の五時間目、すべてを任せてくれねえか」

想像して怖さを感じる瞬間、西月さんがだいたい色に染まったまま手を伸ばしてくれた一枚の絵、それを思い浮かべた。

すうっと恐れが消えていく。

司は顔を上げた。天羽の表情には、教室で見せているようないいかげんな笑いではなく、百メートル走を走り終えた直後のような陰しさが残っていた。それが司には本当だと思えた。言っていることの半分以上は理解できなかったけれども、天羽なりに司へ、本気で勝負してほしいがっていることだけは伝わってきた。

「天羽のおかげだよ。ありがとう」

小さくつぶやくと、足下のあり地獄を少し砂利で埋めた。

「ロングホームルーム、そうする。あとは頼む」

「ほお、お前、ほんっと未来の社長っぽくなってきたなあ」

言い方に刺がなかったから、司は軽く流した。いつもだったらかっとなってしまうような言葉なのだが。でも顔にはちらっと「ふざけんな」なるニュアンスが浮かんだのだろうか。天羽は慌てて手を振った。

「嫌味なんかじゃねえよ、片岡、俺はただな、お前のこと勇氣ある、男だなんて思うだけだ。女子の趣味についてはなんとも言えねえがなあ。な、お前、本当に後悔してねえのか？」

何言い出すんだろうか。司は首を思いっきり振った。

「本当にほんとか？ まあお前の望むことだから、もういまさらって気もするけどな、ほんとに西月と付き合うってことで後悔しねえのか？ もし後悔してるなら今はっきり言えよ」

——後悔なんて、するもんか。

天羽の言い方が今の段階で一番真剣だっただけに、司はもう一度はっきり言う必要を感じた。当たり前だ。あの笑顔で見つめてもらえただけでいい、ばらを通じて気持ちが伝わっただけで、もう何も望まない。

「僕、西月さんとは付き合わないよ」

「はあ？ だって、お前言っただろ？ 『付き合ってくれ』って！」

確かに司はそう言ったかもしれない。無我夢中だったし、ばらの花をとにかく渡すことだけで精一杯だったような気がする。でも、西月さんの答えだけははっきり聞いている。司は首をもう一度、軽く振った。

「だって、西月さんは、付き合うって言わなかったから」

「ちょっと待った！」

天羽の顔が真っ赤に染まった。照れじゃない、形相が変わった。

「お前、七日間もあんな恥ずかしい思いして、ばらの花持って行ったんだろ？ いったい何のためだったか、よおく思い出してみろよ！」

「思い出すたって、あれはただ」

少しひきつりつつ司も答えるしかなかった。

「僕、ただ、お礼が言いたかっただけだから」

「礼だと？ それだけかよ！ お前、あいつと付き合いたいんだろ？ 好きなんだろ？ ぶっちゅっとしたいんだろ？ やらしいことしたいんだろ？ なあ、正直に答えろよ！」

答えるしかない。正直に。

「そうだよ。天羽、僕はそうだよ。けど、きっと付き合えないよ」

「俺混乱してきたぞ。つまりなんだ、昨日西月からOKを貰わなかったのかよ？ で、そんなに機嫌いいのかよ？ 俺になんでそれだったら感謝するんだよ！」

「だって、西月さんとふたりっきりにしてくれたし、僕と話をさせてくれたし、ばらの花、あげさせてくれたし」

司なりに正直な答えを發したはずだった。嘘なんてついていない。天羽が求める「真実」を全部話そうと司としては決めている。

「けどそれは、お前、付き合いたいからだろ？」

「僕は西月さんが、してほしいことしかしたくないから」

——くさい言葉、って僕もしゃべれるもんだなあ。

天羽には嘘を吐きたくなかった。

なんで天羽がいきなり頭を抱えてしゃがみこんだのか、舌打ちしたのか、なぜそんなに天地崩れるくらい動揺しているのかわからない。

「ああ、ちょっと待て、片岡、お前のプライド許す範囲ないでいい、何があったのか、言ってみろよ」

——嘘なんて、吐かないさ。

司はそのまま、金曜の放課後、西月さんとふたりきりの時を話すしかなかった。

——もういいよ、ありがとう。

微笑んだ夕暮れ色の、あのひとのことを。

たぶん、砂利路の向こうに桂さんの車はスタンバイしているはずだ。様子をうかがっているのかもしれない。あとでいろいろ根掘り葉掘り聞かれることだろう。隠すことなんてない。司は天羽に全てを話した段階で、覚悟ができていた。

——西月さんに嫌われてもいい、みんな話すよ。

三回くらい天羽は激しくくしゃみを繰り返した。腹の音が鳴った。

「あの女、一体何考えているんだよ」

全て話し終わった後、つばを吐きかけるような調子でつぶやいた。

「お前、本当にあんな女でもかまわないのかよ。俺だったら女子でも一発ぶん殴るかするぞ」

「なんでそんなことできるんだよ！」

「あったりまえだろう。いいか片岡、お前、西月がお前に何を言ったのか、理解していないだろう？」

「理解っていったいなんだよ。天羽だって僕にわかんないことばかり言うから、わけわかんないよ」

ひとりでわけわからないことを話しつつけるのはいい。黙って聞くなら平気だ。でも、西月さんをこれ以上侮辱するのだけは許せない。天羽はとことん、西月さんを嫌っているのだということがよくわかった。だけど、「もういいよ、ありがとう」の一言を話したとたん、あんなに激昂することはないだろう。

「なあ片岡、お前、命がけで西月に告白したんだろ？ ばらの花を持ってくなんてこっぴどかしいことまでしてだ。もちろんあいつが振る可能性だってあるだろうし、そんなときは素直にあきらめろってことだよな。俺も無理じいはしねえよ。ただ、あんな曖昧な言い方をされてだぜ。好きとも嫌いとも言わねえでだぜ。それで、それだけかよ。あいつばらを持って帰ったのかよ」

「うん、だって、他のクラスの女子が待っていたみたいだから」

メロン胸の女子ときっと待ち合わせしていたんだらう。玄関ロビーでふたりが横切ったのを見た時に初めて合点がいった。ずっと待ち合わせしていたのだったら、急いで帰っても当然だらう。

「片岡、あのなあ」

しばらく天羽は唇をかみ締め、空を見上げた。曇り空の昼まっただなか。やはり風邪引きそうだった。何か言おうとしたが、つばを飲み込むようなしぐさをした。きっと腹が減ったのだらう。

「わあった。繰り返すが、俺に任せとけ。それとお前にもうひとつ、言っておきたいことがある」

「なんだよ」

さらに西月さんの悪口を連ねるつもりだらうか。一言でもそんなことしたら、すぐに司は桂さんの車に向かって走るつもりだった。

「お前、とにかくもっと、友だち作れ。人見る目、もっとつけろ」

腕時計を覗き込み、天羽は自分の手首を握り締めた。指を軽くぶらぶらさせた。

「このままだとお前、とんでもない奴に騙されまくっちゃうぞ」

——天羽ってやっぱりわからないよな。

とりあえず、頷いておけばいいだらう。司が一度、こっくりとしたのを確認した後、天羽は全速力で校舎の方へ走り抜けていった。

桂さんの隣り助手席に座り、シートベルトを締めた。少しガソリンくさい匂いが、むっとくる芳香剤で打ち消されている。すきっ腹にぐうっと来て、ちょっと吐き気がした。

「どうした司、風邪か？ 病院行くぞ」

行くか、ではなく、行くぞ、というところが桂さんらしい。口を押えて司はいいやいやをした。

「さっきからなあ、げほげほくしゃみしてるし、鼻水たれてるし、これが風邪じゃなくてなんだっていうんだ。ほら、まっすぐ病院行くぞ。お前この歳で注射が怖いのか？ 彼女が出来そうな時になあ」

「彼女なんて、出来ないよ」

やっぱり桂さんはそれ以上言わなかった。後頭部を軽くぱしぱし叩いた後、自動車電話から行きつけの病院へ連絡を入れてくれた。

「薬もらったら、栄養つけるためにもつ煮を作るぞ。とにかく、食って食って食いまくれ！」

——食えるわけないよ。

もしかしたら天羽に風邪を移されたのかもしれない。そっちの方で少しだけ、天羽を恨んだ。

生徒相談室に呼び出されるのは久しぶりだった。

——咽、渴いた。

司は目の前に差し出された黄色いお茶を見下ろしながら、つばを何度も飲み込んでいた。給食後なので腹はくちくなっている。牛乳も一応は飲み干した。でも、狩野先生と向かい合っとうつむいていると、体育が終わった後のように、ごくごくと何かを咽に流し込みたくなる。

——早くなんか言えればいいのに。

白衣の汚れはほとんど見当たらない。うっすらとピンクの粉が袖についているのはたぶんチョークだろう。窓辺に立って緑色の銀杏を眺めつつ、狩野先生はめがねのレンズをめがねふきでぬぐっていた。めがねを外すと、想像しているよりもずっと若く見えた。父のところで秘書かなにかをしている背広姿の社員さんたちのようだった。

——桂さんより、年上なんだよなあ。

気を紛らわせるために司は、桂さんのどすんとした体型を思い起こした。もし、一緒に暮らす相手が桂さんじゃなくて狩野先生のような人だったらどうなっていただろう。想像するだけでも恐ろしかった。毎日敬語で話をするのだろうか。

全校朝会が終り、教室に戻る途中、狩野先生は司の耳もとで、

「昼休み、相談室まできてください。誰にも言わなくてもいいですよ」

ささやいた。生徒相談室。面談で込み入った話をされる時とか、問題を起こして呼び出される時、司がこの部屋にお世話になったのは、これで五回目だった。例の事件後、クラスで見事に浮き上がってしまった司を拾い上げて、狩野先生は何度も今のようにお茶を出してくれた。もっとも司も何一つ、答えることはしなかった。言うべきことが見つからなかったのだから、しかたない。狩野先生もあきらめたのか、それ以上のことを求めてこなかった。

——何の用事なんだろう？

目の前でお茶の葉を紙にくるんで捨てている狩野先生の指先は細かった。

担任としては、きっと優しい先生なのだろう。桂さんは今ひとつ、狩野先生に対して、

「悪い奴じゃあなさそうだけどなあ。ただ、教師向きじゃねえなあ。狩野先生はなあ」

言葉を濁していた。とはいえ司に関する事とかは父母の代わりに取次ぎの代行をしているらしい。仲は悪くないだろう。きっと司が学校で何をしでかしているか情報交換しているのだろう。

「片岡くん」

めがねを掛け直し、狩野先生は静かに座りなおした。

「今、ここにいるのは片岡くんと、僕だけです。だから、安心して聞いてください」

司はそっと、後ろを振り返った。扉は閉まっている。真後ろには青潟大学附属中学の卒業生が書いたという、風景画が飾られていた。神乃世の景色に似た絵だった。

「昼休み後の五時間目、ロングホームルームで、天羽くんが何をしようとしているか、聞いてますか」

——僕が、何をしようかってことなんだ。

司はゆっくりと眼を上げた。狩野先生の顔をじっと見上げた。

「僕から、言いました」

「え？」

戸惑う風に狩野先生はお茶を持ったまま、首をひねるような格好をした。

「天羽くん、片岡くんが、あのことを話そうと切り出したということですか」

「はい」

どう説明したらいいのだろう。もともとは天羽から切り出されたことである。西月さんに告白し、その後自分の過去をすべて洗いざらい白状し、そしてきちんとけじめをつけること。二年前の司には出来なかったことだけれども、すでにひとつめの目標はクリアしている。絶対に出来ないと思っていた、西月さんへの想いを告げること。天羽や泉州さん、桂さんに励まされて、ばらの花を捧げることができた。どういう答えが返ってくるのか、そこまでは望まなかった。天羽だけはどうも納得いかなさそうな顔をしていたけれども、感じ方の違いだ。気にしなかった。

あとは天羽の言う通り、きちんと本当のことをクラス全員に告げ、自分の過ちをさらけ出すだけだ。

「天羽くんは、きっかけ作ってくれただけです」

お茶をすすろうとして、熱すぎてすぐに舌を引っ込めた。

「きっかけとは？」

「いろんなことをです」

狩野先生は黙りながら、唇の端を小さく上げるようにした。

「僕も、天羽くんから今日行われる予定のことについて説明を受けています。クラス評議として、片岡くんを仲間に入れたいという彼の、熱い気持ちは伝わってきました。きっと片岡くんも同じことを考えているのでは、とは思いました。ただ」

言葉を切った。「本当に、片岡くん、そうする覚悟はついているのでしょうか」

銀縁めがねの奥から刺す瞳は、いささか怖かった。

「天羽くんは一生懸命になり過ぎて、片岡くんの気持ちを先走っているところなどはありませんか。もちろん彼は、片岡くんのことを懸命にA組の仲間に入れようと努力しています。彼は本当に、一生懸命です。ですが、それはあくまでも、天羽くんの視点から観たものです。どんなに天羽くんが片岡くんのことを一生懸命応援したとしても、受け取るのは片岡くん、君です。君がどう思うかが一番大切なことです」

——僕がどう思うかって。

きっと、一ヶ月前の自分だったら、狩野先生に泣きつくか逃げ出すかしていただろう。そういう奴だった。でも、夕暮れ色の光の中で、たったひとりの女神様にばらを捧げた一枚の絵が目に焼きついている以上、もう何も怖くなんてなかった。

——もういいよ、ありがとう。



眼を閉じた。何度もかみ締めて味わった笑顔。

狩野先生は姿勢を正すと、両手を膝に置いた。心持膝を開いて前かがみとなった。

「片岡くん、僕は決して、君が一年の時のことを反省するのがいけないことだとは思っていません。いや、君が二年以上ずっと、重荷を背負っていたことも感じてきたつもりです。でもそれ以上に、片岡くん、君は本当に一生懸命努力を重ねてきたはずですよ。見ている人には必ず見えているはずですよ。伝わっているはずですよ、僕もそれは、毎日、感じてきましたから」

——何言ってるんだろう、先生。

天羽もそうなのだが、司に対して真剣に意見しようとする人は、時たま意味不明なことを口にする。いったいどこが見えているのだろう。努力なんて、していないのに。

「天羽くんが君のためにチャンスを用意しようというのは、彼らしい友情のしるしでしょう。でも、そのしるしが人によっては不愉快に感じられても仕方の無いことです。片岡くん、君にはその友情を、きちんと断ることもできるのですよ。天羽くんの気持ちを受け止めた上で、あえてきちんとそういうことは出来ない、と答えることもできるのですよ」

——断らないから、天羽に言ったんだってわからないのかな。

しばらく司は首を振るだけにした。どうも狩野先生、何を伝えたいのかよくわからない。

「断る気はないです」

それだけ、もう一度口にした。

「どうしてですか」

「はじめ、つけたいからです」

「はじめとは、過去のことをすべて告白して、許して欲しいと思っているからですか？」

狩野先生の眼がまた光った。とらえどころのない落ち着いた口調と、でこぼこのない抑揚。いきなり暗闇で光る車のライトに似ていた。

「はい」

小さい声で答えて流すつもりだったのに、狩野先生はしっかり食いついてくる。思わず身を逸らそうとしたが、狩野先生は目をそらさなかった。

「片岡くん、よく聞いてください」

また、わずかに身体が前にかしいできた。司も懸命に座っているところから後ろに下がろうとした。

「きちんと話をして、わかってもらう。それは大切なことです。もしそれが他の出来事だとしたら、僕は担任としても、一人の人間としても応援したいと思います。しかし、君は過去の出来事を、自分の力で少しずつ消化して、今の自分の身にしたはずですよ。それだけで今は、十分ではありませんか。二年前の片岡くんと今の君とは、もう別なんですよ。成長した自分をもってゆくり、ひとり、ふたりといい友だちをこしらえていく。それもひとつのやり方ではないですか」「決めました」「もし、全てを話して、クラスみんなが受け入れてくれなかったとしたら、どうしますか？」

——考えなかったことなんてないよ。

眼を閉じ、もう一度西月さんの絵をまぶたに浮かべた。勇気と言葉がたまらなく欲しかった。「片岡くん、天羽くんの思いやりそのものはこの際、置いておきます。君が懸命に自分を高めようと努力しているのも、僕は嬉しく思っています。でも、今から行おうとすることは、君にとって必ずしもいい結果が出るとは限りません。そのことは予想していましたか？」

「はい」

と、しか答えようがない。

「クラスの女子たちは、二年前、被害者でした。もし、目の前に犯人です、とばかりに同じクラスの男子が現れたとしたら、どう感じると思いますか？ これは正しいとか正しくないとか、そういう問題ではありません。本当はもっと友だちとして受け入れなくてはならないとわかっているけど、どうしてもそうできない部分が女子にはあるものでしょう。女子に限らず、巻き込まれた人や被害にあった人たち。君が傷つけてしまった人たち、みな、そういうところはあるはずですよ」

——女子に好かれないなんて思ってない。けど、あの人にだけは。

あの人、と言葉が浮かんだとたん、初めてちくりと痛みが走った。注射針をいきなり、関係のないところに刺したような鈍い感覚だった。

「必ずしも、女子たちは君の勇気ある告白を、好意的に受け止めてくれるとは限りません。それも覚悟は出来ていますか？」

——西月さんには。

じりじりと痛みが続く。司は歯を食いしばった。天羽の言葉、泉州さんと桂さんのからかいの声、いろいろな声が響き渡った。

「はい」

じっと、狩野先生の視線を受け止めるように目に力をこめた。

——嫌われる覚悟は、もう出来ている。

今日だってそうだった。

本当は西月さんにだけ、先にすべてを話そうと決めていた。日曜ずっと考えてひとりで決めた。

だから、朝から西月さんを何度も呼び止めようとした。どうしても口が回らなくて、自分でもわけのわからないことばかり口走ってしまったけれど、ちゃんと、言うことを決めていたのだ。

「片岡くん、あのね、ごめん、じゃあね、私、これから、行かなくちゃ」

あからさまではないけれども、西月さんの態度もクラスの連中が揃っている教室の中だと、どこか緊張気味だった。あの日のように、茜色の光がたっぷり溢れんばかりでふたりきりだったら、きっと西月さんも話をきちんと聞いてくれただろう。求めてはいないけれども、やはりつい追いかけてたくなってしまうのはなぜだろう。自分でももちろんそれ以上、追いかけてはしない。頷いて彼女を見送るにとどめる。でも、西月さんは女子たちのおしゃべりに混じって、男子たちからは懸命に距離をおいていた。

——泉州さんが言ってたな。

ぜいたくもんの欲望だとわかっていても、つい考えてしまう。

——西月さんに何人もの男子が、告白しているって。

自分もそのひとりだから。

——競争率高いよな、当然だよな。

慌てて打ち消す。想像してしまう夢を打ち消す。

——あれだけで僕は十分なんだって。

嫌われないですんだ。ばらを受取ってくれた。それ以上の何を求めろというのだろうか？

自分がクラスの恥ずべき下着ドロである以上、西月さんの側に近寄ることすら本当はできないんだと自覚しているのに。理性で抑えても感情が溢れてしまう瞬間が昨日今日と続いてしまう。

——嫌われないですんでいる。今だけは。

「片岡くん、おはよ！」

と声は掛けてくれた。今日もいつも通りだった。

嫌われないことが、最高のごほうびだと自覚しているくせに。

——けど、これも、今日で終りなんだ。

司は眼をこすり、西月さんに話すつもりだった言葉を飲み込んだ。

——あれをしたのは、僕だったんだ。かばってくれたのに、ごめん。

たぶん嫌われるだろう。三日間の夢をあの手でくれたあの人には。

天羽はちゃんと「大丈夫だって、お前を馬鹿にする奴なんていねえよ」と繰り返し言ってくれたけれども、司も世の中そんな甘くないことくらい、わかっている。今まで曖昧なままですんでいたから下着ドロたる自分がここにいられたのだ。もし、それを本当のことだと認めてしまったとたん、司は正真正銘の「下着ドロ」として認定されてしまう。烙印を押されてしまう。

——それがいやだったから、逃げてただけなんだって。

今なら司も分かる。なぜ一年の時懸命に逃げつづけてきたのか。クラス男子たちの弾劾裁判にあえて答えなかったのか。自分のしたことをいまだに思い出せないのも、すべてはあのことを自分のしたことじゃないと認めたかったからなのかもしれない。司にだってそのあたりのことは見当がつく。今でも思い出せないし、自分のしたことを想像するだけでも吐きそうになる。自分の口から自分の記憶していることを、全て話すなんて、気が狂いそう。ふつうだったらそう。

狩野先生も、きっとそのことを心配してくれているのかもしれない。

わけのわからないなりに、司に恥をこれ以上かかせないようにしたいと思ってくれているのかもしれない。好き好んで傷をつけて血を舐めて遊ぶ、そんなことはすべきではないと言ってくれているのかもしれない。めがねの奥でまだちろちろと訴えている視線に司は、簡単な答えだけで応えた。

「僕は平気です」

「そうですか。片岡くん」

沈黙が長く続いた。にらみ合うような格好でふたり座っていると、もう休み時間二十分はあっという間に経ってしまった。

「わかりました。これからロングホームルームです。先に教室に戻っててください。それと、もうひとつ、覚えていてください」

身動きせずに、前かがみのまま、

「君の言葉でもし、クラスの人たちが冷たい反応を返してきた時、もしくは居場所がないと感じるようになった時」

自分に言い聞かせるように頷きながら、

「授業中でもかまいません。『E組』のことは聞いてますね。一階の教室です。そこで駒方先生がいつもそこで絵を描いていらっしゃいます。休み時間や放課後は他の生徒たちも集まりますが、大抵先生ひとりだけです。そこでは机もありますし、もし勉強したかったら図書室からビデオも借りることができます。息抜きにそこへいらっしゃい」

「『E組』？」

知らない。全くそのあたりの噂は耳にしていない。口をぽかんと開けた。

「さぼりを勧めているのだと思わないでください。学校の中で、ちゃんと先生のいる教室で机に向かっているのだったらそれは授業に出席しているということです。逃げることはかならずしも、負けることではないということだけ、覚えていておいてください」

——『E組』って何？

司はとりあえず頷いておいた。付け足すように

「はい」

と答えた。狩野先生がそのままお茶の入ったままの茶碗を持って立ち上がるると同時に、廊下に出た。同時にチャイムが鳴った。走らず、ゆっくりと教室へ向かった。

——嫌われる覚悟は、ある。

——受取ってくれて、ありがとう。

窓から刺す光の隙間に生徒相談室から出てくる狩野先生が、かすんで見えた。

司が教室に戻ると、一瞬だけ男子たちのかもし出す空気が冷え、すぐに戻った。自分の存在が女子たちには……泉州さん除外……無視されていることをよくわきまえている司は、天羽にだけちらりと視線を投げた後、自分の席についた。天羽は近江さんとその他数名の仲間たちと、椅子を反対側にしてまたがり、ひそひそ話をしていた。近江さんだけつまらなそうな顔をして、またひとり頬杖をついていた。いつもだったら天羽もかなりでかい声でしゃべりまくるのだろうが、様子が違う。やはり天羽は計画を百パーセント遂行させようとしているのだろう。

前もって狩野先生に話を通そうとするといい、その通り。

司ひとりでは全く手も足も出ないことばかりだった。

そっと西月さんの様子をうかがうと、彼女は他の女子たちとトーンの高い声で、ラジオ番組の話をしているようだった。内容は全く見当がつかないけれど、女子たちはみな心得ている話題の

ようで、それなりにわいわいとはしゃいでいる。

机の薄いマーブル状木目を見つめていると、だんだん二重、三重に重なってきて目が回りそうになった。天羽は果たして今から司がしようとしていることを、他の男子たちにも話したのだろうか。たぶんそうしたに違いない。そのあたりの手回しも完璧だ。そんなに親しいわけでもないし、それどころかクラスの害虫みたいに言われている自分がどうして、ここまで天羽に救ってもらえているのだろう。いくら西月さんのことがあるとはいえ、親切過ぎる。

司は天羽にもう一度、合図をしようとした。でも即刻、無視された。

——だから、ちゃんと言わなくちゃいけないんだ。そうなんだ。

なんども司は「そうなんだ」という言い回しを繰り返した。何度もそうやっていると、だんだんときどきする音が引いていく。すぐにまた緊張しそうな音が胸の奥で鳴り響くけれど、また「そうなんだ」と心で言い切ると、ちゃんと凧いだ。

狩野先生が前の扉から入ってきた。やはり白衣のままだった。司と天羽の方をちらっと眺めたように見えたのは気のせいかもしれない。すぐに天羽は頷くと、

「きりっつ、れい、ちゃくせーき」

元気一杯に号令をかけた。全員立ち上がり、首だけで一礼した。西月さんはきちんと両手を揃えて頭をしっかりと下げていた。狩野先生は一拍うつむくようにして、めがねを外した。さっき生徒相談室で見せた、妙に幼く見える顔をさらけ出した。ポケットからハンカチらしきものを取り出すと、すっと拭い司に視線を向けた。あっという間だけど、目と目が合った。生徒たちの間からこもった笑い声が沸いた。やっぱり、変な顔だと司も思う。一切反応を無視して狩野先生は、「それでは、今日のロングホームルームは、一学期半ばに入ってから議題としてあげたいことをそれぞれが出していってください。評議委員にあとはお任せします」

いつものように静かな声で、始まりを告げた。

評議委員の天羽と近江さんがふたり仲良く、黒板の前に並んだ。

近江さんの方が冷たく席についている人たちをにらみ付け、さっさとチョークを手を取った。天羽の方に、質問したさそうな顔を向けていた。めずらしくそちらの方を天羽は無視した。軽く拳骨で、

「おまたせしやした！ では本日の議題と参りましょうか、レディー・アンド・ジェントルマン！」

教卓を叩きながら、いつものように狩野先生の方へ向き直り、敬礼をした。狩野先生も表情を変えことなく、頷いた。

——いよいよ始まった。

激しい始まりだ。司は息を長く吐き出した。おなかの限界まで、空気を腹から抜いた。

「では、本日はちょっと特別バージョンA組篇ということで、司会・天羽忠文が仕切らせていただきます。ほら、拍手が足りんぞ拍手が！」

まばらな拍手が、天羽の仲間一群から届いた。三年間全く変わっていない、天羽の切り口だった。「よそのクラスはたぶん、修学旅行、なんだろうなあ。でも、うちで決めることったら、せいぜいしおり作りとグループ決めでしようがってことで。まずはA組としての土台をきっちり

と築きたいと思った次第でがんです。みなさん、本日は評議の俺がどんどん仕切らせていただきますんで、狩野先生、その点よろしく」

汗がにじむ。匂いが少し漂ったような気がした。

「今だから言えることだが、男子諸君、一年、六月末の出来事を、覚えているかな。女子諸君には返す返すも悪夢のあの事件、命名『一年A組下着ドロ事件』。結局犯人は曖昧なまま、俺たちもよくわけのわかんないまま、幕を閉じたわけである。いろいろ噂が飛び交う中、A組の内部では激しく荒れに荒れた。入学後しばらく、他のクラスのように『友情』なんてロマンチックなお言葉が似合わないA組になってしまったのも、また事実である。もう過去だけ過去、って片付けるつもりでいたし、俺もほんとはそれが一番だと思ってた。評議委員として、いろいろ噂やらなんやらを聞きつけてきたけれども、無理に煙を立てる必要もねえなとかんがえてきたからで、あー。今回、そろそろ修学旅行が迫ってきているこの頃であります。諸君。この際、思い切って腹を割って、話しましょうや。修学旅行ともなれば、いやおうなしにお互い嫌いな奴好きな奴、いろいろな奴と三泊四日、顔をつき合わせるし、そうなればバトルも繰り広げられること確実。旅行が始まる前にある程度、わだかまりって奴をお掃除しちゃいましょうってやつです。ということで、昨日、狩野先生に許可を貰って、天羽忠文一世一代のトークショーとなったわけでございます」

くすくす笑いが聞こえる。今度は女子の方からだ。

「です、諸君。A組において、どうしても人を信頼できなくなってしまった事件っていうのがさっき言った、『下着ドロ事件』です。今思えば俺もうらやまし、いや、やっぱりまずいよと思わなくもないのですがね、ですが、人間は反省する動物ってどっかの偉い先生も言ってます。罪を悔い改めれば、人生、大抵のことはやり直せます。女子も結局はパンツやブラジャーを買い替えることができただろうし」

今度は司の後ろあたりから女子たちの「サイテー、センスなさすぎ」との露骨なつつこみ。天羽は無理やりにやっと笑った後、いつものような軽いおちゃらけ口調と、時折かっちりした言い方をまぜまぜにして続けた。

「とにかく、この機会に一度すべてをご破算にしましょうってことで、今回こういう場を設けさせていただいたと、ま、そういうわけががんです。ゆえに本日の内容はA組一同の秘密として、お口にチャックしてくださることを。諸君。よろしいですか。よろしいですね。OKですか、OKですね」司の方を見た。

思わず顔を上げた。唇を噛んで横、前、横、と三方の気配を見た。三方から、男子と女子の固まった視線とぶつかり、また司は頭を下げた。

「さあ、立て、片岡。勝負だぞ」

さっき教室に入ってきた時は男子たちだけが息を呑んでいた。でも今は女子たちも一緒だった。司は西月さんの方をもう一度見ようと思ったけれどもやめた。どうせ黒板の前から、あの人の顔はしっかりと見つめられるはず。そして大好きな人に話し掛けられるはずだ。たとえ、醜い自分の罪だったとしても、許してもらえなくても。嫌われても。

——西月さん。

ゆっくり司は立ち上がった。うつむいたまま、一度呼吸を整えて、一步前へ足を出した。目のふちに力をこめてぐいと顔を上げた。

狩野先生がもう一度、腰を浮かせるような形で尋ねてきた。同じことだった。同じ答えを返すしかなかった。

「片岡くん、本当に、いいのですか」

「はい」

「先生、俺に任せてくれって言っただろ、頼みませ。あとは片岡、お前の好きなように言えよ。俺は男だ、約束は守る。守らせる」

正面からくる天羽のエールを聞きながら司は両手を握り締め、少しずつ教壇へと進んでいった。天羽は動かずに唇を一文字に結んでいる。一度、教壇の上に登った方がよかったかどうか迷った。近江さんが一瞥して降りたのを合図に、司は足をかけた。

「片岡、これが最後のチャンスだぞ」

両腕を組んだままの天羽がもう一度言う。教壇に上がると同時に天羽も降りた。近江さんの隣りに並んでいる。視界からほんの少しだけ西月さんの様子がうかがえた。ずっとうつむいている。あまりじろじろ見たくなくて、司は最初、うなだれたふりをしてもう一度西月さんの表情を探した。でも見せてくれなかった。教壇の上からも、たぶん天羽のいる下からも、あの人が何を思っているのかは読み取ることができなかった。

「すみません、ごめんなさい」

——僕は、あなたに、話します。

「一年の、六月、あの時盗んだのは、僕です」

西月さんは全く身動きしなかった。

視線を司は教室真後ろのロッカーへそのままぶつけ、あとは言葉のこぼれるのに任せた。女子たちの唇がゆがんでいるのは見て取れた。ただ泉州さんだけが、それとは違った意味合いの瞳でにらみつけてきたのだけが、どう対処していいのかわからなかった。あとで、絶対、つかまれる。

「なんで、あんなことしてしまったのか、僕は、今でもわかりません。けど、やってしまったことは、もう取り戻せない。それに僕は、人間として、最低なことまでしてしまいました。捕まって、それで、ちゃんと、やったことを認めて、謝ればよかったって、今は思う。けど、できなかった。そんなことしたら、死ぬしかないって、思ってた。だから、だから、ずっと今まで先生や、周りの人たちが隠してくれたことに甘えてました。クラスの人たちもみな、僕がしたこと、知っていることはわかっていたけど、ばれない限り、大丈夫だって、そう思っていました」

ここまで司は一気にしゃべりつづけた。時折言葉がくぐもってしまい、鼻水が流れそうになった。泣きたくなかったから必死にがまんした。でも限界はあつという間にやってきて、目の前のクラスメートたちが頭だけ黒豆の集団にしか見えなくなった。どんな顔して聞いているかなんて、わからない。当然、西月さんの様子もうかがえない。

「いじめられなかっただけましだって思ってたし、もうこの学校に居る価値なんてない、って思

ってたし。だから、あきらめていたけど。けど、僕のことを、ひとりだけかばってくれる人がいたから、今は、その人のために」

だいたい色に染まった彼女の優しい表情。

いつも朝一番に声をかけてくれたえくぼのほっぺた。

男子たちの前で激しく司を弁護してくれたあの時の瞳。

曇った視界からは、それしか浮かんでこなかった。もう二度と手に入らない。もう絶対、あきらめるしかない。女子たちには永遠の下着ドロ野郎と軽蔑されるだろう。天羽たちがどんなに応援してくれても、自分の罪を認めてしまった以上、あれは冤罪だなんて言えない。言ってはいけない。でも、たったひとつだけはっきりしていることがある。

——僕は、あの事件のことを聞かれても、もう嘘をつかなくてすむ。

西月さんの前で、少なくとも自分はどうそつき野郎ではない。西月さんにこれ以上、嘘のかばいだてをさせないですむ。

「昨日、天羽から、これが最後のチャンスだって言われて、僕もそう思ったから、だから、ここではっきりと言います。僕は、あの時の犯人で、親に頼んで、もみ消してもらったし、僕のことをかばってくれた人を裏切ってしまったってことです。僕は、最低な奴です。許して、許してください」

——西月さんに、僕は嘘をつかせてしまったんだ。

——みんなの前で、僕が下着ドロじゃないって言わせてしまったんだ。

——もしかしたら、天羽はそれであの人のことを。

——そうしたら、西月さんは泣かないですんだんだ。

——もしかしたら、僕さえ早く、ちゃんと告白しておけば。

狩野先生の前で覚悟しているなんてつらとしたこと言ってしまったくせに。足はがくがくと震え、教卓にしっかりしがみつかないと腰が抜けて尻餅つきそうだった。顔をもう上げられなかった。次に顔を上げたとき、西月さんの笑顔がもう見られなくなることをずっと覚悟していたはずなのに、この日を自分からセッティングさせたくせに。もっと強い奴だと思っていたのに、自分は。どうしてこんなに鼻水が流れるのだろう。言葉が詰まるのだろう。どうして顔を机の上に押し当てないと辛いのだろう。

「片岡、泣く前にもう一つ、言うべきこと、あるだろう」

天羽の声が重く、じわんと耳に響く。

「あんなに、あんなに、西月さんが」

もう、自分が自分のことばを使っているのではない。誰か見知らぬ幽霊か背後霊がしゃべらせているとしか思えなかった。

「僕のことを、濡れ衣だとかばってくれたのに、信じてくれたっていうのに、僕は、僕は」

真っ赤なばらの花を渡した時、微笑みを見せてくれた、あの人へ。

「西月さん、すみません、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

何もかもわからなくなった。とうとう、抑えていた声が洩れた。教卓の木目にほおをつけた



まま、司はしゃくりあげてしまう声を消そうと思った。

「片岡、良く言った！ 男だぞ！」

「よっしゃあ！」

遠くの方から、男子たちからの掛け声が聞こえた。誰かが司の側に近づいてきた気配があった。天羽だと、匂いですぐわかった。

「もう泣くな、もういい。片岡、偉い、お前、ほんと偉いよ。つらかったよな。みじめだったよな。もういい、降りろ、戻れよ席に」

背に回った腕らしきもの。温かかった。教壇からゆるやかに顔を上げさせられた。両手をぶらんと下ろされ、赤い布みたいなものを目の前に差し出された。ハンカチだった。

「ほら、鼻かめ」

すぐに何か間違ったと感じたらしく、

「じゃあ、こっちだな」

と、白っぽいものを手に握らされた。まだ涙を吸い込みすぎた瞳からはすぐにポケットティッシュだということに気付くことができなかった。肩を抱かれたまま、天羽のひっぱって行く場所へ進み、もとの椅子に腰掛けた時、前の席の男子が、

「ほら、鼻かめって」

どこかのサラ金会社が配っているポケットティッシュをもう一つ、机の上に置いた。また斜め前の男子も、後ろの奴も、一枚ずつティッシュを司の前にそっと回してくれた。女子たちの顔なんて見ることもできないまま、司は裸のまま机に置かれたティッシュを一枚ずつ使い、鼻をかみ目を拭った。なんと涙を拭いても視界がはっきりしないまま、司は天羽の、本日ロングホームルーム締め言葉を聞いていた。

「以上だ、ってわけで、本日のロングホームルームは終わるってことで諸君。いいな。今日のこととて片岡のことを叩いたり馬鹿にしたり、無視したりするのはやめにするんだ。俺たちは俺たちのやり方で片岡の罪を受け入れたし、あいつも二年間ずっと、苦しんできたってことがよくわかったって奴だ。さってと、修学旅行も近いことだし、これでひとつのわだかまりってものは消えたってわけですぜ。諸君、いいですか。女子諸君にも告げる！」

——ありがとう、天羽。

——ありがとう、西月さん。

司の目の前に、もう一枚、今度は汚い使いかけのポケットティッシュが置かれた。かなりしわしわのビニール袋で、長い髪の毛つきだった。ありがたく鼻をかませてもらおうと手に取り、何気なく裏の台紙へ眼を留めたとたん、司は一気に鼻水を口から吐きそうになった。

——詳しいことは、放課後。すでにいつもの場所で、いとしのKさまと待ち合わせ済み。逃げてもむだ！

恐る恐るメッセージの相手であろう、彼女を見た。机の側に立ち止まり、

「藪用片付けてから行くから、さっさと帰るんじゃないよ」

鐘が鳴っていた。言葉の主、泉州お嬢は即座にうつむいたまま動けないでいる西月さんの側にかげよって行った。

さっきまで流れていた涙が、いきなり止まる。

——なにが、K「さま」だよ！

さすがに泉州さんを相手にして、司の感じた思いをすべてぶちまける気にはなれず、かといって断るすべも知らず、その日は桂さんの車に乗らずひとりでさっさと部屋に籠った。たぶんいつも司が待ち合わせをしている砂利路のところで、泉州さんは「Kさま」がくるのを待っていたのだろう。中学生と大人のお付き合い……しているかどうかはわからないが……なんて、犯罪だと司は思う。でも、そんなことどうでもいい。夕方、玄関の鍵が開いたのは勘付いたけれども、司はひたすらベットの中で物思いにふけていた。厳密にいうと、自分の中でべらべらとしゃべりだす、不思議な存在の声に耳を傾けていた。

——明日からどうしよう。

天羽を始めとする男子たちが、温かく受け入れてくれたのは感じた。狩野先生が心配そうに帰り、声をかけてくれたのも知っていた。でもうつむくしかなかった。廊下ですれ違った他クラスの女子がこれ見よがしに「ほら、A組でさっき」と噂話をするのもいつものことだ。司なりには覚悟していたことばかりだけれども、やはり怖くて辛いものはある。

——もう、西月さんとは顔を合わせられないよな。

本当は暑くて汗ばんでいて、風呂にすぐ入りたくてならなかったけれども、桂さんが呼びにくるまでは全く何もしたくなかった。だから寝ていた。制服を脱ぎ捨てたまま、枕に顔を押し付けていた。

「司、腹減っただろ、食えよ」

めずらしく桂さんは、机の上にそっと肉じゃがとごはん、オレンジジュースを置いていってくれた。桂さんの作る肉じゃがは、母の手作りよりもずっとおいしい。泉州さんと会ったのか、それとも詳しい話を聞かされたのか。司がしでかした第二の出来事についてどのくらい知っているのか。その辺司にはわからなかった。ただ、放っておいてくれるのだけは助かった。もう一生、顔を外に出したくなかった。

とはいえ、腹の虫が泣き喚くのには勝てず、桂さんが出て行くやいなや大急ぎでかぶりついたのである。

次の日は美術の写生授業だった。青大附中では毎年五月のお天気良い時期に、それぞれ写生会が行われる。各クラス二時間ずつ使って、自分たちの一番好きな場所を押えてエンピツでスケッチを行う。二時間もあると、大抵水彩画は完成することが多い。遅くとも早めに教室に戻り、仕上げをする人もいた。

司は決して写生の授業が嫌いではなかった。堂々とひとりでいられる時間でもあるし、絵も苦手ではなかった。小学校の頃、よく誉めてもらって教室廊下に張り出されたものだった。周平に一步先んじることのできる数少ない科目のひとつでもある。神乃世に父がたまに帰ってくる時泊りに来てくれたデザイナーのお姉さんに教えてもらったのも影響しているのかもしれない。水性

絵の具を油絵ぼく使い、直接チューブから搾り出して画用紙に載せていたり、水でおもいきり薄めて乾いた筆ではいたり、結構いろんな技を教えてもらった。周平の「司の絵ってかっこいいなあ」と感動していた声が忘れられない。

西月さんの方を伺うのは怖くてできなかった。なんとなく天羽も落ち込み気味だったのが気になったけれども、あまりその辺も触れないようにしておいた。他の男子たちも少しだけ、ひそひそと天羽について語っているのが聞こえた。

「近江に振られたのかねえ」

「あとで聞くしかねえな」

——あんなに仲良かったのか。

司はあえて聞かない振りをした。そうなのかもしれないが、今の自分は今日一日を乗り切るだけで精一杯だった。狩野先生がいつものように物静かな声で朝礼を行い、修学旅行に向けての準備について注意を促していた。聞き流しつつ、周りの奴らと合わせるように絵の具セットと、配られた木の画板、それと水入れ一式を持ち、廊下に出た。毎年のことだから、下級生たちのように整列させる必要はなく、みな気分任せて、友だち同志でまとまっていった。

「片岡」

振り返った。後ろにはクラスの男子三人が気まずそうに立ちんぼうしていた。返事のしかたがわからない。

「あのな」

一言ずつ、ぶっきらぼうに投げ出された言葉に司は戸惑いつつ頷いた。

「俺たちのグループに入れ」

最後は命令形だった。そういえば、天羽が修学旅行の班分けでこの三人と一緒にくっつけてくれたと話していた。すっかり忘れていたけれども、それもみな天羽の気遣いなのかもしれない。決して目立つグループではないし、天羽たちのように派手ではないけれども、一年の頃から居場所がない時はこの三人と一緒にまとまるが多かった。しゃべったことはほとんどない。いつもくっつけられる場合は先生や天羽の指示かのどちらかだった。三人側から声を掛けられるというのは、かなりめずらしかった。

「うん、ありがとう」

——やはり、「感謝」しかないだろうな。

そういえば、昨日白いティッシュをくれたのもこの三人だった。思い出した。

中庭で四人、紫陽花が咲いている陰で黙ったまま花のスケッチに専念していた。

もともと核になっている三人も、それほど仲良くおしゃべりをするわけではない。必要以上の会話は交わさない。どうも絵だってそんなに得意ではなさそうだ。2Bのエンピツを持ってくるのを忘れ、HBのシャープを使っていることからして、やる気のなさは明白だった。

一応、司は五本だけ写生用のエンピツを用意していた。ちゃんと小さいエンピツ削りもある。

シャープやHBのエンピツだと、どうしても紙が痛む感じがして、きれいな絵が描き辛い。司のこだわりもある。

ひし形を小さく細かく重ねていき、なんとなく紫陽花の雰囲気を描いてみた後、司は三人の様子をもう一度うかがい、絵の内容を覗き見た。時たまひとりが、話題を投げかけるのだが他のふたりおよび司が乗ってこないのですぐに黙ってしまう。居心地はいいとは言えなかった。司は心もちゆっくりとエンピツで紫陽花の隣りに並んでいる牛みたいな置石と一緒に描いた。できるだけ水を使いたくなかったので、さっそくいつものパターン、チューブから直接絞り出し、乾いた筆で少しずつ画用紙に伸ばしていった。

「おい、片岡、お前すげえ描きかたしてるなあ」

「まじ、ほんと、すげえ」

三人の視線がすうっと伸びて、司の手元にくっついた。

——そんな珍しいことしてないのに。

司からしたらいつものことだ。ただ青大附中では今まであまりやったことがなかっただけだ。以前美術の担当だった駒方先生が今ひとつ司のやり方にいい顔をしていなかったからという理由もあるし、あわせようと思ったらそれなりに水性絵の具で普通の描き方もできたからだった。司は答えずに、百色揃った絵の具の中からちょうどよさげな紫色チューブを取り出した。花の上をなぞって少しずつ白を混ぜていくつもりだった。そうすると、油絵っぽくなってあまり筆でいじらなくても見栄えよくなるのだった。小学校時代の経験だ。

——なんで見てるんだろう。

手が震えそうになるがしくじらないですんだ。あっという間に紫色の絵の具はお尻のところ一杯まで出し終えてしまった。まだ乾いていない表面から筆で上をすくい取り、さらに別の花びらへ重ねて塗っていった。足りなくなったら水で心もち伸ばせばいい。

「すげ、ほんと、お前すげえ」

——司、お前の絵ってさ、かっこいいよなあ。

耳に周平の声が聞こえたような気がした。

司は顔を上げた。すっかり手をお留守にしたまま見とれている三人に軽く頷いて、

「ありがとう」

とだけ答えた。あとはひたすら絵の具の色をどんどん替えて、重ねていくだけだった。夢中になると相手のことがどうでもよくなるのはよくあることだけど、三人のクラスメートがひそひそ「こいつ下着ドロなんだぜ」以外の言葉で、司について語っているのは珍しいことだった。

「こいつ、絵、すげえよな、D組の金沢以上かもしれねえな」

「うんうん、いけてるよな」

誉め言葉をもらえたのは何年ぶりのことだろう。今までは視線を合わせるのが怖くてうつむいていたけれど、今は照れた頬がりんごみたいで恥ずかしいから下を向いていた。

一度、誉めてもらおうとなんだか小骨が取れたみたいで、少しずつ野球のこととか、サッカー、バスケのこととかで会話が進んでいった。気が付くと二時間目もだいぶ過ぎているようだった。時計を見て、誰ともなしに立ち上がった。ちなみに一緒に三人は、ほとんどスケッチのみ、司だけが絵の具の大量消費のおかげもあって、派手な紫陽花と置石の絵を完成させていた。

まあまあの出来かもしれない。

すでにほとんどの連中が戻ってきていた。司たち四人が最後かもしれなかった。みな、仕上げのために水を汲みに行ったり、またこぼしたりしていた。見ると天羽の絵がびしょぬれになっていた。色が淡くついているのは、たぶん仕上げ中だったからだろう。床もかすかに水びかりしていた。

「さっき泉州さんに水掛けられたんだと」

隣りで情報を教えてくれる奴がいた。今までほとんど口を利いたことのない相手だ。

「なぜ」

「まあ、天羽も悪いことしたからなあ。自業自得だよな」

全くわけがわからなかった。司は自分の机にそのまま、完成した絵を画板ごと置いた。

「ほお、片岡、いい絵だなあ」

廊下からやはり画板を首からぶらさげてもどってきた美術の先生。司の絵を見るなり、大げさに両腕を広げて驚いてみせた。

「色のセンスもいいけどな、直接チューブから絞り出したのか」

「はい」

答え方がわからない。

「花と石の構図も良く出来ているなあ。お前、才能あるぞ！」

頭を軽くぐりぐりやられた。他の連中に「来い来い」と目配せをして、司の机に生徒を集めた

。

「こういう絵はな、好き嫌いが分かれる。だが、私は大好きだぞ！」

もう一度、今度は背中をはたかれた。

「ありがとうございます」

口の中でもごもご言った。いったいどうしたのだろう。めったに誉められたことなんてないのに、今日に限ってクラスの男子から、そして美術の先生から。

「ほら、女子たちも見てみる。ほら、近づいてみる」

近づいてきたのは泉州さんだけだった。他の女子たちの反応は司の想像した通りだった。ひそひそと、今度は「あの下着ドロがさあ」と聞こえよがしの言葉ばかりだった。「いいかげんにしなさいよ！」と叫ぶ、あの人の声も聞こえなかった。しかたないことだ。司は紫陽花の花だけを見つめて、唇を噛んだ。美術の先生が司の絵を画板からはずし、わざわざ黒板まで持って行ってよさを語りつづける間、司は一点の空白を見つけていた。

——どうして気付かなかったんだろう。

女子たちがざわめいているのを一喝する先生。

「いったいどうしたんだ！ このクラス、まだ戻ってきてない奴がいるのか！」

ふうふうと熱いお茶を冷ますようなしぐさで、画用紙に息を吹きかけている天羽が司を見た。目が合った。司に向かい、親指を立てて、廊下を指した。ほんの一瞬のしぐさだった。

——天羽、どうした。

既に自分の席に戻り、肩を怒らせている泉州さんが司にぐいと唇を曲げてみせた。昨日おっぼ

といて帰ったことに腹を立てているのだろう。その件については謝ったほうがいいだろう。

司はもう一度、廊下から二列目、前から三番目の席が空いているのを確かめた。

美術の時間限定スターに祭り上げられてしまった。結局、司の描いた「紫陽花と置石」の図は先生によって持っていかれてしまった。あとで返してくれるとは言ってくれたけれども、そんなのはどうでもいい。男子たちも口々に「かっこいいぜ」と感嘆の声の嵐だった。言われなれていない誉め言葉をむずがゆく感じながら、司は廊下に出た。天羽の側をわざと通った。後ろから泉州さんに呼び止められそうになったが、そちらは無視することにした。

天羽はブレザーを脱いだまま、男子トイレの方へ司を促した。ゆっくり歩いた。

「あのさ、天羽」

「お前すげえよ、どんどんいいとこ、見せてやれ」

目線をあわせず、真っ正面をにらむように、ズボンのポケットにげんこをつっこんだまま天羽は歩いた。独り言を言うように、

「片岡、今の要領だ。お前、それだけの頭も能力もあるんだ。自信持て」

言葉はかすれていた。

「美術の先生に何か、僕のこと言ってくれたのか？」

「なわけねえだろ。俺が準備したのは別の方だ。お前の天才的絵の才能、あれはガチンコだ」

——ガチンコ？

言っている意味がさらにわけわからなくなる。男子トイレに入り、素早く朝顔ですることを済ませる。さすがに並んでいる間はしゃべらなかつたが、扉を開けようとしたとたん、肩に手を置かれた。

「耳貸せ」

貸すものにも、天羽の口が側に来ている。司は身体をこわばらせた。

「今すぐ裏の林へ行け」

「林？」

いつも桂さんと待ち合わせする砂利路近くの林のことだろうか。

「なんで？」

「行けばわかる」

「はっきり言われないと僕もわからないよ」

「そんなおたんこなすかよ、お前」

はああ、とまた大げさなため息を吐いた天羽は、

「迎えに行ってやれよ」

「迎えって？」

さらにわけがわからなくなり、司は頭をかいた。背中越しにA組の男子たちが天羽へ声をかけていき、他のクラスの男子たちにも何か話し掛けられたりして、途中聞き取れなかった。結局途中で鐘が鳴ってしまい、天羽の言いたいことは半分以上、理解不能のまま終わった。

「ったく、ぼんぼん、困った奴だぜ」

三時間目は理科だ。実験はない。教科書だ。

やはり西月さんは戻ってきていなかった。絵を描くのに熱中していたのかもしれない、と司は思ったりしたけれども、女子たちはそうでなかったようだった。もともと女子の私語が多いクラスではなかったけれども、この時間は半端じゃなかった。

「どいつもこいつも、夏が近づいたから頭のねじが緩んだのか！　しゃべるのやめ！」

みな、視線が西月さんの席に向き、中には指差しをしてささやきどころか、普通の会話状態でおしゃべりする女子も五名ほど。みな、先生に怒鳴られて廊下へ出された。五人も廊下に出されるなんてめったにない。女子十四人うちひとり行方不明、という状態だと、ただ今残っているのは八名しかいない女子。数少ない着席者の泉州さんはきょろきょろと回りを見渡していた。かなりこれも落ち着きない態度だと思われるだろう。注意されるまえに手を挙げた。

「どうした、泉州さん」

いらいらしていた理科の先生は、大きくため息を吐いた後に尋ねた。泉州さんも立ち上がると振り返るような格好で、

「西月さんが戻ってこないんです。先生、私、心配なんで外、見に行っていていいですか？」

いきなり切り込んだ。

——泉州さんも知らないってことか？

司は教科書の上に手を置いた。ゆっくりと握り締めた。数少ない女子たちが黙りこくる。

「一、二時間目は来ていたのかい？」

黒板を叩いた手で、先生は重々しく質問した。

「はい、写生の間はいました。けど、まだ戻ってきてないんです」

少し戸惑った風だった。しばらく黙って時計を見た後、頷いて教壇から降りた。

「よろしい、それなら狩野先生に知らせておいたほうがいいから、少し待ってなさい」

廊下に出ようとした先生は、一步、通路側に足を踏み出そうとした泉州さんを制止するのを忘れなかった。

「泉州さんは行かなくていいよ」

思いっきりむっとした顔でもって、泉州さんは席についた。天羽と近江さんの方を真四角な顔でにらみつけた後、最後に司へ唇を曲げてみせた。あれが実は、親愛表現なのだと気付いたのは、つい最近のことである。知ったことじゃない。

——天羽、まさか。

先生がいなくなったとたんぼわっとため息が洩れ、一気にざわめきが爆発した。女子と男子が一部例外を除いて二手に分かれた。司は取り残されていた。ただ、主のいない机にじっと視線をさまよわせるだけだった。天羽がさっきトイレでささやいた、謎の言葉が蘇ってきた。

——今すぐ裏の林へ行け。

——迎えに行ってもやれよ。



西月さんが今、教室にいないということと繋がりがあのだろうか。

どうして自分は、気付かなかっただろう。

天羽と西月さんがどうして繋がらなかったのだろう。

天羽がちゃんとヒントを残してくれたのに。

汗ばんだ背中が冷えてきた。風が気持ちよく教室を通りぬけた。女子側の塊からは、

「小春ちゃん、戻ってこないって変だよな！」

「うん、私も変だと思うんだ。だって小春ちゃん、授業をサボってしまう子じゃないもん。真面目だしね」

明らかに西月さんを心配する声がある。真中に入って真剣に話をしているのは泉州さんだ。

男子側の声は心持ち小さい。聞こえてこない。

司は時計を見た。デジタル文字で十時三十分と出ていた。あと二十分くらいで三時間目は終わる。今なら教室を飛び出しても気付かれない。かすかに男子グループ、主に天羽を囲んだ数人の声が耳に入ってきた。

「女子が団結した時は怖いものなしだからなあ。間違っていることを、あいつら集団の論理で、無理やり押し付けるからなあ」

「『一途』とか『一生懸命』とかいう言葉でね。『一途』な思いは、暴力と一緒によ」 女子の声だった。近江さんだけが、男子グループの席に混じって、けらけらと笑い出した。一瞬静まり女子たちが近江さんを見据えた。なんか用？という顔で受け止める近江さんは落ち着き払っていた。同時に前の扉から理科の先生が戻ってきた。みなが自分の席に戻るがたがた音に混じって、司はすばやく後ろ扉から抜け出した。天羽や泉州さんが気が付いていたかどうかはわからない。

——気付けよな、気付けよな！

責める相手は天羽ではない、自分だった。

何が起こったかはわからない。めったにないベタ誉めの嵐で舞い上がり、西月さんが戻っていないことにずっと後まで気付かなかった自分が愚かなだけだ。天羽も詳しいことは話さなかったし、司も正直なところ何が起こったのかはわからない。たぶん、司の想像によるとふたりっきりにさせてやろうという「いき」な計らいをしてくれたのかもしれない。前回のばらの花の告白といい、昨日の下着ドロ告白といい、舞台を作るのが天羽は得意だ。

もしかして、司のことを待つように言ってくれたのだろうか。

いや、昨日の今日だ、そんなことはないだろう。

正反対の想像に揺れて、林に入ろうとするところで立ち止まった。誰も追いかけてくる気配がないとこみると、理科の授業は普通に行われているのだろう。一番手ごわいのは泉州さんに追いかけることだけれども、それも今のところなさそうだ。狩野先生にも西月さんが戻ってこないと報告された以上、司が動かないとせっかくのチャンスも台無しになってしまう。

——天羽、ほんと、なんで僕のためなんかこんなによくしてくれるんだろう？

今朝、なんとなくだけど天羽は元気がなかったように思う。近江さんに話し掛けられてもいつもと違って無言で促していたような気がする。でも、写生の後はすぐによりを戻したようだ。思うに天羽は、自分が近江さんとうまくいったことを記念して司にも幸せをおすそ分けしたかったのではないだろうか。小学校時代、両親にも司はよく言われていた。

「自分が嬉しくなったり、幸せだなんて思ったら、みんなに喜びを分けてあげるのよ。そうすると、いい気持ちが倍以上になって帰ってくるんだからね」

たいがい周平や、小学校時代のクラスメイトたちにやることだったけれども、そんなのはどうでもいい。天羽も同じ考えをきつと持っているに違いない。けどどしつこいようだが、昨日の今日のことである。下着ドロを認めてしまい、女子たちからは机をさらに離されている自分を、果たして西月さんは認めてくれるのだろうか。わからない。

——僕のことを、待っているのかな？

立ち止まるたび、天にも昇る夢を思い、すぐに振り切る。

——そんなことはないよ、絶対、そんなことはないよ。

いい想像ばかりしていて、それが裏目に出たら、地獄じゃないか。

天を仰いでぐっと目を閉じた。暗いだいたい色の光がまぶたにほとぼしった。

——天羽、ありがとう。

——僕なんかのために、こんなに、こんなに。

——ちゃんと僕、これから、クラスのために、ううん、みんなのために、ううん、天羽に恩返しするよ。

林の奥まで進んだ。学校で「夜、女生徒は特に通ることを厳禁する」と通達の出ているところだった。司からしたら毎日通っている路だった。両手を広げてもかかえきれない白樺の木や、お正月に出す屏風に描かれているような松の木、ときたまマツボックリに躓いたりして歩いていく。風が高い枝をしゃらしゃらと鳴らしている。この下に西月さんがいて、同じ音を聴いているのだと思うたび、司は息苦しくなった。一時間近くも待たせてしまったのだから、あやまらなくちゃいけない。きっと狩野先生に怒られるだろうから、一緒にあやまろうと思う。司は一年のあの事件から怒られなれている。でも、西月さんは元評議委員の優等生。きっと怖いに決まっている。

——僕にできることなら、何でもするから。待たせてごめん。

風と木のざわめきにかすれるように、かすかな違和感を感じた。

——あれ、今、「くっ」って聞こえたような気、するんだけど。

ぐるっと片足を軸にしてぐるっと回ってみた。もう一度、風に混じって同じく、「ひっ」と違和感のある音がある。

司は目を閉じて、両手を象のように大きくそばだててみた。

もう一度、もう一度。

——泣いてる。

今度は間違えようがなかった。身体をできるだけ動かさないようにして、身体がちょうど隠れる松の大木に身を寄せた。耳を当てると樹液が流れる音が聞こえる。そのまま、別の音を聞き出そうとした。斜め前に種類はわからないが少し小ぶりの細い木がそびえている。その根元に、白いものをスカートの下からちらつかせながら、誰かが座っていた。顔は見えなかった。膝までスカートをたくし上げるような格好で安座したまましゃくり上げる声が司の耳には確かに届いた。

——西月さんが、泣いてる。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。たぶんここから司の姿は見えないだろう。声が聞こえるほど近いのだけれども、姿をすっぽり隠すくらい松の木はでかかった。司からは西月さんのしぐさ、そしてスカートの中身も丸見えだった。かえって動けなかった。側においていた写生道具一式を投げ出したまま、一度周りを見渡し誰もいないことを確認して、さらに激しくしゃくりあげた。数回周りを見てはその繰り返しだった。遠くを見て、何かを拾って抱きしめるようなしぐさをしては、また顔を覆った。誰かに訴えたくてならないのだけれど、その相手がいらない、そう言いたげだった。

時計のアラームが鳴らないように設定しておいてよかった。司はつくづくそう思った。 —— どうすればいいんだろう。

また、西月さんが校舎側を眺めるようなしぐさをして、いったん押し殺した声をまた張り上げるようにして涙を流している。

スカートに目線が行きそうになるのをこらえながら、大木の幹を司は抱きしめた。

物音立てないように樹液の流れる音を聞いていた。すすり泣きの声が途切れてはまた始まり、の繰り返しで司も、動くのがためられた。かといっていつまでも蝉のように松の木へへばりついているわけにもいかない。むずむずする胸のあたりをそっと離し、顔を覗かせてみた。幸い気付いていないようすだった。

——西月さん、どうしたんだろう。

目の前をよじ登っていく白い虫に話し掛けたって答えが出てくるわけがない。

司に見えているのは、西月さんがどうしようもなく傷ついていることと、天羽がどうやら絡んでいるらしいという推測だけだ。西月さんを探しに行くように促したのは天羽だから、そのきっかけとなる出来事くらいは知っていたに違いない。でも、なんでだろう。なぜ司ひとり、授業さぼらせてまで行かせようとしたのだろう。司としては、いつものように天羽の思いやり舞台なのだと思い込んでいたが、ここまで西月さんが泣きじゃくっているのを見ると向こうには納得させられたものではないらしい。

——今、僕がいたら、まずいよな。

なんとなくそんな気がした。天羽が側にいたら詳しい事情を聞き出すべく、胸倉つかんで引っ張り出していただろうけれども、校舎ははるか遠く。A組の教室に声はおろかテレパシーも届きやしない。司は足下の雑草が擦れて西月さんに気付かれぬよう、そっと地べたに腰を下ろした。

——何かあったんだろうなあ。やはり。

昨日、司が下着ドロについて告白したことがかなり響いている可能性はあるだろう。泉州お嬢にはその件に関する感想を聞いていないけれども、たぶん女子には鬨感だったということくらい想像はついている。いや、実際すれ違った女子たちの態度は露骨に、「近寄るな、最低男」だった。二年前から変わっていないといえばそれまでだが。男子たちがうまくフォローしてくれたのと、写生の絵の先生大絶賛によって少しずつ、人間関係が動いてきているような気はする。

——他の人たちに、僕が、ってこと、知られたんだろうか。

あまり考えたくないことだが、西月さんへの想いが他の女子たちにばれてしまったなんてことはないだろうか。昨日もできるだけ恋心を隠すよう努力はしたのだ。天羽や泉州さんにはばれてしまっているけれども、たぶん他の女子たちには、と思っていた。でも、もし昨日のことで「あの下着ドロに思われているかわい そうな西月さん」と言われていじめられてしまったとしたら……。変態に思われるなんてきっと、西月さんにとっては恥、以外の何ものでもないだろう。今、松の木の陰に隠れて、べたっと座り込んでいる司がその変態野郎だということを認めなくてはなるまい。司は髪の毛をかき回した。もちろん、音を立てないように指の腹で。

——どうすればいいんだよ！

風がふくらみもって枝を揺らした。

——僕が、今、天羽だったら。

がっちりした体格、いつも笑顔で西月さんに接していた頃の天羽を思い出した。

きっと、今すぐ来て欲しいのは二年冬休み前までの天羽のはずだ。

なのに、今いるのは、下着ドロ変態野郎の司だけだ。

——すぐに、走っていけるのに。

歯噛みしてしばらくは動かないままでいるしかなかった。このまま黙っているのも限界だろう。西月さんが全く移動しようとしなから、司がこっそり抜け出すしかない。でも少し動くだけでも、風の方が変わりそうだし、気配を勘付かれてしまいそうだ。四時間目のチャイムが鳴るまで司は、身体を小さくしてうずくまるだけだった。

お腹がすいた。ぎゅっとみぞおちのあたりがへこむような感触あり。

「誰か、いるの」

西月さんが初めて言葉を発した。

——まずい、気付かれた。

ずっと物音させないようにしてきたのに。司はもう一度木の幹に耳を押し当て、木と一体化しようとした。カメレオン化したかった。でも西月さんの声はさらに続いた。

「見てるの？」

涙声を押え、自然な風に聞こえるよう、気遣った感じだった。

——どうしよう、出れないよ。

ちょうど司が隠れている松の木からは、西月さんの座り込んでいる姿が丸見えだった。視力のいい司だけに、スカートの裾を半分めくり上げた状態というのわかる。目線に困る。一切乱れた格好を整えようとしな西月さんに、ふといらだちを覚えた。

——だから、あの、なんとかしてよな。

なにをなんとかしてほしいというわけではなく、司は松の木を仰ぎ見た。まだ、たっぷりと揺れている。もし天羽の格好をした司だとしたら、ためらうことなく近づいていくことができるだろう。

——行けないよ、やっぱり。

ゆっくりと身体を木から引き離れた。両腕で幹を押さえつけるようにしてきちんと立った。自分ではだめなのだという、結論だけが伝わっている。

司は大きく息を吸い込んだ。肩に力を入れ、木の陰から一歩踏み出した。

斜め前、西月さんの座り込んでいる木の側に二歩、近づいた。十分話し声の届くであろう位置まで近づいた。

「今から、天羽と泉州さん、呼んでくるから！」

目の前の西月さんは両手を口に当てて目をひんむいていた。

きっと想像していなかったに違いない。やはり顔を出さないで校舎に走ればよかったと、瞬間司は後悔した。あわあわと後ろずさりするのは、やはり司でなければよかったのという想いだ

ろうか。目の前で突きつけられるとやはり苦しい。スカートの裾に気がついたらしく、あわてて膝まで隠そうとした。

「かたおか、くん？」

名前を呼ばれた。後ろを見ずに走り出した。

これ以上真顔で、問われるのだけは避けたかった。

——天羽、いったいなんだよ！

腹が立っているのに腹が空く。猛烈に食いたくてならない。生徒玄関から流れてくるのはたぶんカレールーのはず。いつものように腹に流し込みたい。また胃のあたりがくうとつぼまった。さっきまで緑の色に染まっていた視界は、静かに薄黄色に戻っていった。——四時間目。社会だ。

腕時計を目に近づけた。デジタルに光る数字が太陽のまたたきで揺れて見えなかった。

——天羽を呼ぶか。

西月さんには言い残してきたけれど、天羽を連れていった方がいいのだろうか。口で呼吸してしばし一考。却下することができない。

——とにかく聞くしかない。

司はうつむきながら玄関のすのこに乗った。

先生たちには気づかれずにすんだ。早めに給食を取りに行く他クラスの男子たちが廊下を走っていくのが見えた程度だった。もう一度腕時計を見た。ちょうど四時間目終了の鐘がなった。まだクラスの連中は通っていない。天羽が給食当番だったら捕まえて話を聞くのだから。司はひとり、ふるえた。武者震いなのかもしれないと、ちょこっとだけ思った。A組の女子たちが数人横切ったが、司はあえて隠れることにした。泉州さん以外の人にはまだ、近づかない方がよさそうだった。

しかし、天羽も泉州さんも通らなかった。

——どうしてだよ！

西月さんがあれだけ動揺しているというのに、原因をおそらく作ったであろう天羽は、心配にならないのだろうか。たとえただの「元彼女」であろうともだ。それに泉州さんも「親友」である以上それなりに気になったりしないのだろうか。

——誰か早く気付けよ！

ひとり罵るものの、全く気配がなかった。ずっと靴箱の近くで上履きのまま出たり隠れたりしているうちに身体が冷えて、寒くなってきた。思ったよりも汗をかいていたらしい。各教室ではおいしそうなおいが漂いはじめている。あまり学校のカレーは好きではない。桂さんの連れて行ってくれる屋台のおいしい店を知っているから。でも、味よりも腹の虫の方が猛烈に訴え強く働きかけてきていた。きっと西月さんもお腹すかせているのだろう。たったひとり、あの林にいるのならば。

しばらく司は腹をさすり、つばを飲み込んでいた。給食時間は二十分間。その後はダッシュでみな体育館へ向かう。男子たちはみな体育館でバスケットボールをやるからだった。司はほ

とんど混じったことがないけれども。腹ごなしにはちょうどいい。

空腹最高潮に達した段階で司は階段へと足を向けることにした。カレーの付け合せはきっと、果物のヨーグルト和えだ。食べたい。食いたい。そして、話したい。

ちょうど給食当番が食器や給食バケツの空をぶら下げて廊下に出てきたのとすれ違った。女子が帰りは持っていきらしい。司をちらっと、まるで食べ終わった食事のあとを眺めるみたいに、ねめつけて去った。ということはまだ、天羽もいるのだろう。泉州さんもいるのだろう。順番間違えるとごちゃごちゃになるのは目に見えているので、まずは天羽を探した。反対側の階段を狩野先生が降りていくのを待って、ゆっくりと司は扉の影に立った。覗き込んだところ、勢いよく何人かの男子たちが駆け下りていった。司にちらりと目をやった。何も言わなかった。一、二時間目の美術の授業で「すげーすげー」と連呼してくれた場面などとっくの昔に忘れていたのようだった。

そんなのはどうでもいい、まずは天羽だ。のっそりと現れたところを、司は物言わずに二の腕をつかんだ。芝居がかった風にびくん、と背をのけぞらせた。ひとりで出てきたのは幸いだ。

「天羽、ちょっと来い」

「会ったのか」

——やはりこいつ、わかっているんだよ。

いやな予感と、まだ信じたい気持ち。交差してまた胃のところがちくちくした。

「聞きたいことあるんだ」

「わあ、来い」

司としては精一杯虚勢をはったつもりなのだが、天羽は全く動じていなかった。

たぶん、西月さんの涙の原因は天羽なのだ、と確信した。

——西月さんの前に連れていった方、いいのかな。

やめたほうよさそうだ。司はすぐに結論を出した。つかんでいた自分の手はすぐに解かれ、その代わり天羽が先頭切って窓辺に立った。ポケットから手を出して、窓縁へ手をかけた。軽く外へぶら下げた。

「片岡、お前の言いたいことはわかっている」

——わかっているってなにをだよ！

「けど、俺はやったことを一切、後悔してないよ」

——何をやったんだよ何を！

「だから、あとはお前と西月のしたいようにしてくれ」

——だから、どうすればいいんだよ！

すでに天羽は司が、西月さんからすべてを聞きだして、ぶち切れたのだと思い込んでいるようだった。違う。司はただ、西月さんが激しく泣きじゃくっているのを見ただけだ。天羽がもしかしたら司を勧めてくれたがゆえに傷ついたのであるかもしれない。それとも別のことで……まずありえないだろうが嬉し泣き……泣いていたのかもしれない。プラスの方向へ少しでも答えをずらしたい。気持ちが残っている。なのに天羽はどんどんマイナスへ押し込んでいこうとする。耳をふさぎたかった。でも司は聞いていた。

「いったい、何をしたんだよ」

「本当のことを話した、それだけだ」

「本当のことってなんだよ！」

むせて咳き込んだ。

「俺がなぜ、西月のことを好きになれないか、その理由だ」

風が窓辺から天羽の髪の毛を思いっきりぐしゃぐしゃにしていた。

「今話したことは、あいつに渡したテープに録音してあるんだ。お前ら仲良くなってから、聞かせてもらえ。その段階で、片岡」

「録音って、いったいわけわかんないよ！ 天羽、お前いったい西月さんと」

意味のわからない言葉ばかりが飛び交う。こいつの頭、いったいどうなっているのかわからない。食い下がる司を遮るように手を振り、今度はきつとした眼で答えた。

「とことん、俺を殴りに来い。お前にはそれを西月の前できちんとやる、義務がある」

「だからわけわかんないよ！」

もう一度、小さな声で「わけわかんないよ」とつぶやいた。にっと笑い天羽は、肩を二回そつと叩いた。

「早くあいつの近くに行ってやれ。給食のパンと牛乳と、あとなんかかんか、そのまんま机に置いてあるから、持ってってやれよ。お前の本当にいい奴だってとこ、ちゃんとぶつけてやれよ」

最後まで意味不明の言葉を吐きながら、天羽はゆったりと他のクラスへ入っていった。

しばらく放心していた。口の中に風の吹き寄せる砂が入り、初めて自分が口をぽかんとあけていたことに気付いた。お腹がまた鳴った。

はっきり言って天羽の言いたいことを掴むのが骨だった。西月さんに「好きになれない理由」を告げ、それで泣かせてしまったということ。このあたりは理解できる。いわゆる「振られて泣いた」ということなのだろう。でも、なぜ「テープに録音」なんて言うんだろう？ まさか、その一部始終を西月さんの前でマイクテープか何か用意して録音させたのだろうか。異常だ。まさか天羽がそこまで恐ろしいことするわけない。たぶん冗談だろう。それになんだ？ 「俺を殴りに来い」って？ なんて殴らなくちゃいけないんだ？ それが「義務」なのか？ 体育で剣道か柔道をやる時に対決すれば十分じゃないか。天羽、妙にエキサイトしている。

——けど、やっぱりあいつ、僕のために。

たったひとつだけはっきりしていたのは、天羽が司を応援してくれていることだろうか。西月さんは傷つけてしまったかもしれない。でも天羽は全力尽くして、司のことを守り立てようとしてくれているのだろう。あいつの脳回線がどうなっているのかは別としても、そのことだけは素直に受取るしかないと思ふ。

もう一度、今度は身体を雑巾絞りされるような、強烈な胃の絞込み。

天羽の最後の言葉にぴんときた。

——そうだよそうだよ！ 今から行かなくちゃ！

西月さんはまだあの林にいるはずだ。どういう事情かわからないけれど、たぶん天羽にあらた



めて別れを告げられたショックで泣いているのかもしれないけれど。だからといって司のことを好きになってほしいなんて、思っていないけど。でも。

——やること、やらなくちゃ。

まずは給食だ。教室に入った。泉州さんがいた。近江さんもいた。

泉州さんはぼさぼさの頭をかき回しながら、ふたりの女子と話をしていた。近江さんはひとりで窓の外を眺めていた。司が入ってきたのに気が付いていないらしかった。ひとりでいたら話し掛けられるのだが、その辺がタイミング悪い。司はすばやく自分の席に向かい、置かれている紙パックの牛乳をブレザー右ポケットへ、左ポケットにコッペパンを詰め込んだ。西月さんの机には何も置いていなかった。

ちらりと近江さんが司をにらみつけて、すぐに逸らした。気にしている暇はない。

本当はすぐにぺろっと食べてしまいたかったけれど、西月さんの分がないのならばしかたない。これ、あげよう。背を向けて暗くひそひそ話に没頭している泉州さんに近づくべきか否か迷い、気持ちを整えるためにかばんを机に置いた。置くと今度は中に教科書をしまいたくなる。しまうと今度は、そのまま帰りたくなる。自然な反応だった。

——そうしよう。

心にささやき司は、かばんをぶらさげた。司の気配に気付かない泉州さんを無視したら、きっとまた桂さんにいろいろと告げ口される可能性大だし、なによりもこの人は西月さんの親友だ。他の女子たちのいる中での泉州さんがどういう態度をとるかは想像つかなかった。

「泉州さん」

小さな声で背中に声をかけた。振り向くと同時に白い埃のようなものが、光に混じってぱらぱらと振った。

「あれ、天才画伯、どうしたのよ」

いつもの泉州さん口調ではない。司と桂さんを交えて言いたい放題やっている時とはやはり、違う。見ると他の女子ふたりは胡散臭そうな目で司を眺めていた。こっちに来るなとばかりにだった。やはり女子同士とのつきあいは違うのかもしれない。あまり詳しいことは話せないだろう。司は目の前ふたりの女子視線をあえて無視して、声を落とした。

「西月さん、裏の林にいる。今から、もう一度、行ってくる」

「え、それほんとなの！」

女子同士用の仮面みたいなもの、ぱらりと外れた。司たちと一緒にいる泉州さんの顔がひんむけた。大きく頷いた。言葉を選びつつ、曖昧に、でも伝えることは伝えたい。

「けど僕だけじゃだめだから、泉州さんもこれから来て」

「どこによどこに！」

「Kさんがいつもくるとこだよ」

この辺は隠語を使う。

「とにかく今から、給食持っていくから、泉州さん、すぐに来てほしいんだ。天羽を連れていくこと、できないみたいだから」

最後は自分でもうまくいえないことばかりだった。泉州さんにしか聞こえないように話したつもりだった。本当は西月さんがこの世の終りに近い状態で泣きじゃくっていることまで伝えたかったのだけれども、やはり言えない。帰ってきた時傷つくのが目に見えている。

「わかった追っかける。先生とこと、あともういっこ、やることあるからさ」

大至急女子たち用の仮面を被り直すようにして、泉州さんは司に、「行きな！」と一声かけた。ポケットの牛乳が爆発しないようにそっと押えながら、司は駆け足で教室を飛び出した。

昼休みが終わったのをチャイムで確認した。まだ泉州さんは追いかけてこなかった。

ある程度のことは伝わっただろうけれど、たぶん西月さんが戻ることのできない理由までは勘付いていないのかもしれない。

天羽を連れていけない状態、ということは傷つけた当人が天羽であるということ。

司ではだめなのかわかっているということは、女子の泉州さんが一番温かい傷の手当ての仕方を知っているということ。

お腹がすいているだろうから、大至急給食を持っていかなくちゃいけない、というのが司の判断。

めいっぱい走ってきた。どうすればいいか司もよくわからないけれども、とりあえず必要なのは、腹ごしらえだ。へろへろになりそうな足を叱りつけつつ、松の大木側の西月さんを探した。もしかしたらいなくなってしまうかもしれない。一人で消えているかもしれない、不安もないわけじゃなかった。一刻も早く、泉州さんとバトンタッチしてほしかった。——泉州さん、遅いよ。あまり遅かったら今度、桂さんに泉州さんの悪口いっぱい言っちゃおうぞ！

昼間の木々は影が別方向を向いていた。ややまっすぐだった。いわゆる南中高度の時刻なのだろうか。理科を真面目にやっていない司にはわからない。いきなりげじげじが木の枝から落ちてきたりとぎょっとしたりもしたが、すぐに見つけることができた。同じ松の木近く、座り込んでいた。スカートはきちんと調べられていた。膝を両手で抱えるようにして、あどけなく膝山に目を当てていた。司を見つけ、明らかに作り笑い、というものを浮かべた。

——やっぱり天羽の方がほんとはよかったんだ。

しゃっと葉っぱで心をこすられる痛みあり。ポケットから、白色爆発することなく運んできた真四角の牛乳パックと、つぶれかけたコッペパンを取り出した。かばんを脇に挟み、足下に落とした。

「給食、終わっちゃった。だから、これ」

食べて、とはつなげられなかった。きょとんとした目、だいぶ充血気味だが、目は乾いていた。膝のところに両手をお皿のように出して受け取り、司を見た。やっぱり潤んでいた。

「今、泉州さん、来るから。あの、先生に言ってから来るって」

「先生に？」

かすかにおびえの影があり。

「でない泉州さん、五時間目さぼりになるから。三時間目も泉州さん、探しに行くって言ってたけど、先生にやめられて言われたから」

言ったあとでどんどん後悔が溜まってきた。もっと西月さんが笑うようなお笑いのネタ、仕込んでおけばよかった。天羽みたいに辛い時でも笑わせられるだけのネタがあればよかったのにと。そういえば泉州さんから聞いたけど、西月さんのお父さんは高校野球の選手だったんだとかいう話だ。選抜高校野球の話でもしたら盛り上がるだろうか。頭の中ではいろいろな案が思い浮かぶのだけれども、口に出せるのはほんのわずかだ。

一度西月さんへパンと牛乳を渡した後、すぐ立ち上がったのは、近づきすぎたから。

ただでさえ全力疾走して息が上がっているのに、まんまるいほっぺたを半径五十センチ以内で見つめてしまったら司の神経が完全に別モードへ入ってしまった。かえってどもってしまう。

「あの、だから、泉州さん来るまで、待ってて、そしたら僕、いなくなるから」

へどもどしすぎているのが自分でもわかる。情けない。

西月さんはしばらく両手に載ったつぶれたコッペパンと牛乳を見つめた。唇をかみ締めていた。うつむくようにして、目をぎゅぐゅとつぶった。スカート、靴、靴下、裾からべっとりとドロがついていた。頬には白いものがくっついていていた。

「みんな、知ってるのね」

視線は向けられていないけれど、司への言葉だとすぐに気付いた。

「天羽が教えてくれたから、あの」

——言ってどうするんだよ僕ってば！

「天羽くんが、言ったのね」

西月さんはパンと牛乳を脇に置いた。

「私のこと、最初から嫌いだったって、言ったのね」

ふたたび、声が波打ち、ゆがみ、かすれた。

「天羽くんのいないところへ、行きたい」

大きくしゃくりあげた。もう一度涙と吐息の混じった声もれた。大きかった。

「誰もいないところへ、私をどこかに連れて行って」

あとは声にならなかった。司の前で西月さんは、両頬を押えるようにえっ、えっと繰り返し息を吐いた。

——教室に戻りたくないんだ。そうだよなあ。

泣いてしまった女子を前にどうすればいいのか、司にも見当はつかなかった。

ただ、言葉通りに感情を追うだけだった。

三時間前に振った相手と、また目を兎さん状態にして顔を合わせたいとは思わないだろう。

天羽もこの調子だと相当きついことを言ったのだろう。

司とくっつけたいという親心もあったのだろうけれどもだ。

ただ、西月さんはもう青大附中の三年A組に戻りたくないと言っている。永遠に、というわけではないだろう。実は川に飛び込むとか自殺とかそういうことを一番恐れていた。西月さんが今、ここで、ちゃんと呼吸しているのならばもう怖いものはない。

司ももう、下着ドロという罪を犯してしまっている。これ以上罪が増えることなんて怖くない

——連れてっっちゃおうか。

かちりと掛け金が外れた音が、したような気がする。

「西月さん」

司はしゃがみこんだ。正座して、両手を土下座するようについた。

「本当に、知らないところに連れて行っていい？」

まんまるな瞳、やわらかなほっぺたが揺れて司に留まった。涙目がゆっくりと正面を向き、こっくりと頷いた。

——本当だよ。本当に。

戸惑いがないとは言わない。でも司の口の方が勝手に反応してしまった。

「僕で、かまわない？」

迷うようにうつむいて、また元に戻り、唇を結んだ。頷いたりはしなかった。答えだけを返してくれた。

「他の人が来ないうちに、どこか、私を連れて行って」

司は西月さんから視線を逸らさず、お奉行さまの前でお白州に座る罪人のように、ははあと頭を下げた。

西月さんが放り出したままの絵の具入れを司は抱え、自分のかばんと一緒にぶら下げた。さっきから腹の虫は泣きっぱなしで死にそうだ。でも、目的地にたどり着いたらいやと言うほど食べるはずだ。

「一度、僕のうちに行って、それからタクシー呼ぶから」

「え？」

首をかしげる西月さん。

「それから、誘拐だと思われないように、うちに電話かけておいた方がいいと思う。僕もこれから、うちに電話かけておくから」

全くわけがわからない顔で西月さんは立ち止まった。すぐに司の後を追ってきた。

——僕がつれていけるところで、誰も西月さんの知っている人がいないところで、天羽がいないところ。

「どこへ連れて行くの？」

不安げな声。

「うん、僕の家。到着したらうちから電話かけて、連絡しておけば怒られないよきっと」 腹を何度かさすりつつ、虫に告げた。

——僕は、神乃世へ、あなたを連れていきます。

まずうちに戻り、貯金箱と通帳、あと桂さんへの無断帰省ごめんなさい手紙、および母と周平への電話を入れようと決めた。西月さんにはほんの少しだけ玄関先で待ってもらおう。もし

西月さんが気に入ってくれたら、神乃世に泊ったっていい。明日の朝一番で桂さんに迎えに来てもらって学校に行ってもいい。前もって母さんに連絡しておけば、きっと料理もおいしいもの出してくれるに決まっている。いきなり学校さぼって怒られるかもしれないけど、西月さんをこのまま放っておくなんてことしたらかえって父さん母さんに怒られる。西月さんが、どこへでも連れて行ってもかまわないというのだったら。

今、司が西月さんにできることは、それしか見つからなかった。

家に帰って置き手紙を桂さん宛に用意していくつもりだった。ついでに神乃世にいる母、あと修平にも。一応、学校を二時間さぼる形になるわけだから、狩野先生のお説教は覚悟だろうし、桂さんからはげんこつ三発くらいは食らうかもしれない。あとに残るのだ、桂さんの拳跡は。思い出して顔をしかめた。

——あ、見てる。

背中の方で西月さんが司の横顔を、かするような視線で見た。

「な、なんでもないよ」

聞かれる前に、答えておいた方がいいと判断したからなのだけど、西月さんは口をつぐんだままだった。

——ほんとはいやなのかな。

直接聞いた方がいいだろうか。

——言わないからいいか。

司の家までは歩けない距離ではなかった。でも、空気が薄い緑に染まったような林を抜け出したとたん、世界が暗転してしまいそうだった。やみの中、西月さんが黒に染まってしまいそうで怖かった。

「うちに電話、かけておくから」

うまく言えない。はっと目が醒めて西月さんが学校へ戻ると言うんではないだろうか。不安の葉陰を作るものがある。司は砂利道に立って、いつもならば桂さんの車が近づいてくる合図、タイヤの擦れる音を聞き取ろうとした。聞こえるわけもなく、司は西月さんを背に従えるように林を抜け出した。

——誘拐じゃない。

——だってこのままじゃ教室になんか戻れない。

狩野先生に報告すると泉州さんは言っていたっけ。たぶん西月さんを探しているだろう。先生はともかく、泉州お嬢にご許可をいただかなかったのはまずかったかもしれない。

——桂さん、怒ると怖いもんなあ。

あえて仲裁役に、と腹の中で計算したとたん、またぐうと鳴った。

「うちに帰ったら車呼ぶから」

もう一度振り返って西月さんと眼を合わせた。天羽とふたりで盛り上がっていた頃の西月さんは、奴が振り返って笑いかけるたび、えくぼを口元に深くこしらえていた。今、司にも同じことを要求するのは無理だとわかっているけれど。

——天羽になれたらな。

生気を失った西月さんにもう一度話しかけた。

「僕の責任だから、絶対怒られないようにするから」

砂利道を先頭で歩いていくのは、どこか息苦しかった。もう少しお天道さまから見えないとこ

ろで歩いてたかった。

砂利道を抜け、司の通学路にたどり着いた。後を追う人影もない。ふうっと息を吐いた。すれ違うのは、青いスカートとベストでおそろいの格好をした女の人たち、またワイシャツ姿で、やたらと焼き肉臭いにおいのする男性たちばかりだった。ランチメニューの看板が通りに数多く並んでいた。また胃の方からがつがつとほしがる音が聞こえた。

——やっぱり、電話しよう。

薄緑の電話ボックスをやり過ごす寸前で司は立ち止まり、西月さんへうなずいて伝えた。

「今、家に電話するから」

よくわけのわからなさそうな顔をした西月さん。司と同じくお腹がぺこぺこなのだろう。

「すぐにお昼ご飯食べられるようにするから」

なにがいい？とはさすがに聞けなかった。司は電話ボックスに入った。前に入っていた人がきつと強い香水をつけていたに違いない。トイレの芳香剤を思い起こさせた。

「司、あんたこんな時間に」

母のお説教を聞かされるのはうんざりだけど、どっちにしろしゃべらなくてはならないのだ。司は、少しいらだった声の母へ無理に話を変えさせようとした。

「今から神乃世に帰るから」

「帰るっていったいなんで、またあんた変なことやらかしたんじゃないでしょうね」「そんなことしてないよ」

きっと二年前のようなバカをやらかしたんではと思っているのかもしれない。心外だ。司はすぐに言い返した。

「母さん、困っている友達を助けたいんだ、それが悪いことかなあ」

うっと言葉につまる様子が伺えた。

当然だ。いつも母は「周ちゃんたちが困っているようだったら司、あんたのできる事が何かよく考えなさい。自分で難しそうだったら周りの人に相談しなさい。友達が幸せでいてくれるだけで、司、あんたも幸せになれるんだよ」

と、言い聞かされていた。そりゃあもう、耳にタコができるくらい。

「青瀧の人なんだけど、今、クラスの奴に怒られるかなんかして、教室に帰れないんだ。だから」

いじめられた、というのとは、ニュアンスが違っているような気がした。天羽は決して西月さんをいじめた訳ではなさそうだから。

「帰れないってどういうことよ。司、もっと分かりやすく説明しなさい」

ぱたっと、母の口調が一度止まった。

「もしかして、いじめられている子をかばったの？」

——厳密には違うんだけど。

「それで、教室から連れ出してきた、というの？」

——母さん勘違いしてるけど。

司も黙った。半々、当たっているという言い方をすることができなかった。母はさらにたたみかけてきた。

「周ちゃんがよくやっていたよねえ。あんたも、そういうこと、したの？」

——当たってるけど、違う。

まだいるだろうか。画板を立てかけたそばに、西月さんは黙って立っていた。

「その人、女子だから」

たったひとつ、本当のことを言った。

「女の子なの？ あんただから何がどうしたの」

「だから、今から神乃世に連れてく。だから、オムレツとからあげ、作っというて」

「司、だから何が言いたいの。ちょっと落ち着いて話をしなさいよ。どこからかけてるの？」

「公衆電話」

「うちからじゃないのね」

がおっと通り過ぎるトラックの騒音。

「だから、行くから」

「待ちなさい司、どうやって来るつもりなの」

——あ、そうだ。

司はもう一度言葉を飲み込んだ。もう一度西月さんの後姿を見つめてみた。やっぱり最初の案通りにしようと思った。

「タクシーで。桂さん今、仕事だし」

はああ、とため息をつく気配。

「そうよね、司のやらかすこと、桂さんやお父さんに許可えてやることないもんねえ」

ゆっくりと、母は告げた。

「司、今、電話ボックスの前に行列できてないわよね」

「ないよ」

いるのは西月さんだけだ。

「じゃあ、あんたの手元のテレホンカード、何枚くらいあるの」

使っていないから五枚くらいは余裕にある。

「そう、なら、その子を連れてきなさい。ただ条件があるわよ」

母の声はきっぱりしていた。

「青潟駅から出ている、神乃世直行のバスがあるから、そこのバス停で乗り込みなさい。タクシーなんて使ったら、もう馬鹿みたくお金がかかるんだから。わかっているわね。バスだったら少し遠回りだけでもわりとすぐに到着するから。わかったわね。約束よ」

——バスなんて使ったことないよ。

どきまきました。神乃世に帰る時はいつも桂さんの車以外使用したことがない。公共交通手段な



んで、確か車が本数少ないながらもあることくらいしか知らなかった。

「司、いいわね。まずはバスの時刻を調べるために駅に行きなさい。そこでちゃんと切符を買ってあげて、それからしなさいね」

「バスの時刻とかわからないの」

そういうのは大抵母がみな把握しているはずだ。だから当然聞いた。

「司、あんたそういうことも知らないの。バスの時刻っていうのはね、しょっちゅう変わるのよ。まずは見てきなさい。それと、何があったか知らないけれど、お父さんお母さんに会った時に、なんで学校を抜け出したのかその理由をちゃんと説明できるようにしときなさい。あんたへの宿題よ」

母はもう一度

「神乃世の直行バスは青潟駅のバスステーションから出ているんだからね」と繰り返した。

「わかった。じゃあ食うもの作っというて」

受話器を置いた。遠慮なく腹の虫が鳴く。司は額の汗を拭いた後、外に出た。西月さんは司を見上げるようにして、静かに唇を動かした。言葉は出てこないのがふしぎだった。

「うちの母さん、ぜひ連れてこいって言ってたからかまわないよ。あの、それで」

ほっぺたのえくぼを見せてくれないまま、西月さんはじっと司を見詰めた。

「うち、神乃世なんだけど、青潟からバスが出てるんだって。だから、それ乗って、来るなら来いって」

また唇を動かす気配あり。西月さんは数回ぱくぱく何かを言おうとして、口を押えた。

——僕が神乃世生まれだってこと、ほとんど知らないんだろうな。

きっとこの人も、司が「迷路道」の御曹司だってことくらいしか知らないのかもしれない。神乃世という町がいかにかに土田舎で、静かなところかというのも、きっと話でしか聞いたことがないのだろう。

——西月さんは僕のこと、全然知らないんだ。

「神乃世、いい奴いっぱいいるから、もう、いじめられないですむと思うし。あの、だから、家に電話しておいたほうがいいかもしれないし」

西月さんが意思表示らしきしぐさをした。ゆっくり首を振った。

——て、ことは。

「いや、あのでも、やはりそれはまずいよ。あの、でも、家についてから電話する？」

うつろな瞳に意志がちらっと走った。大きく頷いた。

——あとでも先でも、きっと同じだよな。

乱れた前髪を一生懸命、指先で直そうとしている。

いつだったか天羽が、そっと西月さんの額をつついていた時の場面を思い出し、すぐにシャットアウトしたくなってしまった。

「じゃ、とりあえず、青潟駅に行くことにしよう」

司は背を向けてひとりで歩き出した。ほんとだったら、西月さんの荷物を全部持ってあげたい。でも、距離がないとまた天羽とのかかわりとが見えてきて、息苦しくなってしまう。

——とにかく、うちについたらすぐ、「誘拐じゃないんだ」ってこと、西月さんのうちの人と、あと桂さんに伝えておかないとだめだな。

十歩歩いたところで、そっと後ろを見る。

西月さんはうつむき加減で、画板と絵の具箱だけ持ち、司の真後ろまで近づいてきていた。五十センチも離れていない。背中に汗の地図が広がってしまいそうだった。

「急がなくても、大丈夫だから」

こういう時天羽だったらどういうことを言うのだろう？

司は青潟駅まで歩きながら、もっと国語の勉強をしておけばよかったとつくづく反省した。

自転車だとずっと早く着くのに、歩きだとかなり疲れる。

気が付くともう二時半くらいだった。本当はタクシーかバスに乗りたかったのだけど、そんなことするとかえってサボりだと思われ、怪しまれそうな気がした。西月さんは一言も言葉を発しないけれども、嫌がることもなく黙ってついてきてくれた。

——西月さんもお腹すいたんだろうなあ。

時折、司は肩越しに様子を見ながら、コンビニとラーメン屋、あと屋台のやきとり屋あたりに立ち寄るかどうか思案した。でも、表情に空腹の様子は見られない。ただうつむいているだけだった。

「何か、食べる？」

首を振る西月さん。眼はうつろだった。

「駅についたら、パン買ってくるから。それに、うちについたら母さん、絶対おいしいもの作っているから、お腹すかせておいたほうがいいと思うんだ」

またわけのわからないことを言ってしまった。オムレツでよかったろうか。西月さんは別のものがよかったのかもしれない。いろいろ考えながら司は、ようやくたどり着いた青潟駅のバスターミナルへと向かった。列車の出入りする駅構内と違って、バスターミナルはガラス張りの待合室が備え付けられていた。いわば、温室野菜になったような気分だ。先に司がバス待合室に入ると、かなり高齢と思われる人たちががしっかと腰掛け、膝や首すじをこすっていた。座る場所はかなり空いていたけれども、やはり戸惑うものがあった。西月さんを先に通そうとしたけれども、立ち止まって戸を閉めようとした。いやならば入らない方がいい。司も頷いて、まずはそのままバスの時刻表を調べることにした。

——タクシーの方が絶対早いのに。

なんで母は「バスで」なんて条件をつけたのだろう。バスなんて時間がかかるし大変だと、よく周平が話していた。たまに青潟に用事がある時に、お母さんと一緒に出かけるのだそうだ。せっかく司が「父さんにたのんで車回してもらえばいいのに」と言うと、ちょっとだけ不機嫌になるからあまりいわないのだけれども。

——けど、桂さんにばれたら怒られるだろうなあ。

桂さんはいつも司を迎えに行くまでの間、父のマンションで書類関係の仕事をしている。たまに背広を着て運転したりもしているらしい。父がひとりで住んでいるマンションは、しょっちゅう会社の人が出入りしていて、なんか家と言う感じがしなかった。二ヶ月だけ司も暮らしていたけれども、学校の延長みたいな雰囲気だった。狩野先生みたいな顔をした、細面の人もいたし、周平みたいにまゆげのない男の人もいた。たまたまトイレで司と顔を合わせるとふかぶかと礼をされたりした。でも、その中にあの当時、桂さんはいなかったはずだ。一緒に暮らすようになってしばらくしてから聞いてみたけれど、父のマンションで仕事をするようになったのはつい最近らしいとのことだった。

学校で司がなにかやらかした場合、まず連絡は父のマンションへ行くことになっているらしい。おそらく父も死ぬほど忙しいだろうということで、結局桂さんが迎えにくる。謝ることになるだろう。例の事件以外で司はそれほど悪さをしていないから、そういうことはないけれども、もしかしたらもう桂さん、司が学校をサボったことを報告受けているかもしれない。そうしたら必然、父にもばれるだろう。できたら桂さんに見つからないうちに、神乃世へ移動したいところだ。そちらで西月さんを落ち着かせ、とにかくたくさん食べてもらい、元気になってもらってその後で怒られるのならば、それはそれでいいのだが。

——とにかく早く行きたいんだけどなあ。

でも、いくら探しても神乃世行きのバス停が見つからない。細長いプラスチックのバス停留所柱を全部見て歩いたのだが母の言った通りのものは一本もなかった。「青大行き」とか、「修道院前」とか近場の停留所はたくさん見受けられるのだが、司の探している「神乃世」の名前はほとんどみつからなかった。くさくさしてきた。西月さんの前でわからないなんて、本当は言いたくない。口笛吹けばばれないだろうか。心臓がまたどくどく言っている。右、左、とバス切符売り場を探した。ない。運の悪いことにバスチケット売り場には誰もいないときた。思わず「母さんのうそつき」とつぶやいてしまった。——あれ、西月さん？

ふと、背中の気配が薄くなった。通りに向かう横断歩道をひとりで走って渡っている西月さんの姿を司は見た。

頭の中が真っ白くなる。やっぱり天を仰いでたいしたことないって思わせておけばよかった。西月さんはひとりすたすた駅前商店街の方まで歩いていく。先日通った、「佐川書店」の近くまで背を向けたままだ。小さくなってどんな顔をしているかは見えないけれども、途中で立ち止まり、向かいの道路をじっと見据えた。

——追っかけて逃げられたらどうしよう。

足をカニ歩きで横、反対側に横、と動かした。同時に足下のかばんと一緒に何かが地面を滑った。平たい板だった。ダンボールに似たものだった。

——画板だ。

西月さんが写生の時に使っていて、ずっと抱えたままのものだった。

——忘れたのか？

拾って、首からかける紐ごとぶら下げ揺らし、もう一度バス停へ立てかけた。同時に西月さん

がまた、司の方をじっと見て、横断歩道を渡ってくるのを黙って迎えた。笑みはないのだけれども、しっかりした表情だった。天羽に振られる前の自信ありげな口元だった。ちょっと怖くて司はあとずさった。

「ど、どこ行ってたの」

それしか言えない。西月さんは一度、司をじっと見て、小さく首を振った。言葉は出さなかった。さっき立ち止まっていた「佐川書店」近くの方角を指差した。口を小さく開け、こほんと咳をした。今立てかけたばかりの画板をかかえ、もう一度司に何か訴えたさそうな眼を向けた。

「あの、どうしたいのかがわからないんだけど」

西月さんは二歩、さっき歩いてきた方向まで進んで司を振り返り、片手をひらひらさせた。「おいでおいで」のしぐさだった。

——行っていいのかな。

かばんをかかえて司もついていった。「おいでおいで」ならば、ついていってかまわないってことだ。一メートル程度はなれたまま西月さんを追う。さっき通った道を西月さんはそのままなぞっていき、やはり横断歩道を渡った。駅前の喫茶店や「佐川書店」を通り過ぎた後、赤茶けた丸い直立物の前で立ち止まった。黙って、司を見てもう一度人差し指を立てた。——これっでもしかして。

眼を凝らし、司は赤錆の下に「急行・神乃世ゆき」と書かれた文字を読み取った。バスターミナル内のものとはかなり違っていた。さらに西月さんは赤錆バス停の時刻表らしきところに直接触れて、司へまた「おいでおいで」をした。肩と肩が触れ合うくらいになり、見る。読む。そして指でなぞった。

——母さんのうそつき！

バスの時刻表には、朝五時台に一本、夜の十一時台に一本のみ。いくら錆ついていてもそれ以外の時間帯に走っていないことは十分すかして見る事ができた。

「どうしよう……」

とうとう、言葉がもれてしまった。司は手からかばんを取り落とし、うずくまった。もう限界だった。足に力が入らなくて、もう倒れる寸前だ。あと一歩、バスに乗ればあとはしめたもんだと思っていたのにだ。神乃世へ行けば。あと神乃世へ行けばあとはどうにでもなると思っていたのに。おいしいご飯も食べられるはずだったのに。ああ、そうだ、お腹が空いていたんだ。立とうとした。立てなかった。膝を突いたまま司はしゃがみこんだままだった。ただ何も食べていないだけなのに、どうして足がふら付くのだろう。どうして言葉が出ないのだろう。——最低だよ、もうやだよ。なんでこんなことしてるんだろう。

ふらふらとめまいがした。ベンチに片手を置いて、なんとか中腰にはなったけれども、座るの で限界だった。腹痛とめまいとでもうこらえきれず、司は歯を食いしばりうつむいた。

そっと目の前に差し出されたものを見た。

とっくの昔に食べたはずなのに、と思っていた。

両方の手から差し出されていたのは、司が学校で持ち出した牛乳パックとビニールに入ったま

まのコッペパンだった。

「西月さん、あのこれは」

首を静かに振り、やはり無表情なまま手を伸ばしていた。西月さんの眼には、ほんの少しだけ優しい微笑みが浮かんでいるようだった。えくぼが片っぽにだけ、へこんでいるのが見えた。

「これ、僕があげたんだよ。だから、だめだから」

もう一度、西月さんは首を振った。司の膝にそっとふたつのものを置いた。緑色の牛乳パックは冷たくなかった。パンはだいぶつぶれていて、でも、今なら一気に食べられる。また、お腹がぎゅうと鳴った。

——匂ってる。

かすかにパンらしい、甘いにおいが漂っていた。ふたりを眺めながら通り過ぎる人の中には、ハンバーガー屋の包みを持って歩く人もいた。スパゲティのソースがふと匂ったりもした。つばがたまって、また胃がおかしくなりそうだ。必死につばを飲み込み、司は西月さんにつき返した。

「だめ、だめだから。僕は、西月さんにあげたんだから」

——情けない奴だ。僕は。

ここで泣いてしまったらもっとどうしようもない馬鹿になってしまう。それだけはこらえたかった。司は歯を食いしばった。

「僕、できること、これしかないんだ。ほんとはちゃんと、連れて行ってあげたかったのに。僕、こんなことしかできない」

あとは言葉にならない。司は奥歯をしっかりと噛み締めて、西月さんに無理やり持たせた。「僕は大丈夫だから。あの、バスがないなら、タクシーか車で行けばいいから。だから西月さん」

西月さんはしばらく司を、優しげな瞳で見守るようにしていた。立ったまま、見下ろすような感じだったけれども、威圧感はなかった。受取ってくれたものの、司の脇へそっと置いた。自分の絵の具箱と画板を一緒に置いた。ブレザーの胸ポケットから生徒手帳を取り出した。一緒に差しておいたのだろう、赤いシャープペンシルで何かをさらっと書いて、司に背を向けた。通りがかる人をじっと見極めている様子だった。

——どうしたの、西月さん。

聞きたいけれどもちょっと動くだけでまた腹がぎゅうと鳴る。

じっと西月さんは立ち止まったままだった。バス停の前には小さな洋菓子屋さんが建っている。ほとんど人の出入りはなさそうだった。肩越しに西月さんは振り返り、じっと司を真面目な顔で見据え、次の瞬間駆け足で店に飛び込んだ。

——ケーキ食べたいのかもしれない。

——買ってあげればよかった。お小遣い、まだあったんだ。

そういう肝心要なところが抜けている自分。結局空腹に負けてしまった自分。司は頭を拳固でかるく小突いた。

クラクションが鳴った。聞き覚えのある音だった。近くの人たちが颯颯顔で音の方向をにらん

でいた。司も同じく、腹を押えたままにらんだ。誰が来たのかは、情けないくらいに分かる。

——なんでだよ。いつもそだよ。いつも、いつもだよ。

西月さんがいないのは幸이었다。司は身動きしないで黙って座っていた。

どうせ見つけられるのだったら、とことんみっともないところを見せてからの方がいい。

クラクションの主が後ろから近づいてくるのを待ち構えた。怒鳴られるのも、拳骨も覚悟の上だ。

「どうせ、僕のこと、つけてたんだろ」

近づいてくる汗臭い体臭でわかる。

「どうせ、最初から、バスなんてないんだってこと、知ってたんだろ」

後ろの影は答えない。

「どうせ、神乃世なんかに行くなって言いたかったんだろ」

両肩に手が置かれた。ブレザーの上から、じわっと重くのしかかってきた。温かい体温。「司、あのな」

頭の上から落ちてくる言葉は穏やかだった。

「まずは、順番、考えようや。神乃世にあの子を連れて行く前に、いろいろしなくちゃいけないことがあるだろ。段取りつけるのも大事だぞ」

——やっぱり、母さんから連絡入ってたんだ。

ベンチを回ってきて、桂さんはしばらく赤錆のバス停を見上げた。黒い背広姿だった。シングルの背広だから、腹が突き出したままだった。

「一緒に学校に戻ってからだな。司、まずはそれからゆっくり、段取り立てような」

頷くのもいやで、司は膝のほつれたところをいじり続けていた。

「狩野先生の方は、ちゃんと話がついている。とにかく今日は、ふたりとも元気な顔して学校に戻ってくれば、ちょっと道草しただけだってまあよく納めてくれると話していたぞ。あの先生も話、わかるなあ。見た目とは違うなあ」

——みんな知ってるくせに。

膝の裏をいきなりくすぐろうとした。桂さんがよく風呂上りにやる手だ。

「ま、エスケープの一度や二度は誰もが経験することだし、ということでだ。うまく先生も話をあわせてくれるということだから、お前の彼女にもそのことちゃんと話しておかねばな」 ——桂さん、怒っていないんだ。

恐る恐る下から様子をうかがう。どこまで話を知っているのかは見当がつかないが、とりあえず拳骨だけは食らわないですみそう。頭がこれ以上でこぼこにならないですみそう。「昼間から、ふたりっきりでデートしたんだ。多少学校で怒られても、がまんしろよ。おいおい真っ赤になっちまったなあ」

耳たぶを引っ張られた。横目で見ると桂さんの目は、本当の笑みでいっぱいだった。

西月さんが自動ドアの向こうに立っていた。すぐにドアが開いた。片手には紙包み。じっと桂さんの方に視線を向け、丁寧にお辞儀をした。生徒手帳を胸ポケットにしまいこんだ。桂さんは

笑顔を向けたまま、そっと西月さんへ近づいた。「うちの司がお世話になっていると聞いたんで、今日は飛んできたんだけどなあ。泉州お嬢から、西月さんの噂はかねがねうかがってますよ。聞いてるかなあ」

——話していないかもしれないじゃないか！

無神経な桂さんの言動に、またかっとなりそうになる。が動けない。空腹が憎い。

「今日のことは狩野先生もみな、わかっているということだったから、今日のところは安心して学校に戻ったほうがいい。教室には入らないでもいいからと許可も貰っている。うちの馬鹿司が、今回は全部やらかしたことだっただけでことになっているから。せっかくだし、今日は司に騎士道を貫かせてやってくだせえよ」

最後の言葉だけ少しギャグっぽく聞かせた。かすかに西月さんはえくぼを作った。頷いた。「でも、辛かったよなあ。俺がその場にいたら、相手殴ってやるぞ。ほんと、こんないい子をなあ」

——桂さん、何であっという間にそこまで聞いているんだよ。

桂さんがどうして、見透かしたかのように現れたのか、その辺は経験上見当がつく。影のように司へ寄り添っている桂さんのことだ。たぶんブレザーかかばんかどこかに盗聴器でも隠しているんじゃないだろうか。

——いやそれはないと思うけど。

そこまでなくても、桂さんは司の行きそうなところをしらみつぶしに探して、見つけることくらいお茶の子さいさいだ。どんなに司が巻こうとしてもうまくいかない。必ず見つかってしまう。今回だって同じだ。結局司は、桂さんの監視下から離れられないというわけだ。騎士道、なんていうけれど、他人に手伝ってもらった騎士道なんて何にもならない。

——西月さん、連れていきかけたよ。

やたらと生唾が出てくるのを、司は必死にこらえた。ゆっくり司に近づいてきた西月さんは、もう一度生徒手帳を取り出し、さささっと何かを書いた。桂さんへ渡した。

「え、なにに？ ラブレターかなあ？ 司うらやましいだろ」

軽口を叩く桂さんに、西月さんははっきりと否定の首を振った。そのまま司を指差し、渡した。

「……そっか、腹が空いているのかあ。司。だから動けないのかあ」

にやにやしてまた小突くのはやめてほしかった。

「わかったわかった。じゃあまず、その辺のラーメン屋にでもよるか。けど、こいつに気を遣ってやらないでもいいぞ。なあ司、別に筆談じゃあなくても、いいよなあ」

——筆談？

そういえばさっきから、西月さんは手帳に何かを書き込んで、桂さんへと見せていた。何をしたいのかがよくわからなかったけれども、わざと気にしない振りをしていた。それに一度も、言葉を発しなかった。

——どこへ連れて行くの？

——うん、僕の家。到着したらうちから電話かけて、連絡しておけば怒られないよきっと。

空腹の痛みが消えた。司は立ち上がり、そっと手帳を西月さんの手から取り上げた。はっとした様子だが、西月さんは抵抗しなかった。

「おい、女性に対してそれは失礼だぞ、司！」

怒っているのは桂さんだけ。そんなのどうでもいい。司は真っ正面に立ち、一言だけ尋ねた。

「しゃべること、できる？」

えくぼが消えた。桂さん相手にほんの少し笑顔を見せていたあの表情が消えた。

「しゃべれなくなったの？」

当てずっぽだ。こういう状態をどう表現するのか、国語の勉強を全然していない司にはわからない。ただ、西月さんがなぜ生徒手帳を使って、筆談しているのかくらいは想像がついた。いつも元気におしゃべりしているあの西月さんが、二時間何も言わなかったそのわけがわからない。

「しゃべれないん、だよな」

「な、どういうことだ？ 司、先走りすぎるなよ」

「桂さんは黙ってるよ！」

腹から声が出た。通行人がぎょっとして司を見た。かまうもんか。

「しゃべれるなら、一言でいいから、『あ』、とか、『い』とか言ってほしいんだ」

西月さんは逃げなかった。唇を開き、「あ」に近い口の形をした。英語の発音のような口真似をした。息を吐くような感じの音が聞こえただけだった。咽を片手で押えるようにして、今度は口を横にひろげるような形を作った。でもやはり「いひ」というような息が洩れたただけだった。そっと上目遣いに司を見つめ、眼を逸らした。背中がかすかにさざめいた。

——やっぱり、そうなんだ。

——どうして。

無理やり自分の腰掛けていたベンチに西月さんを座らせた。もう抵抗することなく西月さんは、司のなすがままになっていた。素直すぎるほどだった。今まで見ていた西月さんとは別人だった。

「西月さん、いつから、しゃべれなくなったの。あの、僕と一緒にいたから？」

うつむいたままだった。桂さんもこれ以上は何も言わなかった。

「僕が連れまわしたから？ 僕が神乃世へ連れてくって言ったから？ 天羽を連れてこれなかったから？」

もう限界だった。西月さんが顔を上げて、頭を振ってくれたらと祈った。けれど、ただうつむいたままの西月さんは何も意思表示してくれなかった。ただ。袋に入った菓子包みを、下むいたまま握り締めているだけだった。

「僕の、せいなんだね」

うめき声のようなものが、自分の咽から洩れた。司は歯をぎりぎりまでかみ締めた。桂さんに無理やり車の中へ押し込められるまでの間、しゃくりあげる声を止めることができなかった。うつむいたまま西月さんの生徒手帳を握り締めていたら、そっとお菓子の入った袋にすりかえられていた。甘いカスタードクリーム の匂いがした。助手席に司、後部座席に西月さんを乗せたまま



、司は同じ言葉を繰り返していた。

——取り返しのつかないことを、してしまったんだ。僕は。

西月さんだけ、いつもの砂利道で降ろし、桂さんが学校へと連れて行った。

無言のまま、唇の端を少し上げる感じで微笑んでくれた。

「じゃあ司、お前はここで待っている」

いつのまにか話はずいていたらしい。桂さんと狩野先生との間に何が語られたのかはわからないけれども、とりあえず今日は学校に戻る必要がないのだということなのだろう。——また、とんでもないことしてしまった。

涙はだいぶ止まったところだ。西月さんが泣かないでくれたから、司もふんばろうと思えた。桂さんが運転途中、くだらないしゃれをかましたとき、バックミラーにはかすかに笑みを浮かべた西月さんが映った。

——西月さん、怒られないといいな。

自分のことはもう十分覚悟している。母に電話してしまったのが失敗だったのかもしれない。思ったらすぐ、タクシーを拾ってまっすぐ連れていけばよかったのだ。もう止められないってところまで連れていけばよかったのだ。馬鹿正直に大人へぺらぺらしゃべってしまった自分の脳天気ぶりがむかつく。司は桂さんが買ってくれた缶コーヒーを開けて飲んだ。西月さんが置いてくれたお菓子包みには手をつけなかった。袋のまま、動かしたくなかった。「司、おやじさんが指の関節ぱきぱき言わせて待っているぞ。覚悟しとけよ」

「わかってるよ」

たぶん狩野先生から連絡がいったのだろう。桂さんも動いているということなんだから、司がいきなり女子を連れてエスケープしたことはばれればだ。遅刻したとか、試験の結果が悪いとか、その程度だったら父さんはそれほど文句を言わないけれども、今日はやはり別だということだろう。父に呼び出されるということは、鉄拳食らわされるのも覚悟の上だ。

——どうせ僕、父さんに嫌われてるからいいや。

ふてくされて、司は膝の上のお菓子を撫でた。

「怒られる前に何か食べたいんだけど」

「昼から食ってねえのか？」

「うん。今、缶コーヒー飲んだだけ」

「腹にくるぞ、それじゃあ。少し落ち着いたらホルモン焼きのなんか、つまみ作るからな」 桂さんは妙に優しくかった。エスケープしたことそのこと自体は認めてくれているのかもしれない。西月さんに対しても紳士だった。もちろん泉州お嬢の親友ということを知っているから情報もたくさん持っているのだろう。

——泉州さんとは連絡取ったのかな？

時計の文字は、まだ四時前だった。

「狩野先生は夜にうちへ来ると言っていたぞ。お前のこと、心配してたなあ。やはり社長は仕事が夜まで立てこんでいるから、それからゆっくり司のことを聞きたいんだそうさ。だから、今夜は午前様だぞ。覚悟しとけ」

——いいや、どうだって。

司は少しごろごろとしたお腹をさすった。

真っ白いマンションの最上階へと向かった。二ヶ月だけだがここに住んだことのある場所だった。父の会社はもちろん別の場所なのだけでも、うちにはたくさんの人が出入りしていた。背広姿の人たちもいたし、スカートの短い女の人もいた。いつも司へふかぶかと礼をしていた。いつも司は部屋に籠り、テレビや漫画、スポーツ新聞を読んだりして遊んでいた。あの部屋はまだ、手付かずのまま残っていると、この前父さんが話していた。

泊ろうと思えば泊めてもらえるだろう。

でも。

——桂さんも、泊るに決まってるよな。

何発殴られるかは考えないことにした。司はブレザーを羽織り、膝に手を当てた。足ががくがく震えてくるけれども、それは武者震いだと思うことにした。

桂さんが呼び鈴を鳴らした。インターフォンのところで話し掛けた。

「桂です、司くんを連れて参りました」

「よし、入れ。司をライブラリー室に連れていってくれ」

父さんの声だった。インターフォンの格子ごしに、別の人たちがうろうろしているらしい気配を感じた。きっと仕事なんだ。機嫌悪いだろう。

「ほら、きんたまに力いれてほら、行け」

腰をぼんぼんと叩かれ、司は背筋を伸ばした。足と手が右・右、と出てしまった。白い大理石の玄関と、溶けない氷の中に埋められたような時計が静かに司を向かえてくれた。いつもと変わらなかった。

「ライブラリー室？」

「本でも読んでろ」

——読むものなんてないよ。

読書なんて嫌いだ。このうちにいた頃、二度くらいしか入ったことがない。父さんは玄関すぐ側に、自分の蔵書を全部まとめた「ライブラリー室」というのをこしらえていた。早い話が図書室なのだ。いつ使うんだろうといつも不思議に思っていた。でもなによりも、司としては玄関に入りたい。怒鳴られる前に何か食わせてくれると信じたかった。

「じゃあ、ここにいる。俺も先に挨拶してくるからな」

「なんか食べ物持ってきてほしいんだ」

「彼女のくれたもの、食べよ」

司の手元を見て言った。

「今のうちに、覚悟を決めてろ」

ライブラリー室は小さかった。大体六畳くらいだろうか。三面に作りつけられている本棚。ぎっしりと並んでいる本は、難しい英語の本とか、ビジネス関係の本とかそういうものばかりだ

った。司の読みたいスポーツ関連の本は一冊もなかった。当然、漫画もない。灯りの入らない部屋ということもあり、昼間なのに蛍光灯をつけなくてはならないのがうざったかった。どっしりした切り倒したばかりの木、という感じのテーブルがでんと真ん中に置かれていた。司はどしどしと座り込み、大きな木目の板に顔をつけた。にらみつけている「第三の眼」という感じがした。脇にお菓子の入った袋を置いて、しばらくまどろんだ。

——これからどうなるんだろう。

桂さんはちゃんと話をつけてくれたと言うけれども、果たしてあの、白衣教師狩野先生は受け入れてくれたのだろうか。二年前の事件もそうだったけれども、狩野先生はあまり司や家の人たちと接点を持ちたがっていないように感じられた。桂さんも最初のうちは「あの先生、なんかとつきにくいよなあ」と愚痴っていたっけ。

——何か、ラーメンとかおごったのかなあ。

そういうことにしとこうと思った。なんとなく、身体が汗で冷えてくる。なんとなく眠くなる。なんとなく、甘いにおいが漂ってくる。

——西月さん、天羽と顔、合わせることになっちゃったのかなあ。

物言わずにお菓子の包みを持たせてくれた、やわらかい指先を思い出し、司は身体が瞬間ほてってしまうのを覚えた。

——父さん、僕のこと怒りに来るんだろうなあ。

もう、言い訳はするつもりなどなかった。

ただ、神乃世へ連れて行けなかった自分が、みっともなかった。

——いくら怒られても、殴られても、嫌われたっていい。

司は顔をテーブルに押し付け、両手を組み合わせて祈りのポーズを取った。

——西月さんがしゃべれるように、神さま、してください。

鍵を掛けられたのに気がついたのは、司が入ってからちょうど一時間くらいたってからだった。待ちくたびれて寝てしまったから、もしかしたら桂さんが迎えに来たのも気付かなかったのかもしれない。何度かノブががちゃがちゃいっていたのは聞こえていた。たぶん桂さんが入ってきて、父さんのところへひっぱって行くのではないかと思っていた。たてつけが悪くて戸が壊れたから、何度もドアノブをいじっているんだろうとも想像していた。——早く、お腹すいたよ。

そっと顔を上げてみた。誰かがそこにいることはわかるのだが、ただ、誰も入ってくる気配がない。絞られるのだったら早くしてほしい。いらただしく司は立ち上がり、ドアの前に立った。がちゃがちゃ音が最後、かちり、と留まった。いやな予感がバリバリとした。ノブをひねり、何度か動かした。がたがたドアが揺れるだけだった。

戸の向こうには誰かがいる。玄関の靴箱を開ける耳障りな音が数回したのち、

「桂くんついてきてくれ」

と、指示を出す父の声だけが聞こえた。桂さんの返事はなかった。代わりにあわただしく玄関の戸締まり、最後に静けさが漂ってきた。この家、誰もいない時耳を澄ますと、細かいじりじりと

した機械音が響く。すんでいた頃はその音が耳障りで眠れなかった。久々に聞こえた、蛍光灯の切れた後のような響き。司はわざと咳をしてみた。ドアノブを何度もねじり、呼びかけた。

「桂さん」

返事はない。

「桂さーん」

静かだった。

「戸、開けてよ」

じりじり音だけ。

「お腹すいた。トイレ行きたい」

最後の言葉は小さくつぶやいた。

父も忙しいのだろう。司のしでかしたことにまわってられないのかもしれない。初めからわかっていた。二年前の事件の頃から父はよそよそしくなったし、このマンションから桂さんつきで追い出したのも、疎ましくなったからなのだろうと思っていた。また事件を引き起こした司になんか、もう会いたくないのだろう。また殴られ、怒鳴られ、もしかしたら勘当されるかもしれない。どういう制裁をされるかはわからないけれども、やるのだったらねばっこく引き伸ばさないうで、さっさと叩きのめしてほしかった。

——けど、鍵開けてたってかまやしないだろ！

腹がねじれるようにきゅうと締まる。西月さんのくれたお菓子はすでに食べ終わっていた。甘い、小ぶりのシュークリームが二つ入っていた。甘かったけれども、一口サイズだったのでかえってお腹が空いてしまった。もっとがっちりしたものがほしくなるだけだった。桂さんが約束してくれた牛のレバー焼きでいいから食べたかった。

——桂さん、すぐ、もどってくるよな。

閉じ込められたとばかりに大騒ぎはする気なんてなかった。だってここは自分のうちだったのだ。もし父さんと桂さんが自動車事故を起こしたとしたら話は別だけどふたりが帰ってこないなんてことは、まずない。夜になったら狩野先生も来るそうだし、それまでには父さんはともかく、桂さんはいるはずだ。せいぜい二時間くらいだろう。司はかばんに入れておいたスポーツ紙を取り出して隅から隅まで読み尽くした。野球、サッカー、競馬、芸能、お色気紙面。西月さんのことを考えたくなくて、ただひたすら文字を眼で追った。

二時間が経った。事態急変。司の腹に空腹とは違うごろごろ感がやってきた。

司は立ち上がった。片手をへそのところに置いてみた。もう限界まで空腹度数が上がっているのは重々承知だ。なんとかシュークリームで補っているから大丈夫だと思っていた。

——さっきの缶コーヒー、今ごろ効いてきちゃったよ。

マンションに連れてこられる車の中で、司は桂さんのくれた缶コーヒーを飲み干した。もう、水分でもなんでもいい。口に入るものだったらなんでも欲しかった。桂さんがおいしいものを食べさせてくれると言っていたから、飲み物だけでいいやと思ったからだった。なのに、三時間以

上も閉じ込められることになるなんて、想像もしていなかった。遅い、遅すぎる。自分の部屋で、出入り自由だったらひとりっきりでいられるのも悪くないけれども、今司が置かれている状態は、監禁もしくは軟禁だ。

——父さん、本当に僕がいること、気付かなかったんだらうな。

——桂さんも、急いでいたから気付かなかったんだらうな。

そうとしか思えない。いくら司のことをどうでもいいと思っていた父さんであっても、まさか自分の息子を閉じ込めるなんて鬼畜な真似をするはずがない。

——きっと、気付かなかったんだ。だからなんだ。早く帰ってくればいいのに。

腹の音は今までの空腹を訴える遠慮深いものではない。

下からぎゅうっと、搾り出そうとするような、マヨネーズの入れ物をひねるような感じだ。司の下っ腹を、巨大な手がぎゅうっと押している。男子にとっては一大事の、あれだ。

——昨日から、出なかったのになんで今ごろ出てくるんだよ！

便秘でもともと、腹が張っていたのは確かだったけれども、いきなりこんな部屋で催してしまうなんて最悪もいいとこだ。本屋に立つとトイレに行きたくなるという話を聞いたことがあって、周平と「いつか実験しようぜ」と言い合っていたことがある。でも、実体験を予告もなしに行うのは神様、止めてほしかった。

——ちくしょう、早く、早く戻ってこいよ、桂さん。

腰が落ち着かず、司はひとしきり尻の穴を締めることに専念した。なんとか波は収まった。またこのままだと便秘が三日目に突入するかもしれないけれど、こんなとこでするよりはましだ。必死に別のことへ集中した。西月さんの年賀状をまぶたの裏に焼き付け思い起こしてみた。しばらくはやつこうとした。約三十分くらいはそれで気もまぎれた。

時計を覗き込むと、もうそろそろ六時過ぎだと、デジタルの画面が訴えている。そろそろ桂さんたちも戻ってこない、腹の下の爆発物が破裂してしまうかもしれない。こっそり、スラックスのボタンを一つだけ外し、ワイシャツを外に出した。

——桂さん、桂さん、早く戻ってこいよ。

心の中でまだつぶやいただけだった呼びかけが、とうとう声になってしまったのはその二十分後だった。

玄関のドアが開く気配を耳にした瞬間だった。ぴんと腰を立てることが出来ず、司は片手をズボンチャックの中につっこみ、片手を尻に当てるような格好で、ふらふらと目の前のドアに張り付いた。ただ叫ぶしかなかった。

「桂さん、桂さーん、早く開けてよ。早く、早く助けてよ！」

手を離せない。身体でどしんどしんと何度もぶつかった。人が二人以上いるのは靴を脱ぐ気配でわかる。たぶん、父さんと桂さんだ。父さんの声で小さく、

「司か？」

と尋ねる様子あり。やっぱり気付いていなかったのだらう。置きっぱなしにしていることを気付かなかったのだらう。馬鹿野郎だ。とにかく早く、一刻も早く脱出させてほしかった。

「早く、もう、早く出して、本当にもう、だめだ！」

つま先で何度もドアを蹴った。慌てたような桂さんの呼びかけ。

「大丈夫か司、ずっと中にいたのか？」

「早く、もうだめ、早く早く」

「ちょっと待て。今鍵出すからな。社長、鍵はどちらに」

父さんが持っているのだろう。司は足踏みを続けた。激しく腰をくねらせて爆弾の発火を必死に押えた。

「ありがとうございます。司、ごめんな。今開けるからな」

——開かないよ！

鍵のノブをひねる音がお腹に響く。司はベルトを外し、すぐにズボンが脱げるような体勢に整えた。半分トランクスが出ているけど、見られるのは桂さんと父さんくらいだから平気だ。もう一刻、一秒を争う爆弾だ。

「桂さーん、早く」

「落ち着け、どうした」

「大と小、出そうなんだ！ もう、穴から顔出しかけてるよ、助けてよお」

桂さんがなかなか出てこなくて、司が何度も泣きそうになりながらトイレのドアをノックするのは日常茶飯事だ。いつものことだ。男だけだし、ズボンをずり下げて走りまくるのもいつものことだ。父さんだってそれくらいわかっているはずだ。お客さんがいるわけじゃないし。

——助けてよ、早く、もうだめだよお！

限界の鬼に食われそうになったとあきらめそうになった刹那、ドアがぱらんと開いた。目の前には背広姿の桂さんと父が啞然とした顔で司を見つめている。けどそんなの知ったことじゃない。危うく転びそうになりながら、司はズボンがずり下がるのもかまわずトイレに駆け込んだ。間一髪。ベルト外しておいてよかった。腹中の缶コーヒー特急を無事、トイレの中に走らせることができた。

何も考えていなかった。とにかく、腹の中をすっきりさせたいだけだった。

トイレから出て、ゆっくりスラックスをはき直した。

——あぶなかったよなあ。

手を念入りに洗い、呼吸を整えて司はライブラリー室に戻った。たぶんこれからお説教が始まるに違いない。どうせ父さんと桂さんしかいないだろう。爆発物がなくなった今なら、何を言われてもかまわない、そんな気がした。

——僕が西月さんを神乃世へ連れて行こうと思った理由を話せばいい。

——けど、そうすると天羽のことも話さなくちゃいけないよな。

——天羽、一方的に悪者になってもいいなんて言ってたけど、そんなの無理だよな。

廊下、男物の靴が三足並んでいた。黒いつやややかな皮靴と、汚れた靴、また茶色の見慣れない靴。父のだろうか？ 桂さんのだろうか？ まさか、お客さんがいたのだろうか。

——まさか？

司の予感は当たっていた。

ライブラリーに向かいノックしたとたん、そっと戸を開けてくれたのは、  
「片岡くん、大丈夫ですか」

——狩野先生。

薄い茶色のブレザーを羽織った見慣れない格好のめがね顔が迎えてくれた。

「あ、あの、僕」

「これから、ゆっくり話を聞かせてください」

かすかに微笑みながら、狩野先生は父の隣りに腰掛けた。真っ正面、ドアを見据える位置に父さんが、左脇に桂さん、反対側に狩野先生。司は面接を受ける生徒のように三人の視線を一身に浴びることになりそうだ。初めて、足ががくがく震えた。桂さんの目が優しく、狩野先生が穏やかで、さらに父さんの静かなまなざしに司は凍らされた。

「司、おいで」

怒ってはいない。今すぐ殴られるようなことはなさそうだ。でも怖い。つま先で少しずつ、前の椅子に腰掛けた。周りから本の魂が司を見据えているようだった。

父さんは隣の狩野先生に椅子ごと向き直り、肩を軽く怒らせ、一礼した。

「狩野先生、今日は私の息子の件で、ご足労願ひまして申しわけございません。今から三十分の間、父親として司に、教えておきたいことを話したいので、少しだけ待っていただけませんか」

「わかりました。よろしくをお願いします」

「それと、桂くん」

一拍置いて、桂さんに大きく一礼した。

「君が司を、この段階まで育ててくれたようなものだ。本当にありがとう」

——いきなり何、お礼してるんだよ。

荒れる気配がない。だから怖かった。今までの父さんは、司がへまをやらかすと思いきり張り倒したり、どなったりしたものだ。下着ドロ事件の時だってそうだった。今日も泣かされるだろうと覚悟していたのに、三人の大人たちの態度はみな、静かすぎた。

——気持ち悪い。

膝に手を当てて、つまんでいたら桂さんにため息交じりで注意された。

「司、チャックチャック」

「な、なに？」

「社会の窓、それも丸見えだぞ」

トランクスの青がチャックから露骨に覗いていた。慌ててしまい込むのを、三人の大人たちはまた穏やかに微笑みながら見つめていた。チャックのあたりからまた熱が出てきそうだった。

「司。ライブラリーに閉じ込められた間、お前は何を考えていた？ 難しいことは言わなくていいぞ。なんでも言ってみろ」

油が少し額に浮いた父の顔が目の前にある。歯ががたがた言った。

「閉じ込めたって、僕を閉じ込めたの？」



「怖い思いさせて悪かったな。頭が混乱している時にはなかなか思いつかないことでも、このライブラリーで一人籠っていると、不思議とすっきりしてくるものなんだ。父さんもよくここで、いろいろなことを考える。どうだった？」

——どうだったもこうだったもないよ！

「間違えて閉じ込められたんだ」とずっと思い込んでいたのに。今度は別の意味で足が震えてきた。父の顔をにらみすえた。そこまで嫌われていたのだろうか。

「なんでもない」

「閉じ込められた時、最初にどう思った？ どうして俺は閉じ込められるんだろう、どうしてなんだろうと思わなかったか？」

——親にいきなり閉じ込められるなんて、そんなこと想像するわけじゃないか！

でも言葉にはしない。

「わからないよ」

「そうか。なら、次だ。今さっき、大と小のピンチで戸を叩いていた間、お前は何を考えていた？」

くだらないことを尋ねる父だ。当たり前じゃないか。考えることったらひとつに決まっている。

「トイレ」

一言だけ確信たる答えをつぶやいた。狩野先生にまであの、「半ケツ状態股間握り」状態を見られたのは情けないっらないが、西月さんがいたわけではないのでその辺はあきらめる。「やっぱりそうか。ずっと、早くトイレに行かせると、そればかり考えていたんだな」

——当たり前だろ。

父さんは、神乃世にいた頃からこういう風に物事を話すことが多かった。直接説教するのではなく、少しずつ考えさせようと言う感じで情報を与えていくというのだろうか。司の言葉で、何かを説明させようとする。キャッチボールをする時も、カッコいい投げ方を教えるのではなく、まず司の届くところまでボールを投げさせてくれた。その後で色々とコツを教えてくれた。もしそれが、父さんの目的だとしたら、今の司には何がなんだかわからない。早く、核心に入ってほしかった。

「じゃあもう一つ質問だ。さっきの格好を見た限りだと、三十分くらいの間ずっと、トイレのことしか考えられなかったのでは、と推測したんだが、その時別のことを考えたりしなかったのかな。そうだな、今日一緒にデートした、彼女のこととかを」

——西月さん！

口の中に、甘いシュークリームの味が蘇り、また腹の虫が鳴った。早く食いたい。

「お腹、空いたからずっと食べ物のことばかり考えてた」

投げやりに答えた。桂さんが立ち上がり、戸口に出ようとしたが父さんに片手で制された。穏やかに、ゆっくりと。

「そうか、司はずっと食べ物と、トイレのことで頭が一杯だったんだな。そうだろう」

——当たり前だよ！

司は答えず、唇をかみ締めた。いぶかしげに狩野先生がお茶の茶碗を持ち上げる。桂さんもあまりぴんとこない顔をしている。そして、父は大きく頷いている。大人たちが何を考えているか、司には全くわからない。

「これだけ必死になって戸を叩いたのは、何年ぶりだ？」

「だって、出そうだったから」

——誰だって、あそこまでピンチだったらそうするに決まってるよ。

なにせ、穴からこんにちは状態だったら誰だってそうだろう。

父さんはゆっくりと立ち上がった。

「あの時の感情を、司、今日のうちによく、身体に叩き込んで置きなさい」

——は？

ただでさえ腹が空いて干からびそうだったのに、お腹を下してピンチ。この世の終りとまではいかなくても、かなりのしんどさが身体に染み付いている。そんなものを、なんで叩き込まなくてはならないのだろう。司は唇を曲げて父を見た。狩野先生の前だからこれ以上口答えはしたくなかった。

「いいかい司。人間には三つの欲望があると言われるのは知っているね」

意地でもこたえる気は無かった。父は困った顔で微笑んだ。

「性欲・食欲・排泄欲。人間の欠かせない欲望だ。どんな素晴らしい人であっても、この三つの欲望から逃れられる人はいない。この三時間で司は、『食欲』と『排泄欲』この欲望が満たされない時、どれだけ自分をさらけ出さずにはいられないかを経験したはずだよ。もし、あの時桂さんがずっと戸を開けてくれなかったら。もし、このまま閉じ込められていたらどうなっているか、司は想像できるだろう？」

——したくない！

いざとなったらスポーツ新聞を丸めておむつを作ろうとまで思っていたことは、内緒だ。「これから司は、十五、十六、十七と少しずつ大人になっていく。そして少しずつもうひとつの欲望『性欲』の扱い方を覚えなくてはならなくなる。さらに言うならその欲望がどれだけ強烈かを知ることになるはずだ。これは司だけではない、司の周りにいるたくさんの人たち、友だち、家族、誰でもそうだよ。もう一度考えてごらん。部屋に閉じ込められていたあの間、司は何を考えていた？」

真剣だった。最初、意味不明といった顔をしていた狩野先生もじっと父さんを見つめていたし、桂さんも頷いていた。

「食べたい、ってことと、あと、トイレ」

「そうだな。正直だな、司は」

嘘のない笑顔で少しだけ司はほっとした。

「さっき私が、司に今の感情を覚えていてほしいと言ったのは、これから先、人の欲望がどういうエネルギーで出来ているかを忘れないでほしいからなんだよ。司。お前は将来どういう道を選ぶかわからない。まだいろいろ路はある。それこそうちの名前じゃないが『迷路道』かもしれ

ない。だがな、周りの人たちはみな、司がトイレに行きたくなったり、食事をしたくなったりした時の欲望でもって、いろいろなことを求めているんだ。うちの服を買うお客様だってそうだ。洋服に関心なんて司、なさそうだからぴんとこないだろう？　なんでうちの服にあれだけお客様は大金をはたいてくれるのかな」

「ほしいから」

「そうだ。まさにその通りだ。単純に言えば、ほしいんだ。これが『欲望』なんだ」

父は言葉を切った。司が意味を飲み込むのを待っているかのようにだった。

「洋服を選ぶのに関心のない司には、あまりぴんとこないかもしれない。それは父さんも同じだ。母さんが選んでくれる服を着ていけば問題ないというのが本音だよ。でもな。うちの仕事はお客様の『欲望』を満たしてあげることが大切なことなんだ。それも、半端な満たし方ではなく、とことんすっきりした、気持ちよくなった、そう思えるくらいにね」

にやりと笑った父。少し額にしわが増えていた。

「せっかくトイレに行かせてもらえてもだ。もし、アサガオしかトイレにおいてなかったとしたらどうする？　本当に切羽詰っているのは『大』の方なのだと思うだろう。中途半端な欲望の満たし方では、お客さまは満足しないんだ」

——洋式トイレでよかった。

今のたとえ話に、司は震え上がった。もちろんそうは見せない。

「もちろん、司にいきなり顧客満足について話しても、すぐに理解できるとは思わないし、しろとも言わない。だが、今日司は、自分なりに、ひとりの人へ、一つの『顧客サービス』をしようとしたんだ。それはわかるね」

狩野先生が司に視線を注いだ。うなだれるしかなかった。

「理由は、先生と桂さんから聞いている。結果がどういうものだったにしても、司は精一杯その人の『欲望』を満たそうと思ったんだなと、そう感じたよ」

——どこまで知っているんだか。

用心した。身体をこわばらせた。

「だが、その人の本当の望みはなんだったんだろう？　お前の抱えている事情についてはよくわからないが、彼女が本当にしてほしかったことは、果たして神乃世へ連れていくことだったのだろうか？　と一度よく考えてごらん。もし、仮にだ。司がバスに乗って彼女を神乃世へ連れて行って、母さんのおいしいからあげとオムライスをご馳走してあげたとしても、本当に彼女の切羽詰ったものを満たすことができただろうか、ということだよ」

——だって、西月さんは、天羽のいないところへ行きたいって。

不本意だ。あれだって司の精一杯だったのだ。

「お前が今、腹ペコで今すぐ何かを食べたいと思っているのはわかる。三時間閉じ込められて、腹を壊してパニックになったのもわかる。その時、そういう状態から逃れたいと感じたこと、それを忘れないようにしてほしい。周りの友だちも、今司が感じた『欲望』と同じものを、別のものでたくさん感じているんだということも、忘れないでくれ。自分に理解できない『欲望』であっても、その人にとっては腹を下した人のように今すぐトイレに行きたい、と感じるような切羽

詰ったものだってことをだ」

——腹を下した人と同じくらいの『欲望』

司は頷いた。なんとなくだけど、羽根で頭をかすられたような感覚がある。

「その『欲望』をどうすれば、満たすことができるのか。それを少しずつでいいから考えてほしい。もちろんそれを満たすことが正しいとは限らないけれどもな。まず、困ったら先に、人がどのくらいのエネルギーで行動しようとしているのかを考えてほしい。父さんの言いたいことは以上だ。あとは、桂さん、狩野先生と一緒に、彼女にとって一番いい方法を探って行こうな。もちろん、父さんも協力するよ」

父さんの特別講義は終わった。生徒は司だけではない。狩野先生、桂さんもそうだった。丁寧に二人、立ち上がり礼をした。司も慌てて真似をした。

「片岡さん、良いお話をありがとうございます。ただ、一言だけ言わせてください」

狩野先生が父に、静かながらも断固とした口調で意見した。

「司くんはこの三時間、非常に恐ろしい思いをしたはずですよ。全く想像もしていない状態でさぞや不安になったことではないでしょうか。僕はその点に関してのみ、どうしても賛同できません」

「司を閉じ込めたことをですか」

全く悪意のない会話だった。和やかに続いた。桂さんも大きく頷いた。

「社長、俺もそれはそう思います。司の性格からして、へたしたら一生のトラウマになるかもしれません。閉所恐怖症になるかもしれないですしなあ」

大声で父さんは笑い出した。司を眺めて、また膝を打った。

「いや、それは一本取られた！ 司、悪かった。じゃあこれからゆっくり、ここに食事をもってこようか。桂くん、例のもの、運んできてくれ」

「かしこまりました！」

行き際に桂さんは、司の頭をぐりぐりと撫でていった。狩野先生だけが静かながらも不安そうに部屋の中を眺め、ため息をついていた。司に聞こえないようなひそひそ話を始めた父と狩野先生をよそに、司はぼんやりと両膝をもんでみた。

——西月さんが、本当にしてほしいこと？

——中途半端じゃなく、満たすこと？

——僕が神乃世へ連れて行く以外で、できることなんて、ないよ。

——たったひとつしかないよ。出来ないことだよ。

狩野先生から状況説明の前に、桂さんが用意してくれた牛もつ丼を司はひたすら食いまくった。腹の『欲望』は満たされた。顔をしかめている狩野先生を横目に、司は西月さんの渴望がどこにあるのかを、心のうちに認めた。

——天羽に、もういちど好きになってもらうことだけだよ。

牛もつ丼を食い終えてから、父は司に一言尋ねた。

「司、今、一番知りたいことは何かな」

お腹が落ち着くと気持ちも穏やかになるのだろうか。司は片手で口の周りのたれを吹きながら少し考えた。手元に西月さんのくれたお菓子屋さんの紙袋が残っていた。ぐしゃっとしていた。両脇の桂さんと、半分食べ残したままの狩野先生を交互に見つめ、一緒に頷いた。

「西月さん、口きけたかどうか」

「そうか。そうだな」

目と目で狩野先生と桂さんが頷きあっていた。

「やはり、そうなんですね」

「そりゃあそうでしょう」

答えを口走ろうとしている桂さんを、父さんは制した。

「狩野先生から聞いたことと、お前が思い込んでいることとはかなり食い違いがあるだろう。それは仕方ないことだ。現場にいるとなかなか見えないものがたくさんあるのだから。だから、まずはお前の口から実際どうしてああいうことをしたのかを聞きたい。そしてだ」

「そして？」

父さんは真っ正面からまた司に挑んだ。

「そのことをきちんと、これから、彼女のご家族に話に行きなさい」

食ってお腹が温かかったのに、また凍りついた。

——話に行くって、どうやって。

西月さんが今でも口利けなくなっているのか、それとも直ったのか、それすらわからないのにどうすればいいんだろうか。司は頼りたくなって桂さんへ目を向けた。困ったというような表情をしていたが割って入ってはくれなかった。次に狩野先生の方にじっと訴える視線を向けてみた。でもやはり、食べられなかったもつの肉をつつくだけで何も言わなかった。

「話って、どうやっていえば」

「そうだな、言い方の方法を少し練習した方がいいな。まずは、泣かないことだ」

ひくりとする。唇を噛んで一文字にした。

「泣きたい気持ちはわかる。大好きな子が目の前で口きけなくなってしまった。しかもそれは自分のせいかもしれない。不安にはなるだろうな。だがな、それはひとつの事実であって、また時間を巻き戻せるものではないのも事実なんだ。司いいか。この事実から目をそらしてはならないんだよ」

「じゃあ、西月さんはどうなってるの」

恐る恐る尋ねた。

「どうなっていると思う？」

「口利けないままなの？」

沈黙。また電気だけのじいっとした音が響いた。

「やっぱり、そうなんだ」

三人の大人たちは無言だった。

「やっぱり、僕が悪いんだ」

「司」

また口走りたくなるのを父さんは厳しい口調で遮った。

「『僕が悪い』と思いたくなるのは今の状況ならばしかたないよ。でもな、司。『僕が悪い』という言葉は、どこかで『僕が悪くないと言ってくれ』という気持ちがあることも否定できないことなんだ。司はそう思っていないかもしれないし本気でそう思っているかもしれない。だが、聞いている相手にとってはそうではない。『責める人間が悪いんだ』と責められるように感じて、かえって人を憎んでしまうんだ。本当に自分が悪いと思っているんだったら、言葉はよじ登ってこないはずだよ」

——だって、どういえばいいかわからないよ。僕が悪くなかったら。

「司、まずは、起こったことだけをひとつずつ順を追って話してごらん。まずは事実だけを並べてみるんだ。どう思ったかとか、どう感じたかとか、そういうのは後回しでいい。それからあらためて、気持ちのことを考えよう。狩野先生、申しわけないのですがメモをとっていただけますか」

「わかりました」

——狩野先生、もつ嫌いだったんだ。

司は、かばんからメモノートを取り出す狩野先生を観察しながら、半分しか手つかずのもつどんぶりに視線を向けた。あれくらいなら食べられる。気付いたのか司に狩野先生は。

「どうしたの」

と、尋ねてきた。

「先生、もつ、嫌いなんですか」

いかにも苦手、という風にまるのまんま、つやつや残っている。

「食べ物残すの、よくないから、僕が食べましょうか」

やはり先生に言うのはためられるものがある。でも司は子どもの頃から「食べ物は残さず食べること！ 作ってくれた人、そして食べられる命の生き物たち、みんなに感謝してありがたいただかないとだめだよ！」としつけられていた。といいつつも偏食気味なのはしょうもないことなのだけれども。もつなんて、内臓だからそれこそ「命」の塊だった肉だ。このまま捨ててしまうのは、罰が当たる。

「片岡くん、食べかけだよ、それでもいいのですか」

「捨てるよりはましだから」

たぶんOKだろう。司はそのまま手を伸ばし、狩野先生のどんぶりを引き寄せた。父と桂さんがあきれたように見ている。なあに、ふたりの「しつけ」の結果って奴だ。文句あるかと言いたい。

「司、おまえ、太るぞ」

「桂さんよりは痩せてるよ」

父さんは狩野先生へ一言、「まったく、私たちのしつけの結果です」と笑いながらあやまっていた。「ほら司、ありがとうくらい言え。それでは、先に着替えて来い」

司は頷いた。急いでまず、制服からきちんとした黒いスーツに着替えるため、前に使っていた部屋へ向かった。ほとんど机とかたんすとかしか残っていないけれども、ビニールにかかった真新しいスーツとシャツ、トランクス、靴下、ネクタイ、全部揃っていた。すっぱだかになって着替えをした後、髪の毛を指で撫でつけた。

——こんなにめかしこんだのあの時以来だ。

西月さんが夕陽に染まり、茜色のままで微笑んでくれた、あの日以来。

あの時は手元にばらを一輪、携えていた。

今はただ、本当のことを捧げる言葉のみだった。

——何を言えばいいんだろう。

少し腹が出てしまったみたいなウエスト周りをさする。

——事実を話せて言われたって、すべて話したらまずいだろう。

狩野先生がメモを取るくらいなのだから、間違っただけを言うわけにはいかない。司はいったい今まで何をしてきたのかとか、三時間目から桂さんに発見される時までの間、ふたりでどうふらついてきたのかとか。もちろん言いたいことはたくさんあるのだけれども、自分と西月さん以外のことを話すとなると、他人を悪意をもって巻き込んでしまう恐れありだ。天羽のことも難しい。——だって、きっかけは天羽だろう？

殴られたとか小突かれたとか、そういうわけではなかったのかもしれない。司が西月さんを発見した時、かなり顔色が悪かったのと、服がどろだらけになっていたこと、腕のあたりにもどろがついていたこと。かなりじたばたしたことだけは想像できた。

たぶん天羽と西月さん、そして近江さんを含めた三人の間で、何かきつい話し合いが行われたのかもしれない。天羽も司に「一発殴れ」と言い残したのだから、それなりの理由があるのだろう。でも、あくまでもこれは司の予測であって、父さんの言う「事実」の羅列には入らないような気がする。

——というか、絶対、僕の想像範疇を出ないよ。

——だから、言えない。

取り捨て選択は必要だ。司はもう一度腹をひっこめて、ベルトの穴を一つずらした。

——本当のことは言う。けど、人を巻き込みたくないよ。

ライブラリーに戻ると、父の姿が見えなくなっていた。桂さんがにやっと笑いつつ、「司、ちゃんと今は、社会の窓閉まってるな」「さっきはたまたまだってば！」  
「社長、今仕事の電話がかかってきたようで、話をしている最中だ。なにとはともあれ、狩野先生、まずは司の言い分を聞いてやってください」

どうぞ、とばかりに十五度程度、身体を傾けた。

狩野先生も静かに一礼をした後、司に向いた。

「片岡くん、では始めましょうか」

「あの、何から話せばいいんですか」

部屋の中で決めたはずなのに、言葉が詰まる。

「まず、どうして片岡くんは、教室から抜け出そうとしたのですか」

——天羽のこと言わないとまずいかなあ。

唇を噛んでうつむいた。できるだけ天羽の存在を見せないように話を始めた。

「西月さんが戻ってこなかったから、変だって思ったから」

「そうですか。でも、授業を抜け出す人はたくさんいるでしょう。たまたまなぜ、西月さんだったのでしょうか？」

困った。

——天羽が僕に教えてくれたから。

本当のことは言えない。狩野先生が仮にすべてを天羽から聞いているのならば別だけれども、できれば巻き込みたくなかった。となると、言葉はどんどん絞り込まれるわけであり。

「西月さん、心配、だったから、です」

嘘じゃない。心配ではなかったけれども、何かがある、と心臓とくつくさせながら走った。

狩野先生は静かに何かを書きとめた。

「わかりました。それでは次です。片岡くん、どうして西月さんを連れて、駅前に行こうとしたのですか」

——西月さんが、天羽に会いたくないって言ったからだよ。

これも迷った。本当のことだけれども、西月さんはもしかしたら、この言葉を後悔しているのかもしれない。不安だった。結局西月さんは、大人しく家に帰って行ってしまったのだ。司が引っ張り出したせいで言葉を話すことができなくなってしまったのだ。

しかたなく、司はもうひとつの真実を口にした。

「神乃世なら、西月さん喜ぶと思ったから」

わざとらしいため息は桂さんからだ。背広姿で両腕を組んだ。

「だからってなあ司、頼むから神乃世行きのバス停くらい自分で見つけろよ。狩野先生、こいつですね、先ほど話した通りわざわざ神乃世の実家へ電話をかけたんですよ。食べ物用意してくれて。相当、腹が空いていたんでしょな」

「ごもっともです」

少し笑いをこらえるようにして、狩野先生はくくと、咽を鳴らした。

——なんで笑うんだよ！

怒鳴られること殴られることは覚悟していたけれども、なぜそこまで言われなくてはならないのだろう。司は思いっきりむくれたかった。先生がいるから我慢した。

「では、神乃世へ行けば西月さんは喜ぶと思ったのですよね。他の選択肢を考えたりはしなかったのですか？」

——考えるわけない。だって西月さんが。

言葉を飲み込み、被りをふった。



「給食より、うちの母さんのからあげとオムライスの方がおいしいから」

大人ふたりが少し、あきれはじめたことに、司はさすがに気付いた。不自然な答えだと自分でも思う。でも、へたしたら告げ口になってしまうかもしれないし、西月さんを傷つけてしまうかもしれない。ここまできたら、しかたない。

「確かに、司の母さんの料理はうまいからなあ」

桂さんはさりげなく相槌を打つ。狩野先生はなんともいえない表情で、しばらく考え込んでいたがさらに質問を振った。

「片岡くん、それではどうして」

言葉を切った。唇をゆがませるようにして、なにかをこらえるように、

「先に、僕のところに来てくれなかったのですか」

さすがに桂さんも相槌を打ってくれなかった。司の目から見ても、狩野先生の表情はかなり苦しそうだった。牛もつ丼を食べられなかったから腹が空いているのでは、と司は思ったりもしたが、違うらしかった。

「最初に連絡してくれたのは、泉州さんでした。その時に、片岡くんが西月さんを発見して迎えに行ったと聞いたのですぐに戻ってくるだろうと思っていました。もちろん事情が事情ですからいきなり教室に連れて行くことは難しいかもしれませんが、直接職員室に避難させるとか、生徒指導室にかくまうとか、いろいろな方法は取ることができたはずですよ。もちろん片岡くんは西月さんのために良かれ、と思ってしてくれたことなのでしょう。ですが、その時にほんのわずかでも僕のことを思い出してもらえなかったことが、三年A組の担任としては非常に、残念です」

——だって、関心ないって顔しているし。

司も黙るしかなかった。気まずい空気をなんとかしようと思ったのは狩野先生の方だったらしい。すぐに気を取り直してか、すぐに質問を続けた。

「西月さんはどうして、こんなに傷ついたのか、説明してくれましたか？」

——それはないよ。

自信もって首を振った。

「何も、説明なしですか？」

「泣いているってことは、傷ついてるってことだから」

「クラスの人たちとのいざこざ、だということですね」

「だって、僕は」

司はしばらく曖昧に言葉を濁すしかなかった。狩野先生もすでに事情を知っているはずだという認識のもと、話を持って行ったのだけれども、ちょうど肝心要のところは話してくれなかった。本当だったら司も知りたいことがいくつもある。結局西月さんと天羽の間でどのような会話が交わされたのか。いったいどのあたりで傷ついたのか。あんなに涙を流してしまうくらい傷ついた西月さんをどうすれば、一番よかったのか。狩野先生の言うとおりに、直接西月さんを職員室に連れて行けばよかったのだろうか。わからない。すべて本能のまま行動してしまったけれども、一番何を西月さんが望んでいたのかがよくわからない。

——だって、天羽のいないとこったら、あそこしかないんだから。

「それでは片岡くん、今日のことをこれから西月さんのご家族に、どう説明するかを考えてみましょうか」

司の曖昧な言葉遣いにさじを投げたのか、狩野先生は話の方向を替えた。

「西月さんは今、お家にいます。ただ何も口を利いてくれないので、いったい何が起こったのかわからないままなのだそうですよ。当然、一緒にいた片岡くんから、どういう状況だったのか、どういうことが起こったのかを聞きたいとご家族は思っています。言葉が出なくなるほどの衝撃となると、女子の場合いろいろな事件が絡んできている恐れもあります。だから、まずは西月さんにご家族に会いに行って、何が起こったのか、何で片岡くんがそういう行動をしたのか、それを説明してあげてほしいのです。今の話で片岡くんが純粋に西月さんを心配してくれたことを、僕は疑っていません。だから君なりの言葉をそのまま誠実に続けてくれれば、必ず伝わるものがあるはずですよ」

西月さんの、別れ際の表情が浮かんだ。舌に蘇る甘いシュークリーム味の。両手で差し出してくれたパンと牛乳。黙ってさび付いた停留所を指差した姿。涙いっぱい司に訴えた言葉。——どこかに連れて行って。

連れて行くことができなかった。

それどころか言葉をなくしたまま、連れ帰ってしまった。

——僕に、あんなにたくさん、くれた人なのに。

——僕はなんにも、なんにもしてあげられなかった。

うつむくとまた泣きそうになるが、こらえた。泣いたら父さんの言う通り、同情を求めてしまうだけだ。

「連れてってください」

両手を握り締め、桂さんと狩野先生に、頭を下げた。よく父さんが物を頼む時にするしぐさだった。

父さんは仕事をある程度片付けたらしく、さっそくきちんとした黒の背広を着て車を出すよう桂さんに指示をした。その後で、

「司、わかっているな」

と確認するよう、顎を人差し指で上げた。

「うん」

「うんじゃなくてはい、だろう。大丈夫なのか」

怒ってはいないけれど、少し不安そうだった。心配を打ち消す方法なんて見つからなくて、司は黙ってうつむいたまま車の助手席に座った。後ろに桂さんと狩野先生。特段何も言わなかった。「夜遅くまでお付き合いさせてしまい申しわけありません」

「いえ、教師としては当然のことです」

静かな返答あり。後ろの座席はきっと桂さんのお尻で窮屈だろう。司は外を眺めた。車をそろりと発進させた父の握ったハンドルを見て、

——父さん、運転免許ないわけじゃなかったんだよなあ。

と、二年前のことを思い出した。

「司くんは大丈夫です。さっき、話をしてみてわかりました」

沈黙が続く中、狩野先生はいきなり言葉を発した。ぎょっとする。しゃっくりしたみたいに肩が思いっきりこわばってしまった。運転する父さんは唇で少しだけ笑い、

「そうですか。相変わらず子どもじみたことを話していたことでしょうか。この子は通常の中学生よりも四つくらい精神年齢が低いようです」

「いえ、そんなにたくさん話をしたわけではないのですが、人のことを思い遣るようなことを話してくれました。大丈夫です。僕は、司くんを信じます」

——別に、信じるとか信じないとか、そういう話、僕したっけ？

大人三人が和やかに、「そろそろ修学旅行ですけれどもいろいろご準備大変でしょうねえ」「やはり長丁場ですのでね」「子ども達のことを考えるといろいろ胃も痛いことでしょうか」と、全く関係のない話を始めていた。司は取り残されつつ、さっき父に渡された菓子折りの包みの重さにため息をついた。

——僕は何を話せばいいんだろう。

狩野先生は過剰に信じてくれているようだ。司も覚悟がある。西月さんの家族に殴られて怒鳴られて、「娘を傷物にされて」……どういことが傷物なのかよくわからないが……とののしられるのも覚悟の上だ。でも、自分の中で決して言ってはいけないことだけははっきりした。

まず、西月さんと天羽とのやりとり。

もちろん司はその状況を見たわけではないし、天羽を通じてしかわからないのだから、説明の仕様が無い。でも家族の方からしたら一番知りたいことかもしれない。狩野先生はどこまで知っているのかわからない。もしかまわらないのだったら、そこんところは飛ばして行こう。

次に、西月さんと天羽との繋がり。

短い間だけれども、このあたりも考えた。家族に西月さんは、天羽との付き合いを話したのだろうか。自分だったらもし西月さんに告白されたとして、すぐには打ち明けないだろう。桂さんにはいつのまにか白状させられるかもしれないけれどもだ。そして例の騒ぎ……二週間で交際解消および絶交状態……も気付かれているのだろうか。司だったらたぶん、言えない。言えらしたら周平くらいだろう。司にとっての周平は、西月さんにとっての泉州さんだろうし。だからこのあたりも内緒にしておいたほうがいいような気がした。

となると、司が話すべき内容と言うのは、自分のしでかしたことを逐一説明するだけなんじゃないだろうか。嘘偽りなく、ただ天羽の話だけは全部ぶつんと切って、なぜ神乃世へ連れて行きたいとおもったかを語ってしまうしかないのではないだろうか。いきつくところはひとつ。

——僕は、西月さんを、神乃世へ連れていきたくかった。

これだけだろう。

狩野先生もそのあたりの事情については理解してくれたとは思えない。どこかに連れていかないで、先生のところへ連れて行って何とかした方がきっとよかったのだろう。でも、司は西月さんの想いを精一杯、叶えたかった。言葉を失ってしまうなんてことさえなければ、きっと後悔しなかったはずだ。

娘の沈黙が、誰によってもたらされたものなのか。司が勝手に引っ張り出してしまったからだろうか。その辺も司には言うべき言葉がある。そうです。その通りです、と。

——言い訳はしないよ。父さん。

——僕は、西月さんを、神乃世へ連れていきたくったんだ。

——周平に会わせたかったんだ。

——天羽のいないところに連れていきたくったんだ。だから。

「この辺か？ 西月教授のお宅は」

父が振り返って桂さんに尋ねている。目の前の真四角な二階建て。煉瓦で玄関まで階段が用意されている。水色の少し派手に見えるうちだった。玄関のライトはついていて。

「そうですね、駐車するところはあるそうですか。無いようでしたら探してきますが」

「そうだな、少し時間かかるだろうからな」

桂さんだけが大きく降っていった。おそらく水色の家が西月さんの自宅なのだろう。このあたりはあまりよく分からないけれども、西月さんが大学教授の孫娘だということだけは知っていた。たぶん学校関係の人が多いのだろう。

「司も降りなさい。狩野先生、どうかよろしくお願いします」

「こちらこそありがとうございます」

シートベルトを外し、司は大きく降り、狩野先生の座っている席側の扉を開けた。

「ありがとう」

——これでいいのかな。

司はそっと狩野先生の表情を伺った。先生は頼ってほしかったようなことを言ったけれども、司からしたらどうやって頼ればいいのか全く見当がつかない。狩野先生はめがねをそっと上げて、司にゆっくりと頷いた。すぐに出てきた桂さんが、駐車できそうなスペースに「オーライ、オーライ」と手旗信号のようなことをやりはじめたのを眺めていると、狩野先生は斜め上から司に声をかけた。

「片岡くん、さっき僕がお父さんに話したことは、本当のことです。君は安心して、言いたいことを話してきてください。午後にできなかった分のことは、ここできちんとしますからね」

——やっぱり、よくわからないや。

でも、司のことを心から心配してくれているんだ、ということくらいは見当がついた。

「ごめんなさい」

——言いたいこと、言うよ。西月さんのために。

無事車の置き場所が落ち着いて、父と桂さん、そして狩野先生、司の順で煉瓦の階段を昇った。ずいぶん玄関まで長い。西月さんは毎朝ここから通っているのか、と思うと司も足が震えてくる。玄関の向こうには、制服を着ていない西月さんがいる、そう考えるだけでもどきどきしてくる。「片岡くん、入りましょう」

先に父と桂さんが入って行き、少しだけ待たされた。一度閉まった戸がまた細く開き、桂さんが手招きした。狩野先生に背を押された。全身、いきなりぴんと張ってしまいうまく歩けなか

った。玄関マットの上では、真っ白な髪の毛の、やはりきちんと背広を着こなしたお爺さんが立ったまま何度も挨拶をしていた。怒っている様子はなかった。むしろ、穏やかに微笑みを絶やさずに、という感じだった。玄関はほとんどがピンク尽くめの少女めいた小物類でいっぱいだった。カーネーションの花がたっぴりとあちらこちらに生けられていた。香水のにおいで埋め尽くされた空間だった。

「先ほど、お電話させていただきました通り、今日うちの息子を連れてまいりました。息子の粗相は父親の不始末でもあります。どうか、お詫びさせてください」

玄関の前でふかぶかと頭を下げる父。桂さんも同じく九十度こっぴりに腰を曲げている。側で狩野先生が大体四十五度くらい下げている。

——ど、どうしよう。僕、どうしたらいい？

頭を下げなくちゃいけない。それはわかっている。でも、みんな、司の代わりに頭を下げている。父さんなんて関係ないのに。桂さんなんてもっと関係ないのに。狩野先生なんて、もっと関係ないのに。

目の前のお爺さんが何者なのか、それすらわからない。そっと優しい目で司を見つめるその人と、目が合った。足ががたがた震えた。さっきまで平気な顔していろいろ考えていたくせに、お爺さんの髪の毛状態で頭が真っ白になった。「あ、あ」と口を開けたままだもった。

——どうしたらいい？

次の瞬間、司は白い大理石のたたきの上にぺたっと座っていた。茶色の細かい割れ目が光っていた。お尻も膝も冷たい。四人の大人たちが司を見下ろしている。

「司、どうした。腰抜かしたか」

桂さんが手を差し伸べてくれた。父は黙って様子をうかがっている。狩野先生がかがみこもうとした。違う、言わなくては。どんどことお腹の中からあばれる声がする。

「も、申しわけございませんでした！」

両手をつき、司はふかぶかと頭を下げた。足の甲の触れたところが、靴下薄いせいでじんと沁みてくる。お爺さんがどういう顔をしているのかまで見る勇気なんてなかった。もうあとは、本能でしゃべるしかなかった。忘れないうちに、ただ、伝えるために。

「あの、あの、今日のことなんですけど、僕がすべて悪いんです」

声が震えてしまい、咽のところが妙にひっかかる。でも続ける。

「学校で、あの、いろいろあったんですけど、決して叩いたとか、殴ったとかそういうことじゃないです。でも西月さんがつらそうだったし、あの、そういう時うちだったら、ちゃんと神乃世のうちに連れて行って、うちの母さんのオムライス食べさせてあげると、すぐに元気になるってこと多かったから、そうしようと思ったんです」

嘘ではない。返事がないのでとにかく話続けるしかない。

「もちろん、本当だったらすぐに、狩野先生のところに連れて行ってあげるのがよかったんだと思うし、その前にちゃんと電話かけて連絡すればよかったし、その前に学校終わってからのほうがよかったんじゃないかって思ったんですけど、けど、やっぱり、すぐの方がいいと思ってそれで

です。だから西月さんが悪いわけじゃあないんです！」

手がさらに冷えてきた。泣くことだけは絶対に許されない。事実だけ、丁寧に。

「けど、僕、神乃世に行く時いつも、車でしか行ったことなかったから、どうやって行けばいいかわからなくてうちに電話かけたんです。そしたらうちの母さんが、バスで行けばいいって教えてくれたから、駅前に行ったんです。西月さん、僕が乗り方わからないのを見て、全部どこのバス停で乗ればいいのか調べてくれました。けど、やはり、僕の早とちりで、行くべきじゃあないんだってこと、西月さんが教えてくれました。僕、お腹すいてて、もう動けなくて、どうしていいかわからなくなったら、西月さん、僕にシュークリーム持ってきてくれたんです。おいしかったんです。だから、きっと西月さん、僕がひとりで神乃世へ行きたくがっていたのを見て、かわいそうがって付き合ってくれただけなんです。まさか、あの、西月さんが口きけなくなってるなんて思わなかったし、ごめんなさい！」

顔を上げて驚愕した。お爺さんの笑顔、その後ろに西月さんが立っていた。ピンクのトレーナーとタイトスカート姿で、無表情に司を見下ろしていた。今にも泣きそうだった。また後ろの方にはだいぶ背の高い男子高校生っぽい人がひとり、さらに赤いエプロンをつけた、おそらくお母さんであろう人がひとり。

——みんな、なんで見ているんだよ！

言葉が絡まり、舌がもつれる。歯ががたがたいう。お爺さんを除いてみな、表情が硬い。

「いいよ、坊や、もっと話してごらん」

こくっと返事代わりに頷いた。

「あの、僕、決して悪いことを、しようとか思ったことないんです。言い訳かもしれないし、さっき父さんにも『そういうことするつもりじゃなかった』って言うと、そういう下心があるってことを説明するようなものだって言われたんですけど、ほんと、ものすごく悪いことをするつもり、ありませんでした。それから、僕と一緒に駅まで行く間、なんも悪い人が襲ってきたりしませんでした。それだけは大丈夫です。あと、僕、あの」

——僕が恥ずかしがってどうするんだよ！ 西月さんはたった一人で僕をかばってくれたんだ！ 藤棚の笑顔を取り戻したい。涙が出そうになるのをこらえた。絶対に、泣くものか。「僕は西月さんのこと、大好きです。でも、僕は前に悪いこと、したことあるから、あの学校で付き合うとか、男女交際とか、いやらしいこととか、そういうことはできません。だって、西月さんがそうしたら困ることになります。いじめられます。だけど、僕、西月さんがいじめられそうになったり悪口言われそうになったら、どんなことあっても、守ります。だから、だから、あの、その、うまくいえないんですけど、今日みたいにいきなり連れて行くことはしないけど、ただ、あの、いじめた人とかに文句は言うようにします。すみません、今日、やり方、間違えました。ごめんなさい。あの、それと」

西月さんの顔がかすかに震えているように見えた。後ろの二人もだ。白髪頭のお爺さんだけがうんうんと相槌を打っている。

「そうかいそうかい、坊やは小春のことが大好きなんだ」

「め、女神さまみたいな、人です」

完全に、自分の理性は吹っ飛んでいた。とたん、とうとう後ろのふたりの顔が思いっきり崩れていった。まさに崩壊だった。塔が崩れていくかのようにふたり身体をくねらしながらしゃがみこんでしまった。同時にけたたましい男女それぞれの笑い声。西月さんだけが限りなく無表情に近い表情で立ち尽くしていた。何で笑われているのか、わからない。司はただ、西月さんに何かを言わなくてはならないのだということしか、わからなかった。

「西月さん、あの、今日の美術なんだけど、ほとんど写生、できなかつたと思うんだけど」

いきなり振られてきょととした目を向ける西月さん。こっくり頷いた。

「僕、あの、絵、得意だから今スケッチブック貸してくれたら、スケッチだけすぐ描くから。それに色つければたぶん、美術、大丈夫だと思うから」

慌てると自分でも何を口走っているのかわからなくなってきた。肩をとんとん叩くのは桂さんで、

「ほらもうそろそろ、落ち着けよ。お前、今舞い上がってるだろ」

笑い声が響く中、でももっと言わねばならないことがある。振り払った。

「で、今度、夏休み、もしよかったらなんだけど、今度こそ、神乃世に来てください。もちろん一人じゃまた悪いことだと思われるかもしれないから、泉州さんもセットで、いやもっとたくさんきてもいいと思うから。うち、すごく広いから、男女わけて部屋用意できるし、そしたらうちの母さんのオムライス出せるし。だから」

目の前の白髪のおじさんはさっきから司に向かってしゃがみこんでいた。やたらと「坊や」を連発するのは止めてほしかった。がしっと頭を撫でてくれた。犬の気持ちだった。

「司くん、狩野先生のおっしゃる通り、君には悪いことはできないねえ」

ひとり、無表情で佇む西月さんに振り返り笑顔のまま、

「この男の子がついてきてくれて、よかったね、小春は自分の部屋に行っておいで」

大爆笑大会で大受けしているお母さんとお兄さんらしき人には、

「まずは一番の心配事項が片付いたね。さてこれからだよ」

それぞれにそれぞれの言葉をかけた後、司を保護する三人衆……父さん、桂さん、狩野先生へ呼びかけた。

「なにはともあれ、まず上がってください。小春を守ってくれた小さなナイトにもお礼をしなくてはね」

——ナイト、だなんて、そんな、僕、あのどうしたら。

笑い納めたお母さんは涙を軽く拭くようなしぐさをした後、西月さんと同じようなまああるい笑顔で司に見せ、奥に引っ込んでいった。お兄さんも続いた。

「司、ほら、膝どろだらけだつての、払えよ」

桂さんに頭を小突かれつつ、それでも柔らかい空気の中司は入っていった。

玄関に立ち尽くしている脇をすり抜ける際、司はじっと西月さんの瞳を捕らえた。

大人たちには聞こえないようにささやいた。

「天羽のこと、絶対言わないから、安心して」

初めて西月さんは、小さく笑った。



行きづらい雰囲気ではあったけれど、もともと司はクラスメートとしゃべることが少なかったし、それはそれでいいと思った。泉州さんも今までは、多少クラスの女子たちに配慮して、あまりしゃべりかけることもなかったのに、今日からはずいぶんなれなれしい。小さい声で「小春ちゃんにやらしいことしたなんてことないよね」とささやいているのを聞くのは辛かった。誤解されてもしかたないことだとわかっているのだけれども、やはりしんどい。狩野先生も、結局夜の十時くらいまで付き合ってくれた。西月さんの家を出た後、なんと父のマンションへ泊りこんだらしい。今朝みた感じだと、明らかに寝不足そうだった。また父の演説に付き合わされたのだろうか。今度こそちゃんと、「牛もつ丼」ではない食べ物を食べることができたのだろうか。いろいろ考えているうちにめまいがしてきてならなかった。桂さんといつもの家へ戻り、風呂に入って眠り込んだ後、何が起こったのか司は知らない。はっきりしているのは、一日おいて二日後、西月さんは学校に戻ってくると約束してくれたことだけだった。

泉州さんは憤っていた。そりゃあもう、怖かった。

次の日の昼休み、女子たちの前でためらいもなく司は教室から引っ張り出され、体育器具室まで連れて行かれた。グラウンドの奥に立っている、私立青大附属中学の代物とは思えないほどのほったて小屋だ。

「ごめんなさい！ 本当に、ごめん」

ひたすら司は頭を下げつづけるしかなかった。平手で後頭部をぽかんと叩かれる。手加減をされているし、女子の腕力だし、痛くはない。けれど、怒るのも無理はない。

「まったく、あんたって、ボケなのか天才なのかわかんないよね！」

「けど、大丈夫だから！」

——西月さんのことなら、ちゃんと狩野先生が手を打ってくれたから。

そう答えるつもりだった。

「ちゃんと、明日、学校に来るって！」

「そんなこととっくに聞いてるってば。それより問題はあんたよ、片岡」

「ごめん、嘘ついちゃったのはごめんなさい」

また、頭のとっぺんに手を置いて、ぐりぐりされた。誰かさんのやり方とそっくりだ。

「で、あんた、なにやってたわけ？ 小春ちゃんと駅まで行ったんだって？」

——もうばれてるんだ。

司が西月さんを連れて駅まで連れて行き、神乃世までバスに乗って行こうと考えたこと。ふたりだけの秘密にはならなかった。

「あんた、あまり言いたくないけどさ」

泉州さんはもう一度、髪の毛を引っ張った。抜けたらどうしよう、つるつるになったら。

「なんであんた、タクシー使わなかったわけ？」

言葉を発せず。司は凍った。泉州さんは温んだ笑顔で唇を曲げつつ続けた。

「私はさ、あんたらが仲良くなってくればそれでいいと思うよ。小春ちゃんの事情については、黒幕がいるんだってこと、こっちだってわかってるからね。小春ちゃんがどう思っているかどうかはわからないけどさ。けど、あまりにもまぬけじゃないのさ。小春ちゃん、結局片岡じゃあ当てにならないと思ったんだろうねえ。学校に電話かけてきたんだよ」

——えっ？

初耳だった。顔を上げて泉州さんの顔を覗き込んだ。いつものように浅黒く、髪の毛ぼうぼうの泉州さん。口元にソースの跡が残っている。

「無理やり連れてってやればよかったんだよ。私が言うのもなんだけどさあ。あんたがあまりにももたもたしているから、小春ちゃん元評議委員の意識爆発させて、近くのお菓子屋さんから電話連絡してきたんだよ」

「けど、西月さん、口利けないんだよ！」

お菓子屋、と聞いて口の中に甘いカスタードクリームのお味が広がった。つばを飲み込んだ。「知ってるよそんなこと。小春ちゃんのお母さんがうちの母さんにしゃべってたもん。あの家も妙にあっかるいからさ、その辺オープン」

「口利けない人がどうして学校に連絡なんてできるんだよ！」

お菓子屋さんから連絡、というのがよくわからない。第一、そんな暇なんて無かったはずだ。「ばっかだねえ、片岡。あんたと二人っきりで愛の逃避行していた時にさ、どっかのお菓子屋さんに寄らなかったわけ？」

「そういえば」

鈍すぎる。司は思いっきり自分の耳を引っ張った。自分なりのお仕置きだ。

「うん、寄ってた。けど、西月さんひとりだよ」

「あたりまえじゃん。一人に決まってるじゃん。あんたと一緒だったら、またややこしいことになるに決まってるじゃん」

じゃん、じゃん、とうるさいくらいだ。じめっとした空気の中、外の雨がぼたぼたと音を立てていた。

「小春ちゃんのお母さん大受けしてたよ。お菓子屋さんのカウンターに向かって、まず小春ちゃん、生徒手帳に『私は口が利けないので、今から書くことをここの番号にかけて伝えてください』って書いて、お店の人に渡したんだって」

「お店の人にとって、シュークリーム買うんじゃないかって」

飢えた司のために、お菓子を買ってくれたのではなかったのか？

「そりゃあさ、なんも買わないで頼むのはやっぱし、まずいと思ったんじゃないの。小春ちゃん、学校とうちにかけてもらって、かくかくしかじか片岡くんとふたりでいて、これから学校に戻りますってことを、お店の人に言ってもらったらしいんだよ。お母さんもびっくり仰天したらしくって、すぐ学校に迎えにきたって。ほら、あそこのうちって、お爺さんが一番えらいじゃん」 ——えらいのか？

昨夜、大人たちが熱く西月さんの今後について語り合い、最後は固い握手と友好的な雰囲気の中で幕引きとなったのは覚えている。ただ、肝心要の西月さんが静かに押し黙ったままだった

のと、司が居場所見つからずに小さくなっていたのがなんともいえないところなのだが。司に理解できたのは、西月さんが今日のところは学校を休み、明日からいつも通り通うことになること。またもう一つ、授業を受ける場所が別になること、くらいだった。難しすぎて全く理解不能だったんだからしょうがない。泉州さんが言った通りあの白髪頭の人、西月さんのお爺さんで、いわゆる「教授」らしい。お父さん以外には顔を合わせるようになったけれども、なぜかみな、司には優しくした。下手したら「娘を傷ものにして！」と殴られることを覚悟していたのにだ。泉州さんはさすが、親友だけあって家庭事情には通じているらしい。

「お父さんがさあ、いろいろと影薄いんだよね。ほらほら、高校野球のピッチャーだった人なんだけど。いろいろあるみたい。お父さんよりもお爺さんの方がOK出したら、あとはみな黙って従うんだってさ。あんた、お爺さんには殴られなかったんでしょ？」

「うん」

なでられはしたけれど。

「じゃあ気に入られたんだよ。あとはさ、時間の問題だね。小春ちゃんが気持ち落ち着いて、馬鹿天羽のことを忘れて、片岡のことを気に入ってくればさ。あとは家族ぐるみでOKじゃん」

また、「じゃん」だ。つい口を尖らせて言い返したくなる。

「もう、とっくにそうだよ」

「は？ 小春ちゃん、喜んでたの？」

「違うよ、『家族ぐるみ』ってところだよ」

このあたり、話の途中で思いっきり船を漕いでしまい、桂さんにぶんなぐられて目を覚ましたので詳しいことはわからない。ただ気が付いたら父さんと西月教授が意気投合していて、『迷路道』の経営方針とか、人材の育て方とかについて熱く語っていたことくらいだ。そのうちにいきなり話が飛んで、「今度ぜひ、うちの学生たちにその話を聞かせてやってください」と西月教授が言い出し、何度目かの握手を交わしていたことくらいだろうか。とにかく、司のボケのせいでこれっきり西月さんに近づくな、ということはないみたいだった。

「家族ぐるみねえ。あの家、そういうの好きだからねえ」

しみじみとつぶやく泉州さん。雨なのにサッカー部がグラウンドを走りつつ「ファーイト！」と声をかけているのが聞こえる。へこんだサッカーボールを踏んづけつつ、泉州さんは腰に手を当てた。しょぼくれている司の立場っていったいなんなのか、とつい思ってしまう。

「うちの父さん母さんともそうだもんねえ。小春ちゃんのお爺さん、やたらと自分のゼミの学生さんに、社会人の話を聞かせたがるくせがあるんだよね。うちの父さんも警視になる前に、警察の仕事について話させられたって言ってたもん」

そういえば泉州さんのお父さんは警察の人だったのだ。

「とにかく、それであんたはお爺さんに『祝・小春ちゃんの彼氏』と思われたんだ」

「『祝』じゃないし、彼氏でもないよ！」

泉州さんはどうして、どんどん先に先にと話を持っていくのだろう。司が決して望んでいない、望んではいけない夢を、叶うもんだと決め付けて語っていく。そんなこと叶うわけがないのに。司と西月さんがずっと、押し黙ったままオレンジジュースを飲んでいたのがその証拠だ。父さ

んと西月教授はどう思っているかわからないけれども、司には決して手の届かない場所なのだ。  
「大丈夫だって。あのお爺さん、小春ちゃんの彼氏についてはお父さん以上にチェックが厳しいと思うよ。天羽より片岡、あんたの方が上だって思われたみたいでよかったじゃないのさ」

言っている意味がわからず司はもう一度唇を突き出した。

「ほらほら、すねないでさ。今だから言えるけど、小春ちゃんは天羽と付き合っていた間、家族には一言も話さなかったってよ。いろいろ、事情があったんじゃないの？」

——天羽の方が僕なんかより上に決まってるのに！

立っているのが急に辛くなった。力がふよふよと足から抜けていき、しゃがみこんだ。もうひとつ転がっていた、つぶれたボールにまたがって座った。

「あんた、ほんとうこうやって見ると、ガキだねえ」

「悪かったな」

だってそうでもしていないと情報が整理できなかった。

司はしばらく迷っていたが、話すことに決めた。

「西月さん、しばらくA組に戻ってこないよ」

「はあ？ だってあんた、あさって小春ちゃんが学校に来るって話していたんじゃないのさ」

「それはそうだけど」

みんな見通しているように見えるけれども、知らないことだってあるのだと思えて、ひそかに嬉しかった。

「西月さん、しばらく『E組』に行くんだ」

「はあ？」

がしっと尻をボールにくっつけ直し、両腕を組んだまま司は見上げた。少し戸惑っている様子の泉州さんは、やっぱりモデルさんみたいだった。

「狩野先生が言ってたんだ。しばらく西月さん、A組から離れて、気持ちを落ち着けるための時間が必要なのではないかなって」

「そりゃあそうよ、口きけないくらいなんだから」

「だから、だよ」

頭の上から雨漏りしそうなくらいに雨音が鳴り響く。

「僕も知らなかったけど、西月さん『E組』の手伝いをしていたんだって」

「知らなかったの？ ほら、一年の杉本さんの面倒見るために、小春ちゃんいろいろと駆けずり回ってたのよ」

「それだれ？」 答えず泉州さんは西月さんオンリーのことを話しつづけた。

「とにかく小春ちゃんは面倒見がいいから一年の女子からは好かれてるのよ。クラスで弾かれた子を図書室へ連れて行って、いろいろ話を聞いてあげたりとかしていたようだし。妹みたいな子が小春ちゃんにはいるのよ。E組って学年の掃き溜めって言う人もいるし、ある程度は当たってるかなと私は思うけど、まああそこだったら天羽は寄り付いてこないよねえ」

「たぶん、天羽も知らないと思うんだ」

狩野先生が説明していないとするならば、だ。男子たちも興味しんしんでいろいろかまをかけてきたけれども、司はうつむいて無言を通した。余計なことを言う、自分とはにかく西月さんが大変なことになるかもしれないからだ。今の段階では、下着ドロの片岡司にいやらしいことをされたらしいという噂を流されたくなかった。自分が悪者になるのはかまわないけれども、西月さんが男子だけではなく女子の目からも汚れた存在にされてしまうのはいやだった。

「そうかあ。『E組』に非難かあ。そうだよなあ。今まで元気に面倒見のいいお姉さんしていた小春ちゃんが、今度は杉本さんにお世話してもらうことになるわけなんだあ。複雑」

——だから、その杉本さんって誰なんだよ。

「ま、あんたもわかるよね。小春ちゃんがいかにみんなに対して優しい子か。天羽の奴、いったい何言ったんだか。ほんっと頭くるよ。あいつ、人間として最低じゃないのって言いたいよね。あんた知ってる？ ほら写生のとき」

——西月さんに「好きになれない理由」を説明したってことか。

あの時天羽も、かなりいいかげんに話をはしょっていた。いったい何が原因なのか正直なところよくわからなかった。天羽なりにもいろいろ考えるところがあったのだろうし、どうしても伝えなくてはならないと思ったからああいう行動に出たのだろう。でも、もっとやり方があったのではと思う。四時間目まではなかなか、他の男子たちの視線もあって声を掛けられなかった。なんとなくだけれども、天羽と近江さんの二人に対して、女子たちが冷却態度を取っているのだけは見て取れた。司はただ、チャンスがうかがうしかなかった。何度か泉州さんが文句を近江さんにつけているのはちらりと見たけれども、あの近江さん、全くどこ吹く風。知らん顔で受け流していた。

「ほらほら、あんたが戻ってくる前、写生の後よ。小春ちゃんが戻ってこないからさ、変だなあと思って天羽にかまをかけてみたわけ。そしたら『カセットテープ』とか意味不明なことを口走ってたじゃないのさ。いやあな予感したから聞いてみたのよね。近江さんにも」

——カセットテープ？

司も天羽の口から確かに聞いた。でまかせだろうと思って気にしていなかった。しかし泉州さんは「当然」と決め付けたまま話を進めた。

「どうやらさあ、あのふたり、小春ちゃんを呼び出して、話し合いをそのまま録音しておいて、いざ小春ちゃんが食ってかかった時には証拠物件にするつもりだったらしいのよ。アホよね。そんなことしたら自分らが『リンチ』したってことになるのにさ。そういうとこ、あの評議コンビ、頭働いてないよねえ」

ぼりぼりと髪の毛を掻いている。かゆいんだろうか。司は半ば口をあけたまま見上げつづけた。でないと、聞いていられない。

「テープなんて、ちょっと変だよ。そんなのあるわけないよ」

司が首を振ると同時に雷が落ちた。泉州さんと、外と。

「あるに決まってるじゃん。天羽の奴何考えたんだろうね。自分用にはマイクロテープ。小春ちゃんにはカセットテープ。同時録音して、一本を渡したんだってさ。そんな惨めな思いした時のテープ、ほしがるわけないのにさ。最低だよ。もしもだよ、小春ちゃんはその時の会話が元で

何もしゃべれなくなっちゃったとしたら、その時は小春ちゃん家で告訴できるんじゃないの」  
頭の中が整理しきれない。ただひとつ、分かっていることだけを告げた。

「たぶんなんだけど、泉州さん、西月さんは僕が迎えにいった時」

——テープのせいじゃないよ。たぶん、それは僕のせい。

どんなに牛もつ井食べて満腹になっても、桂さんや父さん、狩野先生に支えられても、西月さんの家族に暖かく迎えられても。

「ちゃんと、口利いてくれたんだ。だからきっと、僕が連れていった、後なんだ」

これだけはきちりと告げなくてはならない。天羽のためではなく、自分の責任のために。

「だから、テープのことわかんないけど、たぶん僕が、西月さんをしゃべれなくしたんだ。きっと」

体育器具室の床をじっと見下ろし、司は膝を突いた。腿の間につぶれたボールが入り込む格好となりまぬけだった。自分で笑ってやりたい。泉州さんも鼻で少しだけ笑いの息を漏らした。

「片岡、そんなに自分を責めるんじゃないよ」

休み時間はそろそろ終りに近づいている。いくら泉州さん相手とはいえ、ふたりきりで籠っているのはいろいろまずいかもしれない。A組の女子たちにばれたら、西月さんだけではなく泉州さんもひどい目にあうのではないだろうか。

「ま、私もさ、こういう騒ぎになるまでは、自分の立場ばかり考えていたってのも否定できない事実だしねえ。もう少しおおっぴらにあんたのことかばってやればよかったんだけど」

「かばう必要なんてないよ」

「まあまあ、私さ、あんたみたいな奴はまんざら嫌いじゃあないからね」

どきりとするのを泉州さんはさらりと言う。

「ただ、どちらにせよね、小春ちゃんはそのテープを持っていることは確かなんだってさ。放課後にでも小春ちゃんの家、行ってみるからさ。あんたも来る？」

司は首を振った。

「なんでさ。あんた一番心配してるくせにさ」

「西月さんは、僕なんかに来てほしいと思っていないんだ」

「まあねえ」

このあたり、あっさり同意してくれた。

「今の段階では、あんたもあまりでしゃばらない方がいいかもねえ。とにかく、小春ちゃんにはかわいそうだけど、例のテープを持っているのかどうか、確認してみるわ。持っていて、明らかに天羽たちが悪いということが判明したら、その時はこちらだって出かたがあるよ。このまま小春ちゃんがただの振られた哀れな子扱いされるのは、友だちとして許しがたいもんね。でしょう、片岡」

——けど、そんなこと、西月さん聞かれないんじゃない。

言いかけた言葉を泉州さんはすぐに遮った。

「それにこの機会にはっきりさせておいたほうがいいって。片岡、あんたはこれからゆっくり、

小春ちゃんを攻略していくんだからさ。ここんところで愛情サービスをとことんしときな。事実を確認するのがやっぱり、何事にも大切だってうちの父さん言ってるからねえ。小春ちゃんも、天羽から言われたことを頭に叩き込めば、もう脈がないんだってことがわかるだろうし、それさえわかればあとは、みっともないくらい天羽を追っかけることないだろうしさ」

鐘が鳴るのが聞こえた。教室に戻ろうとしたところで、A組の女子たち数人とすれ違った。完全に密談していたことがばれてしまっているらしい。司は身を小さくして廊下を走った。かすかに聞こえる「あの下着ドロがさあ」を耳ふさぐこともせずに。

五、六時間目は何事もなく終わった。とてもだけれども気持ちが集中できる状態ではない。狩野先生が白衣姿で教室に戻ってきて、帰りの会を行おうとした時だった。

「先生、ちょっとだけいいですか」

聞きなれた、軽い調子の言葉遣い。

天羽が右手を上げて、返事を待たずに立ち上がった。女子たちからは「ぶー」とその名通りのブーイングが上がった。早く帰りたいのだろうし、修学旅行関係の準備などで委員会関係者は忙しいはずだ。

「早く終わらせろよなあ、天羽」

「何やってるんだよ」

男子たちもかなりいらだっている。天羽に対してどう、というのは男子グループにはあまり感じられなかった。

狩野先生はめがねを少し押し上げるようにして、小さく頷いた。

教壇にそそくさと上がり、天羽はいつもの評議委員スタイルで、両手をとんと教卓についた。少し見下ろした格好になるその顔は、険しかった。司の方は全く見ず、その代わりに真っ正面の写生画をずっと見据えるような格好だった。数日前に司が同じことをしたかのように。

「今から、ちょっとまじで聞いてほしいんだ。いいか」

「早く終わらせろー」

男子たちの軽い茶化しを無視して天羽は、握りこぶしを軽く下ろした。

「修学旅行を前にしてってことなんで、これから俺たち評議委員も修学旅行準備でパニック状態なんだが、んなことどうだっていいわな。けど、今のところA組の状態は一年時と全く代わってねえだろ。それを考えると俺としてはとってもだが、たまったもんじゃあねえ。みなさん、わかるかなあ」

軽い問いかけも一切女子には無視されている。女子たちのおしゃべりで、天羽の声は届かない。

「おめえら少し黙れ！」

いきなりの腹から出た怒号に、一瞬だけ教室は静まり返った。が、すぐに「天羽なに格好つけてるんだろねえ」「さんざん人痛めつけてきたくせにさ」「ばっかみたい」「気取るんじゃないよ」と女子たちの反発が返って来た。見かねたのか狩野先生が、

「女子のみなさん、少しだけ天羽くんの話を聞いてあげてください」

と静かに告げた。意外とそちらは効果があったようだった。なんとか聞き取るこののできる程度には空気が落ち着いた。

「先生すまないっす。じゃあ単刀直入にいくわな。うちのクラスはA組だ。A組だから、ちょっと特殊な事情があるんだってことも、ここにいるみんなわかってると思うんだな。俺もそうだしさ」

いきなり女子たちが近江さんの短い髪の毛をじっと見つめて集中し始めた。「こっちみてプリーズって。あのつまりですな、俺たちはずっと三年もの間、他のクラス連中からは『コネ組A組』とかさんざん悪口言われてきたってわけっすよ。一度や二度じゃあ、ねえよなあ」

反応はない。それでも天羽は続けた。

「はっきり言っちゃまうと、それは本当のことだって、みんな知っているだろ」

初めて、純粹に言葉のない静けさが訪れた。

A組には珍しい、しんとした空気が。

「先生、悪いけど俺なりに言いたいことあるから黙っててくれよな」

「言葉には気を付けてくださいね」

どうやら、狩野先生にも了解済みの芝居らしかった。父さんのコネとたぶん寄付金の関係で青大附中に入学したであろう、自分自身を省みつつ、司は肩をつぼめてうつむいた。

「俺は、三年前、うちのじいちゃんのコネで、青大附中に入った、もろ『縁故入学者』なんだ」  
もう、誰も話をする奴はいなかった。

「周りから『コネ組』とか言われたり、『他のクラスよりもA組は異常なほど成績が悪い』とかさんざん言われていたけどさ、俺もそれは本当だなあって思っていた。実際試験を受けた時、俺じゃあ太刀打ちできねえよって内容ばかりだったしさあ。あとで他のクラスの奴に聞いてみたら、そりゃあもうすげえできるできるって、すごい状態だったんだ。うちの学校、入試の後の成績しか教えてくれねえし、面接の方を最優先していたからさ、それは当然だと思うんだわあ」

言葉を切り、唇をぴんと張った。

「俺の場合、じいちゃんが書道の先生というか結構その世界では有名だったけど、青大附中に入ることのできるくらい寄付金納められたわけじゃあねえよ。その点、もしかしたらお前たちと違うかもしれないんだけどな。うちの場合、すげえ昔から、ある宗教に凝っていてつい最近まで活動したりしていたんだ。たぶん知ってると思う。いろいろ新聞沙汰になった宗教団体なんだ」  
ひそひそ、女子たちがまた肩をつつきあう。司の頭はだんだん麻痺し始めた。

「信者を集めて、いろいろ合宿したり、勉強会を開いたり、その他自分たちの悪いところをいっばいつつきあって最後に抱き合っ泣き出すみたいなことを、いっばいしているところだったんだ。俺も子どもの頃からそういうところに入り浸ってたんで、世の中そういうもんなんだなって思ってたんだ。そこの宗教の教えの中に『自分の我を捨てて人に尽くせ』ってのがあったけど、ほんっとこれ、しつこいくらい叩き込まれたなあ。自分のやりたいことをもし、親や目上の人から邪魔されたら、その時は運命だってことであきらめて、やりたくないことを一生懸命やれっていうのか。あと、『自分の好きになれない相手を好きになりなさい』ってのもな。別に教えとし



たらごくごく普通のもんだけど、その宗教の場合、自分の嫌いな相手をイメージさせて、無理やり『この人はいい人です、この人のことを僕は好きになります』みたいなことを言わせるんだ。お仲間信者のいる部屋の、ど真ん中で」

——宗教団体？ あ、それって変なことなのか？

司にはわからなかった。『自分の我を捨てて人に尽くせ』というのも『自分の好きになれない相手を好きになりなさい』というのも、別に宗教とは関係ない話じゃないだろうか。父さんもよく似たようなことを話していた。大嫌いだった先生がいた時は、いいところを見つけて付き合いなさいよと良く言われていた。ごくごく普通のことじゃないだろうか。自分の我、かどうかはわからないけれども、神乃世の仲間たちには母さんが「やりたくなくても、相手が喜んでくれるとやる気がでるでしょ！」と話していたし。

天羽の受取り方がなんとなく極端に思えてならなかった。

「俺もはっきり言って、単純馬鹿だったからそのあたりのことを真剣に信じ込んでいたんだ。俺も情けねえ、とか思うんだけどさ。懸命にどうやったら好かれるかとか、どうやったら嫌いな奴を好きになれるかとか。かなり悩んだ」

——だから僕に親切にしてくれたんだ。

クラスの鬻ぎものだった司へ、西月さんへの橋渡しをしてくれたのはその宗教から来る教えだったのかもしれない。そう考えれば納得する。

「けどな、中学二年の時、なんかが違うって思えてならなくなっちゃったんだ。その宗教団体からは俺、青大附中に入学するために、すげえ金出してもらっていたのもわかっていたしな。ここで寝返るのはやばいとは思っていたんだ。けど、これ以上俺も耐え切れねえって気持ちがあって、とうとううちの親、じいちゃんと相談して、脱退したんだ」

——宗教団体から金？

生臭い言葉が出てくると、なぜかみな、せっけんの匂いで消そうとする。女子たちがささやく言葉「最低よねえ」「お金なんてねえ」「いやらしいよねえ」天羽は外人さんのように肩をすくめた。

「今、俺が『金』と言った時、ほとんどの奴は最低だなあって思ったはずだ。俺もずっと脱退するまでの二年間、ずっと他の連中から『コネ組A組』といわれてそれを否定することにすげえエネルギーを使ってきたんだ。ま、厳密にいやあ今の今までは内緒にしてたしな。けど、もう大嘘ついてごまかして、心にもないことを続けるのだけは耐えられなかったんだ。俺ばかりに見えるだろ？ほんと馬鹿もいいとこだろ？けど、今の俺はさ、本当のことを全部しゃべったことですっきりさわやか便秘の後のさわやかお通じって気持ちなんだ。もう二度と、あの宗教団体には戻らないし、あの教義も一切捨てる。自分の気持ちを偽りつづけることってのが、どれだけしんどかったか、ほんとこれは経験した奴でないとわからねえと思うんだ」

ちらりと、今度は司の方を見た。

「今、うちでは宗教団体の方に俺への寄付金を返すために一生懸命なんかやってる。けど、インチキ宗教関連の裁判が進んでいるんでこれ以上お金返さねえでもいいかな、ってところには来ているんだ。それに俺も、『コネ組A組』として扱われてしまった以上、いつコネを取り上げられ

て青大附中から追い出されねえとも限らねえ。成績なんてなかなか上がらねえけど、せめて評価がこれ以上下がらないようにしないとって気持ちもあるんだ。うんにゃ、それよりもだなあ、みんな」

いきなり呼びかけられて司はぴくっと反応した。

「つまりだな、この気持ち、わかってくれるのはたぶん、同じ『縁故入学者』たる、お前らじゃあないかって気がしてなんねえんだ」

——この気持ちって。

胸のあたりを司は何度かなぞってみた。

「俺、A組はまとまりないって言われているけれど、俺みたいに秘密を抱えていてどうしても何もいえない、ってところがあったんじゃないかなって思うんだ。ろくに試験はいいかげんに通って、受かってみたらやたらとみんな頭切れる奴ばかり、俺の立場っていったいなんだよ状態。けど学校側はずっと『コネなんてない』と言い張ってる。けどけど、自分たちはすでにコネのありかを知っている。このジレンマってあるよなあ。卑屈になったり、嘘ついたりするのに、俺は疲れちゃった。だからこれからは平気のへいざで『俺はコネ組A組で一す』って言っていくつもりなんだ。だからといって手抜きするってんじゃないねえんだ。なにかの縁だよな、こうやってA組に集まることができたのはさ。もし、なにかの表紙で俺たちが『コネ組』だとばれてしまっても、俺たちは誇りをうしなわねえで歩いて行こうって、それだけ言いたかったんだ。他の試験バリバリ組とは確かに違うかもしれないけどさ、ただ、その惨めさとか、ジレンマとか、そういう経験だけはたっぷりしている。だから、相手のことも思い遣れるかもしれない。少なくともA組にいる間は、そんなことで傷つけたりなんかはしないから、平気でそのこと言ってい。無理に隠そう、隠そうとするから息苦しくなるんだ。俺が評議でいるうちは、決してそんな無理くり苦しめるようなことはしない。俺は今日、それだけ言いたかった。ご清聴、あつりがとうござんした！」 最後はお茶らけてごまかしている。でも天羽の顔が紅潮していて、自分の言葉に酔い始めているのは一番窓際の司からもよく見て取れた。なんだかわからないけれども、言葉の端々から伝わってくる、「本当」さが自分にも届いているような気がした。言っていることの半分はよくわからない。とにかく『A組はコネ組』だ。だけど『プライド持っていこう』ということを訴えたかったのかもしれない。もしそうだとしたら、天羽は一世一代の大勝負をかけたわけだ。

——宗教団体から、寄付金だなんて、ふつう、まずいよそんなの。

席に戻る天羽を目で追いながら、司は周囲の女子たちがさらにヒートアップして、

「天羽ってば最低よねえ。クラス全員がコネなんかじゃないのにさ！」

と悪口言い合っているのを聞き流していた。たぶん、女子たちが『コネ入学者』として認めるのは、狩野先生の義妹である近江さんだけなのかもしれない。当事者たる近江さんも頼杖をついたまま、廊下側を黙って眺めていた。ちょこっとだけ天羽が近江さんに笑顔を向けていたが、無視しているようすだった。

——僕だって、絶対、コネ入学者だよ。けど、天羽、そんなことばらしたらクラスにいられなくなっちゃうよ。

泉州さんと目が合った。「けっ」と軽蔑しきった表情だった。

——ああ、泉州さんも天羽のこと、大嫌いになっちゃったじゃないか。

狩野先生は静かに立ち上がり、教卓に出席簿を置いた。

「今、天羽くんが話したことのすべては正しくないかもしれませんが。それはみなさんと、おうちのご両親と一緒に考えてみてください。しかし、天羽くんはA組のみなさんがいろいろなところでいろいろな誤解をされていることを気にして言ってくれたのでしょう。修学旅行まであと二週間くらいですが、これもなにかの機会です。ゆっくりと考えてみてください」

思いっきり玉虫色のお言葉だった。要は『縁故入学者』であることを認めたくないのだろう。

廊下を出て、いつものように生徒玄関に向かおうとした時、どこかで見覚えのある女子生徒がものすごい勢いで突進してきた。司ターゲットらしい。二歩くらい置いたところで立ち止まった。真っ正面からじっとにらみすえるようにして見つめる。

ポニーテールで、全体的にほっそりしているのに胸だけがどんと突き出ている。

——メロン二個入れているみたいだ。

思わず目が生徒手帳を入れているポケットに向かい、慌てて逸らした。一緒に思い出した。あの子だった。胸章には「二B」「杉本」とだけ記入されていた。

——杉本さん、ってあの子か。

泉州さんが昼休みに話していた、西月さんの妹扱いされていた下級生らしい。

「片岡先輩、ですか」

——胸章見れば分かるだろ。

こくりと頷いた。

「西月先輩のことでお願ひがあります」

——なんだよ、この子。

向けられる視線がどこか、尋常じゃないという気がした。背は司よりも低いので、自然と見下ろす形となるのだが、瞬きをほとんどせず、唇を無理にひっぱるような感じで、今にも噛みつかれそうだった。司の返事を待たずに杉本さんは続けた。

「明日から西月先輩をE組にお連れします。西月先輩は人間としていい人です。馬鹿男子たちが行った馬鹿な行為によって傷つけられたというのでしたら、私がお守りします」

言葉に抑揚がない。一本調子だった。語調が強いだけに、教科書を音読しているような口調には違和感を感じる。それになんだろう、『お守りします』って。かすかなむかつきがよじ登る。

「ただ、私も二年生ですので、三年の授業にもぐりこんでノートを取るわけにはいきません。他の先輩も他のクラスなのでお手伝いできません。そこで、唯一まともな男子が片岡先輩であると伺いましたのでお手伝いをお願いします」

——この二年生の人、変だよ。

「あの、けどなんで僕がまともな男子だってことに」

尋ねかけると杉本さんはまくしたてた。

「まず、ばらの花を毎日お届けしておられたということ、それからきちんと過去の悪いことを告白されたということ、他の人たちからいじめられてもきちんと人間らしく対処されておられたと

ということ、さらに言うならば、昨日西月先輩をお守りして、ご自宅までお連れしたということ、すべて伺っております。よその馬鹿な男子たちは片岡先輩のことを馬鹿にしているようですが、下着蒐集の趣味が問題あったというだけであとは人間的に問題ない方と感じましたし、その趣味も今は行っておられないということなので、全く責めるところは見つかりません。大丈夫です。もし二年たちが失礼なことを申しあげましたら、その時は私が叩きのめしますのでご安心ください」

——絶対、この人、変だよ！

顔が引きつっていくのがわかる。きっと誉めてくれているのだろうということはわかるのだが、しかし、『下着蒐集』なんて、そんな恥ずかしい言葉、よく言えるものだ。よその馬鹿な男子、というけれども、いったいこの人はどこで、西月さんの事情を聞きつけてきたのだろうか。もちろん西月さんのことを慕っているというのはよくわかるけれどもだ。

「とにかく、明日、西月先輩がいらっしゃいましたら、休み時間ごとに教師研修室へいらしてくださいませ。あそこは現在、駒方先生専用の個人教室となっておりますので、いつ誰が入っても大丈夫です。それではよろしくお願いします」

毒を飲まれた、としか言いようがない。きちんと一礼して、長いポニーテールが胸にくっつきそうなほど近づけられた。

——西月さんって、こういう子の面倒見ていたんだ。

「どうしたのさ、片岡」

様子を面白そうにうかがっていたらしい泉州さん。現れた。

「見てたのかよ」

悪ぶって言葉を返してしまった。

「杉本さんにびびってたんだよねえ。だろうねえ」

にやつくのはやめてほしい。ふいと向いた。

「あの子はいろいろ問題起こしている子だけど、小春ちゃんが一生懸命かばっていたんだよ。あなたのことをかばうのも当然だよねえ。ま、頼まれた以上はちゃんとやんなよ。明日から！」

——もしかして泉州さんがたくらんだのか？

わからない。司は頭を抱えたいのをこらえた。雨はやんだ。泉州さんが、他の女子たちの視線を無視して司の頭をがしがしとなでた。

約束通り西月さんはやってきた。

静かとは決していけない人だったのに、女子たちと顔を合わせてこっくり頷く姿は、確かにあどけなかった。西月さんが一気に五歳年下になったような気がした。司の精神年齢と、もしかしたらつりあっているのかもしれない。

「小春ちゃん、ねえ、口、利けるんでしょ」

「なんとか言ってよ」

「どうしたの、小春ちゃん！」

最初は軽く受け止めるつもりだった女子たちも、西月さんがかすかに頷き微笑むだけの顔を見るうちに不安げに手をぱたぱた言わせていた。

「だから言ったでしょ。小春ちゃん今疲れてて言葉が出ないんだってば」

相変わらず脂ぎった髪の毛の泉州さんがなだめる。西月さんが制するように片手を伸ばす。男子たちが目に入らないように、なにげなく女子集団に寄り添うように椅子を向ける。

天羽を背にするように、無意識に。

始業の鐘が鳴ると同時に西月さんは立ち上がった。どうやらかばんから教科書を出さずにいたらしい。すぐにかばんをかかえて囲んでいた女子たちに手を振り、廊下に出て行った。そういえば西月さんは今日からしばらくE組に行くはずだった。一階の元「教師研修室」といわれるところへだった。司もすっかり忘れていた。両手を膝において、司はぼんやり西月さんがいなくなるのを見送っていた。教室後ろの席だから、しゃべらないでもすむのはいい。

——本当は天羽の顔見たかったんだろ。

憎まれ口を叩いてみたい。

——天羽だけに、会いたかったんだろう。

——どうせ、僕なんか顔も見たくないんだろ。

嫌いになれたらどんなに楽か。気が付いたら西月さんの出て行った後を追おうとして腰を浮かしかけた自分がいた。狩野先生が入ってきたので慌てて座りなおす。西月さんがいなくなった後の席には、薔薇の花もなければかばんもなにもなかった。

「しばらく西月さんは別の教室で授業を受けます」

いきなり切り口がこれだった。朝の会で天羽の「起立・礼・着席」を聞いた後、狩野先生は青白い顔のままで告げた。

「西月さんは体調を崩して、少し言葉が出ずらくなっています。ほかには何も悪いところはないのですが、しばらくはクラスのみなさんたちとコミュニケーションを取るのが難しいかもしれません。身振り手振りと筆談が主になるでしょう。ですが、本人はいたって元気で、早くA組に戻ってみんなと授業を受けたいと思っていますそうです。ですから、心配しないでください」

「先生」

と、泉州さんじゃない別の女子が手を挙げた。

「西月さん、修学旅行行けるんですか？」

「もちろん大丈夫です。西月さんはただ、一時的にもものが言えなくなっただけですぐによくなるはずですよ。一緒に行動してくれる人たちが、さりげなく心を配ってくれるだけでもだいぶ違うでしょうね」

——どうせ女子の仕事だよみんな。

司は指を組み合わせて窓の外を眺めた。一階の教師研修室といえはめったに使われなくなった部屋として有名だった。誰かがよく「委員会の専用室にしてくれないかなあ」とつぶやいていたのを司はよく耳にしていた。見た目は普通の教室なのだけれども、語学用のヘッドフォンが設置されていたり、すぐにOHPを利用できたり、一部の机にはビデオやテレビが利用できるらしいとも聞いている。そこを噂の「E組」に回したということだったらきっと、西月さん最先端の教室で今、座っているってことだろう。

——あの子も一緒なんだろうなあ。

強烈な印象が忘れがたい彼女。杉本さん。

西月さんのことをあそこまで慕ってくれるんだから、きっといい子なんだろう。たぶん、そうなんだろう。男子にはとにかく、女子には、受けがいいんだろう。

——けど、二年と三年とだと、授業の内容も違うのになあ。テストどうするんだろう。

泉州さんの方を見た。待ってましたとばかりに司に向かって、ウインクした。妙に決まっている。やっぱり泉州さんは外人さんのモデルさんっぽいと改めて思った。

近江さんはいつも通りつまらなさそうに雑誌を読んでいた。時折天羽グループの男子連中と一緒に「上方漫才」の話で盛り上がっているのだが、司には外国語にしか思えない会話だった。ただ、どこかこくが足りないような気がした。ずぶとい声で「だからさあー近江ちゃん」とおちゃらけた言葉をつぶやく奴がいなかった。

休み時間中、さりげなく天羽の姿を探してみた。すぐに廊下端で見つかった。他のクラスに遠征していたらしくて、いろいろと固い顔で話をしている。顔だけ知っているD組の男子とずいぶん無表情な顔で会話をつないでいるようすだった。

「だからさあー、俺のせいじゃあないって」

「だったら説明できるはずだろう」

「男には言えない事情ってもんもあるんだよん、わかってくれよな、立村ちゃん」

「ちゃんだなんて気持ち悪いこと言うなよ。それから、ごまかすな」

ワイシャツにネクタイ、ただ袖は長そで。丁寧に片方だけ三つ折りにしていた男子がいた。名前は思い出せないけれども、何度も全校朝礼とか学校祭とかで挨拶しているのを見たことがある。細い身体つきで唇の薄い、ちょっとなよとした感じの奴だった。話の内容なんてどうでもよかったけれども、

「西月さんのことはどうするんだ」

といきなり、一番気になる名前が飛び出して耳をそばだててしまった。これも定めだ。「だからそれは俺がなんとかするって。人のこと心配するよかお前、そろそろ経験準備したらどうなん

どうなんどーなん？」

「だから話を逸らすなよ！」

かなり機嫌が悪げだった。前髪をかきあげるようなしぐさをすると、天羽に向かい噛み付くように、

「とにかく俺の方には女子たちから一方的な情報が入ってきているんだ。お前だって言い分あるだろ。とにかく聞かせろよ。今の俺がどれだけ誤解いっぱい頭でいるか、想像つくのかよ」

「だあかああ、人の色恋沙汰に燃えるよかお前の」

言いかけたところでいきなり遮り、声を響かせずに怒鳴った。厳密に言うと「怒鳴る」ではないのだろうけれども、耳がちょっときりきりした。

「お前自覚してないだろ？ 言葉が話せない状態ってどういうことだか想像できるか？ 咽から言葉が出てこないんだぞ。叫びたくたって舌が回らないんだぞ？ お前、今から一言もしゃべるなって言われて耐えられるか？」

「そりゃあ寝れば」

ポケットに拳固をつっこみ、方向をあさってにしようとしているのが見え見えな天羽だった。相手から身体をそらし四十五度位置を移動したとたん、司と目が合い、ばつ悪そうにうつむいた。すぐにしゃべっている相手の男子に肩を捕まれ、真っ正面からまたわめかれた。もちろん言葉は響かない。

「俺だって人のどうたらこうたらに首なんてつっこみたくないさ。天羽、このままだったらお前、最低ランクの男子に格付けされてしまうだろ。俺も天羽から詳しい話聞かない限り、お前が人間として最低のことをした奴だと認識するしかない」

「そんなあ、殺生なあ」

腰をくねくね振って、両手をインドの踊りのように頭天辺で合わせあやしく踊る天羽。みっともない。相手も同じく思ったのだろう。顔をしかめて背を向けた。

「いやに決まってるだろ。だから、あとでな。合同交流のことも一緒にだ」

よくわけのわからない言い方で、D組の痩せた男子は自分の教室へと戻っていった。残された天羽は通り過ぎる他生徒たちの視線を受けつつしばらく「いやあんいやあん」と意味不明な言葉で受けを取ろうとしていたが、果たせずとぼとぼA組に向かって歩き出した。司がそばにいることには気が付いたらしいが、声をかけるでもなかった。唇を尖らせて「ふう」と息を吐いた後、猫背のまま扉を開けた。

「片岡、ほら、あんた行くよ！」

授業なんてほとんど聞いていなかった。幸い今日は誰にも当てられずにすみ、時折よだれをたらしたまま居眠りしたりして一日は過ぎていった。さすがに昼休み、泉州さんを追いかけて「E組」の教室へ向かうことはできなかったけれども、帰りの会が終わってからは掃除当番で箒の柄を握ったままずっと窓の外を眺めていた。思いっきり後頭部をぶんなぐられるまでは。

頭を押えて周囲を見渡した。誰もいなかった。

「とっくに掃除が終わってるってのにさ。片岡あんたずうっと外見てたんでしょうが。掃除当番

の男子たちが気、遣ってあんたを放っておいてくれたんだよ。感謝しなよ感謝」

——そんなの知らないよ。

斜めに視線を降ろして行って、おそらく一番「E組」に近いであろう教室を眺めていただけのこと。ほんの数秒程度だったはず。

「はあ？ あんた完全に時間の感覚狂ってるって知ってた？ 十分くらいこうしてるんだよ。ほら、箒握り締めるのもうやめなよ」

言い終わる前に取り上げられた。いったんまたいで「ちょっと魔女ツ子気分」と意味不明のことを口走るのはやめてほしい。

「ほら、行かないの、行きたいでしょ。わかってるって」

「泉州さんはさっき行ったんだろ」

「あんた知らないの？ 『E組』ってさ、夜六時くらいまでやってることもあるんだってよ。ほら、大学のゼミに出る奴とかいるじゃない。D組の立村とか金沢みたいにさ」「誰それ」

話になりません、という顔で泉州さんは額をかりかりかいた。光に混じってまたふけの雪が降る。

「とにかく大学の講義を受ける奴が相談に来たり、いろいろ予習やったりするのを手伝ったりすると、あれ、気が付いたらもう六時じゃんって感じなんだって。小春ちゃんが良く言ってたよ。あんた小春ちゃんがなんで『E組』手伝ってたか知っているよね」

——だから、あの、杉本さんって二年の子の面倒を見るためだろ。

返事するのも面倒で司は掃除箱にもたれた。

「あのねえ、あまりおっきい声じゃあ言えないけど、杉本さんって子ね、たぶん今の状態だと青大附属の高校には進学させてもらえないって噂なのよ。本人も承知しているらしいけどね」

「成績悪いの？」

言葉遣いが変だったから、国語の成績は悪そうに思えた。泉州さんは首を振った。

「とんでもない！ 片岡、あんたほんっとに他人のこと興味ないんだねえ。あの子、青大附中一年の頃からトップ譲ったことないんだよ。ほら、二番がバスケット部キャプテンの新井林でさ、いつも二十点から三十点くらい差をつけてるんだよ。それこそだんとつだよ」

「頭いいんだ」

勉強しなくてもなんとか上位三十番以内にいられてほっとしている司には信じがたい。

「けどね、担任とけんかばかりして嫌われてしまって、病気だとか言われて結局、高校は別のところ行ってくださいって言われたんだって。それにクラスでもいじめの濡れ衣を着せられてしまって、評議委員の座も奪われてしまって、片岡なんて目じゃないくらいずたな状態なのよ。あんたも想像つくでしょうが」

——僕の方がもっと悲惨だよ。西月さん、あんなふうに側にいなかったし。

最後の一言は予測していない言葉だった。慌てて首を振って、泉州さんに怪しまれる視線を向けられた。

「だから、評議委員会の方でいろいろ手を打って、元評議委員の杉本さんを先輩女子たちが守ってあげようってことになったわけ。それで小春ちゃんが代表になって、あの子をとにかくかばっ



たのよ。小春ちゃん優しいからねえ」

——そんなのとっくによくわかってる！

司はしばらく唇を何度か右、左と寄せて歯磨きをするような感じで頬を膨らませていた。なんだか想像がつく西月さんと杉本さんとの光景だけれども、なんとなくもやっとしてしまう感覚が残っていた。むずがゆいというのだろうか。まだ埃をはたいていない、というような。

「なにになに片岡、あんた杉本さんに小春ちゃん取られたと思ってるんでしょうが。まったく、ガキよねえ」

「そんなんじゃない！」

こうやってにやにやしながらまた司を突っ込もうとする泉州さんがうざったい。司はポケットに手をつっこんで肩を怒らせた。きっと、天羽と話していたD組の男子みたく自分がなよっとしているように見えるんだろう。

「それで他の学校との交流会に参加してもらおう人員として、評議から外れた小春ちゃんと杉本さんが活動しようという約束になってたんだって。小春ちゃん、天羽のことがあってからさ、めいっぱい落ち込んでいたけど、でも『私がしっかりしなくちゃ、杉本さんのこと守ってあげられないもんね！ うん、がんばる！ 交流会のメンバーとしてがんばるから！』って一生懸命だったんだよ」

——なんでそんなに、杉本さんって子にこだわるんだよ。

思わずむっとしてまた慌てて口を封じる。息ついただけで、泉州さんに思っていること見抜かれそうになる。

「ところがさあ、世の中ってうまくいかないよねえ」

この人、ちゃんと風呂に入っているんだろうか。香水ではない匂いが匂ってくる。しかも一歩ずつ近づいてくる。女子って感覚全くなし。

「いきなりさ、その交流会を解散させられちゃったってわけ。四月の終りにね」

風呂場で牛乳を飲んだ人のポーズ、片手を腰にやり、泉州さんは司の隣りに立った。一緒に西月さんのいる方向を見下ろした。

「駒方先生とうちの担任が組んで、学内のお勉強何でもありありのサークルをこしらえて、クラスであまされている杉本さんとその他一名を組み合わせて、面倒みましようってプロジェクトが始まったらしいんだ。これも小春ちゃんから聞いたんだけどさ。結構うちの学校って大学の講義受けている奴いるじゃん。それに高校の部活にこっそり参加させてもらってる奴とかさ。そういうちょっとずれた授業を取っている奴たちを集めて、居心地いいとこにしまよって計画だったみたいなんだ。まあ、言ったらなんだけど要は杉本さんを押し込む場所作りだよな。かわいそう過ぎるよねえ」

——いったい杉本さんって、何をやったの？

全くわからない。泉州さんの言うことってなんなんだろう。

「それで、小春ちゃんはその事情を全部聞いて、『じゃあ私は、杉本さんが苦しまないようにするために一緒にいる！』って言って、それから毎日放課後、『E組』に通うようになったんだから。ただでさえ小春ちゃん、A組女子評議を近江さんに取りられて、天羽にはあんなことされて

、ほんと悔しかったと思うよ。けど私の前でも一言だって、天羽や近江さんの悪口言わなかったんだよ。そりゃ、最初のうちは『近江さん全然協力してくれないから困っちゃう！』とか言ってたけど、そうだねえ。天羽に振られてからだよねえ、小春ちゃん変わったよ。いい方にさ。あんまりわがまま言わなくなったし。だから」

いやな予感。司と目と目が合った。残念ながらロマンスの予感はしなかった。

「あんたががんばれば、天羽なんかよりずうっとレベル上の小春ちゃんが手に入るかもしれないんだからね。さ、後輩にジェラシー燃やすなんて不毛なことしている暇があったら、さっさと行きな！」

——自分が先に行けばいいのにさ。

泉州さんの手は手錠だった。なんのためらいもなく手首を握り締め、無理やり教室から引っ張り出された。他のクラスの女子たちが奇異な目で司たちを見つめている。そんなの知ったことかとばかりに泉州さんは司を引きずって階段を降りていこうとした。つんのめりそうになりつつも司はついていくしかなかった。自分の立場上、わめけない。

——そんなにじろじろ見るなよ！ なんも僕、悪いことしてないって！

そのくせしっかり前に歩いていくんだから、世話ないもんだ。自分で自分を罵った。

泉州さんに引きずられた犬状態で連れていかれた教師研修室。

それほどざわめきは感じられず、かといって静かと言う風でもない。後ろの扉から泉州さんが入っていくのにつられて、司も一歩足を踏み入れた。もちろんとっくに腕は自由になっている。前の二列目真ん中の席に、おかつぱ頭の後姿が見えた。隣りでいそいそと動き回っているポニーテールの女子にまず目が留まった。まだ向こうは気付いていない。後ろ半分の窓にだけ、暗幕がかかっていた。ドラキュラのマントさながらに赤色がちらついていた。

「せんせ、入っていいですか」

泉州さんが誰かに声をかけた。

「おお、よし恵か？ おいでおいで」

間の抜けたやわらかい声が迎えてくれた。どこから出てきたのかと思ったら、右手側一番後ろの席で一生懸命、カセットレコーダーをいじっている白髪頭を発見した。ピンクのポロシャツというのがあまりにも似合わない。白く脱色されたジーンズ姿の駒方先生が、振り返り司に笑いかけた。

「司も、最近よくがんばってるんだってなあ。えらいぞ」

——一度も僕の絵誉めてくれなかったくせに。

二年間、駒方先生は美術の担任だった。退職するまで何枚も司、渾身の作を観てくれたはずなのに、どうも納得してくれなくて結局成績は五段階中四のままだった。あれは結構プライド、傷ついていたのだ。

「ほらほら、好きなところ座れ。そうだなあ、小春が前にいるからそこに行けばどうだ？ 梨南が一生懸命、小春の侍女になっているぞ」

——じじょ？

聞きなれない言葉に目をぱちくりさせる。この先生の口癖はひとえに、生徒のことをみな名前で呼ぶところだろう。たぶん神乃世の仲間と家族、あと桂さんを除いて司は自分のことを「つかさ」と呼ばれたことがない。第一、泉州さんのことを「よし恵」だなんて、女の子らしい名前がついているなんて想像もしたことなかったのだから。別に名前で呼ばれることに抵抗はないけれども、西月さんのことをそう呼ぶと、ついなにかを思い出してしまう。

「へえ、杉本さん小春ちゃんの手伝いしてるんだあ。二年の男子連中が見たら絶句する光景ですよねえ」

敬語を使う泉州さん。一応、礼儀は司以外にはわきまえているらしい。

「一時間目からすごいぞ。教科書からノートから、わざわざ小春のために図書館で三年用の教科書とビデオを引っ張り出してきて、一生懸命読んでいるんだ。梨南はそういうの頭に入れるの得意だからなあ。ちゃんとノート作って、シャープ渡したりなんなりしてなあ。休み時間には露草とか摘んできてコップに入れて持ってきたりとかなあ。いい嫁さんになれるぞ。梨南は」

「似合わなさ過ぎ！」

声がかすぎて、噂の主、杉本さんが振り返った。泉州さんに向かってまず九十度近く腰を曲げてお辞儀をした。司にちらりと目をやり、一切挨拶せず。背を向けたままの西月さんにかがみこみ、耳もとで何かを話し掛けた。ふたり、こくこくと頷き合っている。そのままにらみすえるようなまなざしを替えることなく、司たちのもとに歩みよった。駒方先生の真ん前に立ち、見上げるようにした。目つきはやっぱり鋭かった。

「先生、おふたりをお連れしてよろしいですか？」

「いいよ。小春も待っていただろうしなあ。少し三年生同士にしてやったほうがいいぞ。そろそろ上総も帰ってくるころだから、今度はこっちを手伝ってあげなさい」

好々爺。という風情だった。いつも色とりどりの絵の具で染まった手しか記憶に残っていなかったけれども、今は浅黒くしわが寄っていた。杉本さんの方をにこやかに眺めて、時計を見た。

「ほら、今、上総が大学の授業で勉強している本の英語朗読テープがあるから、それを聞いてみるか？ 梨南も手伝ってくれるだろう？」

「先輩は英語しか出来ない頭の持ち主ですから」

——て、ことは、先輩なんだ。三年なんだ。

司の疑問に答えることなく杉本さんは続けた。

「どうせこれから先輩は、小学校五年生レベルの問題を勉強するんでしょう。私がきちんと勉強しておかないとお手伝いできません」

「その点、梨南は賢いもんなあ。ほら、テープもセットしたから、早くヘッドホンかぶってごらん」

かなり「先輩」にあたる相手に対して、失礼極まりない発言をしているように感じたのは司だけだろうか。と思いきや、杉本さんは司の前に立ちはだかった。かなり接近してきた。これ以上進むと、その、あの、胸の先がネクタイに触れそうな程。

「片岡先輩は先ほどまで私が座っていた席に、必ずお座りください」

頷くと、泉州さんがにやりと笑った。

「杉本さん、ずうっと小春ちゃんの隣りだったんだもんねえ。片岡、覚悟しなよ」  
振り返ってくれない西月さんの側に近づいていった。泉州さんはついてこなかった。

——普通女子の方が隣りに座るだろ？

——なんだよ、そのにやつきぶり！

他にも三名くらい、男子がそれぞれの席に座って何かに没頭していた。そのうち一人はひたすらクレヨンを握り締めて、一心不乱に何かを画用紙に描いていた。もうひとりひたすら本を読むのに没頭していた……よく見るとそれは国語辞典だったのだが……全く誰も司に関心を示さなかったのが気味悪いくらいだった。A組だったら絶対にありえないシュチュエーション。司は西月さんの隣りに一度立ち、見下ろした。ゆっくり、司の顔を見上げる西月さん。そこに笑顔や喜び、そういうものは一切なかった。何ひとつ、ふたりきりで歩いた時以上のものは見当たらなかった。

ただ、嫌がっていないらしいということは、こっくりとした後に西月さんが椅子を引いて司へ指差したところから推測できた。そう思ったかった。

——僕でも、いいんだ。

「隣りに行って、いい？」

一応、第三者に対する確認だけして、司は隣りの席に回った。語学用カセットテープ再生デッキだけが組み込まれた机だった。プラスチックの薄い板で仕切られていた。尻を浮かすようにして少しずつ椅子に腰掛けていくと、不意に西月さんの手が司の膝に伸びた。あぶなく、微妙な位置に触れそうになり、ちょっと腰を引いた。

——な、何するつもりなんだ？

司が勘違いをする間もなく、その手は司の机の上に着地した。長方形のカセットケース、題名も何も書いていない、ただ撮りっぱなしというだけのものだった。すぐに西月さんは手をひっこめ、背中を丸めて何かを机の上でしていた。

——カセットテープ？

音を立てないようにそっと触れてみた。少し汗ばんでいたように感じたのは気のせいかもしれない。膝に司は手を置いた。同時にまた、膝に伸びる手。今度はちゃんと、司の膝もとに小さなメモが着地した。

——このテープを聞いてください。

西月さんは司の顔をまた、見つめた。

シュークリームを渡してくれた時と同じ目だった。

「じゃあ、英語やってる振りするから」

司は教科書をかばんから取り出した。ついでに辞書も取り出した。ある一人の女子を特定できるかぐわしい匂いが漂ってきたところをみると、きっと後ろにいるんだろう。司は英語リーダー

の教科書を開き、予習をする顔でカセットテープをデッキに入れた。スイッチを押した瞬間、があがと流れる雑音に耳が埋め尽くされた。かすかに人の声がする。でも誰かわからない。頭の中が凍った。

「これってなに」

ヘッドホンを外して西月さんに尋ねてみた。

メモがすぐに膝に帰って来た。

——写生の時。

風のざわめきと、スカートを乱したまま泣きじゃくる声。差し伸べる手。

流しっぱなしのテープにはしばらくがさごそ音だけ。そのうち、男子特有ののドラ声がかすかに聞こえた。

——あのな、西月……さん。

——なあに？

——今から話すこと、全部聞いたら、俺のことをとことん憎め。

——まさか！

天羽の声だ。西月さんとの会話だ。

教科書を反対側に置いたのも忘れ、司はつぶした。顔をデッキに近づけた。ただひたすら、雑音の中から湧き上がるふたりの会話に耳を済ませた。

ところどころ聞き取れない部分が多すぎて、意味を掴むのが大変だった。英語専門ラジオ局の番組を聞いているような感覚だった。西月さんが黙って机の上を見つめているのを仕切り板越しに感じながら、司は目を閉じて集中した。

『俺のうちな、じっちゃんが書道の殴り書きで有名人だったのは話したことあるよな。俺書道なんて、墨汁で手が真っ黒くなるだけでどこがいいんだか理解不能 だけど、そのおかげで青大附中に寄付金入学できたんだから、それはありがたいと思ってるんだ。けど、うちが寄付金どっさり包めたのは、じっちゃんがある宗教団体に関係しててそこで活動してたからなんだ。たぶん俺が入学した時、じっちゃんの名目でたくさん金を包んだんだと思う。俺の親じゃなくて、宗教団体の方が。今時の新興宗教。仏教とキリスト教とヒンズー教が全部交じり合ってる、今思えば変な宗教』

天羽がところどころ言葉を区切りながら話している。昨日、いきなりクラス全員の前でしゃべりまくった、家庭の事情のことだろう。宗教関連の裏口入学ということ自分を自分から告白しただけでもすごいことだと思う。でもちゃんと、西月さんに前もって話していたのだろうか。

『俺も、じっちゃんの命令で去年まで、その宗教の少年団みたいなのに参加させられてたんだ。青濁じゃなくて、別のところに合宿させられてたんだ。一週間 異常に規則正しい生活を送りながら、経典みたいなものを読まされて、自分の目標とか、教義とか、そんなのを二十四時間叩き込まれてたんだ。今思えば、ありゃ地獄だった。けど洗脳って本当にされちまうもんなんだなあ。俺、中学に入った時に本気で、自分の目標立てて守ろうって思った。『嫌いな奴を好きになるよう、努力しましょう』ってな。俺は小学校の頃から、結構好き嫌いの激しい性格だったんで、周りの先生連中から注意はされてた。卒業する時も、『露骨に好き嫌いを出さないようにするんだよ』とか言われてたしなあ。俺もそれはまずい、やな奴にはなりたくねえ、そう思って、春休みの教義合宿の時に目標にしたんだ。どんなに嫌いな奴がいても、人は人、相手は相手。できるだけ嫌いな人を好きになるよう、努力しようって決めたんだ。だから、青大附中に入ってから、かなりむかつく奴がいても、それはそれ、これはこれって思えるように無理に思ってきた。大っ嫌いだと思う奴にこそ、親切にしてやって、友だちになるようにしてきた。中学二年まで。どれだけ大変だったか、想像つくか？』

誰かに質問されて一呼吸くらい間が空くこともあったけれども、天羽の語り口はいたって冷静だった。学校の先生みだいだった。相手は西月さんなのだとわかっている。いつも学校で「半径五メートル以内に近づくな！」と荒々しくおっぱらっている時とは違う。やはり天羽なりに西月さんを心配していたのかもしれない。ほんの少しだけ、静電気の走ったようなちくちく加減が走った。『けど、去年の夏、うちのじっちゃんとその宗教団体とが大喧嘩して、うちの家族と親戚 全員脱退したんだ。ああ、もうその団体の出している広報誌みたいなのでは、俺たち『裏切

り者ユダ』『地獄に落ちろ』『天誅が下る！』思いっきり叩かれてるぜ。『裏切りもの』とか罵られてるぜ。けどまあそれでよかったと俺は思ってる。あとは青大附高にコネなしで進学できるよう努力するしかねえなどは思ったけど、そのくらいっすな。合宿に追われないですむので俺としてはラッキー。それにな……。もう、無理に、好きでもない奴に好きなふりをしなくてもいいって、思えるようになったのもその時期からだったんだな、実は。俺、やっぱり、西月……さんに謝らねばなんないんだ。ごめん』

かすかに『天羽くん、いいの、私、そんなしかたないこと』と何か言う女子の声が混じっていた。か細く聞き取りづらかったけれども、確かに西月さんの声だった。さらに静電気が全身ちくちく攻撃してきたようだった。司は唇を噛みながらうつぶした。天羽の言葉を聞くまでこの格好のままだった。

『俺は、出逢った時から』

意識が遠のきそうだった。身体がこわばった。天羽の良く通る声が、びんとテープに残っていた。聞き取れないふりなんて、絶対にできないことだった。

『西月さんのことが虫唾が走るくらい、大嫌いだったんだ』

——天羽、嘘だろ？ おい、そんな嘘だろ？

お腹がずきんと痛くなった。学校で見た天羽のおちゃらけた表情と、かつては仲良く甘えていた西月さんのふたりがかすんで浮かんだ。男女そろっている時はいつもあのふたりの姿があったし、憎憎しい会話なんて、今年に入るまで一度も耳にしたことがなかった。

——西月さんのこと、出逢った頃からなんて、そんな嘘つくよ天羽！

もうテープが回っている時に戻ることはできない。消すこともできない。西月さんはこの言葉を聞いてしまったのか？ 最初はよかったけれども飽きただけなのかもしれない、いやよんどころない事情があったのかもしれない。近江さんがたまらなく好きになっただけであって、西月さんをものすごく嫌ったわけではないのかもしれない。いろいろ司なりに想像はしていた。

最初から嫌い、なんて選択肢だけは考えていなかった。

深草少将になることを求められたとか、ビーズの指輪をねだられたとか、その前にか。

西月さんの、か細いけれどもちゃんと聞き取れる言葉が響いた。

『だって、だって、入学した時、最初に話し掛けてくれたの、天羽くんだったよ。ちゃんと私、席がわからないと言ったら、教えてくれたじゃない。それにそれに、一緒に評議に選ばれた時だって、笑顔で『一緒にがんばろうな、おねーさん』とか言ってくれたじゃない。給食の時も、私ひとりで盛り付けてたら、手伝ってくれたじゃない。評議合宿の時だって、私と一緒にいいんだって、バスの中二人で並んでくれたじゃない。私が、『好きな人から薔薇の花を、小野小町みたいに百日間連続で届けてもらいたいなあ』とか『告白される時は、ビーズの指環でいいから、私にプレゼントしてほしいな』って言ったら、『今度俺がやった時には怒るなよ』とか言ってくれたじゃない。冬休みだって『奇岩城』で、天羽くんがルパンになって、私がレイモンドに決まった時、思いっきり喜んでくれたじゃない。あれ、みんな演技だったの？』

泣きそうだったけれども、やはり言葉を話すことのできた頃の西月さんだ。いつも司のことをかばってくれた、あの西月さんが訴えている。隣りにいる、今の西月さんじゃない。評議委員だったころの彼女だ。司には手が届かない存在だと思っていたあの人がいる。

『だから、今言った通りなんだ。嫌いな相手ほど、好きになるよう努力しないと、死んだ後いい生活が出来ないって信じ込んでいたおめでたい俺は、一目見た時から虫の好かないタイプだなんて思った西月さんをとことん好きになろうって決めてたんだ』

——一目見た時からって、入学式の時からかよ！ そんなこと、そんなのないよ！ 異常だよ！ 次の言葉に司も息を呑んだ。

『今考えると異常としか思えねえ。なんでそんな無駄なことしたんだろうって思う。たまたま評議で一緒になった時、本音でうえっと思ったけど、そんなことしたらまず西月さんが傷つくだろうし、なにより俺が天国にいけねえしって思って。一年の頃はそれでも、西月さんも周りの奴も、みな仲良くなれるならば、俺がひとりがまんしてもいいしなって思ってた。クラスもまんざらじゃねえしさ。けど……』

少しだけ間があった。

『近江ちゃん見てから、なんか俺のしてること違うって思ったんだ。近江ちゃんは誰にも媚びようとしてないし、自分のやりたいことだけ好きなことだけしている。それでいて成績だっていつのまにかいいところ取ってるし、担任が兄貴だってのにぜんぜん裏切り行為なんてしやあしない。こいつ、いい奴って思ううちに二年の夏、そう、俺のうちの犬スキャンダル大会が行われた頃と一緒にさ。なんで俺、好きでもないことに一生懸命だったんだろうって思ってさ。天国なんかに行くよりも、今この世で自分の本性に素直に生きるほうがいいんでないかって、ずっと考えてたんだ。近江ちゃんのようにクールに、女子が好きだとか平気で言っちゃって、他人の顔色なんて全然気にしないで生きられるってかっこいいって思って。それで』

——近江さんがクールだって言ったって、天羽のことかばってくれたわけじゃないだろ？

——天羽、なんで西月さんの前でそんなに誉めるんだよ！

——西月さん、天羽のことしか考えてないんだぞ！

どれだけ司が西月さんの姿を目で追っても、どんなに神乃世へ連れて行こうとしても、何千本の薔薇の花を捧げても、西月さんは司の方を見ようとはしない。静かに微笑んではくれる。「ありがとう」とは言ってくれる。パンと牛乳を手渡してくれる。でもそれだけだ。一番ほしいものをくれるのは天羽なのだと分かっている。司がかき集めたものなんて、本当はほしくないのだ。せっぱつまった人のようにどうしようもなく欲しがっている西月さんの求めるもの、天羽の心ひとつだけなのだ。それがわかっていてこんなこと言うのだろうか。

——天羽も一度、腹下りのクスリ飲んで閉じ込められるといいんだ。

胸がうっとむかついてくる。天羽の言葉は次に、西月さんへと向いた。

『人の受けばかり考えて、誰にでもいい顔して、好きでもない奴にまでおべっかつかって、クラ



スにいいことばかりしようとして実は自分が可愛くてしかたない、そんな女子と付き合っているんだらうって、まだ付き合ってもいないのに勝手に決め付けて、あれがほしいこうしてほしい薔薇をよこせリングをよこせなんてわめいている女子のどこがいいんだって、ほんとに思ったんだ。俺、ガキの頃から、うるさくてちょっとしたことで正義感ぶって立ち上がって、男子たちを傷つけて、都合の悪い時は泣いて周りの同情を引こうとする女子が、大嫌いだったんだ。結局泣いて周りが助けてくれて、俺が謝る羽目になる、もしくは無理やり悪いことにされる、そういう計算している女子の顔を見ると、ぴんときちまうんだ。そういう女子でもうまくやっていると、天国にいけないから頑張ったけど、もう限界だってそう思ったんだ』

——西月さんがいつ、そんな同情なんて引こうとしたんだよ！　どれだけ天羽のために一生懸命だったかなんて、きっとあいつ気付かないふりしてただけだろ？　な、そうだよな。僕なんかのためにあんなに一生懸命手伝ってくれたあの天羽が、なんで西月さんのことになるとそんな冷たいこと言えるんだよ！　嘘だよな。やっぱり嘘だよな。

細かく雑音が言葉を遮り、途中聞き取れなくなる部分が多々ある。このテープ、どうやって録音していたのだろう。がしゃがしゃと何度か電子音が割り込んでも、西月さんの涙声だけはちゃんとつかめた。三年に入ってから何度も聴いたあの言葉。

『私、悪いところあったら直すから。直せないって思ってるところもちゃんと絶対直すから！』

隣の西月さんは身動き一つしない。司の方を見ようとしめない。

『お願い、天羽くん、何でもします』

——本当に何でもするのかよ。

『もう周りにいい顔なんてしないから、おねだりなんてしないから』

——そんなこと、できるかよ。

『ちゃんとするから、私うるさくしない。近江さんとの付き合いも邪魔しないから』

——邪魔したいなら邪魔しろよ。

『お願い、嫌いにだけはならないで』

二度繰り返された言葉に、司はか細くうめいた。

——嫌いになんてならないよ。やめろよ。

『これ以上、お願い嫌いにだけはならないで』

——僕は嫌いになんか、ならないってば！

——なんで、なんで天羽なんだよ！

途中何か擦れるような音が響いた。電話している時に受話器を落とされた時に耳が痛くなるくらい耳障りな音だった。西月さんが途中、言葉を詰まらせている。

——これ以上、お願い嫌いにだけはならないで。

隣の静かな西月さんが、確かに発した言葉。

——嫌いになんか、なるもんか！

司だったら、とっくに叫んでいるのに。

天羽の口調はところどころ聞き取りづらい部分もあったけれど、だいたいは意味をつかめた。前もって教室で話を聞いたこととか、泉州さんから前もってもらった情報なども入り交じっていたからだろう。

『『奇岩城』の時に、同期の評議連中、俺たちをくっつけようとしてただろ』

——奇岩城？

確か、西月さんと天羽が委員会のビデオ演劇で主役の恋人同士になったというものはずだ。

どんな話かは見当つかない。推理小説だと聴いてはいたが。

『さっさと知らんぷりして、近江ちゃんにアプローチしようと思ってたけど、奴らがありがた迷惑なことしてくれてさ』

だいたい話は聞いている。確か、西月さんは天羽の恋人役だったはずだ。なのにビデオの撮影が終わった段階でいきなり、天羽は怒鳴って西月さんを追っ払ったという。そのくらいの事情は知っている。

『一度は卒業まで化けの皮被ろうかと思ったさ。とことん西月さんを騙してしまおうかって思ったさ。けど、嫌いな相手を俺の勝手に拘束するのはよくないって思ったのと、俺、やっぱり嫌われることが怖かったんだ。それでずっと迷ってた。その時にはっきりと、今した話を西月さんにすればよかったんだ。ちゃんと。けど、そうする勇気がなくて、俺、こんなにひっばってしまったんだ。最低だよな。人をへど出るくらい嫌ってるのに、どうしても自分が嫌われるのが怖くてさ』

何か西月さんが話し掛けている様子だった。言葉は聞き取れない。天羽だけが冷静なまま話しつつづけている。

『『奇岩城』が出来上がるまではちゃんと今までの俺でいようと思ってた。クラスでは片岡もあんなのこと好きだってことが見え見えだったし』

——僕のこと？ 天羽、あの、どういうこと。

自分の苗字が出てきたとたん、言葉はテープから流れる以上にクリアとなった。天羽の言葉にまじる「片岡」という言葉に、思わず身体をこわばらせていた。

『もし俺に露骨に嫌われたとしても、西月さんも片岡のことまんざら嫌いじゃないみたいだし、代わりに癒してくれるんじゃないかって思ってさ。俺なりに、一番いい時考えたつもりだった』

しゅると回転する音が響くカセットデッキ。重たいヘッドホンで頭が砂にうずめられていくようだった。

『けどやっぱり片岡の過去を清算しねえと、あんたも付き合う覚悟できないだろうなって思ったんだ』

言葉に波がない。天羽はくっきりと一語一語発している。

『こんなに一途に思ってくれた相手を裏切るんだ。それも、ずたずたにしちゃうんだ。俺だってあんたが嫌いだとはいえ、不幸になって欲しくなかったんだ』

——不幸になってほしくないなんて、じゃあなんで、なんでだよ！

西月さんがどうしようもなくほしがっているものを、司は知っている。誰よりも知っている。

天羽だって十分知っているはずだ。なのに、取り上げている。渡すことができない。お腹がす

いて飢え死にしそうな状態の西月さんに、本当にほしいご飯を与えようとしな。司は与えることすらできない。頭が混乱してきた。動けなかった。かすかに泣き声が途切れ途切れに入っている。きっと西月さんは、司が迎えにきた時と同じように泣いていたのだろう。木に寄りかかったまま、繋がれたまま捨てられた犬か猫のように。

『きっと片岡は、俺がおえっとくるあんたの性格を、あがめて奉ってくれると思ったし、あいつもそう白状してたんだ。何よりも、『下着ドロ』事件の後、かばってやったのは西月さん、あんなだけだったよな。あれが、あいつ、めちゃくちゃ嬉しかったらしいぞ。死ぬほど嬉しくて、本当だったら転校するつもりだったのを、もう一度生まれ変わった気持ちでここにいるって決めたらしいんだ』

——余計なこと言うなよ、そんな嘘ばかり言うなよ。なんでそんなくだらないことばかり言ってるんだよ！

流れる天羽の言葉に含まれた、司の想い。

そんなもの、これっぽっちも西月さんがほしがっているわけがないと分かっているのに、天羽はいいやや気に入らないえさばかり置いていこうとしている。

——僕じゃだめなんだよ。西月さんは。どうしようもなく。ほんとにどうしようもないんだ。

『片岡、女子が決め付けているよりも、いい男だぞ』

首を振り、司は机につばが落ちそうなほど近づき、小さくつぶやいた。

「僕じゃ、だめなんだよ、天羽」

目を閉じた。涙はこぼれなかった。代わりに咽までつまってくるもやもやしたもので息が苦しくなった。教科書は胸でつぶされたまま。西月さんは身動きひとつしなかった。

テープの中の西月さんが答えを出してくれた。

『嘘だよ、片岡くんのこと』

司の耳に入ってきたものは、確かに西月さんの言葉だった。少しかすれていたけれども、いつかこうやって話してくれたらいいな、と夢見てきたような言葉だった。ふたりっきりだったらきっとこうやって、なんでも。神乃世に連れていくまでの間、もしこうやって、打ち明けてくれていたならば。でもそれは無理なことだと、一言聞いたただけですぐに勘付いた。

こらえた。自分で言いたいことは山のように溢れてくるのに、いえなくて泣けた。

『だって天羽くん、前言ってたよ。『片岡みたいな奴、好きになる女いたら俺軽蔑するなあ』とか言ってたじゃない！』

——やっぱりそうなんだ。

『そんな相手と私を、くっつけたいほど、私のことが嫌いだったの？』

——僕はやっぱり嫌われてたんだ。

『私のこと、そんなに嫌いだったの？』

——もう、だめなんだ。もうどうしようもないんだ。どうすればよかったんだよ！

林の中、ずっと座り込んで泣きじゃくっていた姿を見た時、司は勝手に自分のことを受け入れてくれるもんだと勘違いしていたのだろう。もしかしたら夢がかなうかもしれないと。自分が「下着ドロ」の過去を持つ最低野郎だということを、忘れられると思っていた。

——嫌わなくてくれると、思い込んでいた僕が馬鹿だったんだ。

すすり泣く声に重なり、司も目からにじみ出るものを押えた。

——あの時受取ってくれた時も、おんなじこと、思ってたのか？

——『ありがとう』って言ってくれた時も？

ほとんどつづく天羽の言葉を聞いていたけれど、意味は取れなかった。どうでもよかった。

『あのさ、西月さん。まさかと思うんだけどな、西月さん、片岡のことをかばったのって、実はいい子ちゃんぶりたかったからなのか？ 本当に片岡のことを信じてああいったんじゃないなかったのか？本当は、あんな奴頭悪すぎ、とか思って他の女子たちと一緒に軽蔑していたけど、クラスのみんなからいい奴に思われたくて嘘言ってた、なんて言わないよな？ 違うよな。もし、そうだったとしたら。俺、とことん西月さんのことを嫌うことになるけどな』

もう堪えられなかった。司は教科書、辞書、すべて閉じた。かばんの中にそっと入れた。隣の西月さんの方を見なかった。身動きしていないようすだった。後ろに座っていた泉州さんが、

「片岡、あれ、どうしたのよ。あらま」

と声をかけてきた。

「先に帰る」

西月さんには一言もかけられないままだった。全く動じる気配もなく、西月さんは黙って司に背を向けたままだった。

——もう、僕じゃ、何もできないんだ。

教室を出る時に誰かとすれ違ったけれど、挨拶したら風船破裂してしまいそうだった。うつむいて唇を噛み、司は生徒玄関から飛び出した。黒光りした空が雨っぽい顔をして見下ろしていた。

桂さんはきっと待ちかねていたことだろう。いつもの待ち合わせ場所、林の裏へ向かった。思い出したくない場面をいやおうなしに蘇らせる路が続いていた。たまに蚊がまとわりついて、手の裏をちくりとさす。痒くてかきむしり、血がほんの少しにじむ。

松の大木前で立ち止まった。

幹に手をかけてみた。しめっぽい冷たさが指先に染みた。

風は西月さんを連れて出て行ったあの日よりも冷たく、分厚かった。

「どうしてだよ」

言葉が自然とこぼれた。

「どうして、僕じゃだめなんだよ」

天羽が話していることも、西月さんが泣きじゃくりながら訴えた言葉も、すべて司の思いなんて無視してぶつかり合っていた。写生会の時なら、もう司が薔薇の花を捧げた張本人だと分かっていたはずなのだから、ほんの少しでも司のことを思っていてくれてよかったのじゃないだろうか。西月さんはなぜ、一瞬たりとも司のことを思い出してくれなかったのだろうか。

「わかってるよ。僕なんて、だめなんだ」

天羽が懸命に司をかばい、なんとか西月さんと仲良くさせようとしていることは伝わってきた。何度も、司のことを「いい奴だ」と繰り返していたことも。西月さんのことを最初から嫌いだったのだとわかっていても、精一杯良くしよう、うまくやろうと努力していたことも。司は男子として気持ちがわかる。それが、天羽なりの精一杯なんだと。宗教関係の問題も、あまり詳しいこと知らないけれど、無理して西月さんを好きにならなくてはならない理由がきっとあったのだろう。天羽もきっと、孤独だったのかもしれない、と勘では感じる。

でもだ。

西月さんの気持ちはどうなんだろう。

どんなに司が神乃世へ連れて行こうとしても、結局幕を下ろしたのは西月さんだった。

——天羽くんのいないところへ、行きたい。

そう言ったから、司は連れ出そうとした。

でも、西月さんは、天羽のいるこの学校を選んだ。

自分から、お菓子屋さんを通して連絡を入れた。

今までは、司のことを心配して、だからと思っていた。

——違う。違うんだ。

腰砕けになる、周りには誰もいない。かすかに雀が跳ねる声のみ。

「僕じゃあなんでだめなんだよ！」

わかっている。「下着ドロ」の張本人で、クラスからは浮いていて、友だちもいない、嫌われもの。女子の敵。汚い奴。金で事件を隠蔽した金持ちの息子。ありとあらゆる罵詈雑言を聞いてきた。西月さんだけは暖かい声をかけてくれたから、きっとそう思っていないんだと、信じ込もうとしてきた。でも、そんなわけがなかったのだと改めて気付いた。司は顔を幹に押し付けた。じりじりと空気の混じるような音が幹から聞こえた。顔を擦り付けて声を上げた。

——神乃世にも連れていけない。天羽のいないところへ行きたくないんだ。

——僕はどうすればいいんだろう。

——どんなに僕のこと嫌われてたって、もうもどれやしない。

裏切られて憎いと思えばよかったのだろう。頬が痒くなった。木の粉のようなものが頬にくっついていて。幹を両手で引き離すようにして、司は立った。

目を閉じている間何度も、藤棚の前で佇む少女の姿を思い浮かべた。たったひとり、自分の前で微笑んでくれたあのひとのことを、二年間ずっとなぞってきた。薔薇を受取ってくれた時の、茜色に染まった柔らかい笑顔。手に入れられるのだったら、一生嫌われてもかまわないと思って

いた。

本当に嫌われているとわかっていても。

本当にただの、どうでもいい存在とわかっていても。

——天羽にかなわないとしても。

今までずっと司は、最初から西月さんの気持ちなんて手に入らないものだと思っていた。いや、そう思い込むようにしていた。恐れ多くも手に触れる権利なんて、下着ドロな自分には許されないと思い込んでいた。だから薔薇を受取ってもらえただけで幸せだったし、天羽に「付き合いかけたのか？」といわれても「付き合い合う気なんてないよ」と答えられたのだ。

——違う、そんなんじゃない。

自分の中で必死に否定したかった。そんな贅沢、許されないことなんだとわかっているつもりだった。でも、側にいて司は、本当にほしいものが手に入りそうになった時、何を思っていただろう。西月さんの家族に温かく迎えられ、やっと隣の席に座ることを許された時、夢見つけてきたものが両腕に入るのだと、思い込んではいなかっただろうか。

——ほしいよ、ほしいよ。ほしくないわけなんてないよ。

——だから、こんなに、悔しいなんてさ。

父の言葉が蘇った。

——どうしようもない、欲望、か。

天羽のことなんて全部ぶちぎってやりたい。本当だったらあの場で西月さんを無理やりこっちむかせて、「あんなひどいこと言う奴、早く忘れろよ！」と怒鳴りたかった。無理に笑顔で、周りをいやな気持ちにさせないよう努力しているあの人を、あんな傷つけるなんて最低野郎だと怒鳴ってやりたかった。でも西月さんは天羽でないと、想いをつなげることができないのだ。どんなに嫌われても、どんなに軽蔑されても、天羽でないとだめなのだ。

神乃世に連れていくことでもなければ、司が身代わりの王子様を目指すことでもない。

たったひとつだけ。司ができることは、本当にたったひとつだけだ。

——天羽くん、私のこと、お願いだから嫌いにならないで。

「どうして、あんなことしたんだよ！」

司は、幹に自分の頭を打ち付けた。

時計を見ると四時半を回るところだった。司は埃だらけのシャツを払った。

もう自分を責めたって、罵ったってしょうがない。

——西月さん。

涙に濡れていたあのひとが座っていた場所をもう一度、曇る目に焼き付けた。

司は頬をもう一度ぬぐって、方向転換し校舎の方へ向かった。もう少しで雨が降りそうだった。教室に置きっぱなしの置き傘を取りに行くつもりだった。上靴に履き替えず、そのまま一階の教師研修室へ向かった。

西月さんもまだいるのだろうか。扉の影から覗き込んだら、後ろの席でひとり誰かが立ち上がった。

見覚えのある、色の白いおとなしそうな男子だった。司の顔を見るや軽く頷き、「西月さんはいるよ」

いきなり口を切った。

——こいつ、何でそんな余計なこと言うんだ？

顔を思いっきりしかめそうになってしまった。黙るしかない司に、目を一瞬きょとんとさせ、たたみかけるように、

「けど、違う人の方がいいか？」

——違う人って誰だよ？

妙につぼを心得た言い方をする奴だった。細い扉の隙間から会話を交わすのが、そいつの気遣いなのだろうか。さっき西月さんを見無視するかっこうで教室から出たのを気が付いていたのだろうか。さらに黙ったまま立ちすくんでいると、次は、

「泉州さん呼ぼうか？」

ジャストフィットな言葉を繰り出した。

思わず頷いていた。そいつがぴたりと扉を閉め約十秒。誰も来やしないと思っていたら、背中からいきなり目かくしする奴がいる。匂いで分かるなんて、言えやしない。司は息を止めたまま硬直した。向こう側の扉から回ってきたのだろうか。

「だーれだ？」

——こんな冗談やっている気分じゃないよ！

すぐに手を離し、司の真横に立った。ぼさぼさ頭をかきながら、泉州さんはふうっとため息をついた。

「お気持ち、お察ししますってとこかな。片岡、どうする」

——どうするって。

「テープ、聴いたんだよね。小春ちゃんから聞いた」

肩をくい、くいとぐるぐる回しながら、泉州さんは堅い表情に戻った。

「泉州さんも聴いたの」

「無理やりね」

小さい声でささやくと、司を無理やり玄関までひっぱっていった。すのこの上には誰もいなかった。奥から吹奏楽部の合奏が聞こえてくる程度で、人気はほとんどなかった。

「まったく、小春ちゃん、何考えてるんだか」

舌打ちをし、もう一度肩をぐるんと回した。筋肉質の指をぼきぼき鳴らした。

「あんたの立場、ないよなあ。ほんっと、あの内容だとさ。悪いけど今回の件、小春ちゃんが全面的に悪いよ。今まで私も小春ちゃんと片岡をくっつけようとしてきたけどさ、もしあんたがこれで愛想尽かししたんだったら、私はなんも言わないよ」

無理に笑みを浮かべようとしていた。嘘のつけない人なのだろう。顔が引きつっている。

「さっき、E組で言いたいことは言ってきたからさ。あんたも遠慮なく、言っちゃいな」

「言いたいことって、まさか、西月さんとけんかしたのか！」

声が荒立つ。まあまあと泉州さんが肩を押えてくる。「けんかになるわけじゃないのさ。相手は口利けないじゃん」

「泣かせたりしなかったよな」

「泣かないよ。小春ちゃん、覚悟はしていたみたいだし」

そのまま泉州さんは何も言わずに靴を脱いだ。司はそのまますのこから降りた。

「私も女子だから、小春ちゃんの気持ちがわからないわけじゃないんだ。たださ、片岡、あんたに聞かせるべきことじゃあないよ。私はこれからも小春ちゃんの友だちだけど、あんたはあんなことされた以上、すっぱり縁切ったって誰も文句言わないよ」

——あんなこと、されたって？

——この人、何言いたいんだ？

泉州さんひとりが燃え上がっている。司は黙って林の方へ歩き出した。肌寒い。

「今日は桂さんと会っていく？」

「いい、すごいやな顔、今の私していると思うからさあ」

しばらくふたりとも黙ったまま、雑草を踏みしめ林の中に潜っていった。不審者が出てきておかしくないような薄暗さだった。泉州さんが桂さんと会う気ないのだったら、今日は入り口のところで別れたほうがいい。これから司のしたいことを、伝えた方がいい。

「泉州さん、お願いがあるんだ」

林前の細い砂利路の真ん中で立ち止まり司は切り出した。

「天羽ともう一度、きちんと話をしたいんだ。立会人になってほしいんだ」

「何の話をさ」

黙り続けていたせいか、言葉がぶっきらぼうだった。

迷った。せっかく今まで応援してくれていた泉州さんを裏切ることになりそうだった。罪悪感がひりひりする。学校と林の往復をしている間も決意は変わらなかったのだから、しかたない。

「いままで、ありがとう。けど」

——これが西月さんの、本当にほしいものなんだから。

「天羽に、もう一度西月さんのこと、仲良くしてやってくれないかって、頼むつもりなんだ」

三発、四発、五発くらい殴られるかもしれない。頭をかばうように押えて一歩引いた。覚悟と痛さとはやっぱり違う。

「一対一だと、僕、何するかわからないから、だから、立会人」

言葉が震える。

泉州さんは動揺したところを見せずに両腕を組んだ。白いブラウスのボタンがひとつ、外れていた。かなり際どいラインがもろ見えだったが気にしていない様子だった。

「大丈夫、桂さんのことは、別の意味で、応援するから。協力する」



どもってしまう自分にいらだった。

「片岡、あのさあ」

首を右、左と傾け、考えている泉州さん。ぎろっと目を光らせた。

「そうだね、あんたのためには、それの方がいいかもな」

言っている意味が司にはわからなかった。素直に受け入れられたのが意外だった。

「わかった。私に任せとき」

——お願い、私のこと、嫌いにだけはならないで。

溢れそうになる嗚咽をこらえた。

泣いてしまうなんてことは、したくない。

——天羽にこれ以上、あなたを嫌いにさせるようなこと、僕がさせないから。

自分だけに向けられた藤棚の微笑みが、葉書の上に残っている。

——僕は、それだけでいいんだ。

それきり司はE組に近づかなかった。

泉州さんも無理に司を誘うことはしなかった。

A組の女子たちのうち、西月さんと仲良しだったグループの子たちがこぞってE組に出かけている様子をうかがいつつ、司はひたすら勉強に打ち込んだ。もともと、教室にいる時は他の男子たちとも話をほとんどしないので、することがない。スポーツ新聞を広げる勇気はないし、漫画を持ち込んでひとりだけ怒られるのもいやだ。宿題の多い学校だし、勉強しようと思ったらいくらでもするだけの課題があった。どうせうちに帰ったら、桂さんにやってもらえばいいとたかをくくっていた。その分を学校で片付けてしまうだけのことだった。ガリ勉なんかじゃない。ただ、時間つぶし。

でも時にはいいこともあるものだ。

「この前の抜き打ちテストの全クラス結果が出たぞ」

英語の先生が答案を返し終わった後、成績を全部納めてあるらしいノートを開いて、司に向かってにやっと笑った。

「片岡、最近よくがんばっているなあ。学年で二番だぞ」

周囲から、男子中心のやわらかい「へえー二番」とつぶやく声が聞こえた。そりゃあ、自分にしては英語の抜き打ちテストの結果が良かったのはほっとすることではあるのだけれども。桂さんから「よくやったなあ」とごほうびに、おいしいソフトクリームをご馳走してもらえるから、実はそちらを楽しみにしていたところだった。

「この問題はなあ、高校レベルのものも入れてあったからなあ。そうそういい点数は取れないだろうと思っていたんだが。片岡、この調子でがんばれよ」

男子限定、女子一切無視。この状態の中で発言した奴がいる。

「片岡もやればできるじゃん」

——うるさいってば！

泉州さんがピースサインを送ってくれた。

あとでわざわざ席に近づいてきて、

「明日から小春ちゃん、A組に帰ってくるよ」

こちらは笑みを見せずに教えてくれた。

——僕じゃ、だめなんだ。

あのテープ、あの瞳、すべてで悟らされた言葉ばかりだった。

家に帰っても、桂さんにどやされても、何をしても頭の中は西月さんの表情だけ。

司を求めている、ということ。

——やっぱり、僕はA組の恥さらしで「下着ドロ」でしかないんだ。

わかっていても、やはりひとりになるとわあっと部屋の中で絶叫したくなる。

「僕のどこがいやなんだよ！」という言葉が吐けない。すぐに答えがこだまのように帰ってくるのが見え見えだから。

「天羽なんて心底西月さんのこと、嫌ってるのになぜまだ好きなんだよ！」と叫べない。だって天羽の方が司よりもずっとできた男だということが見え見えだから。

「どうしてあんなテープ僕に聴かせたんだよ！ 僕をむかつかせたかったのかよ！」と罵りたい。でもどうしようもない。西月さんも一緒に嫌われたいのが見え見えだから。

願わくば、西月さんのことを憎みたかった。

司にしては命がけで想いを告げたのに、結局他のA組連中と同じく馬鹿にただけなのかと。親友たる泉州さんすらも愛想尽かしを了解してくれているのに。

司に西月さんがしたことを、泉州さんははっきりと「間違っている」と言ってくれたではないか。

——嫌いになんてなれないよ。

みんなの前で、A組全員が司を嫌いになったあの時、たったひとりだけ声をかけてくれたあの人の姿、あの人の声。藤棚の笑顔。うわべだけのものだったとしても。あの微笑がなければ、今日まで司は歩くことができなかった。

「ねえ、ちょっと。片岡、意識があっちの方に行ってるよ」

目の前で手をひらひらさせるのは泉州さんだった。学校で話をするのはいろいろと煩わしいということもあり、桂さんの取り計らいで車の中、ふたりきり。本当は桂さんとふたりきりを希望しているのだろうが、そんなのどうだっていい。さすがに桂さんの前だとおしゃれもしたくなったようで、めずらしく香水なんぞを纏っている。汗とは違うくささだ。

「泉州さんの匂いだよ」「悪いわね。窓開けりゃあいいじゃんねえ」 外で孤独に缶コーヒーをのみ、路肩に腰掛けている桂さん。運転席のすぐ側なので、よその悪党が中学生二人をさらっていかうなんてことはありえない。ただ、泉州さんからなにか耳打ちされているらしく、とりあえずは司とふたりきりで密談させてほしい、ということは受け入れてもらえた。

「いいよ。それよりもなんだよ」

いつもだったら助手席なのに、しかたなく後部座席に移動した。思いっきり助手席をリクライニングさせて、橋のような形にして後ろへ移動するという、非常に窮屈なやり方だった。

「でさ、あんたにもう一度確認したいんだけどね」

尖った鼻を軽く人差し指でさすり、

「あんた、天羽のこと、最低だって思ってないわけ」

「思ってないよ」

それだけは本当のことだったので、そう告げた。顔をしかめて「へっ」と答える泉州さん。「天羽になんでそこまで、あんたこだわるのさ」

「だって、天羽は一生懸命だったんだ」

——僕よりも、ずっと、真面目で、懸命だったんだ。

「はあ？ 悪いんだけど私あんたの発想がどう考えても納得いかないのよねえ。あのテープを聴いた上で、なんでなのよ。私理解できないよ」

「女子にはわからなくたっていい」

泉州さんも普通の女子たちに較べるとだいぶ変わっているけれども、やはり理解できないところはあるんだろう。あらためて思った。

「片岡、あのさあ、よく考えてみなよ。確かに奴は話も面白いし、受けることするし、女子にもてそうだなっていうのはわからなくもないよ。小春ちゃんが熱を上げたのもそりゃまあ、そうだなって思うけどね。たださ、天羽が小春ちゃんを振った理由、聞いたでしょうが」

「『宗教の決まりで、嫌いな人を好きにならなくちゃいけないから』だろ」

司にはまずできそうにない。

「よく覚えているよねえ。小春ちゃんのことを大っ嫌いだったから、天羽はなんとかして好きになろうとしたわけよねえ。けど近江さんのことが本気で好きになっちゃったから、代々受継がれてきた宗教をかなぐり捨てて女に走ったと。これって最低じゃん」

「最低じゃないよ。やはり、それが天羽のすごいところなんだ」

自分でもどうして天羽をかばってしまうのか、わからない。泉州さんの言う通り、天羽は西月さんを残酷なまでに叩きのめした奴だ。救いようのないくらい罵った奴だ。西月さんを侮辱した無礼者！と殴りたくなくてもおかしいことではないだろう。泉州さんが喜んで助太刀してくれるだろう。

でも、司には別の言葉が続いている。

「泉州さん、天羽は、僕のために、きっとみんな仕組んでくれたんだ」

「下着ドロ」疑惑を告白する前、司は泉州さんに約束したはずだった。すべてを話すと。もう泣きはしない。涙は流さない。静かに、ゆっくり司は話し出した。

「僕が、このままだとクラスから浮いてしまうこと、天羽は心配してくれていたんだ。僕も気付かなかった。四月になってからそれ言われるまで」

「四月？」

学校を出てきた頃はまだ薄い光が差していたのに、だんだん曇ってきている。雨の予感だ。「僕がなんであんなことしたかって、今聞かれても、わかんない。本当だよ。忘れてるんじゃないって、本当に覚えてないんだ。だからあの時約束したこと言えないけど、ただ、やったのは僕なんだってことは本当なんだ」

教室で告げた言葉がまた蘇る。違うのは、今の司が泣いていないことだけだ。

「けど、僕はどうしても、言えなかったんだ。もし言ったら、もう追い出されるって思ってたし、学校も退学だし、警察に捕まるしって」

「あんときあんたは十三歳でしょうが。まだ少年法が適用されるよ」

よくわからないことを言う泉州さん。

「あの時、ちゃんと、言っておけば、こんなことになんてならなかったんだ」

外の桂さんは退屈そうに大きなあくびをしていた。

「西月さんが僕のことかばう必要もなかったし、天羽が僕のことを心配してくれる必要もなかつ

たんだ」

そこまで言い、司はあらためて泉州さんの横顔に向かった。

「別に僕、桂さんと一緒に生活すごく合ってるし、学校で友だちなんてなくたって神乃世の親友がいればそれでいいやって思ってたし、学校では何にもしないで黙ってればそのまま終わるし、って割り切ってたつもりなんだ。楽しいことなんて、神乃世にいけばいくらでも手に入るって。けどさ」

ここまで言っていていいんだろうか。迷う。

「西月さんと天羽のことは、僕も全然わかんない。けど、もし天羽が僕にこういうことをしてくれなかったとしたら、僕はきっと、一生青大附中A組の人と口利かないで終わったと思うんだ。天羽ともそうだし、あの、泉州さんとも話さなかつただろうし、他の奴ともきっと」

西月さんのことはあえて口に出さなかった。

「だから、僕は天羽が悪い奴だなんて思わない」

すっかり軽蔑の眼で見る泉州さん。首をかしげて、ヤンキー風にがんつけ調子で。

「ちょっとさあ、あんた本当に小春ちゃんのこと好きだったの？ 今はどうだかわかんないけど、仮にも自分の大好きな子をあそこまで罵られたら、普通は切れるよ」

——そうなんだよなあ。

たぶん西月さんでなければこうも思わなかつただろう。

「だって、天羽は」

司はもう震えなかつた。

「西月さんがあそこまで好きになった奴なんだから」

泉州さんの返事は曖昧だった。

「それなら別にいいけどさ。それより天羽と話をするのはいつよ」

「明日」

こればかりは泉州さんに頼み込むしかない。

「わかった。放課後あいつをうまく外にひっぱってくるわよ。ほら、委員会活動なんかがあると足がついてまずいじゃないのさ。小春ちゃんも明日からA組に戻るって言うしさ。やっぱり小春ちゃんは大切に隔離されているよか、傷つけられてもいつものクラスにいたいんだって。さっき駒方先生とうちの担任が相談していたよ」

——やはり、天羽のいる教室に戻りたいんだ。

どんなに西月さんを天羽のいない世界に連れていきたくても、いけない。これが答えだ。

だから司は決断したのだ。

——僕は西月さんの求めるものを、捧げることはできないんだ。

泉州さんにどれだけ理解してもらえているかは見当がつかないけれども、もう後戻りをするつもりはなかつた。

「泉州さん、いろいろとありがとう」

桂さんがくしゃみを三回している。そろそろ車の中に戻ってもらおう。

「僕は、泉州さんとかうやって話、できたこと、ものすっごく助かったって思っている」

「なあによ、いきなり照れるじゃないのよ！」

だからといっていきなりげらげら笑いながら背中をひっぱかれるとと、

——今の、打ち消しておいたほうがいいかも。

そう思いたくなる。

桂さんが鼻水をすすりながら車に乗り込んできた。まったくおくびにも出さず、泉州さんは当然のごとく助手席に座り込み、おいしいラーメン屋や焼き鳥屋の話で盛り上がっている。司と話している間の生真面目な表情はどこへいったんだか、という感じだった。ひとりにしてもらえたので司はいろいろと頭を整理することができた。

——とにかく、明日。泉州さんに任せておいて人のあまり通らない場所へ天羽を呼び出してもらおう。学校だといろいろ問題になるしなあ。そして、あのテープを天羽のものか確認しよう。きっと天羽、西月さんがどうしようもないくらいあいつのことを想っているなんて想像していないんだ。せっぱつまるくらいもうだめだって思うくらい。もちろん近江さんがいるのだから、もう一度付き合ってもらうなんてことはできないだろう。でも、半年間だけでも。

——A組に西月さんがいる半年間だけでも。

親切にしてあげたり今までどおりに振舞ってあげたりすることはできるんじゃないだろうか。

天羽はすべてを切り捨てたがっていたけれども、それはいろいろとまずいのではと思う。近江さんと付き合いを続けながらも、西月さんにやさしくしてあげるくらいはできるはずだ。あまりしたくないことだけど、あのテープがもし公表されたならば、天羽の立場は大変なことになるだろう。泉州さんの態度や、最近の女子たちの冷たい視線がすべてを物語っている。西月さんを守ってくれていることはありがたいのだけれども、それだけではいろいろとまずいのではないか、そう思わずにはいられない。

——僕じゃ、だめなんだよ。天羽。

——せめて、A組の中だけでも。

助手席と運転席で、「青潟の餃子屋で一番おいしいところはどこか？」ランキングを作っていた泉州さんへ、司は割り込むように話し掛けた。

「泉州さんあのさ」

「うっさいわねえ」

「あのテープ、明日までに預かっておいて」

「ください、って丁寧に言いなさいよ。なによお、その『おいて』って」

「すみません。『預かっておいてください』！」

一瞬、言葉に詰まった様子だったが、すぐに戻った。

「オッケー、それより桂さーん」

全く司のことなんて気にしていないかのように、桂さんは「巨大餃子」のおいしい店の名前を言い、

「じゃあこれから食いにいくぞ！ 司も付き合え！」

と、車を発進させた。その日はただ、ひたすら食いつづけた。

帰ってからも一切話題に上らなかった。自分のことにかまけていてすっかり忘れていたけれど、あと一週間少して修学旅行だ。ボストンバックとカメラを用意した以外はみな、桂さんにまかせっきりだった。買物以前の問題として、外に出ること事態が少ない。せいぜいコンビニや文房具屋、本屋に行くくらいだ。近所のスーパーになんてほとんど足を運んだことがない。「司、来週の修学旅行の準備なんだけどなあ。この前狩野先生に言われたものだけ用意すればいいのか」

「わかんないけど、それでいい」

「じゃあねえなあ。着替えのシャツとパンツをどっさりこと、寝巻きはいらねえだろうなあ。あとは食べ物だなあ。小遣いが五千円というのは聞いているけれども、それは当日渡すからいいよな。で、さっき修学旅行予定表を目、通していたんだがなあ」

両手で肩を揉み解すような真似をする。気持ちいい。少しだけのけぞって桂さんの足下に持たれた。

「いっちゃん最初の休憩所なんだけどな、ここ、神乃世に近いんじゃないか？」

ずとんと押し返された。腹筋で足首を掴む体勢を取った。背中をそのままぐいぐい押されたまま話を聞いた。全然修学旅行の休憩所情報なんて関心なかったし、見ていなかった。桂さんは結構こういうところ、鋭い人だ。鉄道関係にも詳しい。

「ここだったら周平と会えるかもしれねえぞ。呼ぶか？ 朝一でな。司もひさびさに会いたいだろ」

また背中をつんと押された。早く解放してほしい。背中が硬い。無理やり反動つけて後ろにひっくり返った。桂さんの持っているプリント用紙をひたくり読んだ。

『青潟大学附属中学三年・修学旅行・保護者のしおり』によれば、朝六時半に校門前で集合、その後バス乗り場から七時に出発し、八時に一度バス休憩を取る。確かに神乃世近辺のバスステーションだった。ちなみに連絡船出発の時刻は八時四十五分だった。

来てほしいと言えば、来てくれるかもしれない。けど。

「来られるわけないよ。だって学校あるし」

なにせ学校は青大附中も神乃世中学も同じ八時二十分開始のはずだ。周平は部活をやっているからなおさら無理としかいいようない。いくら司でも朝連をサボらせてまで呼び出す気にはなれなかった。

「あいつが学校真面目に出る奴だと思ってるのかよ、ったく」

「だって、部活だってあるし」

「関係ねえだろ。あとで聞いたら周平の方が怒るぞ。なんでせつかく近くにきたってのに連絡しねえんだってな。ほらほら、『親友の証』見せないくせになってまたすねるぞ。あいつ、野郎っぱくみえて結構こまいところ気にする奴だからなあ。司、連絡してやれよ。どうせ一日二日休んだって、あいつの腕が落ちるわけじゃあねえだろ？」

——親友の証。

手首に巻いた時計のアラームを小さく鳴らしてみた。桂さんもしゃがみこんだ。「それに。お前報告することもどっさりあるんだろ。まあ休憩時間だしなあ。それほど長話できるとは思えねえが、でも、今の司はいい顔してるぞ。見せてやれ見せてやれ」——家庭教師の言うことじゃあないよな

「遠回りなところ通るよなあ。無理に船になんか乗らねえでもいいのになあ。な、司、ちゃんと前もって酔い止めは飲んどけよ」

もう桂さんは司が周平を呼ぶつもりなのだと決め付けていた。わざわざアドレス帳をポケットから取り出し周平あての電話番号を調べているようすだった。ヤンキー座りのままっていうのがなんだか変だった。

「わかった、僕、手紙書く」

すぐに机へ向かった。この数日間机の上が英語の問題集と発音テープで埋め尽くされていた。いろいろ考えるところあって、西月さんの出来事が起こって以来 司は、ほんのちょびっとだけ勉強へ打ち込むことにしていた。手紙を書こうと思ったけれども、何から始めていいのかわからなくて結局挫折した。あらためて文章を書こうとしたことなんて、国語の作文とか、学級日誌くらいだった。あんまり得意なことではない。ちらちらと机のあたりを蠅か蚊ののりでうろついていた桂さんが、机を指先で叩いた。

「面倒だったら、神乃世のお母さんところに連絡すりゃいいだろ。あ、そっか。お前母さんにまた話するのいやだよなあ」

例の事件後、だったら当然説教の嵐だ。おぞけたった。身も心も硬直した司に桂さんはにんまりと笑いつつ、あらためてアドレス帳をめくった。

「わあ。司の代わりに周平へ連絡してやるから。八時だったら奴もそれほど、学校に遅刻なんてすることねえだろうって。それよかお前、勉強もやらないとまずいだろ。今日はまあ、得意分野の英語といくか！」

——周平、来るかな。

周平に会いたい。たまらなく会いたい。

桂さんと英語の宿題を終わらせた後、司はベットの上に横たわった。

天井の野球選手ポスターがはがれかけていて、いまにも落ちそうだった。

——周平、あのさ、僕さ。

——ちゃんと言ったよ。約束したこと、全部言ったよ。

——付き合いなんてしないけど、お前との『親友の証』みたいなもの、全部言ったよ。

本当はこのことをすべて打ち明ける相手こそ、周平のはずだった。周平はどう思っているかわからないけれども、司なりに本当のことをすべて話すつもりだった。夏休み、神乃世へ帰った時に、ちゃんと呼び出して、一晩かけてぶちまけるつもりでいた。

もちろん「下着ドロ」のこともそうだし、西月さんを神乃世へ連れて行こうとしたことも。そして天羽ともういちど娶わせようとしたことも。あいつは言うだろう、「司、ばっかじゃねえの



？ 女なんかに狂うなんてなあ」と。でも、そういわなくてはならない相手が、周平なんだってことくらいはわかってもらえるんじゃないかと思う。あの事件以来クラスメートとはほとんど口を利いたことのなかった司が、いつのまにか泉州さん、天羽、西月さんの家族、そして西月さん、それぞれと繋がりを持つことができた。それだけで今の司は十分だった。

——十分なんかじゃないよ。

そうささやく声に耳栓をした。

テープを聴いた時に目覚めた声。

——ほしくたって、無理なものは無理なんだ。何考えているんだよ、僕は！

西月さんはやはり、A組へと戻ってきた。

次の日、何事も無かったかのように席に付いていた。どういう顔をしているか見られなかったのは、周りを女子のバリケードが囲んでいたからだった。

時々、

「小春ちゃんこんなじゃだめだよ！ 言いたいことあるんだっいたらはっきり言わなくちゃ！」と、聞き覚えあるどすの聞いた声が耳をつくこともある。一緒に餃子を食ったかのお方だ。

「近江さん、あんたって最低だよねえ」

と、これは別の女子。

「天羽、あんた、小春ちゃんにあやまりなさいよ！」

これも事情をよく理解していない女子たち。

西月さんがそれについてどう思っているのかはわからなかった。ただはっきりしているのは、天羽が時折立ち上がり西月さんの席へ向かおうとした時に、何か訴えようとした目をしたことだけだった。授業中、天羽が困った顔をして前の方に座っている西月さんを見つめ、休み時間に入るや否やすぐ立ち上がり、もの言いたげな顔をした。

「ちょっと近づくんじゃないよ！ あんたのせいで小春ちゃん口利けなくなっちゃったんだからね！」

泉州さん以外の女子たちが騒ぎ立て、結局は半径三メートル以内に近寄れなくなってしまう。別の席で近江さんがあきれ果てた顔で眺めている。こちらの方もいろいろと面倒らしい。文句を言われてすこしうんざり気分らしかった。他の女子たちに噛み付かれんばかりで、口を尖らせたまま対応していた。

「近江さん、あんたいったい小春ちゃんに何を言ったわけ？ あんた最低だよ！」

「その面さらしてどこへ行くつもりなんだろうねえ」

「早く土下座しな！」

正直、その状況は怖い。A組の女子というのはどうも集団になると迫力が増す。むしろ司のように最初から無視してくれた方が、親切だったのではと思う次第だった。近江さんは全く動じることなく、

「私が関わっている証拠でもあるの？」

——ないんだよ。

大抵、様子がおかしいと気付いて割り込む天羽の姿で終わる。

「やめろよ、近江ちゃんは関係ないんだ」

明らかに天羽は、近江さんをひいきしていた。見るたび司は、西月さんの背中にどう言葉が突き刺さっているのかを想像し、息が苦しくなった。聞こえていないわけがない。

泉州さんがまた伝達にきた。

「あのさ、天羽のことなんだけどさ」

他の女子たちの目も気にしつつ、短く伝えてくれた。

「今日の放課後、連れて行くよ。無理やりにでもさ。あんたは桂さんを言いくるめて、ひとりでこのコンビニで立ち読みしてな。いつもいつも桂さんの保護つきで動くのはやっぱ、よくないよ」

「いいよ、すぐに家に帰ってから、ひとりで自転車で行くから」

あまり天羽たちにも気付かれたくはなかった。

時折司に、同じく物言いたげな表情で見る天羽。

——僕はちゃんとお前に言うよ。殴らないけど、でもちゃんと。

司は、ほんの少しだけ簡単に思えるようになった英語の教科書を開いた。

放課後、司はダッシュでいつもの林、砂利路へ向かい、すぐに車を出発させてもらった。

「おおどうしたんだ、司」

「ちょっと、すぐに買物があるんだ。あのその」

「なんだよ、お前どうした」

「あの、泉州さんと待ち合わせ」

吹き出して、エンストしそうになった。

「お前、西月教授のお孫さんじゃあないのかよ。お嬢とずいぶん、仲よさそうだなあ」

「そんなんでもないよ」

基本として桂さんの監視下でしか動けない司だった。

薔薇の花を買いに行く時だってそうだし、神乃世への脱出作戦に至ってもそうだ。もちろん桂さんの助けあってこそその出来事もその倍あったけれども、何もかも桂さんの手のひらの中で片がついてしまうのはもういやだった。

「あの、これからさ、コンビニで、修学旅行の時に何か買おうとか、あの、その」

しどろもどろになりながら司は続けた。

「だから、あの僕は」

——もう、ひとりで動くんだ。

「修学旅行前だし、やっぱり買いたいものあるし、桂さんにみんな頼るわけいかないし。やっぱり自分で買わなかったらいけないし。けど青湯には周平いないし、あの、泉州さんしか友だち、いないし」

最後の一言。言った後で絶句した。

言葉が途切れた司に、桂さんはしばらく沈黙していた。やがて父さんのようにやんわりと頬を緩ませた。

「わあったよ。お嬢がいるなら大丈夫だろう。けどな、早く戻れよ。ああそうだ。暑いしなあ。お嬢にアイスクャンディーくらいおごってやれ。お前一人いつもお世話になってるんだからなあ。そっかそっか」

——なにがそっかそっかだよ！

また知らないうちに桂さんが尾行したりしないだろうか。そんなことないだろう。これから父さんところで桂さんは仕事しなくてはいけないはずだ。

「じゃあ、なんも僕、悪いことしないから」

早口でつぶやき司は玄関に走り出た。散らばった靴に躓きそうになった。かかとを踏んだままエレベーターに乗り込み、一息ついた。

——もう後戻りはできないんだ、周平。

西月さんの求めているものを、司はしっかりと獲りに行く。

コンビニの中で、まずは野球週刊誌を立ち読みした。いつもだったらバッターのフォームとか、記録の更新とか、いろいろとチェックするところがあるのだけれども、さすがに頭には入ってこなかった。目の前に「立ち読みはご遠慮ください」との赤い文字がかかっている。無視して漫画雑誌をめくっているガクラン姿の高校生もいた。司もその人に近づいてまねをした。

——泉州さんちゃんと連れてきてくれるのかなあ。

いったん忘れ物してかばんを後ろにくくりつけ、全速力で自転車を漕ぎ、降りるやいなやコンビニに飛び込んだ。驚いた顔していたっけ、店員さんも。よっぽど慌てて買いにきたのかと思ったことだろう。申しわけない、時間つぶしだなんて。つい、おなかがすいたこともあってキャラメルを一箱買ってしまった。店の中でこっそり開けて、口に放り込んだ。甘くて、だんだん落ちていくのがわかる。

——けど、けんかごしになにかされたら、まずいよ。あの人、やりかねないし。

立ち読みしている位置からガラスの向こうを眺めやる。小型車が三台停まっている。じゃまにならないよう、駐車場の隅に自転車を着けた。たぶん目の前だから盗まれないと思うのだけれども、過去の経験……三台盗難経験あり……を考えると油断してはいられない。

雑誌のページを追うよりも、自転車の人影がちょろちょろしないかをチェックするのに忙しかった。

背中の方で、店員さんがモップを持って床の掃除を始め出した。

何を意味するのかはわかる。

——いかにも出て行けて感じだよなあ。

隣りの高校生は全然気にしていない。無表情で荒っぽい絵の漫画を読みふけている。

——外に出たほう、いいかなあ。

立ち読み厳禁、目の前の文字にせつつかれ、結局司は自転車の脇で立つことにした。冬じゃなくてよかったと、それだけ思った。

襟を直し、ネクタイをちゃんと締め直した。ブレザーを脱いで籠に入れた。もう一度反対側を眺めると、見慣れた制服姿の女子がひとり、こちらに向かってくるのが見えた。同時に後ろへちらつくふたりの影も。

——連れてきたんだ、やっぱり。

なぜふたりもいるのか、その辺は泉州さんに聞いてみないと、わからないだろう。司は背を伸ばした。大きく息を吸い込んだ。立ち止まり、泉州さんが手をぶるぶる振っていた。髪の毛は相変わらず素浪人風だった。近づくにつれて匂いが漂ってきた。司にほんの少しにやっと笑ってみせた後、泉州さんは顎で後ろのふたりを差してみせた。

天羽と近江さんのふたりだった。少し髪の毛が伸びてきた近江さんは、泉州さんと違う意味でほっこいモデルさんのようだった。ふたりとも外人さんだったらよかったのに、と関係ないことを思った。

「なんだよ、片岡かよ、なんか用か」

身構え、ごくっと思を呑んだ。のどぼとけがびくんと動く。音、聞こえてなかったろうか。

天羽は最初、泉州さんの背を唇ひんまげてにらんでいた。そのまんまの眼でどやされるのを覚悟した。いきなり呼び出して何考えているんだ、こいつというのが本音だろう。最初泉州さんに向けてにらみ返している時とは違って、天羽は穏やかに笑いかけてきた。

——ええっと、何言えばいいんだっけ。ええっとええと。

最初の一言は、とことん「お前なに考えてるんだよ！」のつもりだった。そのつもりでさっきまで心のリハーサルしていた。西月さんの横顔をすべて頭の中に広げて、天羽の吹き込んだ言葉をじっくり再生して、気合を高めていたはずだった。なのになんでだろう。天羽の顔を見ると、用意していた台詞がみんななんも意味の無いものに思えてくる。

——なんで、なんでだよ。あんなことお前言ったんだよ！

——今なら間に合うよ、西月さんのところに行けばいいんだ！

ちらっと目の隅にかばんが目に入った。一度荷物を家に置いてきたのだけれども、途中、泉州さんから預かったものを入れっぱなしにしていたことを思い出し、慌ててかばんごと持ってきたのだ。桂さんに見咎められるのがいやだった。

——確か、この中にあったはずだよな。

準備だ。じっと天羽の瞳を覗き込んだ。全然、表情に荒れがない。

——けど、これ聞いたら怒るだろうな。

息をぐいっと止めた。後ろにくくりつけておいたかばんの紐を外し、手を入れて探してみた。筆箱の中身が溢れてしまったせいかなかなか見つからない。

「片岡、あんたもとろいね。もっとてきぱきやないと立派な社長さんになれないよ」

——余計なお世話だよ！

肩に顎を乗せるような気配あり。ぎょっとした。

「見つかった？」

次の台詞はきっと「探してあげよっか」だ。冗談じゃない。

「これ」

念じたら、すぐに出てきた。手のひらから少しあまる程度のカセットテープ。

天羽の顔をもう一度見た。

近江さんも横から肘でつついている。どういう代物か、気付いているのだろうか。

泉州さんも司の肩越しににらんでいる。

天羽は唇をぐいと引いて、じっと司の手元を見下ろした。

「天羽、ここに録音されていたことは本当か？」

指先で角をつまみ、差し出した。

「ああ本当だよ。俺のうちにもう一本、マイクロテープで同じものを持っているんだ」

——同じものって、なんだよそれって！

動揺したところを見せたくないのに。指先でテープをぶら下げた。震えているのをごまかした

。

「予備にか」

天羽の答えは落ち着いたままだった。少し上ずるような感じで軽く答えた。

「一言も嘘は言っちゃいない」

もう一度確認しようとするよりも早く、泉州さんがいきなり隣りで叫んだ。鼓膜が破れそうだった。隣りにいるんじゃないや。

「開き直るんじゃないよ！ 小春ちゃん、口きけなくなっちゃったんだよ！」

「俺、その日のうちに狩野先生へマイクロテープバージョンを渡して聞いてもらったぜ。なんも問題ないって言われたんだ」

——天羽！ お前、嘘だろ！

隣りで吐き捨てる泉州さんを抑えることができなかった。体がこわばって動かないのが情けない。父のマンションに狩野先生が来てくれた時、すべてを耳にしたということなのだろうか。いや、そんなわけがない。西月さんだってそんなこと、夢にも思っていないはずだ。司にだって本当は見せたくなかっただろうに。二重の恥をかかせるなんて、まさか天羽がするわけない。思い込みなのに、天羽は平然と言い放つ。泉州さんも言い返す。

「さすが近江さんのお兄さんだよ。最低な担任だよ」

最初の決意がだんだん揺らいでくる。今の言葉が本当だとしたら、天羽はばれてもいい覚悟でもって、西月さんを罵ったことになる。そこまで、そんなにまで西月さんのことを嫌っていたのか。いやわからないわけではない。気付いていないわけではない。でもあまりにも、あんまりだ。泉州さんと天羽とのやり取りが聞こえているのに、司ひとりだけが遠くに飛んでいきそうだった。激しく続いているのに。

「うっかり聞き間違えられたら近江ちゃんに被害が及ぶと思ってさ」

「近江さんに被害ってどういうことよ！ 小春ちゃんが復讐しようとしているとでも思ったわけ。やっぱり後ろめたいって意識はあるわけね」

——まずい！

初めて司は意識した。暴発注意報発令だ。周平も似たようなオーラを泉州さんみたいに出す時がある。大抵それは、喧嘩の時だとも。

——やめろよ！

遅すぎた。司をかわすようにして泉州さんの手は、天羽の頬をぶんなぐっていた。

「近江さんなんか今ごろ青渦川の中にどざえもんになっているかもしれないのに、小春ちゃん一生懸命『絶対しないでね』、って筆談で話してるんだよ！」

声が震えている。泉州さんの眼は血走っていた。

「もし近江ちゃんに手出ししたら、って俺が口止めしておいたんだ」

「あんた、そこまで根性腐っているんだったら、それなりに覚悟はあるんだろうね」

両手を握り締め、司をじゃまっけにするようにして前に出た。気迫のようなものだろうか。泉州さんからただよってくるのはいつもの汗臭い匂いだけではなかった。肩を怒らせて、髪を振り

乱している。怒った時の父さんみたいだ、とまた思った。

天羽は顔を逸らしたまま、唇を尖らすようにした。じっと司にやわらかくまなざしを向けた。  
——なんだよ、また変なこと言うのかよ。

カセットテープが汗でつるつる滑りそうだった。ぎゅっと握り締めた。手から滑り落ちそうだった。その手も同じまなざしで射した後、天羽は尋ねてきた。

「片岡、まだ西月をくどききってないんだろ？」

もうどうやっても、天羽に西月さんへの思いやりは感じられなかった。

司へは信じられないくらいたっぷり、温かく訴えてくれるのに、西月さんにだけはもう容赦するところのないものばかり向けられていく。

あの笑顔も天羽には、全く届かないものなのだろうか。涙ながらに訴えた西月さんの叫びすら、どうでもいいものだったのだろうか。声が震えてきた。咽にひっかかるたんのようものが取れなかった。いつのまにか司は、自分の声が天羽に似た男声になっていることに気が付いた。

「最初、天羽、言ってたよな」

やっと、これだけ言葉を継いだ。

「何をだよ」

「西月さんのためだと言っていただろう。そうじゃなかったのか。わざと冷たい行動を取って、西月さんが振ってもいいように演じて、決して傷つけないようにしたいからって言っていただろう？ 違ったのか」

「片岡には嘘ついちゃったようで悪かったな」

「最初から西月さんを痛めつけるためだったのか」

「それだけは言いたくねかったけどな。普通のやり方じゃああきらめてくれねえからさ。最終兵器、使うしかなかったんだ。けど、これで西月もあきらめてくれるだろうなあ」

一度しゃがみ、腹を落ち着けた。立ち上がった。西月さんの声そのまま詰まったテープを支えられない。つばを何度も飲み込んだ。確認するしかなかった。天羽の答えはあっさりしていた。「最初から嫌いだったって本当なのか」

「初対面からな」

「宗教の修行のためだったってのも、本当か？」

「自分の目標を少しずつ達成していけば、死んでから天国に入ることができるってガキの頃から叩き込まれていたんだ。今じゃあお笑いだけだな」

「近江さんが好きになったから、心変わりした、申しわけないけどって、僕には話してくれただろう」

「一番の理由だ、嘘はついちゃあいない」

「傷つけて平気だったのか。テープではあんなに泣いていたんだろう。天羽に嫌われないためだったらなんでもするって話していたのに、それでも嫌いになるしかできなかったのか」

天羽の答えは顔にはっきり書かれていた。ちらりと近江さんに見せる笑み、それだけで司は勝負が終わったことを悟った。

——もう一度、天羽が西月さんを選ぶなんてこと、あるわけない。

最初からわかっていたはずなのに。

司も、天羽が近江さんを連れてやってきた段階で翻すことができないんだと思わないわけではなかった。なんでこんなことしているんだか、自分でもわからない。ただ木の下で膝を抱えて泣きじゃくる西月さんの声が耳から離れないだけだった。——天羽くんのいないところに連れて行って。天羽が死ぬほど自分を嫌っていることを西月さんは知っていたのだろう。どうしようもなく、この世で一番と言っていいくらい嫌いだっていうことを。だから、西月さんは司に訴えたのかもしれない。よくわからないけれども、天羽の眼の届かないところにいれば、きっと。

——僕がやっぱり、神乃世に連れて行けばよかったんだ！ そうしたら。

悔いても悔いてもしょうもないことばかりが湧いてくる。

西月さんは、嫌われていてもそれでも、天羽の側にいたかったのだ。

だから、先生たちが守ってくれるE組を抜けて、A組に戻ってきたのだ。

司と一緒に神乃世へ行こうとした時だって、西月さんは結局、天羽を選んだ。司よりも天羽でなくてはどうしようもなかったのだ。どんなに憎まれていたとしても。

おめでたく、天羽によりを戻してもらおうと考えた自分がみっともなかった。どんなに努力しても、天羽は西月さんを受け入れようとなんてしないとわかっていたくせに。それでもなんでこんなことをしてしまったのか司には自分がわからない。

。気が付いたのだろう。天羽は小さく笑った。

「言葉の綾だ。勘弁な」

「だったらなんで」

涙が出そうだ。でも泣いてはいけない。必死にこらえた。言うことだけは言わなくては。

「一年だけだろ、それくらいどうして騙してやれなかったんだよ。二年の半ばって言ってただろう？ 半年間がまんしてたんだったら、どうしてあと一年、夢を見させてあげられなかったんだよ。ひどすぎるよ」

泉州さんがそっと司の肩を叩いた。何度も頷いた。どうして、頷いてくれる相手が天羽ではないのだろう。西月さんが求めているのは、たったひとり、天羽だけなのに。

——僕じゃ、だめなんだ。

しばらく沈黙が続いた。近江さんが上目遣いで司たちをみやり、ついでに天羽へため息交じりに首を振った。早くして、うんざりって表情だ。天羽は黙ったままふと、司と目を合わせ、一瞬だけあったかく笑った。すぐに表情を消したけれど。次の言葉も温もりがまだ続いていた。

「片岡、お前もわかってないなあ。片岡、お前は二年間ずっと西月以外の女子に目なんてくれなかったよなあ。西月もずっと二年間、お前には毎朝挨拶をして手を振ってやってた。そんな中、好きでもねえ俺があいつと付き合うっていうこと自体、不自然なことだったんだぞ」

——そんな、わかってるよ天羽！

うまく声が出ない。咽でひっかかっている。言葉が出ない。やっと搾り出したこの言葉。「西月さんに謝ってくれよ、天羽」



——西月さんは、天羽がほしくてなんないんだよ！

「僕みたいな奴が近づいたって、西月さんは嫌がるだけだ。天羽でなくちゃだめなんだ」

「俺の言ったことは嘘じゃない。死んだって認めねえよ」

「責任あるだろ！ 口利けなくなったんだ！」

もうこらえられなかった。天羽の乱れた襟元へ手を伸ばしていた。

周平みたいに、思いっきり殴りたかった。襟を掴もうとして前につんのめり、天羽の胸に思いっきり飛び込みそうになった。男同士で抱き合っただろうか。腰が揺れた。

泉州さんの怒鳴り声が聞こえる。

「片岡、あんたなに引いてるのよ。ばか」

倒れなかったのは天羽が片手で司の腕を取ってくれたからだろうか。襟から手を引き、ぶらんとぶら下げた。肘のところを天羽はぽんぽんと叩き、全く変わらない表情で続けた。

「片岡、お前は偉えよ」

——どこがえらいんだよ！ また話逸らそうってのかよ！

ぐいと見つめ返す。でも天羽の穏やかな口調は変わらない。

「よく言ったな。嘘じゃねえよ。いろいろあったにせよ、俺あん時は感動した」

白目一瞬出して口を尖らせている近江さんがいる。全く気が付かない風天羽は微笑んだ。「自分のやらかしたことをきちんとけじめつけてから、西月を守りたいってことなんだよな。わかるぜ。お前、ほんとに本気だったんだなって思った」

——本気だって、けどできないものはできないんだよ！

「だったらそれでいいじゃねえか。俺にはあいつを嫌いになる権利があるけれどもいじめる権利はない。きちんと、筋は通したってことだ。あとはお前に任せて去るぜ」

——任せて去るぜなんて、むちゃだよ。出来たら僕だってやっているさ。けどできないから今こうしているんじゃないかよ！

咽からあふれんばかりの言葉が、どうして口の端に上るときはこうも説得力ない響きとなるのだろう。司にはじれったすぎた。

「それは勝手な言い分だろう。天羽しか西月さんは見てないんだって」

自分がだんだん制御できなくなってくる。原動力がどこからきているのか、今の司にはやりきれないくらい根っこが見えていた。どんなに嫌われても、どんなに司が神乃世へ連れて行きたくても、きっと西月さんは天羽の側にいたいのだ。司が精一杯、西月さんの足下にひざまずいたとしても、その瞳はずっと天羽を向いている。首が痛くなるくらい見つめ続けているのに、どうして天羽は心動かされないのだろう。あの藤棚の下で微笑んでいる笑顔に。

——あんなに西月さん、ほしがっているのにどうして、天羽。

吸い込む空気が圧縮されたみたく、濃く体に広がる。司は小さく首を振った。

「僕には何もできないんだよ。僕とそんなことになったら、西月さんはもう馬鹿にされてしまうって分かっているって、そのくらいわかっている。だから、だから」

西月さんの笑顔を守るには、天羽が必要なのだ、だから。

「馬鹿野郎！」

頭に衝撃。拳骨でぐりぐりと天羽が司を小突いてきた。油断していたせいか、ぐらっときた。「お前、西月のことを本気で惚れてるだろ！」

さっきまでの穏やかな表情が嘘のようだった。科学反応を起こしたように、ぱっと燃え広がった、怒りの囟。司はもう動けなかった。天羽の言葉はバーベキューの金の串刺しだった。ぐぐっと突き刺され、尻の穴からのど元までぐいと貫かれた。

「俺も二年間お前と西月を見てきて、きっとお似合いだろうって思ってた。ほんとのこと言うと、俺も去年の夏あたりから一刻も早く縁を切ってしまいたかったんだ。けど、俺がさんざん気を持たせてきた以上、責任持って西月が惨めにならない形で後釜用意しようと思ってた。片岡、お前だったらあいつの欲しがる薔薇も毎日持っていける、ビーズの指輪も作ってやれるさ。いつもひつついてつまらんぬいぐるみとか見て喜んでやれるさ。意味不明な言葉をぐちられても優しくしてやれる」

——そんなことない、西月さんは天羽のためだったらなんでもする、なんでも我慢するって言ってたじゃないか！ それくらい一生懸命な人なんだよ！

出かけた言葉を天羽はめっと、ひとにらみして押えた。

「なによりも、俺のしゃべったテープの内容と、西月の泣き喚いた様子を聴いても、全然気持ちを変えないでいられるのは、片岡、お前しかいない」

本当に、もう、動けなかった。

手元のテープをちらりと天羽は見つめ、もう一度司に口元を緩めてみせた。

西月さんの訴えと涙がすべて保存されているこのテープ、最後の命綱だったはずなのに。

「嫌う奴なんて、いるのかよ」

唇を噛んだ。

「あんなに精一杯お前のこと好きだって言われて、どうしてあんなひどい言い方できたんだよ。西月さんかわいそうすぎるよ」

「そうだよ、天羽、あんた血が通っていない冷血人間だよ！」

またわめく人が一人。止める気力なんてなかった。

全く相手にしていない様子で、天羽は背を伸ばし、ぐいと司を見上げた。いち、に、さん、とラジオ体操風の深呼吸を、天見上げてした。

「いいか片岡、西月にお前、なに引け目感じてるんだよ。もうあいつは評議でもないし、E組送りの扱いをされている単なる女子だ。ちゃんとクラスの連中に頭を下げた片岡がびくつく必要なんてないんだ。レベルが合わないとか言って馬鹿にする女子連中の悪口なんて無視しろ。『世界でお前なんかを好きになれるのは俺だけだ』って、俺様気分で奪ってやれ」

なにが「俺様気分」なのか。文句言いたくても、言えない。隣りの泉州さんだけが炎を燃え滾らせているのが感じられるだけだ。ここで一息、天羽が司をやわらかめに見た。

「はっきり言って俺は、西月なんか片岡はもったいないと思っている」

——そんな、なんでそんな。

泉州さんに前の日話した言葉は、間違っていなかった。

少なくとも、天羽は司のことを、認めている。

嘘じゃないって、それだけは伝わってくる。

だから、司は天羽を憎めない。天羽は決して、大嫌いな元彼女を司に押し付けたんじゃない。みな、司を基準にして、司のために、してくれたことだから。

「片岡、お前は十分自信持っていい男なんだ。わかったか」

——どうすればいいんだよ！ みんな悪いことしたくてしてるんじゃないのに、どうしてみなうまくいかないんだよ！ 僕、どうしたらいいんだよ！

「な」、と天羽はいい子いい子の視線を向け、にやっと笑った。

泉州さんが激怒した。司を押しつけ、とうとう大接近天羽の真ん前に立ちふさがった。

「筋なんか通してないじゃないのよ！ 小春ちゃん今でも、毎日、奇跡が起こるんじゃないかっておまじないしてるような子なんだよ。ペアリングの指輪ビーズでこしらえて待っているんだよ。そんな姿見ていたら、いくら片岡が小春ちゃんのこと好きだって、手を出しようないじゃないのさ。小春ちゃんあなたの写真ばかり見ているんだよ。ほら、『奇岩城』の台本を」

言いかけたのを天羽は軽く流した。

「あれ俺、生ごみと一緒に処分した」

近江さんがハンカチを口に当てている。

「謝りなさいよ！ 小春ちゃんの前で土下座して謝りなさいよ！」

さっき司がやろうとしてできなかったことを、ぼさぼさ頭の泉州さんは瞬時にやってのけていた。襟首を掴み、車の陰へと思いつき突き出した。後ろで誰か見てないだろうか？ あわてて司は泉州さんの後ろに回り両腕を抱えた。変な匂いなんて気にしている余裕なんてない。泉州さんが司の背中をばしっと叩く時、はんばでなく痛いのだ。この人が本気で人を殴ったら、けがが出る。抵抗しない天羽をふたたびけりいれようとした泉州さん。いざとなったら司は泉州さんの腕に噛み付いてでも止めなくちゃ、と思った。

「片岡、なにしてるのよ！ やめなよ。それくらいして当然じゃん。今の話聞いた？ 天羽の奴、小春ちゃんをあれだけずたにして、それでも平気にいるんだよ。なあにが、片岡のためよ。片岡がいい男だって。そんなに小春ちゃんが嫌いだったら、もっと自分が悪者になって、小春ちゃんに一発殴らせてやって、それから別れなさいよ！」

——それをしていたんだって、泉州さんどうしてそれわからないんだよ！

ひたすら「泉州さん、だめだよ、ここで殴ったら店員さんに捕まるよ」とささやくしかなかった。まだ手をぶるんぶるんと振り回す泉州さんの動きが止まったのは、近江さんの台詞だった。「聞きたいんだけど」

けだるそうに、ポケットに手をつっこんだまま、近江さんは泉州さんに話し掛けた。ちらりと司の方も見たようだけれども、すぐに目をそらされた。

「結局天羽くんは何をすればいいわけ？ 話聞いている限りだと、片岡くんが言うには西月さんとよりを戻してもらいたいみたいだし。泉州さんは天羽くんに土下座してもらいたいみたいだし。今の見ていたら、ただ単に天羽くんをどつきまわしたいだけみたいだし。支離滅裂で何がなん

だかわかんないのよね」

「近江ちゃん」

「ちゃん」付けで呼ぶ天羽の声が、不安げだ。ちらっと横目でにらむようにして、近江さんが続ける。かすかに馬鹿にした風な笑いを浮かべている。

「結局どうしたいかがわからないから、こちらとしても対処のしようがないのよ。天羽くんの言い分は、片岡くんをA組の人間として受け入れてあげたいってことでしょう。西月さんが好きだったらフリーにしてあげて堂々と口説きなさい、ってアドバイスしてあげただけよ。もちろん西月さんはまだ天羽くんに未練あるみたいだからそう簡単にはいかないけど、泉州さん、本当は、西月さんと片岡くんを応援していたんじゃないの？ 写生の授業が終わってから二人で探しに行ったんじゃないの。だって天羽くん、このテープに録音されているように、もともと西月さんのことが大嫌いで、これ以上嫌いにならないよう努力している真っ最中なんだから、親友だったらそんな相手と一緒にいて欲しくないでしょう」

ゆっくりと、聞き取りやすく、めんど臭そうに話す姿は、西月さんの叫びとは正反対だった。こんなに近江さんを観察したことはなかった。狩野先生の義妹で、クラスの女子たちとは離れているけれども天羽たちのグループ男子とは仲良しだ、という程度の認識しかない人だった。どうして西月さんよりもこういう怖い女子が天羽は好きなのか、不思議だった。でも、側で天羽が泣きそうな顔で何度も口を動かしているところを見ると、きっとそうしたくなるなにかがあるのだろう。向ける視線が全然、違う。

「ふざけないでよ！ あんた、人の彼氏取っておいて」

「彼氏だと思い込んでいたのは西月さんひとりだけでしょ。天羽くんだって人間だから、どんなに努力したって嫌って気持ちがあふれ出たこと多いと思うのよ。私、その辺はよくわからないけれど、嫌がられているって気持ちを感じられないほど鈍い西月さんに一番の問題があると思うんだけどどうかしら。西月さんがもし、早い段階で天羽くんのことを見限っているか、同じ評議仲間としてだけ割り切って付き合えればきっと、細く長いお付き合いができたし、天羽くんももしかしたらクラスメートのひとりとして受け入れてあげたかもしれないわよ」

「口先だけで言うんじゃない！ 小春ちゃん一生懸命だったのに。天羽のこと一筋に考えて必死に尽くしてきた、それで」

辛くて、泉州さんのように言い返すことができなかった。こぶしを作り振るわせるだけ。

——だから、だめだったんだよ、天羽は好きになれなかったんだよ。

近江さんがあっさりと答えを出してくれた。

「悪いけど、尽くすとか一生懸命とか、嫌いな相手にとっては拷問なのよ」

司をちらりと見て、「ね、そうでしょ」とばかりにかすかな笑み。

「でも、西月さんの鈍感さを責めたってどうしようもないわね。それより目的はもう決まっているでしょ。一本に絞ったらいんじゃないの。天羽くんは西月さんと縁を切りたい、片岡くんは西月さんのことが大好き、ってことは簡単よ。西月さんが片岡くんと付き合う気になるよう、説得すればいいのよ。できるよね、泉州さん」

泉州さんを押える手に再び力が入った。振り払われた。「片岡、いいかげん離しなさいよ！

ばか！」と力いっぱい押されて尻餅つく寸前。慌ててさらに背中に飛びついた。なんとか暴力行為は押えられたかのように見えた。近江さんは全く微動だにせず。

「あんた何様のつもりよ！ たかが担任の妹だからって。あんただって所詮コネのくせに！」  
「恥ずかしいこと？ 天羽くんも話していたでしょ。A組は縁故入学のクラスだって。泉州さん、もしかしてとっくに試してみたの？ 西月さん、説得できなかったの？」

ここで一息ついた。また、自信ありげに口元を緩めてものいいたげに笑ってみせた。  
「私なら簡単に説得する自信、あるわ。ためしてみる？ 修学旅行までにはちゃんと答えを出してあげる」

女子たちの考えていることが司にはわからない。エキサイト状態の泉州さんはともかくとして、近江さんも西月さんを天羽から引き離したくてならないようだ。それはそうだろう。今の彼女は近江さんなのだから当然だ。しかし、どういうことだ？ 「私なら簡単に説得する自信、あるわ」って。西月さんが司と付き合う気にさせるなんて、できるわけがない。いや、してもらおうなんて思ったこともない。それに近江さんは司のことをとことん軽蔑しきっている。近江さんに限らず、他の女子たちすべてに言えることだ。それを責める気にはなれないけれども、どうしていきなりそんなことを言い出すのだろう？

——西月さんが僕と、なんてそんなこと、ないよ、絶対ないよ。

——泉州さんも僕にすっごくよくしてくれたけど、できるわけないよ。だって僕は。

薔薇の花。藤棚の花。茜色に染まった教室の微笑み。決して手にしてはいけない、傷つけてはいけない。

——僕は「下着ドロ」野郎なんだから。

司と天羽を完全に無視して、女子ふたりは言い合いを続けていた。言い合い、というよりも泉州さん一人のまくし立てだろうか。また抑えなくてはならないだろうか。司は背後霊の気持ちで泉州さんの後ろにひっついた。

「あんた、小春ちゃんをここまで馬鹿にして楽しいわけなの？」

「あきれてはいるけれど、楽しくはないわ。でも、できれば修学旅行の前にけりをつけたいのよ。天羽くんもそうだし、片岡くんも、私も、ほら、泉州さんだって本当はそうしたいんですよ。担任の妹としても、やる気なしなしの評議委員としても、やはりこの状況は心苦しいものがあるもの。まかせてもらえる？ 決して悪いようにはしないわ」

用心していたのは正しかった。道路沿いに追い詰めるようにして、泉州さんが近江さんを追い詰めた。一気に手を振り上げ、あっという間に襟元を掴んだ。天羽にやったように手加減はしていないようだった。さすがに近江さんも顔をしかめた。横を向くようにして気持ち悪げに首を振った。とたん、様子をうかがっていた天羽が飛び出した。

「やめろ！ 近江ちゃんに手を出すな！」

泉州さんの手を強引に引き離し、後ろ足でけりを入れようとした。すかしたけれど。近江さんの姿が一瞬見えなくなった。

——あ、あれ。

とにかく司も、泉州さんにこれ以上暴力沙汰を犯させるわけにはいかない。もう一度飛びついて、肩をつかんで振りまくった。

「だめだよ、暴力はよくない、泉州さん」

「るっさいわねえ、あんたも男のくせに、どうしてそうも女々しいのよ！ あんたそれでも、小春ちゃんのこと本気で好きなわけ？ ここまであんたの大好きな小春ちゃんを罵られて悔しくないの？ いくらあの子がそれなりのことしたからって、そこまでされる筋合い、ないよ！」

泉州さんの目には涙がかすかに浮かんでいた。

「だめだよ、そんなことしたって、だめなんだよ！」

司にはそれしか言ってあげることができなかった。

ふと、目の前のふたりを見た。泉州さんも凍りついた。

——天羽、お前。

天羽は両腕でもって、近江さんを抱きしめていた。映画やドラマでしか出てこないような、カッコいい雰囲気をもっと出し、きりりと口を引き締めるようにして、近江さんの頭ごと、胸に引き寄せていた。コンビニに入っていく人たちが、「あれ、中学生のくせに、ませすぎー」とか言いながらからかい口調のささやきを残していく。野次馬も若干いるようす。全く動じることなく天羽は、がっちり近江さんの顔をしっかりと胸に納め、うつむき加減に見つめていた。

「近江ちゃん、もういい、いいよ」

何かを近江さんが言おうとして、顔を上げようとした。さっきの馬鹿にしきった冷たい表情ではない、どこか、西月さんが木の下で泣きじゃくりながら顔を向けた時に似ていた。すぐに押えるようにして、また天羽はシャツに近江さんの顔を隠した。

「わかった。西月には俺の方からきちんと謝る。けど、ひとつだけ頼むな」

「また条件つけるわけね」

冷静な声で泉州さんがつぶやく。天羽は両腕をまた強く引き締めるようにして、近江さんを支えた。きっぱりと一言だけ。

「近江ちゃんにだけは一切、手を出さないでくれ」

押えようとしてもと

まらない、司はただ泉州さんの腕を押え直すだけだった。腕をさらに突き出し、指差しをしながら泉州さんはさらにわめいた。そちらの方にもギャラリーが着目しているようすなのに、このままだったら大変だ。

「だめだよ、ここでけんかしたらおまわりさん来るよ」

「どうせうちの父さんに竹刀で殴られるだけよ。そんなの怖くないよ。それよりあんたいいかげん腕、離しな！」

泉州さんは涙の溜まりそうな瞳でもってまくし立てていた。

「天羽、そりゃそうだよ、あんたにとって近江さんが一番大切な相手なんだってのはよーくわか

るよ。わからなかった小春ちゃんが馬鹿なんだよね。そーだよ。私もそれは賛成してやるよ。けど、なによ。嘘つきたくないから小春ちゃんを突き放すって許されるわけ？ ああ、そうだよ。私だってあんたみたいな冷血馬鹿男よりも、片岡みたいにアホでまぬけで、単純で純情で、ほんとにこいつが大社長になってしまうのか信じられない奴の方がずっといいと思ってるよ。近江さん、あんたが言う通り、私もあんたの言う通り、小春ちゃんが馬鹿だったと思うよ。だから片岡の方に気持ち逸らしてやりたいよ。そうだよ、ほんとにそうしてやりたいよ。けどさ、あんたそんな簡単にできるわけ？ 小春ちゃんをたっぷり傷つけて、しゃべれなくして、それでもあんた「嘘」をつかないことが正しいって言えるわけ？ せめてさ、片岡が言ったみたいに、ほんの半年間だけでも、付き合った振りしてあげるとかさ、どうせ馬鹿な子だったら馬鹿な子用にやさしくすれば小春ちゃんは舞い上がるから、そうしてあげるとかさ。あんたみたいに頭よかったらそれくらい考えつくんじゃないの。近江さんもなにさ、いきなりしおらしくなって天羽相手にラブシーンしてさ。小春ちゃんがどれだけあんたのために、一生懸命努力してきたかも考えたこと、ないんでしょ。小春ちゃんは……そうよ、あんたが言う通り鈍感で馬鹿だよ。早く見切りをつけられないで、いまだに天羽のことしか考えられなくて、せっかく片岡が命賭けて王子様になろうとしているのに、それすら受取ろうとしないんだよ。片岡みたいに金持ちのぼんぼんだったら、多少ブラやパンツ触られたってかまわないって、そう割り切れる頭いい子じゃないからね。けどさ、あんたたちよりはましだよ。あんたもじゃあ、試してみればいいよ。小春ちゃんが片岡を選ぶかどうか。決めるのは小春ちゃんだよ。あれだけ傷ついた小春ちゃんが、簡単に天羽のこと忘れられるわけ、ないじゃないのさ！ 片岡だって、あれだけやってて出来ないのにさ！」

言いたいことを全てわめき尽くしたのだろう。脱力するように、泉州さんは肩を落としてしゃがみこみ、すぐに立った。司の方にもう一度涙目で、

「そうだよ、やってもらおうじゃん。そんなこと、できるかどうかさ」

——なに、この人言ってるんだよ。

何度も思うこの感慨。たぶん、誉められているのだろうけれども、泉州さんから出る言葉だと、どうもみな貶し文句にしか聞こえないのがもったいない。司は黙って天羽と近江さんを見つめた。——天羽、そうなんだ。

穏やかさ、ひょうきんさ、生真面目さ、今まで見てきた天羽の表情ライブラリーの中に、近江さんを見つめている時の覚悟した表情は含まれていなかった。たったひとり、近江さんのためだけにとっておいたであろう、決意の瞳。

西月さんが咽から手が出るほどほしくてならなかった、想いの表情。

どんなに手を伸ばしても届かない。写真に向かって手を伸ばそうとしている自分に似ていた。

どんなに司が天羽に頼み込んだとしても、決して西月さんへあの瞳を向けることはないだろう。

。——ごめん、やっぱり僕には何も出来ない。

藤棚の笑顔を取り戻すことは、もうできない。

天羽はそのまま近江さんを抱いたまま、

「実言うと、今度の土曜にな。評議委員会の『弾劾裁判』受けることになってるんだ」

いきなり告げた。さっぱりとした口調だった。

「弾劾？」

——評議委員会の『弾劾裁判』？

司も一年A組男子から「弾劾」を受けたことはある。あの時のような乗りなのか？ 背筋がぞっとした。隣の泉州さんも一緒に声を上げた。頷く天羽。

「そ。弾劾なんだ。うちの委員長から呼び出しくらった。おまえさんたちが聞いたこのテープ、聞かせて事情を説明したんだけどな。うちの委員長そういうところ潔癖な奴だから、『弾劾』に回すってすげえ激怒しやがったんだ。俺も最初は頭来たけど、そうだよな。当然だよ。俺、西月を人間としてやっちゃいけないところまで傷つけてしまったんだ。どういう結論になるかわかんねえけど、俺は俺なりにきちんとけじめをつける。いつか、西月がふつうにしゃべることができるようになるまで、とことん償いたいと思ってる。許してもらいたいなんて思ってねえよ。お前らも殴りたいとか、文句言いたいっていうならそのまま受けるから」

腕の中の近江さんが驚いたように顔を上げ、「弾劾？」と小さくつぶやいた。

「ふうん、『弾劾』ね。そんなんで一発殴られて、それで終りなんてことなんて甘いこと考えるんじゃないよ。そんなことで小春ちゃんが許してくれるなんて、勝手な言い分だよ」

「許してくれなんて言わねえよ」

司はそっと泉州さんの腕をひっぱった。もうここにいる必要はないと思えてならなかった。

「行こうよ」

ささやき、天羽にまた呆れ顔された。烈火状態の泉州さんは、少しだけ黙った後、天羽と近江さんに向かった。天羽に向けているけれども、言葉は近江さんあてとといった風に。

「じゃあ、今言ったこと、天羽、覚えときなよ。忘れたとは言わせないからね！」

「ああ、約束する」

再び顔を胸に押し当てるように、近江さんの頭を抱きながら、天羽は自信ありげな笑みを浮かべて答えを返した。あしらわれてむかっときたんだらう。顎でしゃくるように泉州さんは司へ合図した。頷き返し、自転車のカギをポケットから探した。すぐに出てきた。まだいちゃいちゃしているふたりを背にしたとたん、何か言い忘れたことがあるように思えてならなくなった。「泉州さん、ちょっと先に行行って」

「はあ？」

返事を待たず、天羽にだけ聞こえるように……必然的に腕の中にいる近江さんにも聞こえてしまうのだけれども……司は尋ねることにした。もう割り込むことができないとわかっていたから、言わずにはいられなかった。

「一度でも、西月さんに、あの、そうしてやったこと、あったのか」

天羽は天を見上げた。気持ちよさげにははっと笑った。

「今度お前がしてやることだろう」

何度言われたかわからない、最後の言葉。

「がんばれよ、片岡」

司は受取った。そのまま背を向けて、泉州さんを追った。



自転車を押しながら泉州さんと歩いた。最初興奮冷め遣らぬ様子だったけれども、司と歩いているうちに落ち着いてきた様子だった。肩で息をしていたのがだんだん普通になる。やっぱり横顔を見ると、かっこいい外人のモデルさんっぽい。

「私、後ろに乗りたんだけどさあ、あんたいい？」

「冗談じゃない。かばんがつぶれる」

「でさ、今日、桂さんのところに連れてってほしいなあと思うんだけど」

「だったら少し風呂に入りなおしてからにしろよ」

「ああら、じゃあ今日、お風呂貸してくれる？」

信じがたいくらい脳天気な会話を交した。さっきまで涙をためて抗議していた泉州さんなのに、司と歩き始めるや否や、いきなりこうだ。せつかく、「さっきは、良く言ってくれてありがとう」と言おうかと思っていたのにだ。調子が狂う。司は横を向いた。

「桂さんには思いっきり嘘言ってきたんだよ。泉州さんと一緒に修学旅行の準備するからってさ」

「ふうん、だから今回はお付きの人がこなかったってわけなんだあ」

「どうだか、どっかで見張ってるかもしれないけど」

思いっきりぶっきらぼうに答えた。泉州さんは立ち止まり、腕時計を覗き込んだ。驚くなかれ、男物のデジタルウォッチである。

「じゃあそっか、裏付けが必要だもんねえ。じゃあさ、コンビニなんて高いところで買物するよかさ、もっとやすいスーパーに行こうか。あんた全部桂さんに買いものとかやってもらってるんでしょ。これからはもっと庶民感覚を身に付けないとまずいよ。それにさ」

いきなり風が吹いた。スカートがめくれそうになるのをそのままあぶない格好のままにして、泉州さんは真面目な口調で言った。

「もうあんたもわかったよね。もう二度と、馬鹿なこと考えるんじゃないよ」

「なんだよ、いきなりまたお説教かよ。お説教なら桂さんと父さんで十分だよ」

まぜっかえしたかった。

「小春ちゃんを天羽にくっつけようだなんて、非常識なこともう二度と、言うじゃないよ」

——な、なんだよ。僕、あの、そんなつもりじゃない。

「修学旅行前かあ。弾効がどういうことになるかなんてこっちの知ったことじゃない。けどね、片岡。あんた、まだ肝心のことでないじゃん。小春ちゃんのことばっか考えているって言うけど、肝心要の『行動』ってやつ全然じゃん」

また、「じゃん」だ。「じゃんじゃんじゃん」ってうるさい。耳を覆う真似をした。すぐにはがされた。

「いい、片岡、天羽はもう二度と、小春ちゃんのこと近寄らせたくないって言ってるわけよ。近江さんにいたってはあの女何者？ あんたとくっつけようだなんて勘違いしたこと言い放ってるわけよ。そりゃあそれがベストだと私も思うさね。でも、近江さんなんか無理やりお膳立てされるくらいならば、あんた、もっとやるべきこと、あるんじゃないの？」

——やるべきことってなんだよ！

睨み返そうとして、じっと見つめ返されたらどきまきする以外、何もできない。

「小春ちゃんに言うことさ。『僕と付き合ってください』ってさ。あんたたくさんチャンスあったくせに、結局それだけは言えなかったんだねえ。あ、パンツドロ口の話は言っこなし。何はともあれそれを言わないでただ、テープ聴かされてパニックになるよりさ。私も一応小春ちゃんの親友だし、本当だったらあんたが愛想尽かしして逃げるのが当然だとも思うけどさ。でも、本気で小春ちゃんのこと、今でも好きなんだったら、それしか方法ないじゃん」

「できるわけないよ、だってさ」

——西月さんは今でも天羽のことしか。

出かけた言葉を飲み込むしかない。

「あんた、振られたくないんでしょが。自分は小春ちゃんのナイトでいいとか思っているけど、本当は小春ちゃんに「あんたほんとは下着ドロ口だと思っていたのよ」みたいなこと言われたくないんだよねえ。けどさ、天羽もさっきはちょっとだけまっとうなこと言ってたじゃん。『そんなお前を好きになれるのは俺だけだ』って俺様気分で奪ってやれってさ。奪ってやんなよ。今、小春ちゃんが振り向いてくれなかったんだったら、次は振り向かせるため、もっと次なる手を考えなよ。もちろん私だって、桂さまだって応援してるじゃん」

——だから、桂「さま」ってのはやめろよな！

「いい、小春ちゃんの親友たる私が言うのもなんだけどさ、あんた以上に小春ちゃんのこと思って、小春ちゃんのためにだけ動いている男子、いないよ。西月教授やお兄さん、お母さんからあんた、ちゃんと太鼓判押されてるってよ。あとは小春ちゃんだけだよ。あんたのことを小春ちゃんは、まだ全然知らないんだよ。私とか天羽がバックアップしたいって思える理由を、あんたなりに一生懸命アピールしてやればいいじゃん。振られるかどうかは別として、まずはあんた、いいなよ、『付き合ってくれ』ってさ」

——できるわけないよ。だって僕は。

「いくら天羽や私がお膳立てしたってさ、あんたが本気にならなくちゃ、どうしようもないんだよ！」

西月さんが咽から出るほどほしがっていた天羽の瞳。それはもう届かないものなのだと気付かされた。もう天羽は振り向こうとはしないだろう。近江さんのためにならばなんでもするだろうけれど、西月さんが苦しんでも泣いても、あの瞳を向けることはないだろう。

だったらどうすれば、藤棚で微笑むあの笑顔を取り戻せるのだろう。

言葉を失っても天羽の側にいたがっている、あの人に司はなにができるのだろう。

泉州さんの言うとおりのかもしれない。司はあえて西月さんの求めている形でもって、恩返しをしたかった。想いを伝えるだけでいいと思い込んでいた。近くにいさせてくれるだけでいいと思っていた。神乃世へ連れて行ければそれでいい、そう思いこんでいた。

でも、泉州さん、天羽が交互に突き刺した串が、司をぐりぐりにつつついている。

今まで目を背けてきた、司の本当にほしいものが、今の司には確かに見える。

テープを聴いて、あの人の気持ちが司には一切向いていないことを知った時流れた涙の感触。

——ほしい、ほしいよ。どうしてなんだよ！

手に入るわけがない、そう思い込んでいた。でも泉州さんも天羽も、司の切迫するくらいほしいものが、簡単に手に入るはずだと断言している。そんなわけないのに。なぜそんなこと言うんだろう。夢見ちゃいけない、って自分に言い聞かせたはずなのに、つぶしたはずの「ほしいもの」が意識の奥から浮かび上がってきってしまうではないか。

——そうだよ、言いたいよ。

「桂さん、おたくの大切なお坊ちゃま、現在スーパーにてお預かりしてまーす！ 身代金はラーメン一杯！ よろしく！」

公衆電話でいつのまにか桂さん呼び出している泉州さん。結局はこれが目的だったのだろう。相手は「桂さま」なんだから。見繕われてパジャマやらゲームとかいろいろ買物させられた司は、スーパーの休憩所で腰を下ろした。

——天羽はどうしても、西月さんだったらだめなんだって。

——だから、僕でよかったら、代わりでよかったら。

今まで迂回してきた、この言葉。

——西月さん、僕と、付き合ってください。

唇に乗せてみる。

修学旅行前だしなおさら忙しさにも拍車が掛かる。

買物は桂さんと泉州さんが全部やってくれたし、なんだかんだ言って同じ班のクラスメートたちも、司に声を掛けてくれた。あまりしゃべったりはしないけれども全くの無視をこかれたまま過ぎさなくてもよさそうだった。

「で、周平には連絡してくれたの」

「ああ、あいつびっくりしてたぞ！」

本当は自分で周平へ電話しようと思っていたのだけれどもしそびれてしまった。桂さんが受けた伝言によると、

「絶対、眼開けて来いよってな」

小学六年の修学旅行、司はずっと朝寝つづけていて、周平が揺らしてもなかなか眼が覚めなかった。あきれられた思い出がある。三年前のことなのに、みんな周平は知っている。

「あいつ元気だった？」

「元気もなにも、まだ一ヶ月も経ってねえだろ？ 周平も色々悩みがあるみたいだぞ。司ももうちょっと大人になってだな、周平の上下の悩みを聞いてやれよ」

「なんだよ上下の悩みって」

ぐっと腹に笑いを留めるような顔で、桂さんは司の髪の毛をかしゃかしゃ混ぜた。

——大人になれたって、わかんないものはわかんないよ。

ひとり、部屋で社会の参考書を開いた。

修学旅行前に一通り、旅先の名産物や歴史について調べておくようにというのが、社会科担当菱本先生の宿題だった。確か、ほたるが飛ぶので有名だとか……でも昼間見ると蛍ってゴキブリに似ている、と思ったりもした。学校に上がる前、父さんに連れられて蛍のたくさん飛ぶといわれる町へ行ったことがあるけれど、途中で眠くなって結局見損ねたという思い出しかない。

——ちゃんと起きてるって。周平も僕のこと、ずっとガキ扱いしてるしなあ。

そのまま寝ようと思った。宿題なんて明日の朝早く起きればいい、いつもだったらそうしていた。でも、なぜか背中がびんと張って、寝させてくれなかった。あの日からずっと、司は勉強の神様に好かれてしまったみたいだった。桂さんに全部手伝ってもらって宿題を片付けていたのに、どうしても自分でやらないといけない、そういう切迫感に襲われる。桂さんにそんなこと言ったら、猛烈勉強マシーン化されるから言わないけれどもだ。

——勉強したら、少しは、大丈夫かなあ。

司は参考書の赤字部分をそのままノートに書き抜きながら、音読した。

——天羽の代わりに、なれるだろうか。

別に天羽はそれほど成績がいいわけではない。評議委員だからげれっばってことはないけれども、それほど目立つ点数を稼いでいるわけではない。西月さんがこつこつ苦手なところを友だちから聞いて、一生懸命勉強して誉められているのとは違う。

——今ごろ、泉州さんに聞いているんだろうか。

泉州さんは理系がばりばりに得意だから、大抵のテストはいい点数を取っている。

「今時の女はね、理系できる方がかっこいいのよ」

と勘違いしたことを司に言うけれども、それは置いておいてもだ。

「けどさあ、片岡、あんただって英語できるじゃん。私もびっくりこいちゃったじゃんかあ。この前の小テスト、なんであんた二番なわけさ？ あんなわけわかんない言葉どっさり出てきてさ、それも二枚くらい長文でさ、それをどうやってあんた答えだしたわけさ。あんな蟻の集団みたいなテスト用紙読んでいるくらいだったら、方程式百題の地獄を見た方がましだって」

——方程式は絶対やだって！

誉められたら嬉しくて舞い上がりたくなる。

「ほら、一人頭の中が語学一色っていうのがD組にいるじゃん。あいつに負けるのはしょうがないよねえ。けど、その次だよあんた。語学馬鹿の次だよ。それに片岡、絵もいかしたものの描いてるじゃん。あんたってさあ、もっとそういうところを見せつけるチャンス作りなよ」

——だって、僕が二番取った時、あの人がいなかったんだよ！

さすがに司はそこまで言えない。でも泉州さんは読み取ったように得心顔を見せた。「小春ちゃんは運動能力抜群な男子が好きみたいだけど、やっぱり成績もいいこと、越したことないよ。ま、今はあんたまだまだだけど、桂さまに頼んでどんどん尻叩いてもらいなよ。ある日小春ちゃんが気が付いたら、天羽なんか目じゃない王子様がすぐ側に、なんてことになってハッピーエンドだってあるかもよ」

——この人、いったい何考えてるんだろう。あんな難しい数学の問題解いてるのに。

頭の痛くなる、青渦における唯一の「友だち」に思いを馳せ、司は宿題をしっかりと片付けることにした。

もちろん、泉州さんと意味ない話をして盛り上がっているのが、逃げだってことも意識していないわけではない。今までならば、司の方が心の準備をして、その上で薔薇の花なり神乃世逃避行をしたりと、いろいろやってきた。

——今度は違う。

天羽と近江さんが甘ったるい恋人同士みたいなことをしているのを見せ付けられた段階で、西月さんにしてあげられることはたったひとつしかない、そう叩き込まれた。泉州さんも、また後で一緒に話を聞いてくれた……泉州さんが一方的に報告したという方が正しい……桂さんも、「お前、お嬢の言う通りだ！ お前きんたま縮こまらせてびくつくのもいいかげんにしろよ。司がやってねえことったら、そうだな、一つしかねえなあ」

——わかったよ。それしかないんだろ。

司は唇を噛んだ。

覚悟はしている。

振られることがもう決定事項だとわかっている。司の存在なんて、何にも心に残っていないことくらい。

——そうだよな。『下着ドロ』なんかと付き合ってくれるわけないよな。

——どんなに僕が成績良くなって、野球部のエースになってもだめなんだ。

だけど何も、泉州さんだってそんなに早く、準備を整えなくたっていいだろうに。

振られるなら早い方がいい、と、別の意味で応援してくれているんだろうか。

「片岡、ちょっと悪いけど来てよね」

「悪くてもよくてもいかないと怒るだろ」「さっすが、私の性格を読めるようになってきたねえ」

「余計なお世話だ」 天羽との話し合いが終わりもう一週間が経った。表面上は天羽も近江さんといちゃついていたなんて思えない態度を取っていた。近江さんも天羽の腕に抱きしめられて顔をうずめていたなんて、想像できないようなクールさで日々過ごしていた。

きっと、影ではいろいろあるだろう。

うらやましいとは、今のところ言うてはならない。泉州さんかというと、それなりに西月さんの面倒を一生懸命見ていた。天羽が時折、真面目な顔をして西月さんの方へ近寄ろうとする時がある。すると、

「ちょっと天羽、あんた何様のつもりさ！ これ以上小春ちゃんを傷つけるつもりかい」

と噛み付いた。天羽は黙って頷き、素直に席に座る。でもまたその繰り返しで泉州さんに負ける。やはり、「近江さんには一切手を出さないでほしい」という条件を守る以上、西月さんをこれ以上不安定にってしまう言葉を出せないのだろう。

肝心要の西月さん。実は最近、クラスの女子たちが五人も学校を休んでいて、そのおかげで教室がすかすか、おかげで西月さんがどういう風な顔をしているのか、ちゃんと勉強しているか、泣いていないか、全部見えるのだった。修学旅行前に食中毒なんだろうか、それともいろいろまずいことをやらかしたのだろうか、と噂は飛び交っている。誰も本当のことはわからないらしく、たまに近江さんに尋ねてくる奴もいる。担任の妹だからその辺は詳しいのではないか、という読みらしいけれども、話しているのかどうかはわからない。少なくとも司は全く見当がつかない。

「泉州さん、それより、なんだよ話して」

「ほらほら、あの時間いたでしょが。弾劾よ弾劾」

——弾劾裁判。

クラスの男子一丸になって、司を責め立てた、一年の日の記憶。

体がぴりりとした。

「あんたが受けるわけじゃあないんだからびびるんじゃないってさ。それより、弾劾裁判がねえ、修学旅行の前の日なんだわ。あんた、来る？」

「僕呼ばれてないからいけるわけないだろ」

「別に呼ばれなくたって、行ったっていいじゃん」

泉州さんは身勝手にもおっそろしいことを言う

。「それに弾劾裁判って、この前の土曜だったんじゃ」

「いやね、それが違うんだわ。あんたにだけ教えてあげるね」

——僕にだけって、いったいなんだよ。泉州さんはかがみ込み、司にだけ聞こえる声でささ

やいた。今日はちゃんとシャンプーしてきたらしかった。

「一応、やったらしいのよ。弾劾」

早口で言うから大体のニュアンスを掴むので精一杯だ。「ただね、どうもその前に天羽が女子たちに締められたらしいんだ」

「締められた？」

思わず口に出てしまい、泉州さんのでかい手にはたかれた。

「オフレコだよ。クラスの連中は知らないんだからさ。小春ちゃんがかawaiiそうだってことで女子たちが団結して、天羽を呼び出して、それで思いっきりぶん殴ったんだって！」

——ほんとかよ。

天羽の方を横目でちらっと見た。体育の時もちゃんと走っていたし、別段変わったところなんて見受けられなかった。

でも、確かに月曜から女子たち五人はしっかり休んでしまっている。

「けど、それどうして

」 「ばかだねえ。私たちとおんなじこと考えたに決まってるでしょうが。小春ちゃんをもう少し人間らしく扱いなさいよ！ってさ。けど皮肉だねえ」

皮肉だねえ、のところだけ、おじさん臭い言い方をした。

「なにがだよ」「小春ちゃんさあ、一生懸命クラスのために尽くしてきた時はなかなかみんな協力してくれなかったのにさ」

口を耳から離し、右肩越しに西月さんを見つめ、また戻した。

「評議委員の間は、小春ちゃんクラスをまとめよう、みんなに喜んでもらおうっていつも笑顔振りまっていたのにね。天羽に嫌われ、近江さんに評議取られ」

——言葉も取られちゃった。

小さな声でつぶやいた。司を見て泉州さんは大きく頷いた。視線を逸らさなかった。

「小春ちゃん、本当はずっと目立たない子でいた方が、幸せだったのかもしれないねえ」

司ももういちど西月さんの後姿を見た。

別の女子友だちが机の前に来ていて、映画雑誌を広げて差し出しているのを、頷きながら指差ししている。

「天羽じゃないほうが、ずっといいのかもしれないねえ」

——またその話かよ！ むすっと無視したかった。向こうの方が上手だった。間髪入れずに次の言葉。

「ということで、明日、放課後まっすぐ、駅前のカラオケボックスに集合。桂さまにちゃんと道草の連絡しときなよ！」

「カラオケボックスっていったいなんだよ！」「黙りな！」——なにが黙りなだよ！泉州さんとぽんぽん軽口をやり取りしているうちはそれほどどでかいこととも感じなかった。でも、改めて思い起こすに、「天羽を女子たちがぶんぐる」なんて想像を絶している。約一名、やらかしてもおかしくない女子がいるけれども、その人はちゃんと西月さんの側にいるのだから、関わっていないことは確かだ。

それに天羽だって、女子に手を出さなくとも逃げるとか、何かできたんじゃないだろうか。その日は評議委員会主催の弾劾裁判だったというのだから。殴られたままだったんだろうか。それとも先生に女子たちのことを告げ口したんだろうか？

この辺については司も何がなんだかわからなかった。少なくとも天羽はひどい怪我をしているわけでないし、狩野先生も五人の欠席については取り立てて何も言わなかった。たぶん、たいしたことでなかったんだろう。泉州さんが大げさに取りすぎているだけだ。それよりも、なんで泉州さんはあんなことを言ったのだろう？ ——カラオケボックスなんて、行ったことないよ。そんなとこいったら補導されるかもしれないのにさ。全く見当のつかない場所だ。泉州さんが言うには「弾劾裁判」がそこで行われるらしいし、司もぜひ参加すべきだと言い募るわけだけれども、それもなんだか勝手過ぎる。裁判に掛けられるのは天羽だろう。西月さんも行くのだろうか。

——泉州さんの言うことなんて、全然わかんないよ。

次の授業は教室でビデオ鑑賞だった。社会科・菱本先生がよっこらしよとビデオデッキを抱え、放映幕を黒板の上から吊り下げた。しばらく寝ていられる。曇り空と蒸し暑さで汗がだらだら流れる。司は言われるままにカーテンを閉め、ビデオが再生されると同時に机へつつぷした。堂々と居眠りさせていただきます。

——お願い、私のこと、嫌いにならないで。

——天羽くんのいないところへ行きたい。

——半径五メートル以内に近寄るんじゃないねえ！ 俺はな、お前みたいな偽善ぶる女が大っ嫌いだったんだ。最初からな。

——悪いけど、一生懸命ってのはね、求めてない人からしたら迷惑でしかないのよ。ばかじゃないの。

——何でもするから、お願い、天羽さんと近江さんを邪魔したりなんかしない。ちゃんとクラスのために何でもするから。お願い、私のことを嫌いにはならないで。

——じゃあ、近江ちゃんにだけは手を出すな。

——俺のことをとことん嫌いになってくれれば俺は最高に幸せなんだよ！

画像は出てこない夢が、まぶたの奥に広がっていた。声だけがくっきり聞こえる。どんと聞こえると同時に眠りが途切れ、またうつむくとさらにまた声が響く。西月さんが泣きじゃくる声、天羽が怒鳴り散らす声、近江さんが冷たくせせらわらう声。

たくさん交じり合っている。その声を司はずっと聴いていた。

時折眼を覚ますと、何事もない風到天羽がやっぱり居眠りをこいている。近江さんが文庫本をめくっている。西月さんは背中しか見えない。ずっとうつむいてノートを取っている。

暗幕ではない、白いカーテンのせいで光が百パーセント遮られたわけではない。ちょっとだけ



影が濃くなった程度だった。居眠りしているのも丸見えだった。菱本先生と思わず眼があつてしまい、どうしても上体を起こさねばならなくなってしまった。

——天羽、お前さ、偽善ぶる人が嫌いだって言ったよな。

司はそっと眠りこけている天羽の方にテレパシーを送ってみた。もちろん超能力なんて持っていない。気持ちだけだ。

——大人の受け狙いで、僕のことをあのひとはかばったって言うこと、だったよな。

もう一度、強く念じた。全然眼を覚まさない。やっぱりエスパーじゃない。

——僕のことなんて最初っからなんとも思っていない、それどころかやっぱり「下着ドロ」だっと思って、僕があの人のことを嫌いになってくれるように無理やりテープ聴かせたことだっ、僕わかってるよ。そんなに僕はガキじゃない。

テレパシーが通じたのは西月さんの方だった。ビデオが地元の特色「蛭狩りツアー」の説明を流しているところで、ふっと振り向いた。司と眼が合った。そのまま一秒しっかり見つめ、また顔を戻した。表情のない、あの時のままだった。

——そう、わかってるよ。僕のことなんて最初っから、なんとも思っていないって。けどさ、天羽。けど二年間のことは本当なんだよ。両手を握り締めた。膝の上に置いた。——嘘か本当かわからないけど、ずっと僕に声をかけてくれた人は、西月さんだけだったんだ。二年間、あのひとだけだったんだ。天羽が僕を心配して、いろいろ応援してくれたことはありがたいって思ってるよ。けど、あの頃、クラスで年賀状をくれたのは、二年間、あの人だけだったんだ。

口に出さないから素直に言える言葉。頭の中で数珠繋ぎで転がっていく。

——あのひとがいたから、僕は、死なないですんだんだ。車の行き来する道路に飛び出して立ち止まってやろうとか思ったこともある。

父さんの住んでいるマンションから飛び降りてやろうと思ったこともある。

一度は窓から片足出そうと父さんにしこたま殴られ、それきり口を利いてもらえなくなった。桂さんに預けられたのはその後だった。

桂さんを信用して、何でも話ができるようになったのは、ずっとずっと後のことだ。それまでは部屋に籠ってずっと天井を見上げていただけだった。学校の行き帰り、噂をばら撒かれて否定できなくて帰り道泣いたこともある。

あの時、話し掛けてくれたのは、ぽちゃぽちゃしたほっぺたに前髪をちょっと古くさげにつまんだ感じの女子ひとりだけだった。笑顔で「片岡くん、おはよっ！」と声をかけてくれた女子。天羽に「決まってないのに決めつけるなんてひどいじゃない！」と食ってかかってくれた女子。本当にやらかしたことなのに、ぎりぎりまで信じてくれていた女子。

たったひとりだった。

いまさら偽善だと言われたって、もう受け止めてしまった言葉は離せない。

空中に舞ってコンクリートに叩きつけられることなく生きてきた司が、ここにいる。

天羽がふうっと頭を上げ、天井に向かって大きくあくびをした。

近江さんが退屈そうに時計を見て、なにか小さな声で話し掛けていた。

どうも菱本先生は名産品よりも「ほたる」の商業関係についての話題に持っていきたいらしく

、その後少しだけ話が続いた。誰も関心なんて持っちゃいないってわかっているのにだ。たぶん誰も、「授業」の一環なんて思っちゃいない。司はもう一度西月さんの方へ自分なりのテレパシーを送ってみた。ほんの少しだけ、背中がぴくっとしている様子だった。もしかしたら伝わっているのかもしれない。西月さん限定だったら、かまわない。

せっかくの修学旅行前日だっていうのに、とうとう恐れていた事態が発生してしまった。大雨だ。めったに梅雨なんてこない青濁の気候なのに、今年に限って局地的大洪水の恐れありやとのことだった。母からも心配そうに電話がかかってきた。

「司、あんた大丈夫なの？ 船に乗るんでしょ。しけたら酔ってしまうわよ」

——だって行くしかないだろ。行くしか！ 本当のことを言えば、楽しみなんて気持ちさらさらしない。それどころか早く終わってほしいと祈っている。どんなに人間関係が改善されつつあったとしても、真夜中に周平たちを相手にしたような「親友の証を見せろ」とか、意味不明な話題をかわすとは思えなかった。

「そんなしけた面しやがって、司どうしたんだあ？」

全部、桂さんが明日の準備をしてくれた。リュックというには大人っぽい皮の肩掛けかばん。一本で肩にかけるもよし、たっぷり物を詰め込むのならばリュックにしてもよし。泉州さんと二人で選んだものだ。

「桂さん、もし僕が船に乗ってて沈んで帰ってこなかったら、きっと泣くよね」

「おいおい、お前もしかして、船が嫌いなのか？ 将来の夢は船長さんって玉じゃないよな」

「そんなんじゃないよ、ただなんとなくさ」

お菓子だけはたくさん買ってきた。泉州さん曰く

「社交辞令としてお菓子を配るってのはね、女子が良くやる手なんだよ。野郎はあまりやりたがたないけれどもね。あんたの好きなお菓子を少し仕入れておいて、『なんか食う？』と声をかけてみなよ。人生、そういうところでうまくいくもんなんだよ」とまた意味不明なことを話していた。

桂さんはしばらくはやにやしていたが、いきなり真顔に戻った。

「今日の夕方なんだけど、ちょっと泉州さんに修学旅行のことで、教えてもらうことがあるから、遅くなるね」

「旅行前に風邪引いちゃったらしゃれになんねえぞ。早く戻って来い。迎えに行って乗ってくるのがいやなのか？」 「そんなんじゃないよ」

弾劾裁判を見る以上、司はどんなことがあっても帰るわけにはいかなかった。泉州さんからさらに最新情報が届いたというのもある。

「あのさあ、桂さん、前から僕わからなかったんだけどさあ」 話を逸らすというのが半分、前から知りたいと思っていたのがまた半分。司はリュックを抱きかかえたままあんざした。

「なんで、桂さん泉州さんと仲いいの。中学生と付き合うって犯罪になるよ。父さんに怒られるよ。怒られたら、やめさせられちゃうよ」

今のところ、桂さんは泉州さんの熱烈なアプローチにそれなりの扱いをしてやっているようだった。どうしてかはわからないけれども、「お嬢」と呼び、司がいる時には家に呼んでくれたり

している。いちぞやはふたりきりで部屋にいたではないか。男子感覚で話すならそれ以上のことは求めないけれども、桂さんはやはり成人した男だ。たまに夜、ネオン街で悪いことしてくるはずだ。そんなことも泉州さんは知らないだろう。知らせないままで、こんなにいちゃいちゃしてていいのだろうか。

「ほお、妬いてるのか？ 司」

「妬いてないよ。妬きたくもないもん」

どういう感情が「妬く」のかわからないけれども、司は首を振った。

「ま、今だったらお前にも話しておいたほういいかもなあ」

桂さんは朝から暑苦しい焼き鳥レバーにぱくつきながら、泉州さんとの関係を一言で言い表した。「十五年前の事件な、お嬢の父さんが担当してたんだ」

——お嬢の父さん、って、泉州さんのお父さん？

——お父さんって、事件って？ ただでさえ目覚めていない頭がさらに混乱してくる。髪をかきむしった。「つまりだな、司のじいちゃんばあちゃんをずうっと眠れる国の美男美女にした事件、あるだろ。あの時に一生懸命やってくれたのが、泉州刑事だったんだ」

そうだった。泉州さんのお父さんは、警察のお偉いさんだった。

まだ完璧に回線が繋がらない司に、桂さんは自分の分のトマトを一つ、丸のまま渡してくれた。それを食べ、ってことだろう。皮もむかずにか。

「お前がもうちょっとでかくなってから、この事件についてはもっと詳しく話すことができると思うけどな。朝早い時間にこんな辛気臭い話してどうするって気もするからこの辺にしとく。けどな、司。泉州刑事……じゃあないんだな、警部だったか警部補だったか。とにかくお嬢の父さんが一生懸命に尽くしてくれたんで、社長は非常に、感激したんだそうだ」

「人が生きるか死ぬかなのに、一生懸命でないわけないよ」

「俺もその場を見ていたわけじゃあねえからなあ。俺もまだまだ小学か中学のガキだったし覚えてねえよなあ。ただな、それ以来泉州刑事、つまりお嬢の家と司の父さんとは仲良くなったってことなんだ。お前が生まれる前から、なんかわからねえけれども付き合いが増えて、お得意様感謝祭をやる時にはちゃんとお招待したり、パーティーには呼んだり、いろいろしてたんだ。知らなかったよなあ。俺もまさかなあって思ったよ」

——だって誰もなんも言わないじゃないか！

文句を言いたいけれど、かぶりついたトマトの汁がズボンについてしまい慌ててティッシュで拭いていた。その間も桂さんはしゃべりつづけた。

「とにかくだ。たまたま去年のクリスマスパーティーの時に、仕事で俺が手伝いにいった時、やたらごついタイプのお姉さんがいると思ったわけだ。俺は泉州刑事のことは前からいろいろ聞かされていたけれど、お嬢のことはその時まで全く知らなかった。その時に、どうやら惚れられたらしいがその辺はわからねえよ。もっとも惚れたわけじゃあなくてな、お前のことが心配だったんじゃないかねえかって気もするけどなあ」

——僕のことが心配？ 去年の十二月といえば、相変わらずクラスの女子たちからは総すかん、西月さんの「おはよ！」しかコミュニケーションの取れていない時期のはずだ。

「いろんな意味でお前、注目されてるんだよ。お嬢が青大附属だと聞いた時に、俺としては義務として司のことを聞いてみたんだ。クラスでうまくやってるかなあとか、また悪さしてねえかなとかだ。大抵はあれだけでかいことやらかしたんだから、黙っているかごまかすかだろ？　ところがな、お嬢はなんと言ったと思う？」

わかるわけがない。トマトを飲み下すので精一杯。

「『あの子、しゃべらせれば絶対面白い奴だと思うんですけどねえ』だぜ。しばらくお前のことで盛り上がってな。あ、怒るなよ司。ナイフ持つな、危険だ」

バターナイフくらいでびびるなと言いたい。

「じゃあ、どうすれば面白くなるかなということと話しているとだ。その辺は今回飛ばすけどな。『やっぱ、彼女ができるかどうかってことじゃあないですか？　やっぱりお坊ちゃまだから彼女をこしらえるって大変かもしれないけど、でも一人でも味方がいたら、結構世の中なんとなかなるもんだと思いますけどねえ』と、なんか大変なんだなってことをしゃべってたよ。お前と同年なのにこんなに悟ってていいのか、お前って言いたくなっちゃったよ」

「僕だって言いたいよ」　ゆっくりと、桂さんはやわらかなまなざしで司を見つめ、そっとリュックサックを取り返した。「あくまでも俺の想像なんだがな。お嬢はかなり、お前のことをお気に入りだったんじゃないかな。だから、俺が『もしよかったらアタックしてやってくれないか』って言った時に『もう少し様子見てから、チャレンジですね！』って言ったのかもしれないなあ」

——え、待てよ。桂さん、意味わけわかんない。

簡単に答えを出してくれない。司は苛立ち何度も腰を揺らした。

「ま、これは過程だわな。結局司は、まんまる顔のあの子にほの字、いろいろ大変なことあったにしても、なんとかいい線行っただってことだな。あとはどのくらい迫るかだが、こればかりは小春ちゃんの気持ち最優先だから無理すんな。けどな、これだけはよく覚えておけよ」

立ち上がり、司に学校用のかばんを手渡した。

「お前が小春ちゃんのことをずっと追いかけている間、もしかしたらお前のことを好きでなんないでいる奴がいたかもしれないってことをだな。全然お前、そんな気なかったとしても、相手の気持ちが本物だったら少し思い遣ってやれってことを、少しこの回で勉強しとけ」

慌てて食い終わった。口を手の甲で拭い、慌てて洗面所でゆすいだ。半分以上が意味不明の言葉の羅列だった。何が「勉強しとけ」だろう。今の話が本当だとすると、泉州さんは十二月前から、司のことをチェックしていて、隙あらばアタックする予定だったと言うことになってしまう。そんなことあるわけない。あんないきなり背中をばしんと叩いて

、「使用済みのパンツ売っちゃおうか」

なんて言う人が、司に片想いしているなんて、そんなわけ、絶対はない。

「じゃあな、今のことはお嬢には内緒だぞ」

——言うわけないよ。言ったら「なあに思い上がってるの、この馬鹿」って殴られるに決まってるよ。

修学旅行一日前の指導、ということで、男子だけ視聴覚教室に集められ、ホラー映画を見させられたくらいだった。女子が体育館で「保健体育」の話を聞かされていたらしいとは周りの噂で気がついたけれども、相変わらず西月さんがうつむき加減なことと、天羽と近江さんが無口なのが眼につくくらいで、あとはそれほどのこともなかった。

「泉州さん、本当に今日やるのかなあ」

さすがに「弾劾裁判」が教師連中には内緒なのだということは承知している。小さい声で聞いた。泉州さんは唇を一文字にして、

「やる。絶対にやる。大丈夫、あんた、私に任せときな。絶対、悪いようにはしないさ」

——何やるかわかんないのに、呼ばれてないのに、本当に行っているのか？

司としては突込みどころが満載だったのだが、なんとなく黙っておくことにした。

どう見ても、「かつて司に片想い」していた過去を持っているとは思えない。桂さんもたまには人を判断し誤ることがあるものなのだ。少し自信になった。

約束どおり泉州さんと待ち合わせた。どうやら全然司と歩くことを嫌がっていないらしい。現在にいたるまで、司を毛嫌いする女子たちの雰囲気は壊れることなんてないのにだ。司はただ、おずおずと生徒玄関で待ち、せいたかのっぽの泉州さんに従ってかさを差すだけだった。「あれ、あの」 西月さんの姿がない。

「小春ちゃん？」

泉州さんは髪の毛をかき上げた。少し、脂臭い匂いがむっとする。

「ああ、小春ちゃんはね、一年の杉本さんが連れて行くって。それに直接裁判見るわけじゃないんだから、ゆっくり行こ行こ」

このどしゃぶりの中、自転車漕いで帰る男子もかなりいる。

「あらら、委員長様も自転車かい」

目の前を通り過ぎたのがどうやら、評議委員長らしい。

「あんたのライバルだよ。恋じゃなくて、英語の方でね」

やっぱり泉州さん、言っている意味がわからない。司は聞き流すことにした。

「直接裁判見るわけじゃないってどういうことだよ。なんのために行くかわかんないよ、僕だって困る」

「しょうがないねえ。坊やはだから困るってさ」

肩をすくめてみせ、泉州さんはバスの時刻を確認した。

「とりあえずさ、バスで行こ。歩くとしゃれになんないよ。それにあんた、今日はやたらと私の顔ばかり見てるねえ。結構いけてること気付いてくれた？」 「桂さんに気付いてもらわないとしょうがないだろ」

この機会だ、言うだけ言ってしまおう。

「今日、雨だからなおさら臭いんだけどさ、泉州さんはお風呂に入って髪の毛洗えばすっごいきれいになるって桂さんが言ってたよ」

「え、桂さまが？」

いきなり「さま」付けになる。

「僕なんかに見せる必要はないけどさ」

泉州さんは黙った。ため息を大きくついた。

「あのねえ片岡。そのくらい私に文句言えるんだったら、どうしてもう少し他の奴とうまくやらないのさ。見ててお母さんは涙が出てくるよ。せっかく同じ班になった奴と、もう少し打ち解けるとかさ、わかるよねえ」

「お母さんは二人もいないんだ」

「あっそ」

また気まずくなった。この会話の中にどうやって、「片想い」を読み取ればいいのか。司はブレザーを羽織るとすぐバスに乗り込んだ。たまたま運転手後ろの席がいたのですぐ座ったら、頭を思いっきりはたかれた。

「あんた、後ろに年取った人が乗ってきてるよ」

——それはまずい！

条件反射でぴよこなんと立ち上がってしまい、席を譲ったおばあさんに大笑いされてしまった。

駅前で降り、泉州さんに従って会場のカラオケボックスに入った。自転車が二台ほど玄関先に着けてある。放課後、カラオケで盛り上がる奴がけっこういるのだろう。制服姿で入るのにちょっとだけ抵抗があったが、泉州さんが堂々と顧客名簿に名前を書くのを見てあきらめた。

「ふたり部屋でお願いします」

顔をしかめた司ににやりと、

「ちょっとエッチなこと考えてるんじゃないの、片岡も」

——そんなこと思ってるの泉州さんだけだよ！ 司はむっときた。こうなったらしゃべってなんてやるもんか。

大して動揺するでもなく、泉州さんは一階のカラオケ室へ案内され入っていった。二人部屋だと密室、体臭がすさまじくなりそうだと懸念したのとは違って、結構広い六畳くらいのルームだった。ガラステーブルの上には曲選び用の本。電話帳かと思った。

「なんか歌う？」

「いいよ、だってそれが目的じゃないんだからさ」

「あっそう。そうだよねえ」

泉州さんは勝手にウーロン茶を二杯注文した。

「この店、一時間で500円だから、あとで割り勘だよ」

「わかってる」

それより早く聞きたいことを確かめたかった。

「あのさ、今日の弾劾裁判ってどういうことになってるのかを早く教えてよ。それとさ、なんで僕がここで待ってなくちゃいけないのかってことと、あと」

「小春ちゃんね。そうあせりなさんな。片岡、ちょっと待ってなよ」

薄暗い中にミラーボールがゆっくり光を細かくばらまきながら回っていた。よく父さん関係のパーティーとかで、こういう風な部屋を見ることが多い。

「泉州さんさあ、僕にかまおうとしたわけ、教えてよ」

できるだけ何気なく、ふと思いついた、そんな顔で司は尋ねることにした。

——まさか、変なこと考えてるなんて、言えないじゃないか。

「なによやぶからぼうに。そんなことよりもっと別のこと、知りたいんじゃないの」

「別のこと？」

つついつつられてしまうけれども、もしこれからのことだったとしたら聞いておかないとまずい。司は質問を飲み込んでおき、泉州さんの言葉を先に待った。

「今日、うちらがここに来ていること、小春ちゃんとあと、一年の杉本さんしか知らないんだ

わよ」

「え？」 思いっきり驚いた。「だってさ、今日弾劾裁判だって言ってただろ？」

「なにもうちらふたりが顔出すわけじゃないじゃんか。出してどうすんの。また天羽に言い負かされて尻尾巻いて帰るのがオチでしょうが。ったく、片岡、あんたってばさあ、ほんとよわっちいんだからさ」

——殴り合いになってうちのクラスの女子五人みたいに停学になって修学旅行行けないよかましだよ。あの人たち、いけることになったみたいだけど。

司個人の希望としては別に行きたくもなかったのだが、泉州さんのために、としておく。

「じゃあなんでここに集まってるんだよ」

「あせりなさんなよ、まあいいじゃんか。たまにはゆっくりふたりで密室ってのも」

にんまり笑う泉州さん。顔だけ見れば、ほんと外国のファッション雑誌でポーズとっているモデルさんそっくりなんだが。

「だって僕と密室だってことになったら、泉州さんの方が困ると思うよ。桂さんにばれたら」

「大丈夫。桂さんあんたをライバルだなんて思ってないからさ」

「じゃあさっきの質問だけど、なんで僕なんかに声かけてきたんだよ。桂さんから聞いたよ、クリスマスパーティーで」

無理やり引き戻すことに成功した。何か物言おうとしている泉州さんの表情が少し慌ててきたがそんなの無視する。

「僕のこと話して、桂さんと盛り上がったんだって聞いた。どうせ僕のことなんか、馬鹿にしていたんだろ。桂さんに近づきたくて僕にちょっかい出してきたんじゃないかって思ったけど」

「まあね、それは当たってる」

ほっとしたのだろうか、泉州さんはブラウン管と向かい合う格好で座った。唄本を何度かめくり直した。

「友だちになるってことってさ、理屈じゃないじゃん」

「けど僕になんか声かけたら女子たちから嫌われるかもしれなかったんだよ！」

「いいじゃんそんなの。話合う奴としゃべりたいっていうのが本音だったら、男だろうが女だろうが関係ないじゃん。桂さんが食後のデザートとしてくっついてくるなんてもっと最高じゃん」

——桂さんはデザートじゃないよ。焼き鳥だよ。

あの体格だと、鳥よりも豚の方が近いかもしれない。

余計なことを考えてしまった。つい笑ってしまいそうになり、泉州さんに文句をいえなくなってしまいそうだった。

「片岡、あんたいいかげん、『僕なんか』って言うのやめな」

一呼吸おいて、泉州さんは司に背を向け、扉の方を見つめたまま言った。

「桂さんとも言ってたけどさ、あんた、自分をちっちゃくみせればいくらでもみんな許してくれると思っ込んでるんじゃないの。あんたとしゃべっているとさ、肝心なところでびびって逃げようとしてるのがわかるんだよねえ」



「逃げてなんかないよ！ 何が言いたいんだよ」

「黙んな」

穏やかだが、有無を言わせぬ口調で一喝されてしまった。言い返せないのがやっぱり悔しい。膝を抱えた。泉州さんはやはり背を向けたまま、今度はいきなりエビぞりした。頭をガラスのテーブルに載せた。

「そろそろ弾劾始まるころだと思うんだけどさ。この前近江さんがふざけたこと口走ってたじゃん。『私が丸く治めてあげる』みたいなことをさ。ふざけんな、って思ったけど、あの人の言うことも一理あるって思うんだわ」

——近江さんの言うことが？

よくわからない。あの時は近江さんよりも、怒れる泉州さんを押しとどめるのが精一杯だった記憶のみ、残っている。

「今の小春ちゃん、きっと天羽に申しわけない、許してほしいって思っているいろいろ努力していると思うんだ。女子の目から見ると、何もそこまでしなくたってってぐらい頑張ってるよ。二月くらいから今までずっとね。けど、そんなことさっさとやめればもっと楽になっただろうし、近江さんじゃないけど『天羽もクラスメートのひとりとして』お付き合いしてくれたかもしれないんだよね。あの子なんかしゃべっているとむかつくけど、言ってることは正しいよ」

——良く覚えてるなあ。

ガラスの上で少し司向けに、寝返り打つようなしぐさをした。妙に甘ったるくみえた。

「だから、近江さんが手出しする前に、私の方からひとつ、話しといたんだ」

「話って、なにになに、僕わかんないって」

身を乗り出し、真ん前に顔を近づける。

「近江さんが言ったあの覚えてないわけ？ あんたのことなのにさ」

わからない。ミラーボールを見上げ、散らばった光を羊の数数えるような気持ちで指差し、考えた。思い出せない。

「まったく、だからあんた、一人じゃなんもできないってのよ。いいかげん大人になりな。ほら」

ため息をつきながら泉州さんはもう一度、テーブルにえびぞったまま、天井を見上げ、答えをつぶやいた。

「小春ちゃんが片岡と付き合いたくなるよう、私の方で説得してみたってわけ」

腰が抜けた。ってこのことだ。立ち上がれない。テーブルをぶん殴ろうとしたが、素早く泉州さんは起き上がり一歩後ろへ下がった。仰天すると声が出ないって本当だ。あ、あ、と咽仏が震えるだけだ。

——あ、あの、今なんて言った？

「なにぶったまげてるのさ。前々から匂わせておいたけどさ、小春ちゃんのことをクラスの粗大ゴミみたいに思われているやつらなんか説得されたくないって思ったわけよ。近江さん、小春ちゃんに何か言ったみたいよ。今日の生理の話の時にさ」

——今日のって……？

あまりこだわることなく泉州さんは横座りしたまま髪のかいた。

「小春ちゃん泣きそうになっていたから、きっと相当なことを言ったんだわ。いつもだったら私なりに文句言ってやるんだけど、違う視点から考えてやっぱり、そっちの方がいいと私も思ったわけよ」

「けど、けど、あの、それは違うよ！」

やっと声が出た。足が痺れて立ち上がれない。

「だって西月さんが好きなのは、天羽なんだし、僕じゃあだめなんだ」

「だからさっき言ったっしょうが。『僕なんかじゃ』って言うのはやめなって」

「だって、だってさ」

今まで何度も心によぎらせ、封じてきた言葉を言うしかなかった。壁にもたれながら司は立ち上がった。つま先だけ針山に足つつこんでいるような感覚で、膝ががくりときそうだった。

「僕は、僕は、女子のあれとかそれとか、盗んで現行犯で捕まっちゃった奴なんだって。そんな奴と付き合うとかしゃべるとかしたら、もう西月さん、クラスで居場所なくなっちゃうよ。あの時の僕みたいになっちゃうよ」

「あ、それは大丈夫。杉本さんもいるし、E組だってあるし、クラスで仲良しの子も結構いるし。あんたよかまし」

——そりゃそうだけどさ！

まだある、と理由を挙げた。

「それに、僕、面白いことしゃべれないし、天羽みたいに明るくなれないし」

「そのまんまのあんた十分面白いじゃん。キャラが立ってるよ。お笑いマニアの天羽にもちゃんと認定されたじゃん」

「それに、僕」

「あのさあ、片岡。あんた本当に小春ちゃんのこと、好きなの？ イエスかノーか、はっきり言いな」

とうとう、司は理由を挙げることができなくなった。

言い訳できない、最強の理由。どんな理由も、気持ちに嘘はつけない。

——藤棚の前で微笑む、あの笑顔。

いつも机の上に飾って、想いを伝えたつもりでいた。

「イエス、なんだね」

司の頭を軽く片手で掴み、こくと頷かせた。無理やりじゃなかった。自分で頷けなかっただけだった。泉州さんの顔を見た。ほんのわずかだけ唇が曲がっていたけれど、すぐに元通りに戻った。司の腕をつかんで、軽く振った。

「小春ちゃんしだいだからね、こればっかは。私が桂さんからしたら、ほんの小娘でしかないみたいなのと同じさ。ははっ、しょうがないよねえ。けどさ、片岡、これだけは忘れるんじゃないよ」

ゆっくりと座りなおした。ふたり、同じ位置、同じところだった。

「小春ちゃんにしてあげられることは、あんたがしてもらったことで十分じゃん。振られようが何しようが、あんたの方で明日から、小春ちゃんに挨拶してあげな」

「あいさつ？」

「あんたさ、人の顔みてまず『おはよう！』と声かける習慣、まずはつけな。男子連中も悪くないけど、まずは小春ちゃんから。だって小春ちゃん返事できないから、受取るしかないよ。他の女子たちなら無視するかもしれないけど、小春ちゃん、にっこりくらいはしてくれるよ」

——無視されるよ、絶対！

顔に出てしまったのだろう。泉州さんは司のおなかあたりにかかるく平手チョップを食らわせた。急所は外れた。

「小春ちゃん、たぶん今ごろ、天羽と最後の別れ話しているはずだよ。考えているはずだよ。あんたのことも、天羽のことも、これからのことも。小春ちゃんがどういう結論だすかわかんないけどさ、私はとりあえず、あんたをいちおしってことで推しておいたってことよ。よその、いかにも大人しくなりましたって小春ちゃんを好きになってつきあいかけてる男子たちよか、ずっとあんたの方が本気だもんね」

時計を覗き込んだ。泉州さんの言う通り、最後の話し合いの真っ只中のはずだった。

「だからさ、まずは飲み物飲もうよ。悪いようにはしないって」

司はメニューを覗き込み、財布の中身を確認した後、「杏仁豆腐」を二人分注文することにした。泉州さん、たぶんこういうのが好きなはずだと、何度か食事を一緒にしていて感じたからだった。

しばらく何も歌わず杏仁豆腐をすくっていた。

舌に滑り込むつるりとした白いゼリー。

——僕のこと、好きになんてなってくれるわけないよ。

泉州さんがどのようなことを西月さんへ吹き込んだのかはわからない。きっとあの乗りで「小春ちゃん、片岡の方がいいんじゃないの？ もう天羽なんてあきらめな」

と声をかけたに違いない。さっき司が攻めまくられたように。きっと。言葉を返せない西月さんはどういう反応をしたんだろうか。露骨に「いやよあんな下着ドロ」と言う顔をしたのだろうか。薔薇を受取ってくれる程度だったらかまわないけれども、付き合うなんて、そんなこと許されるわけがない。

でも、泉州さんは、もう司が口に出す前に、準備を整えてしまったという。

近江さんに対する対抗意識、としか考えられない。

——なんでそんなこと、言ったんだよ！

もっと文句を言いたかった。でも、言おうとするたびに咽が詰まって言えなくなる。もうまな板の鯉だ。もうどうすればいいのか自分でもわからない。どくどく心臓が鳴り響き、涙が出そうになったり、一緒に西月さんと歩いた日のことを思い出したり、なぜか周平に会いたくなったり。頭の中はめいっぱい大洪水だった。

「あんた、なんか歌う？」

「こんな時に、良く歌えるよ」

あっさり泉州さんが歌本を置いたときだった。扉のガラス越しに、見覚えのある顔が走った。二度首を横に振り、司を見た。どこかひとつのところしか見えていない表情の、ちっとも笑っていないポニーテールの、あの子だった。

「あ、あの一年生」

「どれどれ、来たの」

自分の取り皿分、杏仁豆腐をすべて平らげた後、泉州さんは振り返った。大きく頷くと同時に、司の腕をひっぱって一緒に立たせた。まだ食べきっていないのに。ちりれんげを床に取り落とした。拾ってくれた。

「ほら、あんたの出番だよ」

「出番ってなんだよ、いったい」

背中を思いっきりはたかれた。

「お嬢さまにお連れしていただきな。ほら、ネクタイ曲がりまくってるよ。それと髪の毛、もっとちゃんとしな」

すぐに扉を開け、泉州さんは顔を合わせた一年の女子……あの杉本さんだ……に手を可愛く振ってみせた。水色のアンティークドール風ドレスを着ている。ということは、学校から来たということではないらしい。ふかぶかとお辞儀する杉本さん。司の方をいつもの固まった瞳で見据えると、

「西月先輩がお待ちです」

一言だけ告げた。

「ありがとね、杉本さん」

「西月先輩のためなら当然のことをするまでです」

抑揚のない言葉で返答した後、杉本さんは部屋から出た。もう一度司は泉州さんにひっぱられるまま一つ尋ねた。

「僕、なんで呼ばれたの」

「行けばわかるって！」

ピースサインをほっぺたの横でしてみせたところみると、悪いことではないのだろう。

最後に耳もとで、

「ちゃんと、小春ちゃんを連れて帰ってくるんだよ。ここで待ってるからね」

まだガラスボールに杏仁豆腐はたっぷり残っていた。さくらんぼもかなり浮いている。それを食べたいんだろう。やっぱり好きなんだ。「また戻るから、杏仁豆腐残しといて」

ささやかなお願いだけして、司は廊下に出た。だいが客が入ってきたらしく、かなり声がかかなり響きまくっていた。どうやら部屋の中では防音が効いていたらしい。杉本さんの上品な洋服姿に、ほんの少し緊張した。西月さんがどうしているのか、天羽がどんな様子なのか、尋ねることすらできなかった。

——泣いてなければ、いいなあ。

あの時のような状態でなければ、大丈夫だ、そう信じたい。

二階に向かう階段を上がり、ドアが開けっ放しになっている部屋へ案内された。一階よりも部屋が広いのは道理か。一階に較べて人気はまだなかった。

杉本さんが黙って一度振り返った。またじいっとにらみ付け、  
「西月先輩を、どうかお守りください」

古風な台詞を口にした。

——僕、疫病神かもしれないのに。

言えずうなづうだけだった。

先に杉本さんが入っていった。司は戸口のところから様子をうかがった。結構広い。十畳くらいの部屋だった。真ん中にテーブル、ソファがしつらえられているのは、さっきいた部屋とそう変わらない。このくらいの広さだったら、さっきみたいに泉州さんに接近されたりしないだろう。背中を丸くしていた男子がひとり、司の方を振り返り、絶句した後、

「おい、片岡、お前」

大声で叫んだ。天羽だった。顔を見るまではわからなかった。入っていけない。入ってはいけない、そんな雰囲気だった。杉本さんが立ち上がるやいなや、素早く靴を脱ぎ、立ち上がった女子らしい人に寄り添った。黙って動かないでいるその人の手を引いた。奥に座っていた制服姿の男子が、側のかばんの柄を持ち、まず杉本さんに声をかけた。

下の階のがなり声が廊下で響く。部屋に広がるミラーボールの光だけが頼りで、誰が誰だかわからない。ただ、髪の毛を幼い雰囲気ですくって結んだ、あのひとが近づいてきていることだけは、ちゃんと見て取れた。うるんだ瞳。結んだ唇。決して、司に来てほしいとは思っていない表情だ。

でも、司の方をまっすぐ見つめている。

あの日、司に給食のパンと牛乳を差し出した時と同じまなざしだった。

——僕、入ってっていいのかな。

——近づいて嫌がられないのか。

自然と片手を差し出していた。一步だけ、前に出ようとした。西月さんは動かずに部屋の中へ視線をさまよわせた。すぐ側で啞然としている様子为天羽に何か言いたそうな顔でもって、見つめた。また背中を丸める天羽の姿。側に近づいてきたのは他のクラスの男子だった。かばんを差し出した。西月さんは受取った。もう一度、天羽にテレパシーを飛ばしたような顔をした後、靴を履いて廊下へ出た。扉を閉めて、明るいところで西月さんを隅から隅まで見つめた時、やはり泣いているのだと気が付いた。

「下に、泉州さんいるから。僕、持っていく」

司は西月さんのかばんに手を伸ばした。西月さんは拒絶しなかった。両手で司にそれを渡した。無表情のままだった。

沈黙に守られたまま、泉州さんの待つ部屋へ案内した。西月さんは気力なさげにうなだれたま

まだだった。それでも司にはかばんをもってくれたお礼なのだろう、かすかに微笑んでくれた。最近、年賀状の上でしか見られないやわらかい笑みだった。

「小春ちゃん、終わったんだね」

こっくり、頷いた。やはり親友に接する態度とは違うのだと、ちょっと落ち込みたくなった。先に西月さんを部屋に通した。狭い部屋なので、ずいぶん動きづらい。杏仁豆腐もまだ残っていた。泉州さんが自分の入れ物にもう一杯すくい取り、西月さんに渡した。

「私の使ったもんだけどさ。まずは食おうよ」

素直に西月さんはソファーに座り、ちりれんげをそのまま口に入れた。味なんてどうでもいい、ただ加えている、そんな感じだった。黙ってその様子を眺めていた泉州さんは、西月さんの隣りに座り、大股を開いたまままたエビぞりをした。司はおずおずと、もといた壁際の席に正座した。もちろん足をくずして。

「小春ちゃん、考えてくれた？ さっきのことなんだけどさあ」

「いいよ、泉州さん、僕はあの」

西月さんの視線に思わず黙った。してやったりと笑うのは泉州さんひとり。

「近江さんにもまた言われたんでしょが。むかつくよねえあの女」

むかついているとは思えない静かな口調で、

「けどさ、言ってることは、当たってるんだよ、悔しいけどさ」

司をぐいと見た。黙ってな、との合図だ。もうひとさじ、西月さんはうつむいたまま、口に含んだ。

「もうどんなことしたって、天羽は小春ちゃんのこと、好きになってくれないんだよ。このままだと、嫌われる一方だよ。もう、あきらめなよ。小春ちゃんみたいに尽くす子が天羽は大嫌いだっただけなんだよ」

かすかに首を振った。泉州さんの舌は止まらなかった。

「小春ちゃん、そんなに天羽に何かしてやりたいんだったらさ、とことんあいつに嫌われてやりなよ。だってそうしてほしいんだってあいつが言ってるんじゃない。小春ちゃんができる最後の思いやりって、それだけだと思うんだ。思う存分嫌われるだけ嫌ってもらって、あとは何も言わない。そうしてくれれば天羽は満足なんだよ」

——泉州さん、いったい、何言ってるんだよ！

女子同士の会話は理解不能だ。あとで桂さんに聞いてみたってわかりっこない。

「私は小春ちゃんがなんでも一生懸命がんばる子だって知ってるよ。クラスのことだってなんだって努力すればなんでもよくなるって信じてるんだって。今だってそうだよ。あんなひどいことされてもさ、近江さんにクラスのこと協力してやってるじゃん。私も、ほら、小春ちゃんの代わりに天羽を成敗したあの子たちだって、みんな小春ちゃんを応援してるんだよ。私とか他の子だったら、いくらでも努力が通じるよ。けど、天羽はどうしようもないよ。努力したって、いくらおまじないしたって、嫌いなものは嫌いなんだよ」 身動きしない。膝の上の杏仁豆腐は全然減っていない。司は息を殺した。

——嫌いなものは、嫌いなんだよ。

——どんなに努力したって、だめなんだ。

うつむいた西月さんの瞳がまた揺れ始めた。泉州さんが容赦する気配はない。

「だから、もう努力するのをやめなよ」

わざと明るく、さらりと。

「その代わりさ、さっきも言ったけどさ」

司を射る。やな予感ありありだ。西月さんならともかく、泉州さんの視線は怖い。つられて西月さんも司を見つめ、また手元の杏仁豆腐に眼を落とした。

「片岡を利用しなよ」

思いっきり司はテーブルに頭をぶつけそうになった。

——あの、おい、泉州さん！

「利用って、なんだよ！」

「片岡、少し黙ってな。あんただっていきなり、小春ちゃんが恋人づきあいしてくれるなんて期待してないんでしょ。どうせ僕は下着ドロだから、どうせ僕なんか、どうせどうせっていじけるんでしょ。今の今になってこの状態ってのも、なっさけない話だよねえ。けどさ考え方によっちゃあ、ここまで小春ちゃんに都合のよい彼氏ってのもなかなかいないよ。無理に付き合うなんてことしなくたっていい、って片岡言ってるよ。小春ちゃんがばれてほしくないようだったら絶対他の人には言わないよってさっきもちらっと言ってたよねえ。それにさ、こいつ曲がりなりにも超お金持ちじゃん。本人全然その意識なさそうだけどさ。今日のカラオケボックス代結構気にしてるしさ。なんか言ったんだって？ こいつのうちに連れていってくれるって。神乃世だって？ 話聞いたらさ、片岡のうち、大きなお寺を作り変えたようなところなんだってさ。小春ちゃんついていけば、一生忘れられない豪遊できたんじゃないの。まあそれは冗談だけどさ。とにかくしばらく、天羽なんかどうだっていい、って思えるまでの間だけでもいいからだ、片岡を利用させてもらいなよ。ね、それでいいんでしょ。いいっていいな！」

怖い、逆らえない。けどいやだ。「泉州さん、僕、そりゃあ、言ったけど、けど利用だなんて、あの」

西月さんも目を真ん丸くして、司をそれなりの表情浮かべて見つめていた。今までの無表情とは違う動きに、司は思わずどきまきした。「だってやなんでしょ？ 普通の付き合いじゃあ。あんたの方が本当は堂々と言うべきだったんだろうけどさ、それができないんだったらまずは、利用してもらうのが一番でしょうが。まあ、あんたのやったことを考えれば、小春ちゃんの立場も心配ではあるけどさ。でも、もし片岡と付き合ったとして、他の連中や天羽から馬鹿にされた時は、私や他の女子たち、あと片岡だって黙っちゃあいないよ。大丈夫だよ。小春ちゃん。いきなりこのほほん坊やと付き合えなんて言わないよ。たださ、天羽以外の野郎と、気分転換するのもいいことだよ」

——泉州さん、気分転換っていったい！

司があわあわと口を動かしている間、泉州さんは「黙ってな」の合図を送ってきた。

——僕を利用するって、ばかにしてるよな。いくらなんでもそんな、そんなのないよ。

——利用されるんじゃないくて、僕はただ。

しばらく言いたい放題、「片岡司の有意義な使い方」についての説明が続いていた。司はしばらく黙り込んだが、とうとう我慢できなくなった。

「泉州さん」

と割り込んだ。

「今の話、ひどすぎるよ！」

困りきった顔できょとんとしている西月さんと目が合った。こんな顔を向けられるのも初めてだ。

「そりゃあ、僕じゃだめだって、確かに言ったけど、でも、利用だなんて」

「なにあせってるのさ。利用されるのがいやならどうしたいわけ」

面白がるように、泉州さんは首を一度、二度両方に曲げた。

「利用って言わなくても、僕、頼まれたらするよ。それに」 今度は西月さんに向かって言った。決して怒りの籠らない口調になるように。「してほしいこと、これかなって思っただけだよ！」

瞳大きく、口を尖らせ、片手のちりれんげを取り落としそうになっている西月さん。

隣りで笑いをこらえて、またソファでえびぞっている泉州さん。腹が立ってきた。

「してほしいじゃなかったら、僕は絶対しない。けど、してほしいことだったら、僕は、やり方覚えてなんでもやるから。この前は神乃世行かなかったけど、夏休み、行きたいって言うてくれるなら、ちゃんと連れて行くから。泉州さんもおまけで連れてくよ」

そういうところで「きゃあ、ラッキー」と喜ぶ泉州さんを冷たく見つめた。

「けど、もし僕がいて、じゃまだったら、ちゃんと視界に入らないようにするよ。もし僕がいて、西月さんが嫌われることになるなんてそんなことやだから。だから、迷惑なんてかけない。けど、してほしいって言うてくれたら、ちゃんと、僕するよ」

語尾が震えた。もう一度、唱えた。

「してほしいかったらちゃんとする。しないほうよかったら、しないから」

「結局私の言ってることと同じじゃん」

泉州さんのまぜっかえしで、結局西月さんは何も意思表示しなかった。

「要は、片岡にもものを頼む時、『利用したいんだけどいいですか』って頼まないでやればいってことでしょが。ったく、男はおだてりゃ木に登るよねえ」

西月さんはもう一口、さくらんぼを流し込んでいた。大きな瞳はそのままに、

「ねえ、どうしよう、どうしよう？」

と友だちに声をかけたそうなしぐさだった。能面ではなかった。



——絶対、周平に会うまでは起きてなくっちゃ。船に乗ったらいくらでも寝てればいいんだ。船が揺れても酔わないですむし。絶対バスの中では目、開けてるんだ。

司の誓いもむなしく、バスの窓際後ろ側の席に座った段階でうとうとしてしまった。今回の席は一番後ろ側だった。二人ペアで座るのが決まりなのだが、男子が十五人いるとどうしても奇数、割り切れないことになる。となるとクラスで浮きまくっている司が押しやられることになる。今まではむしろそれの方が都合よかった。遠足などでも友だちとはしゃぐ必要なんてないので、さっさと居眠りしていればよかったのだから。今回はそれでもまだ、同じグループの連中と二言三言程度の静かな会話を交わすことがある。ものすごい進歩だ。後ろ側の席は窓が開けられない。片面だけの窓にガラスがびちっと入っているだけだ。乗り込んできた女子たちが、司をあからさまに避けるようなしぐさをしつつ席についていた。唯一の例外泉州さんが、まずは一番後ろに駆け込んできて、

「本当はさ、私がそこ行こうかなって思っていたんだけどさ、浮世のお付き合いってもんもあってさ、残念だねえ」

と用もないのに報告しにきた。

「別にいいよ。僕は一人の方がいい」

「ふうん、ほんとかねえ」

前の方に固まっているのは、天羽率いるその一群プラスワンだ。

女子の場合、ひとり昨年退学したこともあって、二で割ろうとしたらちゃんと割り切ることができる。相手がないということはまずない。しかしながら、近江さんの関係でいろいろごたごたが続いた関係もあり、結局のところ男子グループに混ぜてもらうことになったようだ。噂によると、自由行動の時はD組の女子たちと共にするのだそうだ。

「おっし、みんな、さっさと座りやがれ！　ちゃんと酔っ払わないような薬飲んだか？　出すもの出したか？　荷物上にあげたか？　そんじゃあ気合入れていこうぜ！」

テンションが妙に高かった。昨日の今日とは思えない。背中を丸めて暗く話をしていた奴とは到底思えない。

——あの時、何があったんだろう。

明るい廊下から覗いただけだったし、西月さんもあの中で何が起こったのかを説明してくれたわけではない。ただ、天羽の様子が少し危なさそうだった。うまくいえないけれども、いたくないところにいる、もう限界という雰囲気だった。

西月さんの方がまだ、普通の顔もしてくれるようになって、元気な感じがしたが。

やはり裁判だから、天羽は相当叩かれたのだろう。

西月さんにまた似たようなこと、言ったのだろうか？

——僕がもし、そういうこと言えたら、ちゃんと聞くのに。

西月さんの席は真中あたりの通路側だった。泉州さんと一緒に座っているのかと思ったら違うらしい。どうやらひとり、男子と組になりたい子がいたらしく、ものを言えない西月さんだったらひとりでいいだろうという判断をしたのだそうだ。だから、非公認ではあるけれども……公認席は「クラス修学旅行のしおり」に記載されている席のことを言う……若干のバス席替えが行われているようだった。近江さんが男子グループ当然天羽の隣りとなったら、十三人、確かに奇数になってしまう。浮世の付き合いゆえどうしても離れることになってしまった泉州さんが、一生懸命に話し掛けている。

がく、がくと体が何度も揺れる。まだバスが発車していないのに。今回はD組から発車することになっていて、A組は少し待たされることになる。どうやらB組の生徒がひとり、遅刻しているらしく若干時間が推していた。眠い、そのままかくんと眠ってしまいたい。そっと目を閉じ、司は窓ガラスにもたれた。昨日の大雨で峠を越した青澗地方、今日は朝から快晴なりだ。太陽がかなりまぶしい。鼻の頭だけ日焼けして皮向けてたらみっともないだろう。

狩野先生だろうか。

誰かが近づいてくる気配がする。

よくあることだった。いつもひとりになりがちな司を心配してか、「片岡くん、大丈夫ですか？」と声をかけてくれた。そのたびに「大丈夫です」とだけ答えていた。

「だいじょうぶ……、です…？ え？」

薄目を開け、ゆっくり目を見開いて、自分の目がおかしくなっていないかどうか確かめた。目をこすって、もう一回、被写体を観た。

「あ、あの」

隣りに誰もいないで本当によかった。腰が完全に砕けていた。

西月さんが赤い皮のバックを両手で持って、司の斜め前に立っていた。

一番後ろは座席だから、どうみても、その辺の席に座りたい、そういう意思表示だった。

昨日ほどのやわらぎが目元にも、頬にも感じられなかった。それこそ「能面」。意志だけが浮かび上がっている顔だった。意志とはただ、「ここに座ります」のひとつのみ。司にもそれだけはわかった。

「後ろ、来るの」

昨日泉州さんから「まずはあんた、挨拶から始めなさいよ！」とどやされたけれど、この瞬間すっかり忘れていた。このおまぬけな状態で「おはよう！」なんて言えるわけがない。「あの、後ろの席、代わったほうがいいのかな、あの、僕、そうしてほしいならするから」前の席にいた男子がぎょっとした顔で司に振り向き、隣りの席の奴に「おい、後ろに西月来るらしいぞ」とささやいているのが丸ぎこえだ。司以外の人にも、意志は通じている。ってことは、最初っから、そのつもりってことだろうか。

頭の中がまた雨あられの暴風雨だ。はしゃぎながらおしゃべりしていた女子たちも、西月さんが司の側で立ち尽くしているのに気づき始め、互いにこそこそやり始めている。どういう会話かはわからないけれども、少し馬鹿にするようなアクセントが混じっているのだけ聞き取れた。後

ろから狩野先生も近づいてきた。先生が気付くってことは、もう正真正銘、そうだろう。きちんとした背広姿だった。白衣を着ていないと大学生に見える。

「西月さん、どうしたのですか」

ゆっくり、やわらかく尋ねた。

指差したのは確かに司の隣りだった。かすかに能面が揺れたように見えた。

「この席に、座りたいのですか」

西月さんは頷いた。

「わかりました。いいでしょう」

「しおりで決まっている席にどうして座らないんだ！」と怒鳴る先生ではなかった。一瞬だけ考えていたようだが、すぐに答えを出してくれた。

「それでは片岡くん、隣に西月さんが来ますがいいですか」

声が上ずっているのがどうもばればれだったらしい。

「は、はい」

いきなりの大爆笑に包まれた。戸惑う様子もなく、無表情のまま西月さんは司の隣に荷物を置いた。挟むようにして座った。高らかな笑い声がひときわ響いた。天羽の声だった。

もう寝るどころじゃあない。

司が恐れていた事態が刻々と進んでいることを見せ付けられたようなものだった。

女子たちが遠めで「ちょっと、小春ちゃん、正気？」とささやいている声も聞こえてきた。

「あの下着ドロの隣にわざわざよ。いくら失恋のショックが大きいからって、やけになってるんじゃないの？」

別の男子たちも、さりげない嫌味を口にしていた。西月さんにも聞こえているはずだ。

「気、惹くためなんじゃねえの」

西月さんはかばんを境にしてじっと真っ正面を見据えていた。視点の向こうには誰がいるのだろうか。前の席の天羽だろうか。唇をきりりと結び、司の方を一切見つめず、通路側の方だけをじいっと見つめていた。

——なんで、僕の隣に来てくれたんだろう。

——どうして、今、こうやっているんだろう。

恐る恐る、西月さんの横顔をのぞきこんだ。視線を感じたのか西月さんはじっと司の方を向き、無言で何秒か見つめ、また通路の方へ顔を向けた。今度ははっきりと、バスガイドさんと漫才めいた会話をかましている天羽の姿を追っていた。立ち上がり派手にパフォーマンスする天羽は、確かに目立っていた。

「ではでは、れでいーあーんど、じえんとるまーん、疾風怒濤のクラスA組、本日とうとう修学旅行と言う暴挙に出ってしまったしだいでやんす。どーないしましょ？ まあ人生いろいろありますわなあ。山あり谷あり。けど、登山の後の景色の美しさってものに心惹かれて世の中の人、

遭難覚悟で登山する。それもまたひとつの美学、って奴ですか。みんなは一りきっていきましよう！　まずはこれからたっぷりお世話になるガイドのおねえさまにインタビューっすね」

拍手喝采だった。男子ほぼ全員、女子一部のみ。

そりゃあそうだろう。集団ランチ食らわせたメンバーだっているのだから。

司は拍手せず、でもちゃんと話だけは聞いていた。隣の西月さんのように、一言一句聞き漏らさないようにしているのとは、また違った意味で。

——やっぱり、天羽でなくちゃだめなんだ。

再確認するこの現実。

今までは言葉、離れた場所から観察した結果、あとカセットテープから知ったものばかりだった。でも今は違う。すぐに手の届きそうな場所に西月さんがいるのに、かばんひとつ以上の距離がたしかに有る。

横顔はまあよく、つやつやしていた。髪の毛はいつもと違ってひとつに小さく結わえていた。顔をすっきり出したので、いわゆる大福顔だった。前髪もきちんとそろえたせいで、すっきりまゆが顔を出している。きれいに細く整えられているので眉だけが浮き出しているということはなさそうなのだが。司はしばらく西月さんの表情を見つめつづけた。

視線の向こうにいる相手は、どんなに西月さんが努力しても、泣いて訴えても聞く耳持たない相手なのだ。理由も、天羽にとっては正当なものだろう。周りがいくら西月さんのために応援してやっても、天羽の心はとろけない。近江さん相手に強烈な抱き合いをしてみせても、西月さんには半径5メートル以内近づくなと罵る。司から見たらどう考えても、西月さんの方が深く想ってくれているのに、天羽のほしいものは近江さんだけだった。

天羽しか見つめていない。

けどなんでだろう。なんで西月さんは司の隣に来ようとしたのだろう？

昨日の今日だからだろうか？　司なりに考えて、精一杯伝えた言葉が心を打った、なんてことないだろうか。ほんの少しだけ期待したくなる。

——どうして、僕の隣に来たんですか？

泉州さんの口走った言葉が頭をよぎる。

「片岡を利用してやんなよ。あいつもそれを求めているんだからさ」

不意に全身、凍りつくような感覚が走った。西月さんの遠くを見つめる視線、むりやりひんまげて、L字型に曲げることはできないだろうか。

「西月さん」

司はうつむき加減になり、前ふたりの席に聞き取れないようにささやいた。かばんを越えて接近しないと難しい。西月さんはすぐに司の方を向いた。

「もし、僕がこの席にいないほうがよかったら、さっき西月さんが座っていた席に移動するけれど」

震える声で尋ねた。

「昨日も言ったけど、僕は、西月さんがしてほしいこと、できることならするから」

何度も視線を拾おうとして、肝心要のところで逸らしてしまう自分。目が合うたび心臓がばくばく言って動けなくなってしまう。現に今、ほとんど尻が落ち着かない状態だ。

ゆっくりと西月さんの瞳が揺れた。

唇がかすかに動いた。

何を言いたいのかはわからない。ただ、この席に座っていたい、ということだけ。司の目を見ながら、何度か唇を動かした。

「おい、片岡がなんか言ってるぜ」

「あれ、小春ちゃんに何かしようとしてるんでないの」

また、余計な茶々が入りそうだった。でも司には声をかけない。誰一人関わろうとしない。周りの人たちが司を別世界の人間として見ているのと同じく、今は西月さんをも一緒にまとめてしまおうとしているのかもしれない。赤いかばんを隔てて、なんで西月さんは司に近づこうとしているのだろう。泉州さんに何度も話したではないか。

——何、びびってるんだろう。なんで泉州さん、西月さんと一緒に座んなかったんだよ！

がくんと急ブレーキ、動じない表情。天羽たちグループの騒ぎ声、完全に隔たれてしまう。自分に都合よく解釈したくてたまらないのに、おどおどしている。

西月さんは数回、体を揺らすようなしぐさをした後、そのまま司から視線を逸らさなかった。司の中に、何かがよぎった。

——僕の側に、いてくれるんだ。

——一緒にいたら、「下着ドロ」としゃべってるって馬鹿にされるかもしれないのに。

それでも西月さんは、司の側に座ってくれている。逃げないでくれている。

あどけない口元はきりりと締められている。心の奥で何を考えているかどうかわからないけれども、司の側に近づこうとしてくれている。二年前、誰も味方がいなかったあの頃のように。

司を利用しようとしているのかもしれない。泉州さんに提案されたのと同じく、天羽のことを忘れるために近づいてきただけなのかもしれない。これが天羽の言う「偽善」なのかもしれない。

でも司は西月さんがいたから、歩いてこれた。

藤棚の年賀状をもらえたから、ずっと見つめてこれた。

「おはよっ！」と声をかけてもらえたから、転校しないですんだ。死なないですんだ。

泉州さんや天羽の思いやりが、初めて理解できた。すべて、あのひとがいたからだ。

自分の膝もとを司はじっと見つめた。こぶしを握り締めた。

天羽の声がまた響き出す。

「そいじゃあ、クイズ大会やりまっしょか！ このために俺と近江ちゃんは懸命にネタを仕入れてきたっすよん。なあ」

「なに一人で盛り上がってるのよ、勝手にやったらば」

ガイドさんのマイクに声が入ってくる。西月さんの表情がわずかに翳る。

——もう、行きたくても、どんなに戻そうとしても連れていけないんだったら。

司は立ち上がった。昨日のカラオケボックスできょとんとしたように、表情が揺れていた。

「席、窓際に来てほしいんだ。これから神乃世が見えるから」

ゆっくり、はっきり、伝えた。指差した。言葉なく、西月さんは動かずにいた。やがて立ち上がり一度通路側に出た。前の席、女子側の席、たぶん運転手後ろ席に陣取っている天羽や近江さんたちにも見えるように。そして司の座っていた窓辺の席に座り、静かに窓辺を眺めた。やはり赤いかばんを間に置いていた。西月さんが座っていた席の位置からは、天羽たちが楽しげに盛り上がっている姿が直線で丸見えだったことを、司は改めて気付いた。天羽に目配せで合図され、にやりと笑われた。あいつも全てお見通しだったらしい。ひそひそ話のざわめきの中、泉州さんだけが司に振り向き、ピースサインを送ってくれた。

「では、最初に休憩所に入りませう。トイレに行きたい人、あと新鮮な空気を吸いたい人はちゃんと降りてくださいね。みなさん、起きてますかー！」

ガイドのおねえさんが声を張り上げている。言われなくてもわかっていた。見覚えのある山連なりの景色、緑が淡く散らばっている神乃世の風景だった。司が住んでいた場所と、ほとんどの人は知らないだろう。

周平がいるだろうか？ ちゃんと桂さんはこの時刻、と伝えてくれただろうか？ 周平に会えるだろうか？ 窓辺を眺めたまま動かない西月さんの頭の上から、司は覗き込むようにしてパーキングエリアを隅々眺めた。自然と西月さんのかばんを乗り越えるような格好になる。気にする余裕なんてなかった。西月さんが真下から見上げてきて、初めて気が付いた。ぴたぴたと接近しようとしている自分。

「あ、ご、ごめん」

慌てて身を逸らそうとした。その時、白いTシャツ姿でそりの入った頭の野郎が駐車場側を轆かれそうになりながら自転車で走っているのに気が付いた。どうやら司の乗っているバスの前を横切ったらしく、いったん急ブレーキをかけようとしたらしい。

「ひゃーあぶねえ！」

「あいつ死刑だな」

同じく外を眺めている男子連中がせせら笑いつつ罵っている。

思わず窓ガラスを思いっきり叩きたくなった。席に膝を着き、土足のまま司は窓に張り付いた。西月さんが身体を斜めにするようにして、また司を見上げている。目が合った。何か口からこぼれた。

「しゅうへいっ！ 周平、周平、こっち見ろっ！」

周りがなんと思おうが関係ない。今、確かに周平が司に会いに来てくれている。もう一度窓ガ

ラスを叩いた。完全に西月さんの顔先まで身体が伸びている。自転車で立ち止まった周平らしき野郎に向かい、また叫んだ。

「ここだよっ！ ここにいるよっ！ 僕だよ！ 周平、ほらこっち見ろよ！」

明らかに仰天している様子の西月さん。司の横顔を驚き眼でじっと見つめ、きょときょとさせている。次に目が合った瞬間、司はまくし立てていた。もう止まらなかった。

「今、今さ、僕の親友が来てくれたんだ。周平っていうんだけど、神乃世に住んでいるんだ。神乃世の近くで休憩するって連絡したら、学校来る前に来てくれるって。ほらあそこなんだ。あそこにいるんだ。すっごいいい奴なんだ」

おびえつつも西月さんは、細かく何度も頷いてくれた。話を聞いてはくれているらしかった。司はひたすら、車が止まるまでの間、周平についてしゃべりつづけた。赤いかばんを追い越すようにして、周平が気付いて手を振り出すまでの間、神乃世のことをしゃべりつづけた。

「だから、僕、もし西月さんがかまわないようだったら、今度の夏休み、神乃世のうちに連れて行く。ちゃんと、あのおじさんたちにも、うちの父さんにもちゃんと言うよ。もちろん泉州さんをおまけに連れて行くよ。変なことしたりしない。神乃世だったら僕、いろんないいところ知ってるから。青瀉だったら何もできないけど、神乃世だったら、なんでも僕、してあげられるから、花がいっぱい咲いてるとこ知ってるから、もう一度藤の花の咲いているところ連れて行けるから。うちの母さんの料理、おいしいんだ、だから」

だんだん言っていることがわけわからなくなってきて、司は途中で言葉を止めた。バスが駐車準備を始めている。

窓ガラスに張り付く格好で司を見つめ続けていた西月さんは、車が止まると同時に、もう一度唇を結んだ。今度ははっきりとした、意志のある瞳を向けた。

ゆっくりと、ひとつだけ頷いた。

## 藤棚へつづく路

<http://p.booklog.jp/book/77999>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77999>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77999>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ